Kodak Gray Scale

C Y M

© Kodak, 2007 TM: Kodak

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

inches 1 2 3 4 5 6 7 8

cm 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19

Kodak Color Control Patches

© Kodak, 2007 TM: Kodak

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

554 227

554-227

12005015100000

改版 邦文日本外史

頼山陽 著
池邊義象 譯述

東京 三陽書院

昭和六年一〇月 帝國圖書館

千歲將作走女媧骨九京欲慰
大寃魂莫言鉛槧無權力公議於
當泯上論是山陽歟子修史之
根本精神也

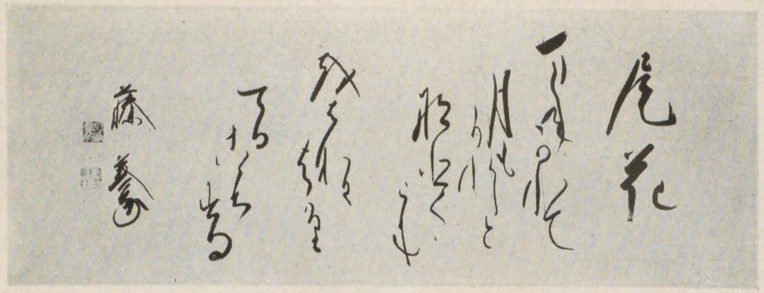
鎮西倉聲正敬

德富蘇峰先生題字

雲到山邨吳到越水天髣髴青一髮萬
里泊舟天草灘煙橫蓬窓夕漲海漁火
大魚波冒起太白南船明月

西遊藁記之卷八尾
山陽拜　正月時己丑九月吉辰時己十二年矣　之義　謹書

賴山陽先生肖像及筆蹟



池邊先生筆蹟

池邊義象先生肖像

554-227

序

日本外史は、わが國の戰史であり、武士道史である。本書は實に賴山陽先生の、心血を濺ぎたる、萬古不朽の、一大名篇である。

顧みるに、わが戰史中、源平二氏の鬪爭の如く、華やかなものはない。又南北朝史、殊に楠公殉死の如く、人をして勤王の念を奮起せしめたものはない。更に亦、群雄割據時代のやうに、武士道の眞味を知れるもの、豐太閤の偉略のやうに、眞に快哉を叫ばしむるものは、求めて他にない。

是れ等の事柄を、萬邁、卓拔の識見を以て、或ひは長詩の如く、或ひは戲曲の如く、所謂先生一流の、かの雄勁、圓曲の靈筆を馳せて、縱橫に描寫して、眞に一讀三嘆、興趣津津として盡きざるもの、獨り『日本外史』あるのみである。

幕末、志士雲の如く起つて、旺んに勤王愛國の大義を高唱した。然かもその多くは、外史の愛讀者であつたといふことは、外史が維新の大業に貢献したことを最も力强く、如實に語りつゝあるではあるまいか。また、爲朝、重盛、義經、正成、信長、秀吉、家康等を

此書に依つて始めて知つたものは抑幾人ぞ。

本書は斯くの如く、活ける戰史であり、武士道史であるが、惜しむべし現代の青年諸士は、學科多端のため、力を漢文學に注ぐ能はず、折角の名著も、讀み難い原文では、靴を隔てゝ痒きを搔くの憾みがある。

予はこれを遺憾とし、玆に全二十二卷を邦文に譯述し、上梓せしめた。而して本書の他書と異る所以は、重要な點には原文をも併せ掲げ、別に筆蹟、肖像、戰爭地圖、名所、古蹟、等の諸圖を挿入しあれば、譯文と相俟つて、興趣更に深きものがあるであらう。

武士道は國體の精華であり、平和の鍵である、眞の世界の平和は、武士道的精神の充實に俟たねばならない。故に武士道的精神鍛錬は、須臾も等閑に付すべきでない。玆に於て日本外史讀習の普及は焦眉の急務である。これ本書を譯述せる主眼にして、敢て大方諸士に本書の繙讀を推奬する以所である。

譯述者　池邊義象識

上樂公書

布衣賴襄謹再拜白。

少將樂翁公閣下。襄嘗讀宋蘇轍上韓魏公書。愛之。以爲自古進言於當世王侯者。大抵有求而自售。識者所醜。獨轍偉魏公人物。比之名山大川。欲接其言貌。以養己作文之氣。言雖近狂。其澹泊無求。可知也。雖然。魏公是時猶當路秉權。人將疑轍之有求焉。

閣下。今代之魏公也。而勇退高踏。久處閑地。使襄學轍所爲。可以無嫌矣。特貴賤懸絕。不啻如轍於魏公。則徒仰而心嚮之而已。今玆。

尊嫡君侯膺

慕命。入朝謝

大拜之恩。襄伏在草莽。側聞盛事。而不圖邸吏帶

閣下之命。來就襄家。取所著私史。欲賜覽觀。禮意慇懃。愧悚交至。夫襄不敢求於

閣下。而

閣下求於襄。襄之榮大矣。復何所嫌而辭避乎。雖未接謦欬。聞其詞

命。亦可以自壯。於是忘其蕪穢。出以納下執事。又敢有所瀆告。轍書稱。史遷文有奇氣。他日自作古史。則論遷之疎略輕信。淺陋無識。夫遷官太史。總領天下文籍。猶不免疎略之譏。況如襄以寒隔一書生。獨力罔羅古今。其不自揣而招大方嗤笑。必也。然少小嗜讀國乘。每病常藩史之浩穰。又恨其有闕。至近代之事。與夫

隆治之所由。非無先輩撰著。又未有晰其端緒。綜各家終始者。於是私倣遷史世家。而加詳備。斷自源平氏。至於今代。間以中興諸將。及割據羣雄關係治亂者。家別紀之。或錯而合之。要覽其成敗盛衰之狀。與臣屬謀戰忠邪之跡。取其大體最明確者。若夫博引旁搜。辨析錙銖。世自有其人。以爲非襄輩所及也。至其義例。蓋亦有貽淺陋之嘲者。事繫

一姓之下。而不有統紀以總之。列將家而雜以雄長。舉

今代而稱謂論說。如缺尊崇者。是自有說焉。夫右族迭興。甲起乙仆。以成

海宇之沿革。而不必關於

王室者。我中世以還之國勢也。故依實創體。以形世變。而其中貫以

帝系年號。以表條理。至大義所繫。必用特書。雖廁權豪於元帥。隨成敗次第。而

因署題以見統屬。而載之事實。名分截然。讀者自能見之。至若

今代稱謂。則謹據

奕葉名爵天下公行之稱。名實輕重。按跡可知。不敢私撰名號。以黷

今代

而眯後世耳。目閱首至尾。睹其得失之相形。明其分裂統合之所漸。則今日無前之

功德。有不待言者。又不敢喋喋頌贊。使人疑其諛與溢。自謂敬之至也。凡是

襄區區撰述之本意。不可不爲閣下一言之。野人朴直。以所謂無求之心著書。取其簡約。自便省覽。始非謀公之世也。所以引据剪裁。皆成一家私乘之體。至寫錄體貌。又一倣古史。不肯學輓近之文縟。是以拮据二十餘年。藏之篋笥。未嘗示人。今及得

閣下之寓目。以取信於天下後世。眞意外之幸也。襄雖無求於今日。而不

大賢之鑒識。不足以保其傳也。然苟得流傳。不別今與後。其損益於世道人心。尤不可不加謹。襄也病羸。不能效力父母之邦。況敢望有益於世。然生遭此極盛之運。以其庸陋之筆墨。稗補萬一焉。則不負爲太平之民也。蘇轍謂魏公。苟以爲可教而教之則幸矣。閣下其亦有以教襄焉。冒瀆尊嚴。惶懼無已。

文政十年。丁亥。五月廿一日。布衣賴襄謹再拜白。

改版 邦文日本外史 目次

卷之一 源氏前記平氏……一

評論……一
平氏系圖……六
天慶亂……八
忠盛……九
保元亂……一一
平治亂……一三
鹿谷會合……一七
重盛諫言……二〇
治承亂……二四
富士河陣……二七
南都討伐……二八
清盛遺言……一一
賴朝上書……一九
篠原合戰……二一
平氏西奔……二三
一谷合戰……二六
屋島合戰……二九
壇浦合戰……四〇
一門滅亡……四一
平氏餘黨……四二
評論……四三
牛若東下……五四
山徒神輿振……五五
賴政謀亂……五六
八牧合戰……五八
石橋山合戰……五九
鎌倉建府……八二
賴朝と義經……八四
木曾義仲……八五
栗殼壑合戰……八七

卷之二 源氏正記源氏上……五一

源氏系圖……五一
安和の變……五三
安倍氏系圖……五五
前九年役……五五
賴義上書……六八
藤原氏系圖……六九
後三年役……六〇
保元亂……六四
平治亂……六八
賴朝遠流……七三
義仲亡狀……九一
宇治川先登……九三
義仲追討……九四
義仲妾巴……九五
義仲戰死……九五
一谷攻戰……九六
鵯越逆落……九七
屋島攻戰……一〇一
範朝西伐……一〇一
那須與一……一〇二
嗣信忠死……一〇二
壇浦合戰……一〇三
腰越狀……一〇五

卷之三 源氏正記源氏下……八九

堀川邸夜襲……一〇六
賴朝追討宣……一〇七
義經西奔……一〇七
忠信忠死……一〇九
義經北走……一〇九
衣川合戰……一一〇
奧陸鎭撫……一一一
賴朝入朝……一一三
時政の計……一一六
實朝……一一七
公曉企謀……一一〇
評論……一一一

卷之四　源氏後記北條氏……二三五

論……二三五　三浦光村……一四五
評……一二七　時頼……一四六
北條氏系圖……一三二　青砥藤綱……一四七
頼家の行狀……一三三　時宗……一四八
義時……一三三　文永弘安役……一四九
頼家圖北條……一三三　高時暴狀……一五一
義盛謀叛……一三四　南北朝分立……一五一
後鳥羽上皇……一三五　後醍醐天皇……一五二
承久亂因……一三七　鎌倉攻伐……一五五
鎌倉軍議……一三八　北條氏滅亡……一五六
宇治川合戰……一四〇　評論……一五九
三上皇還幸……一四二
泰時の人物……一四四

卷之五　新田氏前記楠氏……一六三

北畠氏　菊池氏　名和氏
兒島氏　土居氏　得能氏

論……一六三　赤坂城……一六九
楠氏系圖……一六六　隱岐遷幸……一七〇
兩統更立……一六七　兒島高德……一七一
笠置行幸……一六八　未來記披讀……一七二
楠の靈夢……一六八　千早城……一七三

卷之六　新田氏正記新田氏……二〇三

論……二〇三　洛中巷戰……二〇〇
新田氏系圖……二〇六　天皇還幸……二〇二
護良親王……二〇七　義貞北行……二〇二
義貞擧兵……二〇八　金崎籠城……二〇四
稻村崎……二一〇　義貞戰死……二一七
護良禁囚……二一二　勾當內侍……二一七
尊氏の八罪……二一三　義宗……二一一
足利勢攻上……二一四　義興義治……二一二
兵庫激戰……二一六　評論……二一三
叡山臨幸……二一九

主上遁隱岐……一七五　櫻井驛訣別……一八五
名和氏系圖……一七六　湊川合戰……一八五
船上山合戰……一七六　正行圖自殺……一八六
天皇還幸……一七八　北畠顯家……一八八
菊池氏系圖……一七八　後醍醐崩御……一八九
菊池武時……一七九　住吉合戰……一九〇
建武中興……一八〇　正行參內……一九一
藤原藤房……一八〇　四條畷合戰……一九二
尊氏謀叛……一八〇　菊池武光……一九四
北畠氏系圖……一八一　南北朝和睦……一九七
正成建策……一八四　評論……一九九

卷之七　足利氏正記足利氏上……二三七

足利氏系圖……二三七　高兒弟暴狀……二五三
六波羅攻……二四〇　兄弟再不和……二五五
尊氏決志……二四四　楠氏攻京師……二五五
京師戰亂……二四五　義滿……二六二
足利氏西下……二四六　滿幸謀反……二六六
尊氏上誓書……二四八　明德の役……二六八
官軍攻鎌倉……二四九　神器の授受……二七〇
義貞戰死……二五〇　應永の役……二七一
土岐頼遠……二五一　明の使節……二七三
足利氏恩威……二五二

卷之八　足利氏正記足利氏中……二七五

南朝遺臣……二七六　結城氏朝……二八一
三管四職……二七六　義昭……二八一
兩上杉……二七六　嘉吉の役……二八二
三管八館……二七六　滿祐討伐……二八四
細川氏系圖……二七七　持國と持豐……二八六
上杉氏憲……二七七　義政奢侈……二八八
赤松滿祐……二七八　義尙……二八九
義教……二七九　義就擧兵……二九一
持氏討伐……二八〇　應仁の大亂……二九二

卷之九　足利氏正記足利氏下……二九九

東西解陣……二九九　細川藤孝……三二
太田持資……三〇〇　喜連川公方……三四
三好長慶……三〇七　評論……三六
三好三黨……三一

卷之十　足利氏後記後北條氏……三二

論……三二　管領の命駕……三三四
後北條氏系圖……三三五　黃八幡……三三四
長氏大志……三三六　長尾輝虎……三三七
小田原攻略……三三八　鴻臺の役……三三八
三浦攻伐……三三九　晴信來襲……三四〇
氏綱……三三〇　小田原大役……三四三
上杉氏系圖……三三一　評論……三四七
氏康……三三二

卷之十一　足利氏後記武田氏上杉氏……三五一

武田氏系圖……三五一　上杉氏系圖……三五六
晴信自立……三五三　上杉景虎……三五八
山本勘助……三五四　河中島……三五九

河中兩雄士……三六九　天目山……三八四
三形原合戰……三七四　大阪役……三八九
謙信西伐……三七六　評論……三九一
上杉景勝……三八〇

卷之十二　足利氏後記毛利氏……三九五

毛利氏系圖……三九五　信長西伐……四一〇
元就……三九七　輝元媾和……四一六
隆景元春……四〇〇　隆景華押論……四一九
全萱弑義隆……四〇一　碧蹄驛……四一九
元就賜詔……四〇二　吉川廣家……四二一
嚴島城……四〇三　關原役……四二三
嚴島合戰……四〇四　評論……四二五
元就勤王……四〇六

卷之十三　德川氏前記織田氏上……四二九

評論……四二九　信長入朝……四四四
織田氏系圖……四三三　姉川役……四四九
信秀……四三四　一向宗僧徒……四四九
政秀諫死……四三六　叡山を焚く……四五一
桶狹合戰……四四〇　槇島合戰……四五三
信長奉勅……四四一　足利氏に代る……四五四

卷之十四　德川氏前記織田氏下……四七七

長篠合戰……四七九　蒲生賢秀……四七六
柴田勝家……四八一　明智氏亡ぶ……四七六
安土城……四八二　清洲會議……四七七
大阪戍擊……四八二　賤岳合戰……四七八
南伐……四八三　勝家最後……四七九
大阪降る……四八三　小牧戰……四八〇
武田氏攻伐……四七〇　秀吉媾和……四八一
瀧川一益……四七一　關原役……四八二
明智光秀……四七二　信雄……四八三
本能寺變……四七四　信益……四八五
信忠……四七五　長評論……四八五
信長性質……四七五

卷之十五　德川氏前記豐臣氏上……四八九

豐臣氏系圖……四八九　西征大將……四九六
日吉丸……四九〇　秀吉の宿志……四九六
信長に仕ふ……四九一　別所長治……四九七
清洲城修理……四九二　荒木村重……四九七
豪族を率ゐる……四九三　高松城水攻……五〇〇
千瓢馬表……四九五　山崎會戰……五〇二

九州征伐……五〇二　北伐……五一一
江北の戰……五〇四　聚樂行幸……五一六
大阪城……五〇七　北條氏政……五一七
小牧長湫戰……五〇八　小田原攻伐……五一九
四國征伐……五〇九

卷之十六　德川氏前記豐臣氏中……五二七

秀吉の大志……五二七　平壤合戰……五二四
征韓を企つ……五二八　碧蹄館激戰……五二一
征韓の部署……五二九　長政諫言……五二四
那古耶陣……五三〇　殺生關白……五二六
全軍上陸……五三二　大地震……五二八
韓王奔る……五三三　明韓使至る……五二九
明の援軍……五三五　再征……五三〇
行長破明軍……五三六　水軍……五三二
清正進軍……五三六　蔚山籠城……五三五
二王子生擒……五三七　秀吉遺言……五三八
明和を欲す……五三八　在韓軍召還……五三九
明の策略……五三九

卷之十七　德川氏前記豐臣氏下……五五五

德川家康……五五五　家康を詰る……五六五
三成の計……五六六　大阪兵備……五七九
家康東下……五六七　幸村建議……五七九
關原合戰……五七〇　木村重成……五八二
淺野幸長……五七二　和議成る……五八四
清正退三諫……五七五　秀賴出馬……五九〇
秀賴來京師……五七五　大阪落城……五九二
方廣寺鐘銘……五七六　評論……五九五
淀君の恚憤……五七七

卷之十八　德川氏正記德川氏一……五九九

德川氏系圖……五九九　家康歸國……六一三
德壽……六〇一　信長と盟ふ……六一五
清康……六〇三　一向宗徒……六一七
葵章……六〇四　武門の棟梁……六二四
安部川石戰……六〇九

卷之十九　德川氏正記德川氏二……六二五

本多忠勝……六二六　酒井忠次……六二四
三形原合戰……六二七　三氏盟約……六三七
長篠合戰……六三二　諏訪會合……六三九
鳥居勝高……六三二　甲信略定……六四二

卷之二十　德川氏正記德川氏三……六四五

小牧山合戰……六四六
長湫合戰……六四九
佐々成政……六五一
本多重次……六五三
眞田昌幸……六五四
秀吉媾和……六五五
家康西上……六五八
本多忠次……六五九
板倉勝重……六六〇
小田原征伐……六六三
論功行賞……六六六
秀次殺さる……六七一
伊達政宗……六七一
家康直言……六七二
諸雄忿諍……六七三

卷之二十一　德川氏正記德川氏四……六七七

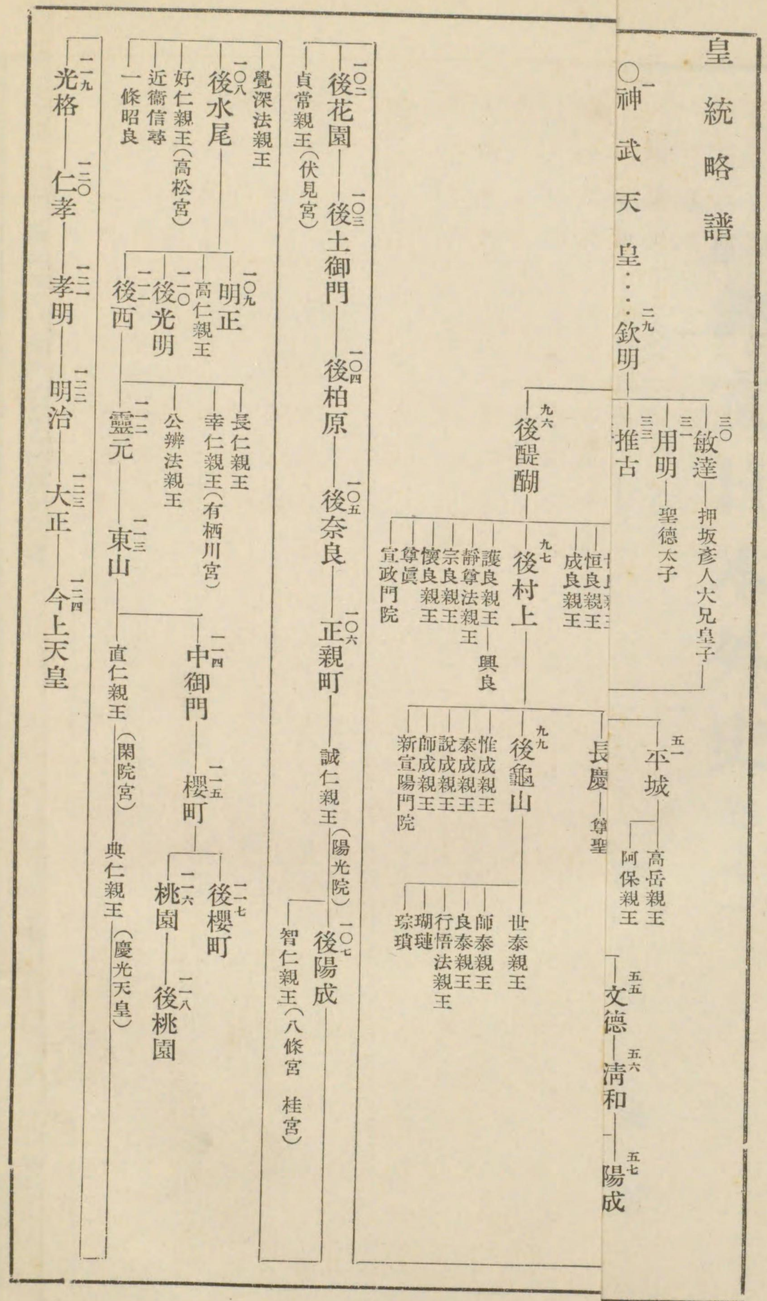
細川忠興……六七八
京畿騷擾……六七八
諸奉行密議……六七八
七將と三成……六八一
上杉景勝……六八二
家康入西城……六八四
家康東伐……六八六
西軍東下……六八八
福島正則……六八九
秀康……六九〇
山內一豐室……六九二
伏見落城……六九四
織田秀信……六九五
岐阜城陷落……六九六
赤阪の屯……六九九
大垣會議……七〇〇
關原會戰……七〇一
諸軍の部署……七〇一
西軍大敗……七〇三
田邊籠城……七〇四
眞田父子……七〇九
諸將封土……七〇九
本願寺僧徒……七一
榊原康政……七一四
禁庭修拓……七一七
朝鮮入貢……七一八
琉球征伐……七二〇
禁耶蘇教……七二一
經典刊行……七二四

卷之二十二　德川氏正記德川氏五……七二五

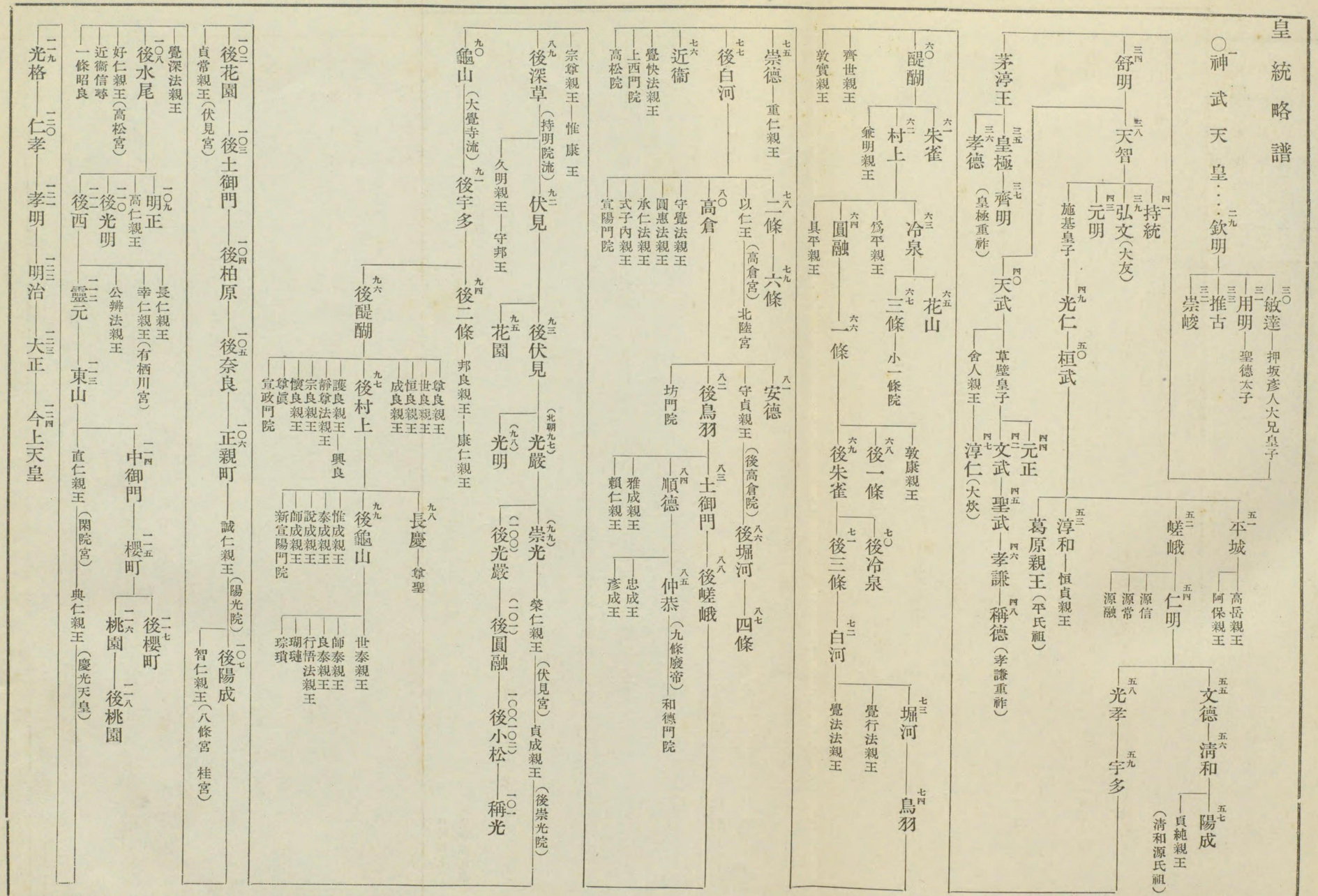
淀君と治長……七二五
片桐且元……七二五
大阪募兵……七二七
大阪陣……七二八
和議成立……七三三
井伊直孝……七三五
道明寺口戰……七三九
東軍の部署……七四一
城兵の部署……七四二
大阪落城……七四四
宣賴……七四五
豐臣氏亡ぶ……七四六
新式十三條……七四七
朝廷式……七四七
忠輝……七四八
家康遺言……七四九
松平信綱……七六一
松平正之……七六三
明暦大火……七六三
吉宗……七六四
評論……七六五

目次終

皇統略譜



皇統略譜



卷之二十一 德川氏正記德川氏四……六七七

細川忠興……六七八
京畿騷擾……六七八
諸奉行密議……六七八
七將と三成……六八一
上杉景勝……六八二
家康入西城……六八四
家康東伐……六八六
西軍東下……六八八
福島正則……六八九
秀康……六九〇
山內一豐……六九二
伏見落城……六九四
織田秀信……六九五
岐阜城陷落……六九六
赤阪の屯……六九九
大垣會議……七〇〇
關原會戰……七〇一
諸軍の部署……七〇一
西軍大敗……七〇三
田邊籠城……七〇四
眞田父子……七〇九
諸將封土……七〇九
和議成立……七一三
井伊直孝……七一五
道明寺口戰……七一九
東軍の部署……七二一
城兵の部署……七二二
大阪落城……七二四
宣賴……七二五
家康遺言……七二九
松平信綱……七六一
松平正之……七六三
明暦大火……七六三
吉宗……七六四
評論……七六五

目次終

改版 邦文日本外史 卷之一

賴山陽 著
池邊義象 譯述

源氏前記

平氏

大權武門に歸するの由來

【封事】醍醐の朝延喜十四年二月清行意見封事を上る

上世兵制文武一途

外史氏曰く。吾れ舊志を讀み、鳥羽帝の時、數制符を下して、諸州の武士の、源平二氏に屬するを禁ぜしを見て、曰く、「大權の將門に歸せしは、其れ此時に有るか」と。三善清行の封事に宿衛豪橫の患を陳べしを讀むに及びて、乃制度の弊、其來ること久しく、亶に此に始まりしに非ざるを知れり。

蓋し、我朝の初めて國を建つるや、政體簡易にして、文武一途なり。海內を擧げて皆兵にして、天子之が元帥たり。大臣、大連之が褊裨たり。未だ嘗て別に將帥を置かざりしなり。豈復謂ゆる武門武士と云ふ者あらんや。故に天下事なければ則已み、事あれば則天子必ず征伐の勞を親し、否らざれば則皇子、皇后之に代り、敢て之を臣下に委ねられざりしなり。是を以て大權、上に在りて、能く海內を制服し、施きて三韓、肅愼に及ぶまで、來王せざるは無かりき。

中世兵制文官武官を分つ

【六衛】左右の近衛、衛門、兵衛

【八省】中務、式部、治部、民部、兵部、刑部、大蔵、宮内

【首領】大毅、小毅、主張、校尉、旅師、隊正等軍團組織

【守令】國司

【契勅】符節の敕書

【尺一】詔版なり長一尺一寸

中世に至るに及びて、唐制を摹倣し、官を文武に分ち、乃特に將帥を置き、六衛の將、天子の親兵を將ゐたり。而して兵部、八省の一に居り、左右の馬寮を建て、以て貢馬を蓄はしめたり。而して邊要の國は、諸郡に皆軍團あり。一國の丁を三分して、其一を取り、五人を伍となし、伍二を火となし、火五を隊となし、隊二を旅となし、旅十を團となす。各首領あり。一火六馬とし、騎射に便なる者は、特に騎隊となす。皆守令に任じて簡點せしむ。京を衛り邊を戍るには、簿を按じて差遣す。征伐を稟ぐる毎に、沿道の諸國をして、契勅を須つて勘合せしむ。凡征行萬人に、乃將軍あり、副將軍あり、軍監あり、軍曹あり、錄事あり。三軍を總ぶる毎に、大將軍一人あり。大將の出征には、必ず節刀を授く。軍に臨み敵に對して、首領の約束に從はざる者は、皆專決を聽す。還る日、狀を具へて以聞す。勳位十二等を建て、功を論じ賞を酬いて、其兵を罷む。凡そ其器仗は兵庫に藏め、出納するに時を以てし、皆之を兵部に管せしむ。中朝、兵を制せしこと、大略此の如くなりき。上世の旨に及ばずと雖も、其亂を防ぎ禍を慮るは、密なりと謂ふべし。

武門の起原

是故に、事有れば則尺一の符を下して、數十萬の兵馬立所に具る。而して平時は散じて卒伍に歸す。之が將帥たる者、或は文吏より出でて兵陣に臨み、事畢りて歸り、介冑を脫ぎて衣冠を襲る。未だ曾て謂ゆる武門、武士と云ふ者有ざりしなり。藤原氏外戚を以て、世政權を執るに及びて、卿相の位、其族人に非ざれば擬せず。官、品流を論ずること、因習して俗と成る。庶僚百揆、概其職を世にす。而して將帥の任は、毎に源平二家に委ぬ。是に於て始めて武門の稱あり。

兵農分る

光仁、桓武の朝、疆場多事なり。寶龜中に、廷議して冗兵を汰す。般富の百姓、才、弓馬に堪ふる者は、專ら武藝を習ひて、以て徵發に應じ、其羸弱なる者は、皆農業に就けり。而して兵農全く分る。貞觀、延喜の後に至りて、百度弛廢し、上下隔絶す。奥羽關東の豪民、軍功を以て、六衛の舍人に至る者、或は坐ながら鄉曲を制して、宿衛を勤めず。而れども守令之を能く制するなし。清行の謂ゆる六軍の貔虎に非ずして、諸國の豺狼たる者、所在皆是なり。平居は甲を藏め馬を蓄へ、儼然として自武士と稱す。是に於て始めて武士の稱あり。天慶より寛治に馴致す。

武士の起原

源平二氏

【東邊】奥羽

源平相絣制す

兵權

源平二氏、數〻東邊を鎭するや、毎に此輩を用ゐて、以て功効を奏す。而して各習用する所ありて、以て相隷屬す。因襲の久しき、君臣の如く然り。是より其後、苟も事あれば、輒之を二氏に命ず。二氏、各其隷屬を發して之に赴くこと、物を囊に探るが如し。復將を選み兵を徵することを煩さず。而して討伐剿誅、立どころに辨ぜざるはなし。廟堂の上は務めて恬熙を取り、其勢の積重して回らざるを憂へず。方に且く延きて爪牙と爲して、以て相傾排するのみ。鳥羽の此令を下せるは、其弊を察せられしものの如くにして、弊の由る所を窮められず。之を救ふの術に於ては、蓋し已だ疎なりき。

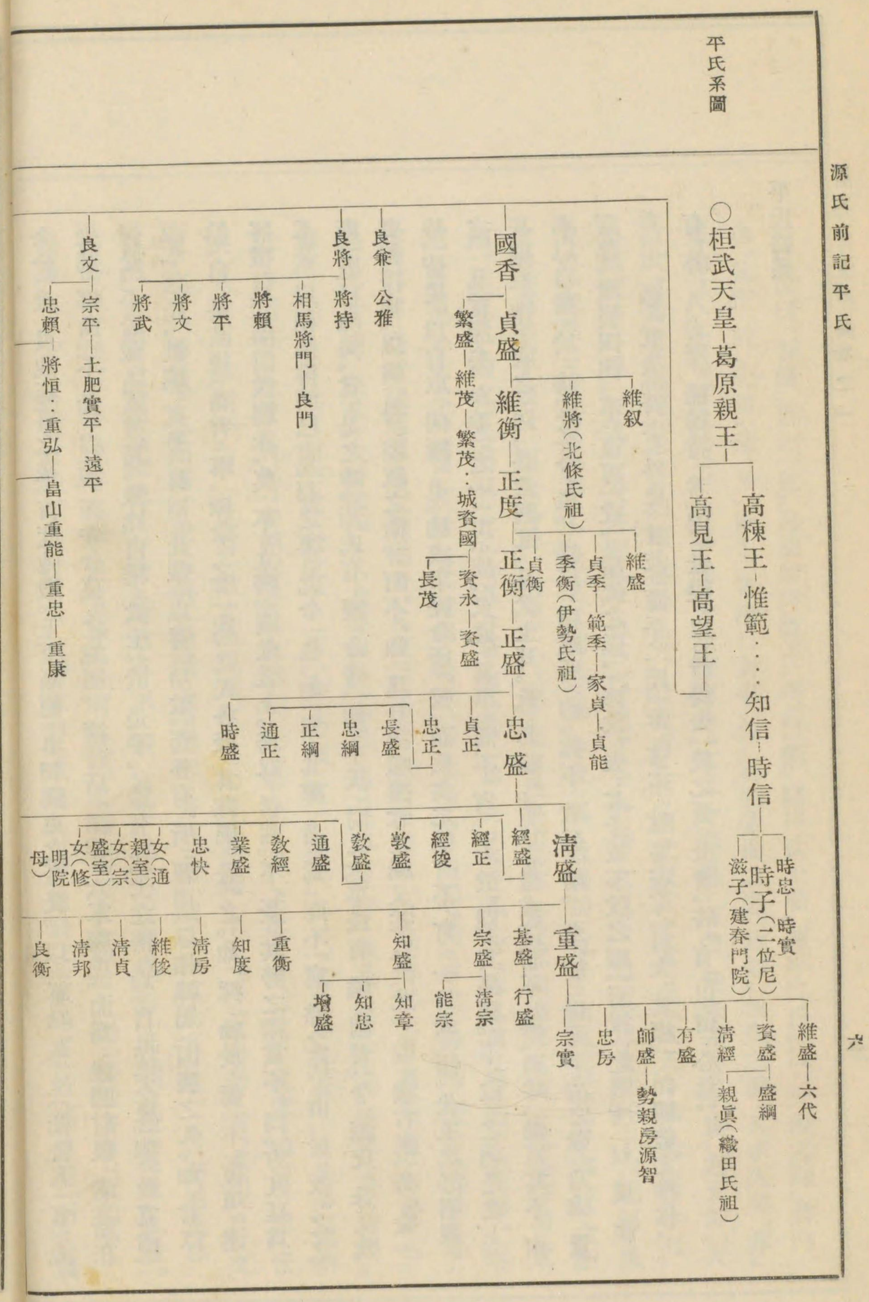
是の時に當りて、源氏に命を梗ぐものあれば、平氏に勅して之を討たしめ、平氏に制し難きものあれば、源氏をして之を誅せしむ。更相絣制して、以て控馭の術を得たりとして、異日搏噬攘奪の禍、又此に基きしを知らず。古制を敗壞して一時に苟媮し、皆以て自ら困蹶を取るに足れり。抑、戎事は民命の繫る所にして、兵食の權は一日も國に去つ可らず。先王の必躬之を親らしたまふは、其旨深し。今之を一二の宗族に委ね、又其事を賤みて省みず。其品類を別ちて、之を朝廷の上に齒せざるに至る。甚しきは、則之を奴僕視して曰く「これ武門のみ、これ武士のみ」と。其功を論じ賞を行ふに及びては、或は愆みて與へず。嗚呼、幾何ぞ、其れ相率ゐて、以て自ら法度の外に棄てざらんや。特積威の約す る所を以て、抑へて敢て發せざりし耳。保元、平治の際に至りて、乃釁に乘じて起り、潰裂四出して、復收む可からず。横流の極、終に、其千歳不拔の權を失ひて、之を嚮に奴僕視せし所の者に授くるを致す。慨くに勝ふ可けんや。

吾、外史を作り、首に源平二氏を敍するに、未だ嘗て王家の自ら其權を失ひしを歎ぜずんばあらず。而れども國勢の推移する、人力の維持する所に非ざるものあり。世の變に因りて以て得失を見、後の世を憂ふる者、將に以て心を留むること有らんとす。

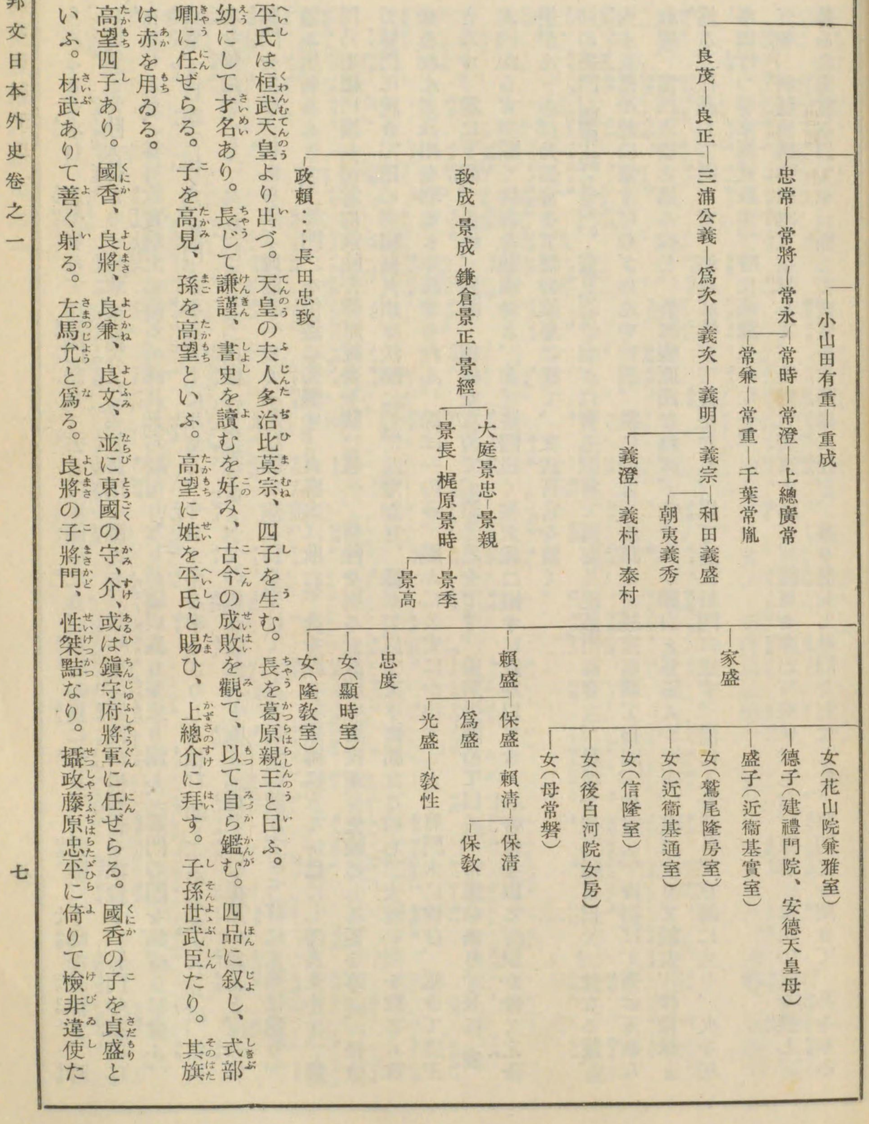
外史氏曰。吾讀舊志。見烏羽帝時數下制符。禁諸州武士屬源平二氏曰。大權之歸將門也。其在於此時歟。及讀三善清行封事。陳宿衛豪橫之患。乃知制度之弊。其來久矣。非亶始於此也。蓋我朝之初建國也。政體簡易。文武一途。舉海內皆兵。而天子爲之元帥。大臣大連爲之褊裨。未嘗別置將帥也。豈復有所謂武門武士者哉。故天下無事則已。有事則天子必親征伐之勞。否則皇子皇后代之。不敢委之臣下也。是以大權在上。能制服海內。施及三韓肅愼。無不來王也。及至中世。摹倣唐制。官分文武。乃特置將帥。六衛之將。將天子親兵。而兵部居八省之一。建左右馬寮。以蓄貢馬。而邊要之國。諸郡皆有軍團。三分一國之丁。而取其一。五人爲伍。伍二爲火。火五爲隊。隊二爲旅。旅十爲團。各有首領。一火六馬。便騎射者。特爲騎隊。皆任守令簡點。衛京戍邊。按籍差遣。每舉征伐。令沿道諸國須契勅勘合。凡征行萬人。乃有將軍。有副將軍。有軍監。有軍曹。有錄事。每總三軍。大將軍一人。大將出征。必授節刀。臨軍對敵。首領不從約束者。皆聽專決。還日具狀以聞。建勳位十二等。論功酬賞。而罷其兵。凡其器仗。藏于兵庫。出納以時。皆管之於兵部。中朝制兵。大略如此。雖不及上世之旨。其防亂慮禍。可謂密矣。是故有事則下尺一之符。數十萬兵馬立具。而平時散歸卒伍。爲之將帥者。或出自文吏。臨兵陣。畢事而歸。脫介冑。而襲衣冠。未嘗有所謂武門武士者也。及藤原氏以外戚。世執政權。卿相之位。非其族人。不擬。官論品流。因習成俗。庶僚百揆。概世其職。而將帥之任。每委源平二家。於是乎。始有武門之稱焉。光仁桓武之朝。疆埸多事。寶龜中。廷議汰冗兵。殷富百姓。才堪弓馬者。專習武藝。以應徵發。其羸弱者。皆就農業。而兵農全分。至貞觀延喜之後。百度弛廢。上下隔絕。奧羽關東之豪民。以軍功。至六衛舍人者。或坐制鄉曲。不勤宿衛。而守令莫之能制。清行所謂非六軍貙虎。而爲諸國豺狼者。所在皆是。平居藏甲蓄馬。儼然自稱武士。於是乎。始有武士之稱焉。自從天慶。馴致寬治。源平二氏。數鎭東邊。每用此輩。以奏功效。而各有所習用。以相隸屬。因襲之久。如君臣然。自是其後。苟有事。輒命之二氏。二氏各發其隸屬。赴之。如探物於囊。不復煩選將徵兵。而討伐剿誅。莫不立辨。廟堂之上。務取恬熙。不憂其勢之積重不回。方且延爲爪牙。以相傾排而已。鳥羽之下。此令也。如察其弊者焉。而不窮弊之所由。於救之之術。蓋已疎矣。當是之時。源氏有梗命者。勅平氏討之。平氏有難制者。令源氏誅之。更相箝制。以爲得控馭之術。而不知異日搏噬攘奪之禍又基於此。敗壞古制。苟偷一時。皆足以自取困蹶也。抑戎事民命所繫。而兵食之權。不可一日去國。先王之必躬親之。其旨深矣。今委之一二宗族。又賤其事。而不省。至於別其品類。不齒之朝廷之上。甚則奴僕視之。曰。是武門耳。是武士耳。及其論功行賞。或悋而不與。嗚呼。幾何其不相率以自棄於法度之外也。特以積威所約。抑不敢發爾。至於保元平治之際。乃乘釁而起。潰裂四出。不復可收。橫流之極。終致失其千載不拔之權。而授之之嚮所奴僕視者。可勝慨哉。吾作外史。首敍源平二氏。未嘗不歎王家之自失其權。而國勢之推移。有非人力所能維持者。因世變。以見得失。後之憂世者。將有以留心焉。

平氏略系

平氏系圖



平氏系統



平氏は桓武天皇より出づ。天皇の夫人多治比莫宗、四子を生む。長を葛原親王と曰ふ。幼にして才名あり。長じて謙謹、書史を讀むを好み、古今の成敗を觀て、以て自ら鑑む。四品に叙し、式部卿に任ぜらる。子を高見、孫を高望といふ。高望に姓を平氏と賜ひ、上總介に拜す。子孫世武臣たり。其族は赤を用ゐる。

高望四子あり。國香、良將、良兼、良文、並に東國の守、介、或は鎮守府將軍に任ぜらる。國香の子を貞盛といふ。材武ありて善く射る。左馬允と爲る。良將の子將門、性桀黠なり。攝政藤原忠平に倚りて檢非違使た

高望の子貞盛將門

【相馬の里】
下總
天慶の亂

【敦實親王】
宇多帝子

興世王

藤原純友

天慶二年
天慶三年

らんことを求む。忠平省みず。將門怒り、去りて東國に之き、相馬の里に據りて、常陸、下總を劫掠す。時に國香、常陸大掾たり。良兼、下總介たり。皆將門と隙あり。承平中、將門終に國香を攻殺す。將門の京師に在りしとき、嘗て敦實親王に詣る。從兵五六騎可りなり。適貞盛も亦來り謁し、將門の門を出づるに會ふ。貞盛、人に謂て曰く、「將門必事を天下に生ぜん。今日士卒を率ゐざりしを恨む。卽し士卒を率ゐたらば、當に之を擊殺すべし」と。是に至りて、貞盛、官を棄て東し、父の仇を復せんと欲す。良兼及び從弟の良正と、共に將門を攻む。利あらず。貞盛謂へらく、「是私鬪なり。勅を受けて、之を討つに若かず」と。將に京師に還り、請ふ所あらんとす。將門之を信濃に要擊す。貞盛大に敗れ、身を脫して京師に入る。已にして良兼卒す。將門乃下總に據り、遂に常陸介藤原維幾を襲ひ執へ、常陸を取る。武藏守興世王、兇險にして亂を喜ぶ。往きて將門に說きて曰く、「關東九州は沃饒にして四塞なり。據りて以て天下に覇たるべし。夫れ一州を取るも誅せられん。八州を取るも亦誅せられん。誅は一のみ。顧ふに公安にか決す」と。將門大に悅び、延きて謀主となす。遂に下野、上總、武藏、相模を攻めて、悉く之を下す。弟將平諫めて曰く、「帝王命あり。安に冀ふべからず。願くは之を熟圖せよ、」と。將門曰く、「天我に縱すに武を以てす。吾帝位を取る、孰か能く之を拒がん」と。乃僞宮を下總の猿島に建て、文武百官を置く。

初め將門、藤原純友といふ者を友として、善し。嘗て同じく比叡山に登り、皇城を俯し瞰て曰く、「壯なる哉、大丈夫當を此に宅す可らざらんや」と。遂に與に反を謀る。純友に謂て曰く、「他日志を得ば、吾は王族なれば、當に天子と爲るべし。公は藤原氏なれば、能く我が關白と爲らんか」と。是に至りて純友、伊豫掾と爲る。任滿ちて還らず。海島に據りて盜をなし、以て遙に將門に應ず。潛に人を遣りて京師に入り、火を坊市に行つ。京師戒嚴す。時に天慶二年なり。

三年、朝廷參議藤原忠文を拜して、征東大將軍と爲し、諸將を率ゐて東伐せしむ。東海、東山の兵を發し、募るに重賞を以てす。而して貞盛を常陸掾に任じ、兵を發して將門を討たしむ。將門之を聞きて、兵を率ゐて貞盛を常陸に索むれども得ず。乃其衆を散じて獨り千餘人を以て下野に至る。

藤原秀鄕

天慶の亂平ぐ

貞盛の子

下野に押領使藤原秀鄕といふ者あり。世々大族たり。將門兵を起すに及びて、往きて之を見る。將門方に髮を梳る。髻を捉り、出でて之を款接す。食を命じ共に食ふ。飯粒前に墮つ。拾ひて之を食ふ。秀鄕、其輕卒にして、與に爲すに足ざるを知りて、乃貞盛に從ひぬ。

貞盛、將門の備なきを窺ひ、秀鄕と兵四千餘人を合せて、急に之を襲ふ。將門、遽に出でて之を拒ぎ、大に敗る。貞盛、勝に乘じて疾く攻む。將門、之を險阻に誘んと欲し、走りて島廣山に據る。貞盛、其營を火き、大に山北に戰ふ。將門、見兵四百騎を以て死鬪す。貞盛兵を麾きて之に蹙る。將門獨身出でて走る。貞盛叱咤して追馳す。射て其右額に中つ。將門馬より墜つ。秀鄕其首を斬る。興世王以下、悉く誅に伏す。京獄に梟す。八州皆定る。而して純友も尋で平らぐ。忠文等皆途より還る。貞盛、功を以て從五位上に叙し、後、從四位下に遷り、鎭守府將軍に任じ、陸奧守を兼ぬ。世呼びて平將軍といふ。

貞盛四子あり。季の維衡最勇なり。平致賴、源賴信、藤原保昌と名を齊くし、四天王と稱す。下野守に任ず。後私に致賴と鬪ひ、謫せられて淡路に徙る。貞盛、又從子維茂を養ふ。亦勇敢維衡に亞ぐ。維衡の曾孫正盛武幹あり。時に平氏、源氏と並に武臣たり。而して源義家功を邊陲に樹て、宗黨尤强し。其長子義親、對馬守たり。九州を剽掠し、官使を殺して、隱岐に流さる。逃れて出雲に歸り、吏を殺して貢賦を奪ふ。勢甚だ猖獗なり。是に於て正盛に詔して追討使となし、驛鈴を賜ひ、兵を率ゐて之を討ち、義親と戰ひ、其首を斬りて、京獄に梟す。時に天仁元年なり。

天仁元年

正盛、忠盛を生む。忠盛、伊賀、伊勢の間に居る。人と爲り、一目眇なり。大治中、山陽、南海に盜起る。忠盛逮捕して功あり。白河、鳥羽、二上皇に事ふ。並に寵あり。鳥羽上皇、得長壽院を建つるや、忠盛を以て役を董さしむ。役竣りて、但馬守に叙し、昇殿を聽す。舉朝之を憎む。豐明節會を以て、暗に乘じ、之

忠盛

得長壽院
【豐明節會】
新嘗祭の翌

日群臣に宴を豐明殿に賜はる

忠盛銀刀を帶して殿に昇る

【上皇】鳥羽

忠盛の子

祇園女御

清盛

頼盛

を刺さんと謀る。忠盛曰く、「朝すれば則ち詬を蒙り、朝せざれば怯となる。其宗を辱むるは一なり」と。乃刀を帶びて入る。家人平家貞、其子家長と甲を衷して從ふ。吏これを訶止す。家貞對へて曰く、「主君、戒心あり。臣、將に之と同じく死せんとす」と。吏止むるを得ず。忠盛殿に昇り、闇に就きて刀を拔く。刀光外射す。衆大に畏れ、敢て事を發せず。宴に及びて、忠盛を召して舞を命ぜらる。忠盛、之を愧ぢて、宴を終へずは醋瓮なり」と。蓋し國音、瓶子は平氏に通じ、醋瓮は眇に通ずればなり。忠盛、衆歌ひて曰く「伊勢瓶子して退く。主殿司を呼びて、刀を脫し之を授けて出づ。衆、忠盛劍を帶び殿に上り、兵を以て自衛るを劾奏し、典刑を正さんと請ふ。上皇驚き、忠盛を召して之を問ひ給ふ。對へて曰く、「臣の家人、道路の言を聞き、臣に尾して來れり。臣をして知らしめず。唯陛下其罪を斷めよ。其佩刀の如きは、請ふ之を主殿司に問ひ玉へ」と。主殿司、刀を進む。木刀に銀を塗りしなり。上皇嘻ひて曰く、「忠盛、意を用ゐる良に苦めたり。死を以て君を衛るは則武人の習ひのみ」と。遂に問ふ所なかりき。忠盛、累遷して、正四位下刑部卿を以て、仁平中に卒せり。

忠盛七子あり。清盛、經盛、教盛、家盛、頼盛、忠重、忠度と曰ふ。而して清盛最寵貴を極む。初め忠盛の白河上皇に事ふるや、上皇に嬖姬あり。祇園祠の傍に居る。嘗て夜幸するに、雨ふること甚し。鬼の髮の束鍼の如きを覩る。乍覩え、乍失す。忠盛に命じて之を射さしむ。忠盛捕へて之を覩るに、一老僧の麥稈を束ねて以て笠に代へ、火器を提げて行く〳〵これを吹くなり。曰く、「將に燭を祠に上らんとするなり」と。上皇、忠盛の膽勇倚るべしと謂ひ、益寵あり。幸する所の宮人兵衛佐局、忠盛と私して身めり。上皇、卽之を賜ひて曰く、「女を生まば、則朕之を取らん。卽し男ならば、卿以て子とせよ」と。宮人免身して男を生む。是を清盛となす。後更に妻を娶り、家盛、頼盛を生む。清盛、出でゝ中御門氏に依る。大治中、左衛門尉に任ず。累遷して從四位下安藝守に至る。海に航して任に赴くとき、魚の其舟に入るあり。或人曰く、「家を興すの兆なり」と。

【璋子】大納言公實の女

崇德天皇

【得子】中納言長實の女

藤原頼長

保元元年

【法皇】鳥羽

【上皇】崇德

保元の亂

【如意山】京都の東

【忠政】清盛の伯父

是より先、鳥羽の太子、禪を受く。是を崇德帝とす。帝の母璋子、幼きとき、白河法皇に養はる。法皇之を鍾愛す。長ずるに及びて衰へず。頗る物議に涉る。鳥羽、是を以て崇德を子として視給はず。戲に之を目けて叔父兒といふ。鳥羽の寵姬を得子といひ、美福門院と號す。皇子體仁を生む。崇德をして養ひて太子と爲さしむ。四歲にして禪を受く。是を近衛帝とす。帝崩じて、崇德位に復せんことを希ふ。崇德の皇子重仁、又長じて賢なり。中外望を屬せり。而して美福、近衛の蚤世を以て呪詛に出づとし、乃密に鳥羽に勸め、崇德の同母弟雅仁を立てらる。是を後白河帝とす。朝野駭然たり。

崇德、憤恚して、左大臣藤原頼長を召して、之に語るに情を以てす。頼長慧黠なり。世、惡左府と稱す。兄の忠通と權を爭ひ、逞からず。上皇をして位に復せしめて、己れ柄を專にせんと欲す。乃慫慂して兵を擧ぐ。物情恟然たり。

保元元年七月、法皇崩ず。卽夜これを葬る。上皇遂に兵を擧げて、白河殿に據る。源爲義等、これに屬す。法皇豫め變あるを度りて、諸將の當に召すべき者を遺命す。清盛與からず。蓋し忠盛の夫妻、重仁に傅たるを以てなり。美福曰く、「安ぞ强きこと平宗の如くにして、召さゞること有んや」と。遂に之を召す。清盛其宗を舉げて召に應ず。叔父忠政は獨上皇の宮に赴く。清盛の義子基盛、檢非違使たり。上皇の黨、源親治を宇治にて擒にす。已にして源義朝に敕して白河殿を攻めしめ、清盛等を留めて、宮を衛らしむ。少納言藤原通憲奏して、清盛をして同く往かしむ。清盛の長子を重盛と曰ふ。父に從ひて其西門を攻む。西門の將源爲朝善く拒ぐ。我が先鋒の二將其れに射殺さる。清盛曰く、「吾れ命を受くる必しも此門ならず」と。重盛肯せずして曰く、「敵を擇びて進むは、豈武臣の爲す所ならんや。兒、請ふ之に當らん」と。清盛、兵士をして重盛を擁止し、與に共に南門を攻めしむ。白河殿陷る。上皇、出で走りて如意山に入り、髮を削りて南都に奔る。途にして執へられて讃岐に遷さる。頼長流矢に中り、已にして自殺す。帝、清盛に詔して、爲義を捕へんとすれども獲ず。忠政出でて、清盛に依りて降を乞ふ。聽さずして之を殺す。朝議因りて義朝を

平治の亂
義朝【藤原通憲】
信西【上皇】後白河
藤原信頼

平治元年清盛熊野に詣【三條殿】皇居
（後白河法皇宸影）

して爲義を殺さしむ。

清盛を以て播磨守となし、太宰大貳に超遷す。重盛以下賞を受くる差あり。始めて甲第を六波羅に興す。義朝、平氏の聲望己が上に出づるを視て、心常に之を嫉む。藤原通憲、清盛の女を娶りて婦となす。亦義朝と隙あり。通憲、大議に參與し、釐正する所多し。帝、位を太子に授く。是を二條帝とす。而して上皇仍政を聽く。政、通憲に在り。上皇の嬖人を藤原信頼と曰ふ。近衛大將たらんことを求む。上皇之を聽さんと欲す。通憲可かず。因りて唐の安祿山の事跡を圖して上り、以て之を諷す。信頼慙恨し、乃義朝と深く相結納し、陰に亂を作さんことを謀る。藤原經宗、藤原成親、藤原惟方みな其謀に與かる。謀既に定まる。而れども清盛を畏れて敢て發せず。平治元年冬、清盛、重盛、筑後守家貞等五十人を率ゐて熊野に詣づ。行きて切部に至る。六波羅の使者來り告げて曰く、「昨夜信頼、義朝、源頼政、源光基等と、兵五百を率ゐ、三條殿を圍みて之を燒き、並に少納言通憲の第を燒く。殺傷算なし。遂に上皇及び主上を禁内に幽し、少納言も亦害に遭ふ」と。衆愕然たり。清盛曰く、「之を爲すこと如何。宜しく熊野に到りて之を計るべきか」と。重盛曰く、「甲なき如何にせん」と。清盛曰く、「武臣天子の急に赴く、何ぞ猶豫を爲さん」と。清盛曰く、「甲なき如何にせん」と。家貞曰く、「臣、豫め是事あるを慮る」と。其擔を開きて甲冑五十を出す。器械弓箭これに稱へり。衆乃結束して北に還る。已にして源氏の兵阿部野に要するを聞く。清盛曰く、「彼は衆、我は寡。我れ且之を四國に避けて、以て再舉を謀らん」と。重盛曰く、「機失ふべからず。今を失ひて擊たずんば、彼將に我より先ぜんとす。我寡にして敗るとも、何の恥か之あらん。今日の事、死あるのみ」と。清盛曰く、「吾が志決せり」と。衆を率ゐて疾く馳す。未だ阿部野に至らざるに、一騎に遇ふ。衆意ふ、源氏の使ならんと。騎至りて曰く、「臣、六波羅より至る。六波羅の兵、駕を迎へて見に阿部野にあり。請ふ速に歸れ」と。衆相喜慶し、

藤原光頼

（平治之亂の圖）

天皇六波羅に行幸

清盛討賊

踴躍して京師に入る。是の時に當りて、信頼、乘輿に僭擬し、百官の上に坐し、庶政を聽斷す。百官敢て仰ぎ視る者莫し。獨左衛門督藤原光頼屈せず。會議に因りて信頼を折く。其弟惟方を勗まして、二宮を護り、以て清盛を待つ。清盛既に還る。信頼之を聞きて、諸門の守兵を益す。清盛、其備を怠らしめんことを謀り、乃名簿を信頼に致して、以て他なきを示す。清盛、帝を拔かんと計り、乃惟方と謀を通じ、夜、火を二條大宮に放つ。守門の兵、守を舍てて之を救ふ。天皇乃皇后と合車し、衣を蒙り、伏して藻壁門を出でらる。惟方從ふ。門者誰何す。惟方曰く、「宮人なり」と。門者、車中に燭して曰く、「可なり」と。既に出づ。重盛、騎三百を以て途に迎へ謁し、奉じて六波羅に入る。百官萃る。關白藤原基實も亦至る。衆、其妻は信頼の妹なるを以て之を疑ふ。或人清盛に告げて曰く、「關白至る」と。清盛曰く、「此れ大臣なり。假令來らざるも、吾固より將に召さんとす」と。衆、心乃安ず。已にして上皇、又仁和寺に逃る。しかれども信頼等は、乃大内に據れり。

帝、清盛を召し、命じて賊を討たしむ。且之を戒めて曰く、「宜しく伴りて退き走り、賊を誘ひて宮を出すべし。宮闕をして兵燹に罹らしむる莫れ」と。清盛對へて曰く、「臣、逆賊を誅すること、之を掌に指さすが如し。以て天心を勞

重盛

義平

八町二郎

六波羅を攻む

する勿れ。後命の若きに至りては、臣甚だ惑ふ。然りと雖も敢て心を盡さずんばあらず」と。乃兵三千騎を勒して、重盛、敦盛、頼盛をして之に將たらしめ、兵を分ちて大内に赴かしむ。賊は承明、建禮の二門を開き、陽明、待賢、郁芳の三門を關し、白旗二十餘旒を樹てて之を守る。我が兵望み見て色動く。重盛兵を勵して曰く、「年は平治なり。地は平安なり、而して我は平氏なり。天、吉兆を示す。勝を獲ること必せり。汝が輩努力せよ」と。乃其兵を分ちて二となし、一を大宮巷に留め、其一を以て待賢門に薄り、大に呼びて戰を挑む。信頼怖れて馬より墮つ。重盛門を排して入り、大庭の椋樹の下に至り、源義平と大に紫宸殿の前に戰ひ、七たび櫻橘樹を匝り、出でゝ大宮巷に至り、弓を杖きて以て息ふ。平家貞之を目して曰く、「平將軍再び生ずと謂ふべし」と。重盛兵を更へて復入る。義平呼びて曰く、「我は源氏の嫡子、公は平氏の嫡子なり。宜しく與に死を決すべし」と。重盛曰く、「諾哉」と。乃進み戰ひ且退き、二卒景安、家泰と、共に走る。義平及び鎌田政家、之を追ひて二條の濠に至る。重盛濠を踰ゆ。政家之を射て、肩及び背に中つ。甲堅くして入らず。馬を射る。馬倒れて胄墜つ。政家之に薄る。重盛扞ぐに弓を以てし、胄を取りて之を被むる。景安至り、政家を搏ちて仆し、義平に殺さる。重盛怒りて親ら圖はんと欲す。家泰進みて義平と相搏ち、政家に殺さる。重盛間を得て走る。是時に當りて、頼盛等、郁芳門を攻め、義朝と戰ひて退き走る。義朝の卒に、善く走る者八町二郎あり。鐵搭を以て其胄に鈎す。頼盛、刀を抜きて搭を截る。二郎仰ぎ仆る。頼盛走る。源氏の兵、宮を空くして出づ。

教盛、乃千騎を以て、横より大内に入り、諸門を關して之を守る。義朝、義平、獲る所無くして宮に還る。宮みな赤旗となる。進退據る所を失ひ、進みて六波羅を攻む。清盛、乃北臺に上り、床に踞して指麾す。賊兵沓至す。官軍逡巡す。賊勝に乘じて進む。矢、内戸に及ぶ。清盛怒りて馬に上り、大に呼びて馳せ出でゝ親ら敵陣を突き、兵を更へて交々進む。賊遂に大に敗走す。清盛乃大内に入り名簿を收め、笑ひて曰く、「咋予へ、今取る。何ぞ速なる」と。乃兵を分ちて賊を追ふ。義朝は關東に走り、信頼は仁和寺に至りて、哀を

義朝誅せらる

平氏の威天に振ふ

【上皇】後白河

永暦元年

六年清盛等昇進

永萬元年

上皇に乞ふ。上皇爲に之を帝に請ふ。帝許し給はず。重盛曰く、「卽之を宥せ。彼れ何をか能く爲さん」と。清盛曰く、「首惡誅せざる可らず。且帝の命を如何せん」と。乃教盛を遣し、兵を引きて仁和寺を圍ましめ、信頼及び其黨源師仲、藤原成親等五十餘人を捕へ、信頼を六條磧に斬る。重盛、教盛、成親と姻あり。乞ひて之を宥す。

帝、清盛の戰功を賞し、其子弟の官爵を進む。尾張の人長田忠致、義朝を誅し、其首を獻ず。之を獄門に梟す。頼盛の將平宗清、亦義朝の少子頼朝を捕へて至る。將に斬らんとす。宗清之を憫み、池尼に因りて宥されんことを請ふ。池尼は頼盛の母、清盛に於ては繼母たり。清盛聽さず。尼怒りて曰く、「刑部卿在らば、汝安ぞ我が言を侮るを得んや」と。重盛、頼盛と固く請ふ。乃死一等を減じ、伊豆に流す。義平、服を變じて京師に入り、清盛を狙擊せんとす。清盛之を覺り、捕獲して之を斬る。平氏の威天下に振ふ。肥前の人日向通良亂を作す。平家貞を遣し之を討ち夷ぐ。

是時に當りて、政、上皇に在り。藤原經宗、藤原惟方、帝に勸めて政を親らせしむ。兩宮交惡し。上皇、清盛を引きて自援く。永暦元年、上皇、清盛を正三位に進め、參議に任ず。清盛、乃上皇の旨を奉じて、經宗、惟方を收執す。帝嘗て故近衛帝の后を納れて中宮となす。世、之を二代の后と呼ぶ。清盛、二人の諫めずして、帝を惡に陷るゝを以て罪となし、之を斬らんと欲す。前關白忠通救ひ解く。乃死を宥して流に處す。明年、清盛累遷して權中納言に至る。六年遂に從二位に進み、權大納言に任ず。重盛正三位參議に至る。永萬元年、秋、帝崩ず。諸寺の僧徒葬に會す。延暦、園城の二寺、禮を爭ひて鬪はんと欲す。上皇源頼政を召して自衛る。訛言あり、「上皇、平氏を圖る」と。平氏大に驚き、兵を聚めて自守る。重盛曰く、「事必安なり。請ふ、法住寺に往きて親ら之を驗せん」と。法住寺は、上皇の宮なり。乃往く。途に上皇の來りて平氏の第に幸し、口づから解諭し玉はんと欲するに遇ふ。因りて扈還す。清盛、病と稱して出でず。重盛入りて諫めて曰く、「大人宜しく出でゝ謁すべし。吾が宗、功ありて罪なし。事何んぞ遽に此に至らんや。大人

西光

六條天皇【滋子】兵部大輔時信の女

仁安元年
二年

三年
高倉天皇【帝の母】寵后滋子

淨海

嘉應元年

資盛

基房

慎みて之を辭色に形す勿れ。不ざれば則讒或は因りて以て入らん。苟くも吾忠直を執らば、何渠ぞ人言を畏れんや」と。清盛之を善とすれども、竟に出でず。上皇還り、左右に謂て曰く、「訛言誰か之を使むるものぞ」と。藤原師光、前みて曰く、「天これを言しむるのみ」と。衆敢て應ふる者なし。師光は阿波の人、嘗て狡黠を以て、藤原通憲に愛使せらる。後髪を剃り西光と稱す。院の北面となり、頗る寵あり。心、平氏の驕恣を嫉む。數間に承り、上皇に說く。

是時太子嗣いで立つ。是を六條帝とす。帝幼し。政、復上皇に歸す。上皇の寵后滋子は清盛の妻時子の妹たり。憲仁を生む。上皇之を立てんと欲す。仁安元年、清盛を以て正二位に叙し、内大臣に任ず。二年、遂に從一位に至り、太政大臣に陞る。隨身兵仗を賜ひ、輦車にて宮に入るを聽す。敕して邑を播磨、肥前、肥後に賜ひ、大功田と爲して世襲しむ。重盛、從二位に叙し、權大納言に任ず。劍を帶して殿に昇るを聽す。次子宗盛、從三位に叙し、參議に任ず。三年二月、憲仁、禪を受く。甫めて五歲なり。是を高倉帝とす。帝の母の兄、大納言時忠、衆に謂て曰く、「方今天下の人、平族に非ざる者は、人に非ざるなり」と。是の時に當り、平族の朝官たる者、六十餘人。其采邑三十餘州に跨る。朝政盡く清盛に決す。清盛疾あり。詔して非常の赦を行ひて、以て之を禱る。既にして清盛髮を削り、淨海と稱す。別第を西八條に興して居る。童三百を選び、異服を服せしめ、京城の内外に散布し、誹謗する者を察して輒法に處す。京師目を側つ。上皇積みて平かなる能はず。嘉應元年、上皇髮を削り、法皇と稱す。平氏益々横なり。

重盛の次子資盛、數騎と出でゝ獵し、途に攝政藤原基房に値ふ。馬より下りず。徑に其衛を衝く。衛士捽へて之を下す。重盛、資盛の無禮を責む。基房、衛士を縛送して以て謝す。重盛其縛を釋きて、勞して之を遣る。清盛之を聞き、怒りて曰く、「今日に當りて、誰か敢て淨海の孫を辱むる者ぞ。必之に報いん」と。重盛諫め止む。清盛聽かず。三百人を伏せて、基房を路に要して其車を摧折し、從者の髻を切る。帝因りて朝を輟めらるゝこと三日。重盛、資盛を追ひて伊勢に之かしむ。

承安元年
【德子】建禮門院
四年
治承元年

成親卽平氏を討たんと行綱

鹿谷の會合

明雲

承安元年、清盛、其女德子を進めて女御と爲し、遂に立てて中宮とす。四年、右近衛大將闕く。重盛奏請して自ら之を拜す。治承元年、左近衛大將に轉じ、尋いで内大臣に拜す。小松の第に居る。弟宗盛、右近衛大將となる。已にして正二位に進む。朝臣舉りて平氏を妬む。藤原成親、權大納言を以て法皇の執事となる。重盛、其妹を娶りて子の維盛を生む。又其女を娶りて子の婦とす。成親の子成經、教盛の女を娶る。然して成親、殊に大將と爲るを希ふ。しかれども得ず。居常憤々たり。遂に平氏を滅さんことを圖る。乃西光と與に謀り、藏人源行綱を饗し、密に之に語りて曰く、「平氏の專恣なること、子の目する所なり。吾れ院勅を受けて、陰に之を圖る。而して未だ將率を得ず。子は源氏の胄なり。盍ぞ我將と爲りて、殊功を成し、顯位を取らざる」と。行綱之を諾す。成親遂に檢非違使平康賴、式部大輔藤原章綱、前近江守源成雅等に結ぶ。又法勝寺の執行俊寛に結ばんと欲し、數之に酒を飲しめ、姬人をして侍せしめ、因りて間に乘じて之に說く。其鹿谷の別館に會して事を計るや、宴酣にして馬逸す。坐者驚き起ち、誤ちて瓶子を仆す。成親曰く、「平氏仆る」と。西光曰く、「盍ぞ其首を梟せざる」と。康賴進みて曰く、「首を梟するは檢非違使の任なり」と。瓶を取りて之を柱上に懸く。一坐大に笑ふ。成親因りて策を建てゝ曰く、「祇園の祭日、京市雜沓すべし。此時に乘じて火を平氏の第に縱ちて、疾く之を攻めば、以て逞しくすべし」と。乃行綱に布五十匹を遺り、諸將の向ふ所を部署す。未だ發せず。西光の子師高、加賀守となる。其目代師經、白山の僧徒と鬪ふ。僧徒來りて之を延曆寺に訴ふ。延曆寺の僧徒、之と兵を合せて京師に入りて、闕を犯す。重盛三千騎を以て宮門を衛り、擊ちて之を卻く。山徒服せず。還りて再舉を圖る。法皇、平時忠をして往きて之を諭解せしむ。五月、師高、師經を誅めて之を流す。西光慙恨す。終に叡山の坐主明雲を法皇に間して、流に處す。明雲素より清盛と善し。清盛爲に奏して之を救ふ。省ず。已にして山僧明雲を奪ひ還る。法皇怒りて、諸將士に敕して之を討たしむ。清盛敕を奉ぜず。則更に成親大に喜び、因りて兵を聚む。

行綱自首

【新大納言】成親

【院中】後白河法皇の宮

西光

行綱、自度る、事竟に成らじ、自首するに若かずと。乃、夜馳せて西八條に赴く。清盛、福原に在りと聞きて又赴き、面あたり事を告げんと請ふ。清盛出でて之に面す。行綱曰く、「院中兵を集む。君其由を知るや」と。清盛曰く、「山徒を攻めんと欲するのみ」と。行綱進みて其耳に附き、語りて曰く、「否々、事貴族に係る。嚮日、新大納言氏俄に行綱を鹿谷に要す。謀云々。聞く、法皇も亦親ら臨まんと欲す。法印靜憲之を諫むるに因りて止む。事已に此に至る。敢て告げずんばあらず」と。清盛大に駭き、直に京師に歸り、悉く子弟宗族を召し、檢非違使阿部資成を遣し、院中に就きて奏して曰く、「凶徒ありて臣の宗を滅さんと圖る。臣且に執へて之を鞫さんとす。然れども事、必源あらん。是を以て敢て奏す」と。法皇、色を失ひ、答へらるゝ所を知らず。

乃西光を縛して至り、階下に跪かしむ。清盛叱して曰く、「下奴、過分の寵を恃みて、無罪を構陷し、又敢て我が家を危くせんと欲す」と。西光笑ひて曰く、「何をか過分と謂ふ。公の父但馬守は朝官の齒するを愧づる所、公は其嫡子たり。常に高履を著きて中御門氏に伺候す。人呼びて高平太と曰ひき。十八九の比、海賊二十人を捕へし功を以て、四位兵衛佐と爲れるを、人以て異數となせり。而今乃太政大臣に至る。是れ之を過分と謂ふのみ」と。清盛大に怒り、躍り起ちて其面を蹴る。痛く之を掠治して、實を得たり。命じて其口を裂かしむ。

又人をして成親を召さしむ。成親未だ事の覺るゝを知らずして曰く、「平公、山徒を宥さんと欲して、吾をして法皇に請はしむるのみ」と。乃往く。西八條に及ぶ比、甲士の繹騷するを見て、心驚く。門に入るに及びて、平氏の士難波經遠、妹尾兼康、耦進してこれを捽へて、小室に囚し、將に昏を待ちて之を殺さんとす。成經、康賴以下、皆逮捕せらる。久しくして重盛至る。衆迎へてこれに謂て曰く、「大事あり。公來る何ぞ晩き」と。重盛曰く、「是れ私事なり。何ぞ大事と言はんや」と。入りて清盛謂つて曰く、「大納言を殺さんと欲すと聞く。願くは之を再思せよ。兒豈姻戚を以て爾云はんや。彼れは名族たり。君の寵を受く。未だ私怨を用ゐて殺す

【惡左府】頼長

（平重盛肖像）

清盛怒怒

【內府】重盛

可からず。往時、少納言信西死刑を興行して、惡左府の墳を發けり。二歲ならずして信西の墓も、亦藤原信賴に發かる。善惡の應ずる、殃慶立どころに至る。願くは之を再思せよ」と。出でゝ經遠、兼康を見て、其亡狀を讓め、因りて之を戒めて曰く、「愼みて我が公をして怒に乘じ、悔に抵らしむる勿れ」と。乃歸る。致盛も亦成經の爲に固く請ふ。皆死を減ずるを得たり。

清盛曰く、「可なり」と。

是に於て、清盛乃甲を被り長刀を執り、出でゝ平貞能を召して曰く、「亟に將士を戒めよ。今舉朝の人、我を嫉みて我を圖る。蓋し、我が官爵、分を踰ゆると謂ふのみ。在昔、田村丸は微者なり。東夷を下したる功を以て、大將に超拜す。他も此に類する者多し。豈獨淨海のみならんや。淨海の勤勞一日に非ざるなり。保元の變に我宗族大半新院に赴けり。且重仁親王は我父の覆育せし所なり。而るに我は故院の遺詔を思ひ、獨官軍に屬し、終に亂逆に克ち平ぐ。平治の變に、信賴、義朝の猖獗なる、吾にして自愛せば事未だ知る可からず。命を重んじ躬を輕んじ、凶黨を夷滅して、以て經宗、惟方等を收むるに至る。數大難を冒す。官家の爲にするに非ざるものなし。此を以て之を言へば、官家の恩宥、子孫に窮むと雖も可なり。

清盛述懷

【新院】崇德上皇

【重仁親王】崇德帝の子

【故院】鳥羽法皇

【輕躁の君】後白河法皇

重盛諫言

【四恩】天地、國主、父母、衆生の恩

今乃輕しく讒言を信じて、族滅せられんと欲す。卽し告ぐる者なければ、豈危殆ならずや。異日細人、再、言を進むる有らば、則、宣を下して我を討ち、我を目けて賊とせん。悔ゆ可らざるなり。吾先づ發して之を烏羽の宮に移さんと欲す。否らざれば此に幸するを請はんのみ。北面の奴輩或は且我を扞がん。亟に將士を戒しめよ」と。

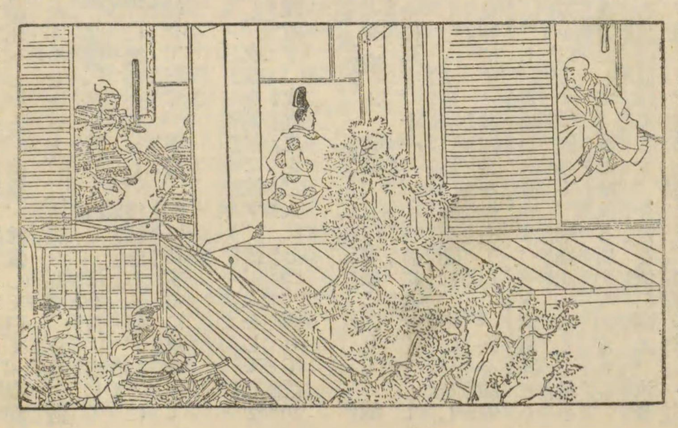
主馬盛國といふ者あり。馳せて重盛に告ぐ。重盛、大に驚き、急に駕を命じて之に赴き、第門に入る。族人皆甲を擐き、馬に鞍し、旗幟列を成し、將に起たんとす。重盛、烏帽直衣にて入る。宗盛其袖を叩へて曰く、「公は何を以て甲を被らざる」と。重盛睨して曰く、「汝等何を以て甲を被る。敵人何くに在りや。吾れ大臣大將たり。寇賊闕を犯すこと有るに非ざるよりは、則甲を被る可らざるなり」と。清盛之を望み見て、遽に起ちて黑衣を表して出づ。歎襟を正うすれども、襟呿きて甲覩る。重盛に謂て曰く、「吾れ西光の狀を察するに、成親等の如きは乃其枝葉のみ。間群小彙進して、覬覦すること已まず。而して御するに輕躁の君を以てす。何ぞ至らざる所あらんや。我れ且、一邊に幸せんことを請ひて、以て此事の定るを待たんと欲す」と。語未だ畢らざるに、重盛泣數行下る。之を久しくして言て曰く、「重盛、尊貌を熟視するに、吾が家門已に衰運に屬するを知れり。重盛これを聞く、『世に四恩あり皇恩を最とす』と。抑我門は桓武、葛原の胤を辱くすと雖も、而れども降りて人臣と爲り、中ごろ微にして顯れず。平將軍の功を以てすら、國守となるに過ぎず。刑部卿、內昇殿を聽されし時、萬人反唇せり。大人に至るに及びて、乃太政大臣に陞る。兒の不肖を以て且大臣大將を辱くす。宗族朝廷に騈び植ちて、田園天下に半なり。恩を叨ること極れり。官家の疾む所たり。誰か宜ならずと謂はんや。而れども運命未だ艾きず。讒人既に獲たり。宜しく罪の當る所を論じて、退きて事の由を陳ぶべし。則公家、豈威を霽さゞる有らんや。何ぞ必しも草々に爲さんや。兒、また之を聞く、『王事を以て家事を辭し、家事を以て王事を辭せず』と。況や善惡較著なる者をや。重盛六位より三公に至る。君恩に沐浴する、舉ぐるに勝ふ可からず。鬱背の決、自、在るあり。素より撫循す

（平重盛諫言之圖）

る所の士、重盛の爲に死を願ふ者、二百餘人あり。保元の亂に、源下野守、敕命を以て六條判官を斬りき。兒其時に在りて、以て大逆無道、言ふに忍びざる者とせり。此れ大人親ら睹る所に非ずや。忠ならんと欲すれば則孝ならず。孝ならんと欲すれば則忠ならず。重盛の進退、此に窮る。生きて是慼を觀るより死するに若かず。大人必今日の擧を遂げんと欲せば、先づ重盛の首を刎ねて、然る後發せよ」と。且言ひ、且泣く。坐を擧げて感動す。清盛曰く、「淨海、衰老を以て此擧を爲すは、一身の爲に計るに非ず。徒子孫を慮るのみ、乃以て不可と爲さば、汝好く之を計れ」と。乃起ちて內に入る。

重盛顧みて、諸弟を讓めて曰く、「今日の事、縱ひ公、老耄して事を發するとも、子等何ぞ匡救せずして、乃之を慫慂するや」と。出でて將士を勑めて曰く、「公に從ひて院に赴かんと欲する者は、重盛の首を刎ぬるを見て、然して後行け」と。乃小松の第に還る。

既に夜となり、憂慮して措く能はず。是に於て令を出し、兵を徵して曰く、「大事あり、速かに來り會せよ」と。衆相告げて曰く、「沈重の人、此の如き令を出すは、必ず由有らん」と。是に於て爭ひて之に赴く者、一夕に二萬餘騎なり。而して西八條復一人無し。重盛、乃家貞、貞能をして往きて淸盛を護らしむ。淸盛問ひて曰く、「小松の第何に由りて兵を徵す」と。二人對へて曰く、「院、內府に宣して曰く、『汝が父、君恩を忘れて、



國家を亂さんと欲す。汝に命じて之を征伐せしむ』と。內府、君の自ら急にするを慮りて、臣等をして來り護らしめて曰く、『君これを安んぜよ。重盛在り。當に身を以て請ふべし』と。」清盛、惶懼して曰く、「我が爲に內府に語げよ。吾が前途已に迫る。事を事とせず、唯唧、これを令せよ」と。二人還り報ず。重盛、漣然として曰く、「父をして此語を爲さしむ。吾罪大なり」と。乃親ら臨み、兵を勞して曰く、「汝等召に應じて卽來る。眞に平生に負かず。而れども事謬傳に出づ。宜しく亟に罷め去るべし。後緩急有らば、幸に【咼】肉を剔り骨に至る【硫黃島】薩摩

これに狃るなかれ」と。因りて盡く罷め去る。法皇之を聞きて泣きて曰く、「重盛、怨に報ずるに恩を以てし、人をして慚愧せしむ」と。

治承二年【嚴島】安藝

已にして清盛、武士をして西光を咼せしむ。並に師高、師經を殺し、成親を備前に流す。後、人をして之を殺さしむ。成經、康賴、俊寬を硫黃島に放つ。教盛常に成經に餽遺す。成經之を二人に分つ。因りて乏からざるを得たり。

安德天皇降誕【法皇】後白河三年

二年、中宮妊す。清盛、身親ら嚴島の神に祈りて、皇子を得んことを冀ふ。教盛、乃重盛に因りて、赦令を下さんことを請ふ。成經、賴康、歸るを得。俊寬、終に島中に死す。十一月、中宮將に產せんとして艱み給ふ。人或は成親、俊寬の祟る所と謂ふ。衆僧をして禳はしむ。法皇、乃爲に經を誦む。卒に分身して皇子を生む。清盛喜極りて哭き、金帛を獻じて之を謝す。法皇懌ばず。其謝書を拋ちて曰く、「朕を驗者として視るか」と。三年、立ちて皇太子と爲る。清盛、驕恣益々甚し。重盛日夜憂懼す。一夕清盛誅せらると夢む。覺めて泣く。會維盛至る。之に酒を飲ましめ、好に刀を以てす。因りて、維盛意へらく、是小烏と。小烏は、平家傳家の寶刀なり。受けて之を視るに、乃無文刀にして、葬る時佩る所のものなり。乃色を變ず。重盛曰く、「尤むる勿れ。公をして終を令くせしめば、吾將に佩びんとす。今之を汝に賜ふ。汝後當に之を知るべし」と。五月、重盛、熊野の祠に造りて死を祈り、歸りて、瘍疾を獲たり。適醫の宋より至るあり。清盛治せしめんと欲す。重盛辭するに、國體を失ふを以てす。且曰く、「兒の疾を獲るは、命なり」

宋醫

重盛薨去

と。遂に治せしめず。法皇其疾を臨み視る。三月にして遂に薨ず。年四十二なり。法皇攝政基房と議して、其封戶を收む。會中納言闕けたり。清盛の婿藤原基通任に當る。而るに基房の子師家之に任ぜらる。甫めて八歲なり。

太政入道

是時、清盛、福原に在り。十一月、地大に震ふ。京師相驚きて曰く、「太政入道來らん」と。已にして清盛、數千騎を以て京師に入る。基房入りて泣きて法皇に訴へて曰く、「清盛來り、怨を臣に修めんと欲すと聞く。果して竄流せられん。復左右に奉ずること能はざらん」と。法皇曰く、「朕と雖も亦自ら保んずる能はざるなり」と。明日、法印靜憲をして、往きて清盛を諭さしめ、且其意を問はしむ。清盛見ず。昏に及ぶまで答ふる所なし。靜憲去らんと請ふ。清盛、子の知盛をして出でて答へしめて曰く、「臣耄たり。復た君に事ふる能はず。此の如き耳」と。靜憲趨り出で、颺言して曰く、「賢相の明德なる、天に蹋まり地に蹐す」と。清盛之を聞きて、召し返へして之に面して曰く、「子は鹿谷の幸を諫め止むる者と聞く。吾れ是を以て子を見るなり。抑我が家、何ぞ官家に負く所あらんや。重盛新に死すれども、遊幸自如たり。獨老夫を憫まざるか。重盛、危を見て命を授くること數なり。官家之に越前を賜ひて曰く、『汝の子孫に傳ふ』と。而るに死すれば卽禠はる。死者何の罪かある。且吾基通の爲に、中納言を請ふこと再三せり。而るに師家に超拜せしむるは何ぞや。凡そ淨海の如き者は、卽過惡有りとも、當に宥七世に及ぶべし。今臣の餘命幾ばくもなきに、動もすれば誅せられんとす。身後の事知る可きなり」と。言畢り涙を垂る。靜憲も亦泣く。少焉ありて說くに大義を以てし、且之を慰藉す。清盛意頗る解け、禮して之を遣る。既にして帝に奏して、基房を貶し、代ふるに基通を以てし、師家以下四十三人の官爵を削り、前太政大臣藤原師長を流し、宗盛をして、衆を率ゐて法皇に造らしむ。法皇問ひて曰く、「將に遠地に流さんとするか」と。宗盛曰く、「敢て然るに非ざるなり。且く鳥羽殿に幸し、以て事の定まるを待ち玉へ」と。遂に之を鳥羽に移す。靜憲請ひて從ふ。清盛乃人をして帝に白さしめて曰く、「今後、諸政は陛下之を親し玉へよ」と。卽日福原に還る。

清盛逃懷

法皇を鳥羽殿に移す

治承四年安德天皇卽位

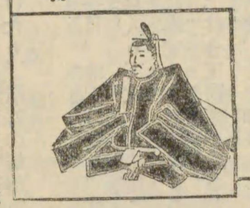
【三宮】大皇太后宮、皇太后宮、皇后宮

【上皇】高倉

（平清盛願文と肖像）

【以仁王】後白河帝の第二子高倉宮と號す以仁王、平家を滅さんとす

頼政



四年二月、帝、位を皇太子に禪る。世其清盛の意に出づと稱す。清盛の夫人時子既に二位を拜し、髪を削りて二位尼と稱す。是に於て夫妻並に三宮に准ぜらる。三月、上皇嚴島に幸して、清盛の意を解かんことを希はんとす。發するに臨みて、法皇に覲ゆ。法皇の鳥羽に徙さるゝや、中外の人、皆宗盛の其亡兄に若かざることを咎む。宗盛數清盛を諫めて、乃法皇を八條烏丸に還し奉る。

五月、熊野の別當變を上りて告ぐ、「以仁王令を下し、東國の源氏を擧げて、平氏を滅し、帝を廢して自ら立たんと欲し、曰く、『事成らば重賞あらん』と。那智、新宮の僧徒も、亦之に應ず」と。清盛大に驚き、兵を率ゐて京師に入り、公卿と共に議す。檢非違使源兼綱等を遣し、官兵を以て、高倉宮を圍しむ。將に王を土佐に徙さんとするなり。兼綱の父頼政、王の謀主たり。平氏未だ之を知らず。頼政急に王をして、先づ奔りて園城寺の僧徒に倚らしめ、而して自子弟を率ゐて之に從ふ。清盛之を聞き、怒りて曰く、「吾、嘗て頼政を奏して三位を授け、昇殿を聽さしむ。何ぞ我れに負くや」と。清盛の將藤原忠清、策を獻じて曰く、「叡山、南都の僧兵皆王に應ずと聞く、我れ前後に敵を防ぎ、曠日彌久、諸國の源氏來り會せば、勝敗未だ知る可からざるなり。宜しく速に院宣を山徒に下し、因りて陷すに利を以てすべし」と。清盛之に從ふ。

宇治戰

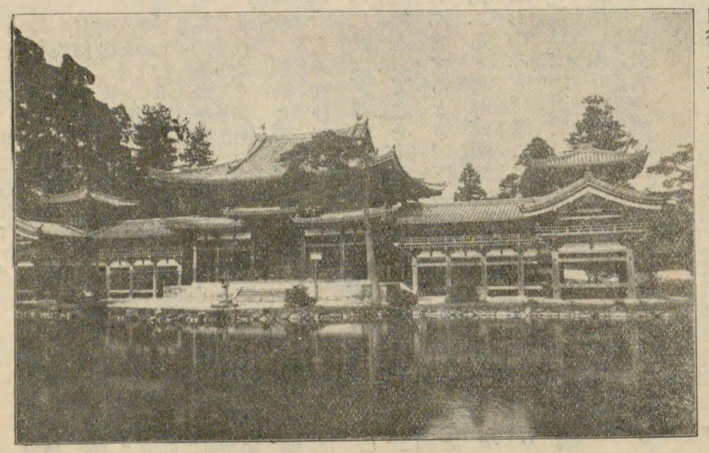
足利忠綱

（宇治平等院之景）

福原に遷都

重衡等を遣し、二萬騎を將ゐて、宇治河に追擊す。王、平等院に入り、橋を斷ちて軍す。僧徒善く鬪ふ。我が將平盛清、兵を分ちて河内より進み、敵の前路を遮らんと請ふ。下野の人足利忠綱、進みて曰く、「我が家、嘗て秩父氏と、利根河を夾みて相挑む。未だ嘗て流を亂りて戰ひを決せずんばあらず。今日の利、速に戰ふにあり。何ぞ猶豫を爲ん」と。乃手下三百騎を以て先づ渡る。令を下して曰く「駿者を上にし、駑者を下にし、淺に操りて、深に縱ち、其步卒は迭に相提携し、或は溺るゝ者は、弱を授けて之を援けよ」と。令畢りて濟る。一人をも亡はず。忠綱呼びて曰く、「我は藤原秀郷六世の孫なり。盍ぞ來りて死を決せざる」と。兼綱笑ひて曰く、「汝名族を以て、乃平氏に驅役せらるゝや」と。對へて曰く、「平氏詔を奉じて亂賊を討つ。安ぞ從はざるを得んや」と。乃大に戰ふ。終に兼綱を射殺す。我が軍悉く渡り、擊ちて大に源氏を破る。頼政及び子の仲綱等皆死す。王、南に出でゝ走り、流矢に中りて薨ず。南都の僧兵木津川に至り、之を聞きて引去る。重衡等凱旋し、首を闕下に獻ず。清盛、忠綱を賞す。

清盛、常に福原を愛し、又島を其南に築きて、以て漕運を便にし、終に都を遷さんと欲す。六月、遂に意を決し、清盛之に從ふ。山徒乃王に倍く。王南都に奔る。清盛、子の



して、帝、三宮、百官を趣して徙らしめ、帝を賴盛の第に奉じ、遂に之を己が第に徙し、兵をして法皇を守らしめ、宮城を建つるを議す。地狹くして建つ可からず。乃權に造る。物議囂然たり。

八月、源賴朝、以仁王の令を奉じて、兵を伊豆に擧ぐ。相模の人大庭景親擊ちて之を走らせ、武藏の人畠山重忠、又擊ちて其黨三浦氏を破る。景親急騎にて捷を報ず。且曰く、「賴朝走り死す」と。已にして東人交々來りて、「賴朝未だ死せず、兵復振ふ」と告ぐ。淸盛大に怒りて曰く、「東國の奴輩は、皆彼が父祖の家人。而るに我れ彼れを東國に流す。是れ彼を減さしむるなり。何ぞ盜に鑰を借しゝに異ならんや」と。切齒すること之を久しくして曰く、「向に吾をして池尼の請ひを聽さゞらしめば、彼れ惡んぞ首領を保つを得んや。恩を忘れ利を規りて、敢て我が子孫に敵す。其れ能く神明の罰を免れんや」と。重忠の父重能、弟有重と、福原にあり。進みて曰く、「東人、獨北條時政、賴朝と婚す。其れ或は之に附かん。其他豈肯て流人に黨せんや。君、意と爲すなかれ」と。平氏の子弟、人々奮ひて東伐を願ふ。

賴朝兵を擧ぐ

【時政賴朝と婚す】時政、女政子を以て賴朝の妻とす

淸盛宮に入て賴朝追の勅を賴ふ

淸盛聲して入り、上皇に見えて曰く、「陛下妙齡、蓋し未だ知るに及ばざるのみ。往時に爲義、義朝と云ひし者あり。敢て凶逆を行ひて、法皇に敵せんと欲せしを、臣謀略を以て之を誅夷せり。而して義朝の少子に賴朝と云ふ者あり。此の豎子を伊吹岳の麓に獲たり。當に斬らんとするとき、臣の繼母爲に之を宥さんことを請ふ。臣、卽召して之を見る。十三歲といふ。短身涅齒、問ふこと有れば輙知らずと答へぬ。臣其幼稚を憫み、且自謂ふ、源氏と宿怨あるにあらず。特君命を以てせしのみと。遂に之を宥しき。今其配所に在りて、敢て不良を謀ると聞く。臣悔い恨むに堪へず。請ふ、宣旨を得て之を討たん」と。上皇曰く、「法皇に稟へ」と。答へて曰く、「主上は幼し、陛下は親父なり。決、聖斷に在り。何ぞ直に法皇に稟ふことを爲ん。陛下、乃、源氏を庇ふこと莫からんや」と。上皇嗤ひて曰く、「猶此言を爲すか」と。卽宣旨を賜ふ。因りて「大將を誰に屬すべし」と問ふ。曰く、「臣が嫡孫維盛可なり」と。卽ち維盛に命ず。右近衞中將を以て、追討使と爲し、而して忠度之を翼く。高祖正盛、源義親を伐ちし故

【上皇】高倉

【法皇】後白河

維盛追討使

事を用ゐて、驛鈴を賜ふ。五千騎に將として、福原を發す。齋藤實盛、東事を諳ずるを以て嚮導とし、行々兵を收めて、駿河に至る。實盛曰く、「宜しく急に足柄を踰え、武藏、相模の兵を收むべし」と。藤原忠淸曰く、「今我が兵は皆京畿の新募なり。此を以て深く入る、未だ其可を見ず」と。維盛之に從ふ。實盛乃辭して西す。維盛曰く、「實盛無きも、吾寧ぞ戰ふ能はざらんや」と。忠淸を以て先鋒となし、進みて、富士河に軍す。此時に當りて、畠山重忠以下、皆賴朝に附き、二十萬騎を以て、河東に至る。使者をして來りて書を貽らしむ。謾言多し。忠淸、維盛に勸めて、其使者を斬らしむ。相持して未だ戰はず。我が軍夜水禽の起を聞き、相驚きて以て敵大に至るとなし、人馬相踏藉して走る。維盛怒りて留り戰はんと欲す。忠淸固く諫む。乃西に歸る。平明、源氏の軍乃之を知り、一將をして來り追はしむ。伊藤某、殿戰して死す。維盛歸りて近江に至る。淸盛其京師に入るを許さずして曰く、「汝王命を奉じて亂賊を討ち、兵を交へずして歸る。何の面目ありて來りて我を見んとするか。軍卽し利あらざれば、盡ぞ尸を原野に橫たへざる」と。因りて維盛を流し、忠淸を刎ねんと欲す。衆之を救解して止む。是より先、源義仲、兵を信濃に起す。義仲幼にして孤なり。齋藤實盛取りて之を育ふ。已にして之を木曾の人中原兼遠に屬す。是に於て宗盛、兼遠を召し、命じて亟に義仲を縛して來り獻ぜしむ。兼遠、誓書を効して、還りて義仲を逐ふ。是月、上皇再び嚴島に幸す。淸盛從ふ。因りて上皇を要して書を作らしめ、源氏を右けざるを誓ふ。旣に還り、宮を夢野に造りて、以て法皇を奉ず。淸盛都を選してより、上下之に苦しむ。山徒も亦數舊都に復せんことを請ふ。淸盛、諸公卿を會して、兩都孰か便なるを問ふ。公卿皆其旨を希ひて曰く、「福原便なり」と。獨左大辨藤原長方曰く、「平安便なり」と。淸盛色を作して入る。衆、長方の爲に之を危ぶむ。已にして、淸盛卽三宮以下を奉じて、都を平安に復す。衆大に悅ぶ。時に十一月なり。或人長方に問ひて曰く、「子何を以て能く相國に忤ふか」と。答へて曰く、「悔ゆる心無からしめば、何ぞ人に問はんや。我因りて之を導きしのみ」と。淸盛素より長方を重んず。是より先き、長方議を朝に建てゝ曰く、「亂人志を得るは、

富士河陣

源義仲兵を起す

【夢野】攝津

藤原長方都を平安に復す

怪異
近江源氏
南都征伐
（平清盛肖像）
養和元年
高倉上皇崩
【板倉】美濃
清盛遺言

是れ天意と人心との致す所なり。宜しく政を法皇に復し、基房、師長等を召し還すべし。過を改め善に遷らば、庶幾くは免れん」と。清盛稍其言に從ふ。

平氏の家、怪多し。清盛嘗て獨坐す。階下に數百の人頭あり。合して一大頭と爲り、眼を瞋して清盛を視る。清盛も亦眼を瞋らして之を視る。人頭漸く縮小して滅す。古者曰く、「爲義、義朝等の鬼なり」と。又鼠あり。厩馬の尾に巣ふ。占者曰く、「小、大を侵し、子、午を犯す。源、平に迫るの兆なり」と。

都を復するの月、近江源氏の兵起る。翌月、知盛、資盛等を遣し、兵を將る、擊ちて之を夷ぐ。初め園城寺、賴政に黨して重譴を得。益平氏を怨む。是に至りて、山徒と皆近江源氏に應ず。乃清房を遣し、園城寺を攻め、燒て之を夷げ、僧八百人を殺す。又南都の叛くを聞き、妹尾兼康を遣し赴き攻めしむ。僧徒逆へ擊ちて之を敗る。又木丸を造り、呼びて淨海の頭と爲して、之を蹴擊す。清盛積怒す。是月、重衡を遣し、兵數千騎を率ゐて之を擊ち、東大、興福の二寺を燒き、僧數百人を殺す。而して諸道の源氏益興る。

養和元年正月、上皇病みて崩ず。清盛益悔悟し、政を法皇に復す。法皇聽さず。固く請ふ。聽す。乃美濃、讃岐を獻じて其邑となす。詔して宗盛を以て近畿を總管せしむ。二月、河内の人源義基を斬る。源行家の兵を舉げて美濃に至るを聞き、知盛、通盛清經、忠度等を遣して、之を伐たしむ。敵、板倉の壘に據る。我が兵遏りて其後に出で、火を縱ち攻めて之を抜き、行家を走らす。清盛、又南海の兵をして東兵を控扼せしめ、而して糧を北陸、西海に徵す。西海の菊池氏、緒方氏、皆源氏に應ず。肥後守平貞能、往きて之を定めんと請ふ。法皇、院廳官をして貞能に從はしむ。已にして知盛、洲股に在りて病作り、戍を置きて還る。源氏益振ふ。宗盛、乃親ら大軍を將ゐて東伐せんと欲す。法皇之を許す。命じて諸武官を統べ、官符を以て兵を徵し、日を刻して發せしむ。衆曰く、「此の行必ず源氏を夷げん」と。二十七日を以て行を發す。發するに先つ一日に、清盛疾作る。車

清盛薨す
（平清盛墳墓圖）
賴盛
賴朝上書
藤原秀衡
資長

馬六波羅に集まる。清盛煩熱を病み、冷水に浴す。水輙沸く。叫號する聲、門外に徹す。閏二月、疾大に篤し。族を舉げて枕を擁し、言はんと欲する所を問ふ。清盛大息して曰く、「生者必ず死す。何ぞ獨我のみならん。我平治年間より、功を王室に建て、天下を專制し位人臣を極め、帝者の外祖と爲る。復何ぞ遺憾とする所あらん。遺憾とする所のものは、未だ賴朝の頭を睹ずして死するのみ。吾死して後、佛に供するを以て爲る勿れ。誦經を以て爲る勿れ。特賴朝の頭を斬りて、我が墓所に懸けよ。我が子孫臣隷、咸我が言に服して敢て忘ることある勿れ」と。病むこと七日にして薨ず。歳六十四。法皇に遺表す、「事必ず宗盛と議し玉へ」と。清盛既に薨じぬ。宗盛、法皇を法住寺殿に奉還し、奏して曰く、「臣不肖、父の過を救ふ能はず、以て今に至る。今後將に唯聖旨を是れ仰がん」と。法皇乃公卿を會し、兵食を調せんことを議す。重衡、維盛、通盛、忠度等を遣し、美濃に入り、其戍兵を併せ、源行家、源義圓と水を夾みて戰ひ、義圓を斬り、行家を破り、行家の子行賴を虜し、行家を追ひて、參河に至りて還る。

賴朝、數書を賴盛に遣し、其舊恩を謝す。又間に上書して曰く、「臣敢て亂を爲すに非ず。乃亂を靖ずるのみ。陛下、尙平氏を棄てざれば、則請ふ、兩ながら和を講じ、二姓並び仕ふること往昔の如くせん。其忠其否、簡ぶこと陛下に在り」と。法皇書を以て宗盛に示す。宗盛答へて曰く、「臣が父終に臨みて、臣等に命じて曰く、『必ず賴朝と死を決せよ』と。語、猶耳に在り。臣和する能はず」と。是に於て、請ひて陸奥の藤原秀衡に勅して、賴朝を擊たしめ、越後の城資長に勅して、義仲を擊たしむ。資長は、平維茂七世の孫なり。六月、資長、弟長茂と、兵を收めて南して、義仲を擊つ。利あらずして還る。八月、資長を越後守に、秀衡を陸奥守に除し、趣して源氏を伐たしむ。資長復發す。疾作りて卒

北陸敗軍

【敦賀城】越前

壽永元年

す。九月、宗盛、從弟の通盛、經正を遣し、東、源氏と越前に戰ひて敗績す。經正走りて若狹に入る。通盛退きて敦賀城を保ち、經正を召す。未だ至らざるに、義仲の兵來り攻む、乃兵を解きて西に還る。壽永元年九月、城長茂復南し、義仲を伐つ。復利あらずして還る。是月、宗盛內大臣に任じ、隨身兵仗を賜ふ。騶從を具へて拜賀す。二年二月、從一位に叙せらる。

追討使發遣

齋藤實盛

四月、維盛、通盛、忠度等を以て追討使となす。山陽、山陰、西海の諸國、及び參河以東若狹以南の徵兵十萬餘人を率ゐ、北陸道に入りて、將に義仲を夷げて、然る後賴朝に及ぼさんとす。齋藤實盛遣中にあり。大庭景尙に謂て曰く、「平替り、源興る。盍ぞ木曾に降らざる」と。景尙曰く、「東人吾輩の姓名を知らざるなし。興衰を以て節を變ぜば、人言を若何せん」と。實盛曰く「吾、徒に以て子を試みしのみ」と。入りて宗盛に見えて曰く、『錦を衣て鄕に歸る』と。臣、君恩を受くること久し。今老たり。唯一死以て君に報ずるあるのみ。君、盍ぞ錦の直垂を賜はらざる。臣衣て以て歸らば、死すとも餘榮あらん」と。宗盛、之を憫み、其言の如くす。

燧城戰

【燧城】越前

【齊明】越前平泉寺の僧

義仲、我軍の越前に向ふと聞き、將を遣して燧城を守らしむ。城は山に據り、谿を帶び、最も要地たり。我が軍、谿水を阻てゝ近づく能はず。城將齋明と云ふ者あり。書を爲り、之を矢に約し、以て我が軍に射て曰く、「源氏、堤を築きて水を貯ふ。君、東山の趾を決せば、たち所に涸れん。臣、內應を爲さん」と。我が軍之に從ひ、立所に其城を拔き、連戰皆捷つ。追ひて三條野に至る。敵將齋藤光平出でて戰ふ。實盛曰く、「我と同姓なり。寧ろ我に死せよ」と。與に鬪ひて之を斬る。我が軍長驅して、越前を定め、進みて加賀に入る。源氏の兵退き、安宅渡に據る。平盛俊、子盛綱をして水を試しむ。還り報じて曰く、「亂るべし」と。盛俊、兵五千を以て先づ渡る。大軍之に從ふ。遂に林、富樫の二城を拔きて之に據る。降將齋明、進言して曰く、「義仲越後にあり。越後、越中の界に、寒原の險あり。君宜しく急に此を扼すべし。敵をして蹈えしむる勿れ」と。乃盛俊を遣して之に赴かしむ。般若野に到る。敵已に寒原を踰ゆ。盛俊與に戰ふ。利あらずして退く。

【砥並山】越中

【志雄山】能登

維盛乃七萬騎を以て砥並山に軍す。忠度三萬騎を以て志雄山に軍す。義仲五萬騎を以て至り、行家をして忠度を攻めしめ、而して自ら維盛に當る。維盛嶮を恃みて備へず。義仲夜に乘じて來り襲ふ。維盛大に敗走す。義仲勝ちに乘じて之を追ふ。參河守知度は淸盛の七子なり。五十餘騎と大に呼びて敵陣を冒し、馬仆れて徒す。敵に岡田親義あり。來りて知度を擊つ。知度刀を舉げて其冑を斫る。冑墜つ。因りて其首を斬る。親義の子重義、踵で至る。我が騎遮り鬪ふ。知度自屠りて死す。敵益進む。右兵衞佐爲盛は賴盛の次子なり。亦樋口兼光に殺さる。維盛退きて佐良岳を保つ。

【佐良岳】加賀

篠原戰

此時に當りて、忠度、盛俊と擊ちて行家を破る。而して維盛の敗れしを聞き、兵を引きて之と合し、退きて安宅の渡に據る。忽、鞍馬十匹あり。水を濟りて至る。畠山重能、前軍にあり。之を視て曰く、「敵近づく」と。乃、三百騎と篠原岳に登りて之を瞰、使を中軍に馳せ、告げて曰く、「源氏の兵悉く濟りぬ。臣將に先づ進まんとす。請ふ後繼を賜はれ」と。

實盛戰死

義仲、樋口兼光を召し、岳頂を指さし、問ひて曰く、「汝、彼一隊の將は誰爲るを知るか」と。曰く、「畠山重能なり。臣數武藏に遊びて、其族章を記す」と。義仲曰く、「此れ與に鬪ふべき者」と。兼光を遣し、與に鬪はしむ。殺傷相當る。維盛等、乃進みて義仲に當り、戰ひ且退き、成合に至り、返り擊ちて大に戰ふ。大庭景尙、自呼びて鬪ふ。義仲曰く、「名士なり」と。騎を麾きて之を迎ふ。景尙十三騎を斬り、創を被りて自殺す。衆悉く退く。實盛獨留り戰ふ。敵將手塚光盛呼びて其名を問ふ。實盛曰く、「汝我が首を斬り、木曾公に獻ぜよ。公は我を知るなり」と。進みて光盛に薄る。光盛の從騎之を遮る。實盛騎を攫み將に之を殺さんとす。光盛之を救ふ。三人相搏ちて馬より墜つ。光盛遂に實盛を刺し、頭を義仲に獻じ、其狀を告げて曰く、「單騎錦を衣る。其語は東音なり」と。義仲曰く、「乃、實盛なる莫きや」と。兼光を召してこれを視しむ。兼光曰く、「是也」と。義仲曰く、「吾れ、實盛年の高きを知る。今其髮の黑きものは何ぞや」と。對へて曰く、「實盛、嘗て臣と東國に於て言ひて曰く、『白頭軍に從はゞ、吾將に我が髮を涅せんとす。否せざれば、則

以て壯者に伍し難し』と。蓋し、其言を踐めるなり」と。乃、其頭を洗ふに、頭髪皆白し。義仲泣きて曰く、「吾れ幼孤のとき、此老に鞠育せらる。其をして來り歸せしめば、將に父とし、之に事へんとせしに、乃恩を重んじ死に就く。義と謂はざるべけんや」と。尸を收めて之を葬る。義仲、復我軍を追ふ。平盛綱、藤原景高等十餘人之に死し、我が諸將敗れ歸る。法皇會議す。藤原長方漢の匈奴と和せし故事を引きて使を遣して、諸源の罪を赦さんことを請へども聽されず。平氏書を山徒に遣りて之を誘ふ。山徒從はず。

貞能西海を定む

七月、平貞能、既に西海を定む。降將菊池高直、原田種直以下、兵千騎、糧十萬石を以て至る。平氏咸喜ぶ。用ゐて東北を禦がんと欲す。美濃の人、來り告げて曰く、「義仲已に近江に至る」と。是に於て、資盛、知盛重衡、貞能等と宇治、勢田を守る。又賴盛を遣し、之に繼ぐ。賴盛辭して往かず。强て之を遣る。已にして源行綱等、四方より京師を窺ふ。山徒も亦義仲に黨す。宗盛、乃諸將を召し還し、貞能を遣し、行綱を攝津に擊つ。知盛五百騎を以て粟津に次す。義仲の前軍と戰ひ、利あらずして退く。義仲、進みて叡山に軍す。宗盛大に族人を召し、議して曰く、「兵寡し、我れ帝及び法皇を奉じて西國に奔り、以て再舉を圖らんと欲す。如何」と。知盛進みて曰く、「不可なり。我が祖の桓武、實に此都を肇め、後降りて武臣となる。今に於て八世なり。未だ嘗て退き避けず。寧ろ此に決戰せん。刀折れ、矢盡きて後已まん」と。教盛、經盛等、皆以て然りと爲す。宗盛聽かず。人をして法皇に造らしむ。法皇在さず。宗盛大に意を失ふ。乃、帝及び皇太后、皇弟惟明を奉じ、劍璽を收め、火を諸第に縱ち、其子右衛門督清宗、其弟中納言知盛、右中將重衡、淡路守清房、其義弟式部丞清定、丹波守清邦、其叔父參議經盛、中納言教盛、薩摩守忠度、經盛の子皇后宮亮經正、若狹守經俊、教盛の子越前守通盛、能登守教經、從五位下業盛、知盛の子武藏守知章、經俊の弟敦盛、清房の二弟維俊、良衡、故基盛の子左馬頭行盛等、及び攝政藤原基通、大納言平時忠を率ゐて西す。權大納言賴盛、從ひて後れたり。鳥羽に及ぶ比、赤幟を撤てゝ束し、法皇に倚りて伏匿す。基通も亦還り走る。平盛嗣之を追はんと欲す。宗盛曰く、「之を舍け、吾れ此不義の人を用ゐる所なし」と。因りて問ひて曰く、「小松中將は如何」と。曰く、「未だ來らず」と。宗盛曰く、「亦賴盛の比か」と。

平氏都を去る

賴盛

基通

【小松中將】維盛

畠山重能

乃、畠山重能兄弟を召して曰く、「汝の子弟、武藏にあり。汝盍ぞ東せざる」と。一人對へて曰く、「臣等、平氏の恩を蒙ること此に二十年。危を見て遁るゝは、爲すに忍びず」と。宗盛曰く、「父子相慕ふは、貴賤となく一なり。父西にあり、子東に在りて、以て相殘滅するは、吾が心之を憫む。汝宜しく亟に去りて、賴朝に從ふべし」と。二人泣き辭して東す。則、維盛なり。其弟右中將資盛、左中將清經、左小將宗盛等關戶に至り、顧みて數百騎の至るを見る。衆大に喜ぶ。維盛曰く、「吾れ妻孥を遺して來る。皆啼哭して我有盛、侍從忠房、備中守師盛を率ゐて來る。

經正

を牽く。吾是を以て後れたり」と。宗盛曰く、「衆皆家を挈ぐ。子何ぞ獨否らざる」と。答へて曰く、「挈げて行くとも、終に庇ふ可けんや」と。相顧みて悽然たり。

是の日、齎し返して、王に謁して曰く、「臣等事已に此に至る。願くは、一たび別を敍べて行くを得んと」。因りて席に卽きて數曲を彈ず。王及び左右皆涙を垂る。經正曰く、「臣、嘗て此賜を守りて、以て子孫に傳へんと欲す。今行きて且に死亡せんとす。寶器を併せて之を減沒するに忍びず」と。乃、琵琶を奉還して去る。

忠度

忠度も亦淀河より還り、其和歌の師藤原俊成に詣り、夜、門を叩きて刺を通じ、面謁を請ふ。俊成、微く門を啓きて之を見る。忠度曰く、「兵興りてより、君の門に數するを得ず。今現に遠く別るべし。聞く、『君、敕を奉じて撰輯する所あらん』と。臣幸に一章を收めらるゝを得ば、死すとも且不朽なり」と。乃、其歌集を

行盛

鎧縫より出だす。俊成泣きて之を受く。行盛、俊成の子定家を師とす。又其集を遺して留別す。俊成、定家、後並びに撰集するに、二人の作る所を收むと云ふ。

貞能

是に於て、族を舉げて、興を奉じて西す。平貞能、大に其不可なるを諫むれども聽かず。貞能、獨東して京師之かんと欲するや」と。宗盛故を告ぐ。貞能、

平氏西海に赴く

後鳥羽天皇即位

平氏九州に入る

に入る。則諸第、皆燼せり。乃、夜、重盛の墓に詣りて、白して曰く、「君、豫め今日あるを知るか。然れども、願くは冥護を以て恢復を圖れ」と。旦日、墓を發き、其骨を收めて西し、追ひて福原に至る。宗盛等方に將士を會し、議して曰く、「我が家は惜むに足らざれども、帝王、神器を如何せん」と。皆泣きて對へて曰く、「臣等世君恩を受く。隆替を以て志を易へず。海を窮め、天を極むるも、唯君の適く所のまゝならん。鳥獸すら旦恩を記す。況んや人に於てをや」と。宗盛喜び、乃、相率ゐて清盛の墓を拜し、樂を墓前に張りて夜を徹す。天明、其宮殿諸第を燒き、航して西海に赴く。

清經死す

法皇、勅して平族百八十餘人の官職を奪ひ、其邑を沒し、分ちて之を義仲等に賜ひぬ。乃、高倉帝の第四子を立てゝ、位に卽かしむ。平氏之を聞き、其取り去らざりしを悔ゆ。遂に帝を奉じて、行在所を豐後に建つ。豐後の國司藤原頼輔の子頼經、州人緒方維義と與に院宣を傳へて、西海の兵を收む。使をして來り告げしめて曰く、「公等宜しく此に止るべからず」と。時忠之を讓めて曰く、「正統の天子此に在り。若胡爲者ぞ」と。維義、對へずして、三萬騎を以て來り攻む。乃、貞能、高直、種直等を遣して、之を拒ぐ。敗れ還る。乃、箱崎に奔り、遂に山鹿に徙る。菊池、原田の諸族叛くを聞き、則又柳浦に徙り、宇佐宮に祈る。維義の來るを聞き、終に航して遁る。清經、自終に免る可からざるを度り、夜、舵樓に上りて、月を看つゝ笛を吹き、海に投じて死す。

平氏屋島に據る

時に長門の國は、知盛の管する所たり。其目代紀通資、船百餘艘を獻じて、以て讃岐の屋島に徙らしむ。阿波の豪傑田口成能、千騎を以て來り附く。旦、爲に四國を徇へ諭すに、順逆を以てす。來り屬する者多し。因りて屋島に行宮を建て、遂に山陽道を徇ふ。閏十月、源義仲、足利義清、高梨高信、海野幸廣を遣し、來り犯さしむ。而して身之に繼ぐ。重衡、通盛、敎經、三百餘艘を以て迎へて、之を擊つ。水島城に據る。

水島戰【水島城】備中

源氏、千餘艘を以て陸を負ふ。敎經、城の東北門より出でゝ、敵を挑む。敵、五千騎を以て來り攻む。敎經、伴り走る。重衡、通盛、舟師を將ゐて、島の西南より、左右の翼を縱ちて之を遮る。敎經、豫、舟を連ね板

妹尾兼康

を布き、以て進退に便にし、親射て高信を殺す。北兵、水戰を習はず。日蝕晦冥に屬し、我が兵之に乘ず。北兵遂に大に敗走す。追擊して義淸、幸廣を斬り、首を獲しこと千二百級。

初め篠原の戰に、妹尾兼康、敵將倉光成澄に虜らる。因りて成澄に仕へて親信せらる。今井兼平、義仲に謂て曰く、「彼れの瞻視常に異なる。之を殺すに若かじ」と。義仲聽かず。兼康、從容として成澄に說くに、其鄕、妹尾の地の肥美を以てす。成澄乃、義仲に請ひて、往きて之を收む。兼康、嚮導を爲し、先づ往く。其子宗康以下千餘人を會して、成澄を掩殺し、板倉の寨に據る。義仲將に備中に赴かんとす。聞きて怒り、今井兼平をして、來りて兼康を擊たしむ。兼康戰ひ且走り、屋島に赴かんと欲す。宗康、體肥えて行く能はず。兼康之を棄てゝ走る。行くこと里許にして、復、還りて之を視る。追兵薄り至る。乃、宗康を殺して、死す。義仲、將に屋島を攻めんとす。賴朝の來りて己を討つを聞きて、則東に還る。十一月、敎盛、敎經、重衡等、源行家と室山に戰ひ、大に之を敗る。山陽、南海の十餘州、來り屬する者多し。

【板倉】備中

室山戰【室山】播磨

是の時に當りて、義仲兵を縱ちて、京師を暴掠す。亦事を以て法皇を怨望し、將士に謂て曰く、「汝、其凡人に敵するよりは、寧ろ、王者に敵せよ」と。遂に兵を擧げて反し、法住寺殿を焚く。矢、乘輿に及ぶ。遂に帝を閑院に、法皇を五條宮に幽し奉る。公卿、皆裸跣して遁る。義仲、乃將士に謂て曰く、「帝と爲り、院と爲るも、唯吾が欲する所。公となり、卿と爲る、唯汝が請ふ所のまゝのみ」と。乃、公卿以下四十九人の官爵を奪ひ、其妻の兄藤原師家を以て攝政となす。京師其暴に苦しみ、乃、平氏を思ふ。義仲、既に賴朝と隙あり。其來り討たんことを恐れ、平氏と從を爲さんと欲し、書を屋島に贈りて其意を言ふ。宗盛之を許さんと欲す。知盛曰く、「義仲、我をして其極に至らしむ。我乃之と和しなば、恐らく賴朝我を笑はん。公宜しく答へて、『天子焉に在せり。汝胄を免ぎ、弓を弛べ、自來りて降を乞はば、吾れ則之を許さん』と曰ふべし」と。宗盛之に從ふ。明年、山陽既に定まりしを以て、帝を奉じて福原を復し、因りて城く。山を負ひ海に臨

法住寺戰

義仲書を屋島に贈りて平氏と合從せんとす

壽永二年平氏福原に城く

東軍來り攻む

む。兵を集めて之を守る。二月、教盛、五百騎を以て、備中の下道に屯す。會讃岐の廳衆二千騎、叛きて源氏に應じ、船に乘りて下道を過ぎ、仰ぎて我營を射る。教盛怒りて曰く、「此輩甞て我馬に秣かひ、我馬に飲はんと云ひし者、今敢て亡狀此の如し」と。舸を飛して之を追ふ。廳衆淡路に走り、源義嗣、源義久に倚る。教盛攻めて之を鏖にし、幷せて義嗣、義久を殺し、遂に河野通信を伊豫に攻む。通信、遁れて安藝に走り、維方維義と合し、東して備前に入り、今木城に據る。教經、赴き攻め、一晝夜に之を拔く。宗盛、帝に奏して教盛を正二位大納言に進む。辭して拜せず。

重衡

是時、賴朝の二弟範賴、義經、義仲を討ちて之を殺し、終に院宣を以て、大擧して來り攻む。關東の將士悉く之に從ふ。期を刻して會戰す。知盛、重衡、東門を拒ぐ。貞能等、西門を拒ぐ。而して資盛、有盛、師盛等、兵七千を以て北山を守る。義經、萬騎を以て夜之を襲ふ。我が兵大に敗走す。資盛之を愧ぢて、獨屋島に奔る。宗盛諸將をして之に代らしむ。皆往くを憚る。教盛之に當らんと請ふ。卽夜、通盛、盛俊と、往きて北山を守る。範賴、東門に至る。土肥實平等西門に至る。藤原景清等力めて西門を拒ぐ。敵、入る能はず。重衡、知盛、又東門の敵を擊ちて之を卻く。已にして、義經間道より來り襲ひて火を縱つ。城卒に陷る。

忠度

重衡、西に走る。東人莊家長、追ひて其馬を射る。馬倒る。其騎、副馬に騎る。重衡呼びて之を取らんとす。騎聞かざる爲して走る。重衡自殺せんと欲し、遂に家長に獲はる。忠度も亦岡部忠澄に追ふる。忠度紿きて曰く、「我は東兵なり」と。忠澄曰く「帽して齒を涅する者は、東兵に非るなり」と。忠度返り鬪ひ、忠澄を搏ちて之を伏せ、三たび之を刺せども入らず。忠澄の僕來る。終に爲に殺さる。忠澄、其鎧を撿して歌稿を得たり。因りて其忠度なるを知れり。

經正【大藏谷】播磨

經正走りて大藏谷を過ぐ。莊高家呼びて、鬪を求む。顧み答へて曰く、「吾れ若と鬪ふを羞るなり」と。高家怒りて、之に逼る。經正、馬より下りて自殺す。其弟經俊、及び通盛、業盛、師盛、清定、清房、盛俊等、皆死す。

知盛

通盛の妻、其夫の死を聞きて海に投じて死す。教經航して淡路に赴く。宗盛、帝を舟に奉ず。諸敗兵、舟を爭ひて溺るゝ者無數なり。知盛初め武藏守たり。國人識

敦盛

りて之を追ふ。及ぶに垂とす。其子の知章、時に年十七。遮り鬪つて、其一騎を斬りて之に死す。知盛間を得て遁れ、馬を下り、舟に上る。舟隘くして馬を容れず。則馬首を北して之に鞭つ。馬躍りて陸に上る。田口成能曰く、「良馬なり。其敵に獲られんよりは、寧ろ射て之を殺さん」と。知盛曰く、「吾れ此れに由りて免る。之を殺すに忍びず」と。馬、知盛を望みて三たび嘶く。終に義經に獲はる。知盛、宗盛に謂て曰く、「子は死して父を救ふ。父は子を棄てゝ走る。他人をして此の如くならしめば、吾れ當に其面に唾すべし。今吾れ之を爲す。之を何と謂はんや」と。因りて歔欷して涕を流す。

（平敦盛像）

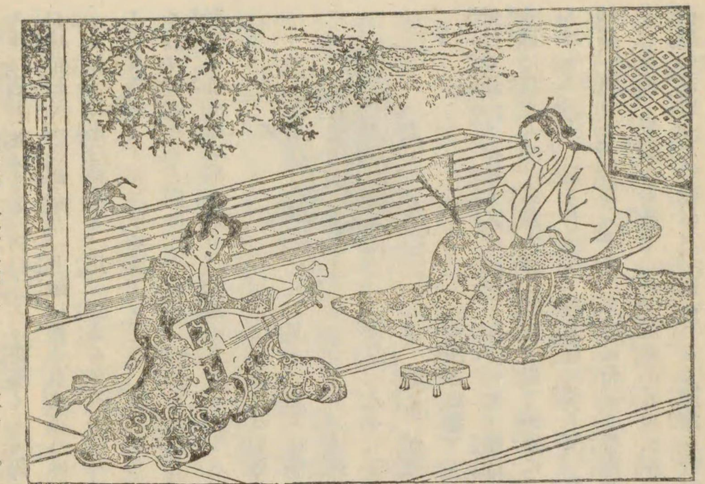
敦盛も亦知章と同齡なり。知盛の舟を望みて之に馳せ、熊谷直實に獲はる。是日、直實、曉を冒して西門に向ふ。城上に笛聲あるを聞きしが、敦盛を獲るに及びて、其腰に笛を挿めるを見る。念ふに嚮に聞きし所のものは是ならんと。乃首を義經に請ひ、其笛を併せて、之を經盛に歸る。義經、諸〻の首、虜を以て歸りて法皇に獻ず。

重衡書を屋島に貽る

法皇、人をして重衡を諭さしめて曰く、「汝、書を宗盛に貽り、神器を効さしめば、則汝が死を宥し、屋島に放ち還さん」と。對へて曰く、「臣の宗、世勳を王家に建てゝ、而して子孫卒に君に棄てらる。以て此に至るは命なり。勝敗は豈臣一人に關らんや。臣、不才にして纍囚と爲るに至る。假令、生きて還るとも、將何の面目ありて、宗族に見えんや。宗族も亦必臣を以て神器に易るを肯ぜざるなり。然りと雖も、臣敢て敷を奉ぜずんばあらず」と。乃、書を作りて、院宣使に從りて、屋島に至す。時子、書を得て悲み泣き、之を聽さんと欲す。

【時子】重衡の母宗盛書を法皇に上る

知盛、執りて不可なりとし、宗盛に教へ、答表を作らしめて曰く、「謹みて宣旨を領す。通盛以下既に命を授く。重衡、豈獨生を欲せんや。神器の若きに至りては、須臾も聖體を離る可からざるなり。陛下、尙貞盛、淸盛の遺勳を思ひ給はゞ、則辱なく龍駕を枉げて、西州に臨幸せよ。臣等、護るに西南四道の兵を以てして、亂賊を討たん。不らざれば、臣等三韓、契丹に赴くこと有らんのみ。命を奉ずる能はず」と。平時忠、院



重衡鎌倉に下る

（千手前平重衡を慰むる圖）

【數行虞氏】項羽の寵姫なり、詩は橘相廣の作

使を捕へ、劓りて之を遣る。ひて措かず。是歳三月、間に出でゝ、京師に之きしに、法皇怒り、重衡を以て頼朝に附して、誅せしむ。頼朝、之を鎌倉に檻致せしめ、延きて見る。梶原景時をして命を將はしむ。來りて重衡の傍に跪く。重衡聽くを肯ぜず。遙に朝頼に語りて曰く、「重衡此に至るは命なり。公、尚先人の德を記せば、則請ふ、速に死を賜へ」と。頼朝、乃之を狩野宗茂に屬し、湯沐を具へ、姫千手をして浴に侍し、因りて其欲する所を問はしむ。重衡、髪を剃らんと欲す。頼朝許さず。因りて酒を餽り、千手及び工藤祐經を遣し、之を佐けしむ。祐經鼓を撾ち、千手琵琶を彈ず。重衡、杯を千手に屬し、朗吟して曰く、「燭は暗し數行虞氏の滂、衣は深し四面楚歌の聲」。頼朝、微行して、耳を戸外に側て、聞きてこれを憐む。更に名姫伊王を遣し千手と更直せしむ。明年六月、南都の僧侶の請を以て、奈良坂に斬る。二女、髪を削り尼と爲ると云ふ。

初め重衡の虜となり、京師に入りしとき、維盛の妻孥、京師に在りて、三位中將虜せらるゝと聞きて、其維盛なりと意ふや、僕をして之を視しめしに、非らず。然れども師盛の首を見て、則憂恐す。維盛、屋島に在りて、亦家を懷

【舊臣】齋藤時頼、瀧口入道と云ふ

【先君】重盛

【頼盛】志源氏に繋ふ小烏、抜圓頼盛

（小烏の圖）

三日平氏

兒島戰

屋島戰

【高松里】讃岐

美尾屋景清

其舊臣の僧と爲れる者に値ひ、之に語るに情を以てせり。曰く、「先君、嘗て頼朝に德せり。内府故を以て猶疑し、吾を頼盛に比す。吾れ故に遁れて此に至る。一たび熊野の祠に詣で、水に赴きて死なんと欲す」と。乃、與に俱に詣で、那智の海に投じて死す。豫、隷人に命じ、還りて資盛に告げしめて曰く、「唐革の甲、小烏の刀。貞能の許にあり。公宜しく之を取るべし。萬一、事平がば、幸に之を我が兒に傳へよ」と。初め平氏、小烏、抜圓の二刀あり。例に嫡長に傳ふ。忠盛に至りて、小烏を清盛に傳へ、抜圓を頼盛に傳ふ。二家是より相惡めり。頼盛、時に京師にあり。是歳五月、頼朝、書を以て之を召す。且曰く、「必宗清を携へよ」と。頼盛、即東に行く。宗清從ふを肯ぜず。曰く、「臣禍福を辨ぜざるに非ず。獨、西海の諸公舊僚に愧ざらんや」と。乃頼盛を送りて、近江に至り、辭して西し、來りて屋島に至る。是月、貞能の弟貞纖、兵を伊賀に起し、平氏に應じ、二百人を集め、襲ひて州の守護大内惟能を破り、遂に近江に入り、源秀義と戰ひて之を斬る。已にして惟能に敗られ、之に死す。世呼びて三日平氏と曰ふ。

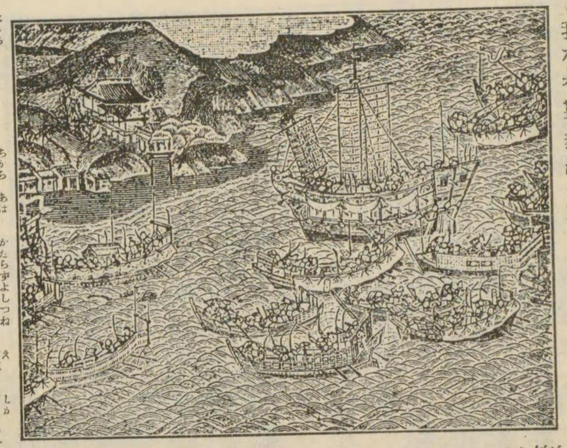
平氏、山陽道を復せんと欲し、九日、行盛、兵二千を以て兒島に屯す。範頼、十萬騎を以て來り攻む。我が軍敗れ還る。宗盛以下、日々悒々として樂まず。知盛曰く、「吾れ、嚮に京師を守らんと欲すれども、公等從はず。今終に如何」と。宗盛、以て應ふるなし。明年春、知盛、長門の引島に城きて、門司關を扼す。又兵を遣し、擊ちて土肥實平を備前に破り、兒島を復す。又擊ちて河野通信を破り、其族黨百六十人を斬り、首を屋島に效す。宗盛之を檢す。時に源義經、阿波より來り攻むと聞く。而れども未だ確報を得ず。明日、高松里に火起るを望む。田口成能曰く、「敵來り襲ふなり。請ふ、急に舟に御せよ。將士をして陸に拒がしめん」と。之に從ふ。義經果して襲ひ至る。我が兵、能く拒ぐ。義經火を行在に縱つ。我が兵盡く舟に上り、海陸交々射る。景清、岸に上りて戰ひを挑む。美尾屋十郎と云ふ者、來り鬪ひて走る。景清追ひて其鑣を攫む。鑣斷ゆ之を薙刀に挂け、

教經

（境浦戰古圖）

【境浦】長門境浦戰

田口成能



拔て呼びて曰く、「吾は景清なり。蓋ぞ來りて死を決せざる」と。敵敢へて近づくものなし。我が兵踵ぎて上り、大に戰ひ、伴り卻きて舟に上り、以て義經を誘致す。幾ど獲へんとして之を逸す。宗盛、教盛を召して曰く、「我が兵數義經を逸す。義經の兵數百騎に過ぎざるのみ。公の一戰を煩はさん」と。教經、乃盛嗣、景清等三十人と、陸に迫りて射る。教經、劉弓長箭、射て敵の精騎數十人を殺し、日暮に會ふ。義經、軍を高松に退く。教經八島に軍し、夜、源氏を襲はんと欲す。盛嗣、江見盛方と先を爭ひ、曉に徹するまで襲ふを果さず。天明に、義經、七千騎を以て來り攻む。我が三十人步行して、短兵を持して接戰す。敵騎披靡す。教經因りて之を射る。戰ひ遂に利あらず。遂に舟に上りて退く。熊野湛增、河野通信、盡く源氏に屬す。源氏の軍、日に盛なり。平氏、乘輿を奉じて志度に避く。義經、復來り攻む。乃、退きて引島を保つ。已にして、長門、周防、悉く源氏に應す。乃、箱崎に赴く。範賴、大衆を以て豐後に在りと聞きて、則旋りて壇浦に泊す。

源氏の軍、海陸に充塞す。兵艦三千、四面より來り攻む。我れに五百艘あり。知盛船首に立ちて、諸將士に謂て曰く、「勝敗の決、今日にあり。汝が輩、進みて死する有りとも退きて生くる毋れ。」と。景清、盛嗣等、爭ひて決戰せんことを願ふ。田口成能、潛に款を敵に通ず。知盛、宗盛に謂て曰く、「士氣奮へり。獨成能疑ふべし。請ふ、斬りて以て徇へん」と。聽さず。固く請ふ。宗盛、乃、成能を召して之を勗めしむ。成能、唯々す。知盛、刀を握り、宗盛に目す。宗盛、終に斷ずる能はず。已にして大に戰ふ。我が兵奮擊す。東軍、數卻く。成能、義經に降り、之に告げて曰く、「平氏、帝を兵船に徙し、兵を帝船に徙す。敵を誘ひて殃みて、之を擊たんと欲す」と。義經、乘輿の在る所を知りて、軍を合せて疾く攻む。知盛、乃、帝船に赴く。諸嬪迎へて狀を問ふ。知盛大に笑ひ、答へて曰く「卿等當に東國の男子を睹るべきのみ」と。一船皆哭く。知盛手づから船中を掃除し、盡く汚穢の物を棄つ。時子、乃、帝を抱きて、相約するに帶を以てし、劍璽を挾み、出でゝ船首に立つ。帝時に八歲なり。時子に問ひて曰く、「安に行くか」と。時子曰く、「虜、矢を御船に集む。故に將に他に徙らんとす」と。遂に與に俱に海に投じて死す。皇太后、纖で投ず。東兵、其髮に鉤して之を獲たり。行盛、有盛、之を聞きて、皆力戰して死す。教經、號名素より著る。敵爭ひ之を獲んと欲す。教經、殊死して戰ふ。敵を殺す數なし。知盛、呼びて曰く、「公盍ぞ早く自計を爲さゞる。多く雜兵を殺すこと爲すなかれ」と。教經曰く、「中納言、吾れ義經と死を決せんと欲するのみ」と。乃、進みて義經を索む。卒に之と遇ふ。教經冑を免ぎ、鎧袖を撤し、躍りて其船に入る。敵兵遮り鬪ふ。輒ち搏ちて之を仆し、直に義經に逼る。敵中、安藝家村といふ者あり。力三十人を兼ね。二力士を率ゐて、進みて教經に當る。教經蹴りて其一人を仆し、二人を挾みて、海に投じて死す。宗盛、清宗と自裁する能はず。從士之を海に擠す。泅ぎて遁る。敵兵鉤して之を獲たり。藤原景經は、景清の從弟なり。之を見て曰く、「奴輩、敢て吾が君を辱かしむるか」と。進みて一人を斬り、箭に中りて死す。知盛聞きて切齒すること之を久しく曰く、「吾れ以て死す可し」と。教盛と皆自殺す。平家長等八人之に殉す。時に壽永四年、三月廿四日なり。經盛、資盛、皆遁る。已にして自殺す。宗盛父子、皇弟、皇太后、平時忠以下と、義經に從ひて東す。命ありて、宗盛以下を京師に徇ふ。宗盛、輿中より四望す。清宗、仰ぎ視ず。既に罷む。皆義經の第に拘す。宗盛、衣を解かず。寢るに袖を以て清宗を庇ふ。守兵見て之を憫む。五月、鎌倉に送る。賴朝之を前舍に延き、庭を隔てゝ相見る。命を將ふ者至る。宗盛、悚然として死を宥されんことを請ふ。賴朝、魚を俎に措き、刀を加へて之を示し、諷して自殺せし

安德天皇崩御

壽永四年三月廿四日平氏滅ぶ

【篠原】近江宗盛殺さる

めんとす。宗盛其意を曉らず。又送りて京師に還す。篠原に至り、父子別に拘す。將に殺されんとするを知るや、乃僧を請ひて佛を稱して曰く、「吾、壇浦に死せざるは、淸宗あるを以ての故のみ」と。是に於て皆斬らる。宗盛、次子あり。副將と曰ふ。先に京師に斬らる。初め壇浦の敗に、時子衆に謂て曰く、「宗盛は故相國の子に非ず。吾の再姙するや、相國其男を生むを期す。而して女生まる。吾れ相國の恨怒を恐れ、密かに人をして之を一傘工の男兒に易へしむ。宜なるかな、其重盛に若かずして、以て此に至る」と。宗盛既に死し、時忠等、皆流に處す。

義經平氏殘黨

時に義經、賴朝と隙あり。逃れて西海に奔る。賴朝、其平氏の遺黨と相依託して、亂を作さんことを恐るゝや、北條時政を京師に遣し、平氏の胤子の所在に伏匿する者を購ひ索めしめ、幼孩は之を生ながら埋め、稍長ずる者は之を殺す。其母若くは保、往々隨ひて死す。啼哭四に聞ゆ。維盛の子を六代と曰ふ。其母に依りて大覺寺の側に匿れ、人に告げられて斬に當る。其乳母、僧文覺に因りて宥を請ふ。賴朝素より文覺を重んず。且重盛の己れに德するを思ふや、特に之を宥す。髮を削りて文覺の弟子と爲す。文覺不軌を圖るに及びて、六代も坐せられて死す。

六代

忠房

初め維盛の弟忠房、壇浦を遁れて紀伊に匿る。知盛の次子知忠、族人の西奔する時に當りて、甫めて三歲なり。乳母の子紀友方、携へて備後に匿れ、後伊賀に徙る。平氏の舊臣藤原忠淸、宗盛に先だつこと一年にして捕斬せらる。平貞能、髮を削り、重盛の骨を奉じて、常陸に隱る。忠淸の二子忠光、景淸は、平盛嗣等と各所に潛匿す。後八年、鎌倉土木の事あり。賴朝臨む。忠光、役徒に雜り、賴朝を刺さんと欲す。魚鱗を眼に嵌めて、以て眇と爲り、畚を荷ひて出入す。賴朝、見て惟しみ、之を執ふれば、利刀を懷にせり。曰く、「平氏の臣忠光なり。故主のために仇を復せんと欲す」と。其黨を究問す。曰く、「獨盛嗣あるあり。聞く、前に丹波にあり。今何に之けるかを知らず」と。復言はず。食飲を絶つこと、月餘にして死す。賴朝、大に天下に索むれども、獲る所なし。

忠光

盛嗣

後五年、知忠、伊賀より還りて京師に入り、法性寺の側に匿る。盛嗣、景淸之を聞きて皆至る。諸舊臣稍來り屬し、賴朝の妹婿前原能保を襲はんと謀る。能保之を覺り、兵をして圍み攻めしむ。我が兵二千餘人亂射し、敵を殺して死す。知忠、友方と俱に自殺す。盛嗣、景淸、遁れ走り、忠房紀伊に在りと聞き、往きて之に歸し、兵を舉げて湯淺城に據る。熊野別當に攻め破られ、忠房、捕殺せられ、盛嗣、景淸、又遁る。

景淸

賴朝の東大寺を慶するに會ふ。景淸、衆中に雜りて、これを刺さんと欲す。事覺れて捕へらる。これを和田義盛に屬す。義盛、其不遜を苦しみ、之を辭す。乃八田知家に屬す。景淸、終に食はずして死す。盛嗣、姓名を變じ、但馬の人氣比道廣に仕へ、其厩卒となる。因りて其女に通ず。馬に浴する毎に馳射の狀を爲す。道廣、其の盛嗣なるを知れども問はず。既にして道廣に隨ひて京師に如き、故の妾家に遊ぶ。妾家之を源氏に告ぐ。乃、道廣をして之を捕へしむ。道廣、力士數人を遣し、其浴するを候ひて之を圍む。盛嗣、罵りて曰く、「奴輩、吾遁れんと欲せば、卽遁れん。而れども主人を累はすを欲せず」と。出でて縛に就く。賴朝之を面讓して曰く、「盍ぞ壇浦に死せざる」と。對へて曰く、「平氏の胤を擁して、以て舊業を復せんと欲するのみ」と。又問ひて曰く、「汝、義經に依ると聞く、諸ありや」と。盛嗣曰く、「否らず。嚮に京に在りしとき、判官を圖りて遂げず。爾來頗る利刃銳鏃を儲へて、一たび之を將軍の身に試みんと欲するのみ」と。遂に斬らる。

平氏の評

外史氏曰く。我が先王の、國を開き給ひしより、僭亂の臣なきに非ざるなり。而れども未だ社稷を危くせんことを謀りし者有らず。獨一の將門あり、しかも平氏より出づ。豈其宗の大恥に非ずや。然れども能く之を討滅せし者も、亦平氏より出でたれば、以て相償ふに足れり。且、將門、一たび誅に伏せしより、後世復神器を覬覦する者なし。彼れ其身を以て、天下の大戒を標せりと謂ふべきなり。

天慶の亂の原因

抑、將門をして一檢非違使を得しめば、則未だ必しも甘じて反賊とならじ。故に天慶の亂は、皆相門の驕傲にして、上下を壅塞せしが致す所なり。

源平興起の原因

清盛の評

【相家】藤原氏、清盛藤原に學ぶ

【詩】小雅、裳裳者華の篇

【彼己氏】藤原氏

【師】藤原氏後白河天皇清盛の勢を養成す

平氏の力を以て源氏を抑へ藤原氏の權を殺ぐ

其事なきに當りては、朝廷の名爵を私門に籠めて、人の職を失ふを恤へず。其急なるに及びては、乃、遽に朱紫を掲げ、天下に呼號し、天下の英雄をして、以て朝廷を窺ふこと有らしむ。後世、源平爭ひ起り、功を以て其上に邀むる者、焉ぞ其此に基づかざるを知らんや。世、清盛の功は其罪を償はずと稱し、不臣の者を舉ぐれば、輒以て稱首と爲す。而して相家の不臣、已に清盛に什倍するを知らず。清盛は蓋し視てこれを學びしのみ。否らざれば則何ぞ遽に此に至らんや。詩に曰く、「唯其れ之あり。是を以て之に似る」と。相門の權を專にしてより、后は皆其女、天子は皆其女の生みし所、而して卿相は皆其子弟親屬なり。苟も其族類に非ざれば、鋤して之を去る。皇族と雖も免るゝこと能はず。甚しきは則其主を易置すること、猶奕棋を視るが如し。清盛の爲す所、一として彼己氏に似ざる者なし。而して加ふるに鷙悍を以てす。其意に曰く、「無功の人を以て、猶權寵を擅にせしこと此の如し。吾れの王室に大造ある、何を爲してか不可なら ん」と。世、其拔興の漸無きを以て、群起して之を咎む。而れども之が師と爲る者有るを言はず。且、清盛の此に至る所以は、後白河帝の其勢を養成せしに由るのみ。夫れ名爵は公器なり。私に用ゐる可からず。人臣にして名爵を私するは、是れ其君に負くなり、人君にして名爵を私するは、是れ其先王に負くなり。帝、先王の名爵を清盛に濫授し、藉りて以て其私を濟す。而して其功を負み、上に邀むるの心を長じ、制す可らざるに至る。將誰を咎めんや。然りと雖も平氏の勢を成すものは、獨、帝に始まりしにあらざるなり。初め忠盛、寵を白河、鳥羽に受け、連に官爵を進む。人以て不次と爲す。蓋し朝廷其力に倚りて、以て源氏を抑へぬ。源氏を抑へたるは、相家の權を殺ぎし所以なり。源氏、滿仲、賴光より、毎に相門の爪牙たり。攝政兼家の花山を騙するや、源賴信、實に道途を捍衞せり。降りて文治の際に至りて、朝廷、關白兼實の源賴朝を助けしを疑ひしも、亦其世相驚援せしを以てに非ずや。是に由りて之を觀れば、平宗を延きて以て相門に抗せしめしは、院政、廟論の相傳承する所、其れ猶寛平の菅氏を擢任せしが如きか。文武異なりと雖も、其意は一なり。菅公の賢を以てして、猶權を繼ふ意なき能はず。平氏は、重盛を除くの外、皆不學無術

源平二氏の評議

【平語】平家物語

【神祖】神武帝

【大友】弘文

【大炊】淳仁

帝王廿一世皆藤原氏の出

なり。其功に矜り、寵を擅にし、進みて止るを知らざるも、曷ぞ尤むるに足らんや。假設ば、重盛、父に後れて死し、盡く其爲す所に反して、子弟を戒飭し、王室を輔翼せば、則藤原氏に接踵比隆すと雖も可ならん。而れば源氏、何に資りて以て起らんや。源氏、名は暴亂を治むと爲して、其實は王權を攘竊せしなり。源平の罪、未だ輕重し易からざるなり。且夫れ源氏の猜忍にして、骨肉相食む、平氏の闔門、死に至るまで、懿親を失はざりしに比して、孰與ぞや。

世、平語を傳へ、琵琶に倚りて之を演ず。其音悲壯感憤にして、聽く者悽愴せざるは莫し。余嘗て西、長門に遊びて、壇浦を過ぎ、平氏覆滅の所を觀き、又肥後に抵りて、其州に五家山あり。山谷深阻、平氏或は竄匿し、子孫今に至りて猶存する者あり。外人と交通せずと聞きぬ。夫れ平氏の王家に於る功罪相償へり。天必しも其後を勦絶せざれば、則是れ其れ或ひは然らん。

外史氏曰く。王權の武門に移りしは、平氏より始まり、源氏に成れり。而して之を基ししものは藤原氏なり。故に略王室、相家の系統を敍して以て參觀に備へん。

蓋し神祖より後三十九世を、天智と曰ふ。是を中宗と爲す。天智の子大友位に卽く。而して天武、叔父を以て簒立し、之に持統、文武、元明、元正、聖武、孝謙、帝大炊に傳へらる。凡七世にして天武の嗣絶ゆ。光仁は天智の孫を以て、入りて大統を繼ぎ、之を其子に傳へらる。是を桓武帝とす。桓武の三子、平城、嵯峨、淳和、兄弟相及ぶ。仁明は嵯峨の子を以て之を繼ぐ。文德は仁明の子を以て又之を繼ぐ。文德、幼子なれども、藤原氏の故を以て、立ちて位に卽く。是を淸和帝とす。淸和の子陽成は、藤原氏に廢せらる。光孝は文德の弟を以て之に代へらる。光孝より下、宇多、醍醐、朱雀、村上、父子相繼ぐ。村上の子冷泉、圓融、兄弟相及ぶ。花山は冷泉の子を以て圓融に繼ぐ。一條は圓融の子を以て花山に代る。三條は又冷泉の子を以て、一條に繼ぐ。一條の子後一條、後朱雀、兄弟相及ぶ。後朱雀より下、後冷泉、後三條、白河、堀河、鳥羽、崇德、父子相繼ぐ。崇德より下、源平語中に詳なり。崇德より上、文德に至るまで二十一世、其藤原

氏の出に非ざりしものは、宇多、後三條のみ。故に皆其權を抑ふるを計りて、在位長からず。能く志を遂げらるゝことなし。然して宇多以後三朝、攝關を置かず。政、天子にあり。白河以後、既に位を辭して、猶政を聽く。政、上皇にあり。其餘は皆藤原氏の成すを仰ぎたまへり。而して其政を擅にするは、文德より始ると云ふ。然れども、余謂へらく、藤原氏の驕專なる、其來ること久し。獨り文德の時に始りしに非ざるなり。鎌足、天智を助け、力を王室に効し、其子不比等、四朝の元老たり。女武、聖武、並に其女を娶り、孝謙は其外孫女なり。而して皆淫縱なり。惠美押勝、孝謙に嬖せられ、殆ど國家を危くす。實に不比等の孫なれば、則其家法知るべきなり。而して平城より以下、文德に至るまで、又みな其出なり。文德の外舅左大臣冬嗣は、不比等四世の孫たり。冬嗣の子良房、又女を文德に納れて、淸和を生む。文德、長子の惟喬を立てんと欲して良房を憚り、遂に淸和を立つ。則藤原氏の威、人主を懾れしむること、一日に非ざるは、又知るべきなり。淸和、生れて九歲にして位に卽く。良房外祖を以て政を攝す。其子の基經、陽成を廢して、光孝を立て、萬機を攝關す。攝關の號此に始まる。基經の二子時平、忠平あり。忠平は朱雀の朝に攝政す。其二子の實賴、師輔と並に三公に列す。是に於てか、天慶の亂あり。冷泉の二弟、爲平、守平あり。村上、爲平を立てゝ、冷泉の儲貳と爲さんと欲す。而して實賴等其藤原氏の出に非ざるを以て、之を沮みて守平を立つ。是を圓融と爲す。是に於てか、安和の變あり。師輔、三子あり。伊尹、兼通、兼家と曰ふ。兼家三子あり道隆、道兼、道長と曰ふ。皆兄弟政を爭ふ。伊尹の女、花山を生む。兼家の女、一條を生む。故に兼家、道兼をして花山を賺し位を遜れしめて、而して一條を以て之に代らしむ。是れ其最甚しき者なり。後一條より下三帝、皆道長の女の生みし所、是れ其最寵榮を極めし者なり。道長の二子賴通、敎通、相繼ぎて政を執る。而して賴通、師實を生む。師實、忠實を生む。忠實其長子の忠通を疎じて、少子賴長を愛す。是に於てか、保元の禍あり。忠通の三子、基實、基房、兼實あり。基實、基通を生む。基房、師家を生む。兼實、良經を生む。更朝政を源平の際に執る。其

鎌足【四朝】持統文武、元明元正

藤原氏の積威一日に非ず

攝關號の始

藤原氏と帝室との關係を論ず

兼實

五攝家【五派】近衞五條、二條、鷹司

藤原の末路

藤原氏公卿の門閥論を嘲る

論議觀るべき者は、獨、兼實あり。他は位に充つるのみ。其後、一姓分れて、五派と爲り、更攝關と爲る。而して其進退は皆、復天下の事に關らず。錄するに足らざるなり。之を總ぶるに良房より下、奕葉鈞を秉る。大抵務めて私門を營み、國家の休戚を以て心に經せず。而して其權を爭ふに當りては、父子兄弟すら且相保たずして、奔競從諛し、朝を舉げて風を成せり。哀まざるべけんや。

王室と俱に衰へ、共に頹れ、徒に空名を存せり。宜なるかな、大亂の是に基すること。而して其終に外史氏曰く。吾れ史を閱して、王覇の廢興せる所以を知るあり。源賴朝、嘗て大江廣元を奏して、廳使、衞尉と爲す。攝政兼實、其不可を議して曰く、「儒家の進仕の例に非ず」と。嗚呼、門閥を以て賢と爲し、格例を以て政を爲す。其才俊を驅りて、以て梟雄を資けしめ、猶覺悟せずして此の區々を爭ふ。兼實すら且然り。其他知るべし。向に相家をして國を憂ふるの心と、變に通ずるの略あらしめば、何ぞ王權の外移するを患へんや。顧ふに嚮者の天慶の亂も、亦藤原忠平の廳使を平將門に許さゞりしに由るなり。久い哉、相家の豪傑を沈滯せしむること。抑、將門は自與せんと欲せしなり。而して得失を以て榮辱と爲せり。賴朝は之を其下に與へんと欲せしなり。而して從違を以て損益を爲さざりき。又以て世變を觀る可きかな。

外史氏曰。自二我先王之開一國也。非一無二僭亂之臣一也。而未一有下謀一危二社稷一者上。獨有二一將門一焉。而出一於二平氏一。豈非二其宗之大恥一哉。然能討二滅之一者。亦出一於二平氏一焉。則足二以相償一矣。且自二將門一伏一誅。而後世無下復覬二覦神器者上。可一謂下彼以二其身一標中天下大戒上也。抑使三將門得二檢非違使一。則未三必甘爲二反賊一。故天慶之亂。皆相門驕傲。壅二塞上下一之所一致也。當二其無一事也。籠二朝廷名爵於二私門一。而不一恤二人之失一職。及二其急一也。乃遽揭二朱紫一。呼二號天下一。使四天下英雄有三以窺二朝廷一。後世源平爭起。以一功邀二其上一者。焉知二其不一基一於此也。世稱二淸盛功不一償二其罪一。擧二不臣者一。輒以爲二稱首一。而不一知三相家不臣已什二倍淸盛一。淸盛蓋視而

學レ之。否則何遽至レ此。詩云。唯其有レ之。是以似レ之。自二相門之專レ權也。后皆其女。天子皆其女所レ生。而卿相皆其子弟親屬。苟非二其族類一鋤而去レ之。雖二皇族一不レ能レ免焉。甚則易二置其主一。猶レ視二奕棋一。清盛所レ爲。無下一不レ似二彼己氏一者上。而加以二鷙悍一。其意曰。以二無功之人一。猶擅二權寵一如レ此。吾之有レ大二造於二王室一。何爲而不可。世以二其拔與之無レ漸。群起咎レ之。而不レ言レ有下爲二之師一者上焉。且清盛所二以至レ此。由二後白河帝養一成其勢一爾。夫名爵公器。不レ可二私用一。人臣而私二名爵一。是負二其君一也。人君而私二名爵一。是負二其先王一也。帝濫二授先王名爵於二清盛一。藉以濟二其私一焉。而長二其負レ功邀レ上之心一。至レ於不レ可レ制。將誰咎哉。雖レ然。成二平氏之勢一者。不二獨始レ於レ帝也。初忠盛受二寵於二白河鳥羽一。連進二官爵一。人以爲二不次一。蓋朝廷倚二其力一。抑二源氏一。抑二源氏一。所二以殺二相家之權一也。源氏自二滿仲賴光一。每爲二相門之爪牙一。攝政兼家之驅二花山一也。源賴信實捍二衞道途一。降至二文治之際一。朝廷疑二關白兼實之助一。源賴朝一。亦非レ以二其世相黨援一哉。由レ是觀レ之。延二平宗一。以抗二相門一。院政廟論。所二相傳承一。其猶二寬平之擢一。任菅氏一耶。文武雖レ異。其意一也。以二菅公之賢一。猶不レ能レ無二戀レ權之意一。平氏除二重盛一之外。皆不學無術。其矜レ功擅レ寵。進不レ知レ止。曷足レ尤焉。假設重盛後レ父而死。盡反二其所レ爲。戒二飭子弟一。輔二翼王室一。則雖レ接二踵比肩隆於二藤原氏一可也。而源氏何資以起哉。源氏名爲レ治二暴亂一。而其實攘二竊王權一。源平之罪。未レ易二輕重一也。且夫源氏猜忍。骨肉相食。孰二與平氏闔門至レ死不レ失二懿親一邪。世傳二平語一。倚二琵琶一演レ之。其音悲壯感憤。聽者莫レ不二悽愴一。余嘗西遊二長門一。過二壇浦一。觀二平氏覆滅之處一矣。又抵二肥後一。聞下其州有二五家山一。山谷深阻。平氏或竄匿焉。子孫至レ今猶有二存者一。不中與二外人一交通上云。夫平氏於二王家一。功罪相償。天不二必勦一絕其後一。則是其或然也。

外史氏曰。王權之移レ於二武門一。始レ於二平氏一。成レ於二源氏一。而基レ之者。藤原氏也。故略二敍王室相家之系統一。以備二參觀一云。蓋神祖而後三十九世。曰二天智一。是爲二中宗一。天智子大友卽位。而天武以二叔父一。簒立。傳之持統。文武。元明。元正。聖武。孝謙。帝大炊一。凡七世而天武之嗣絕。光仁以二天智孫一。入繼二大統一。傳二之其子一。是爲二桓武帝一。桓武三子。平城。嵯峨。淳和。兄弟相及。仁明以二嵯峨子一。繼レ之。文德以二仁明子一。又繼レ之。文德幼子。以二藤原氏故一。立卽レ位。是爲二淸和帝一。淸和子陽成。爲二藤原氏所レ廢。光孝以二文德弟一。代レ之。光孝而下。宇多。醍醐。朱雀。村上。父子相繼。村上之子。冷泉。圓融。兄弟相及。花山以二冷泉子一。繼二圓融一。一條以二圓融子一。代二花山一。三條又以二冷泉子一。繼二一條一。一條之子。後一條。後朱雀。兄弟相及。後朱雀而下。後冷泉。後三條。白河。堀河。鳥羽。崇德。父子相繼。崇德而下。詳レ於二源平語中一。崇德而上。至レ於二文德一。廿一世。其非二藤原氏之出一者。宇多。後三條而已。故皆計レ抑二其權一。而在位不レ長。莫二能遂レ志。然宇多以後三朝。不レ置二攝關一。政在二天子一。白河以後。已辭レ位而猶聽レ政。政在二上皇一。其餘皆仰二藤原氏之成一。而其擅レ政始レ於二文德一云。然余謂藤原氏驕專。其來久矣。非二獨始レ於二文德時一也。鎌足助二天智一。效二力王室一。其子不比等。爲二四朝元老一。文武。聖武。並娶二其女一。而孝謙其外孫女也。而皆淫縱。惠美押勝嬖レ於二孝謙一。殆危二國家一。實不比等孫。則其家法可レ知也。其後光仁。桓武。仁明。獨不レ出レ於二藤原氏一。而自二平城一以下。至レ於二文德一。又皆其出。文德外舅左大臣冬嗣。爲二不比等四世孫一。冬嗣之子良房。又納二女文德一。生二淸和一。文德欲レ立二長子惟喬一。而憚二良房一。遂立二淸和一。則藤原氏之威懾二人主一。非二一日一。又可レ知也。淸和生九歲卽レ位。良房以二外祖一。攝レ政。其子基

經。廢二陽成一。立二光孝一。關二白萬機一。攝關之號始レ此。基經二子。時平。忠平。忠平攝三政於二朱雀之朝一。與二其二子實賴。師輔一。並列二三公一。於レ是乎。有二天慶之亂一。冷泉二弟。爲平。守平。村上欲下立二爲平一爲中冷泉儲貳上。而實賴等以三其非二藤原氏出一沮レ之。而立二守平一。是爲二圓融一。於レ是乎。有二安和之變一。師輔三子。曰二伊尹。兼通。兼家一。兼家三子。曰二道隆。道兼道長一。皆兄弟爭レ政。伊尹女生二花山一。兼家女生二一條一。故兼家令下道兼賺二花山一遜上位。而以二一條一代レ之。是其最甚者也。後一條而下三帝。皆道長女所レ生。是其最極二寵榮一者也。道長二子。賴通。教通。相繼執レ政。而賴通生二師實一。師實生二忠實一。忠實疎二其長子忠通一。而愛二少子賴長一。於レ是乎。有二保元之禍一。忠通三子。基實。基房。兼實。基實生二基通一。基房生二師家一。兼實生二良經一。更執三朝政於二源平之際一。其論議可レ觀者。獨有二兼實一。他充レ位而已。其後一姓分爲二五派一。更爲二攝關一。而其進退皆不三復關二天下事一。不レ足レ錄也。總レ之。良房而下。奕葉秉レ鈞。大抵務營二私門一。不下以二國家休戚一經上心。而當二其爭レ權。父子兄弟。且不二相保一。奔競從諛。舉朝成レ風。宜乎。大亂之基レ於レ是。而其終與二王室一俱衰共頹。徒存二空名一。可レ不レ哀邪。外史氏曰。吾閱レ史。有レ知三王覇所二以廢興一也。源賴朝嘗奏二大江廣元一。爲二廳使衛尉一。攝政兼實議爲二不可一。曰。非二儒家進仕之例一。嗚呼。以二門閥一爲レ賢。以二格例一爲レ政。驅二其才俊一。以資二梟雄一。而猶不二覺悟一。爭二此區區一。兼實且然。其他可レ知。向使三相家有二憂レ國之心通レ變之略一。何患レ於二王權之外移一邪。顧嚮者天慶之亂也。亦由二藤原忠平之不レ許三廳使於二平將門一也。久矣哉。相家之沈二滯豪傑一也。抑將門欲二自與一也。而以二得失一爲二榮辱一。賴朝欲レ與二之其下一也。而不下以二從違一爲中損益上。又可三以觀二世變一矣夫。

改版 **邦文日本外史** 卷之一 終

改版

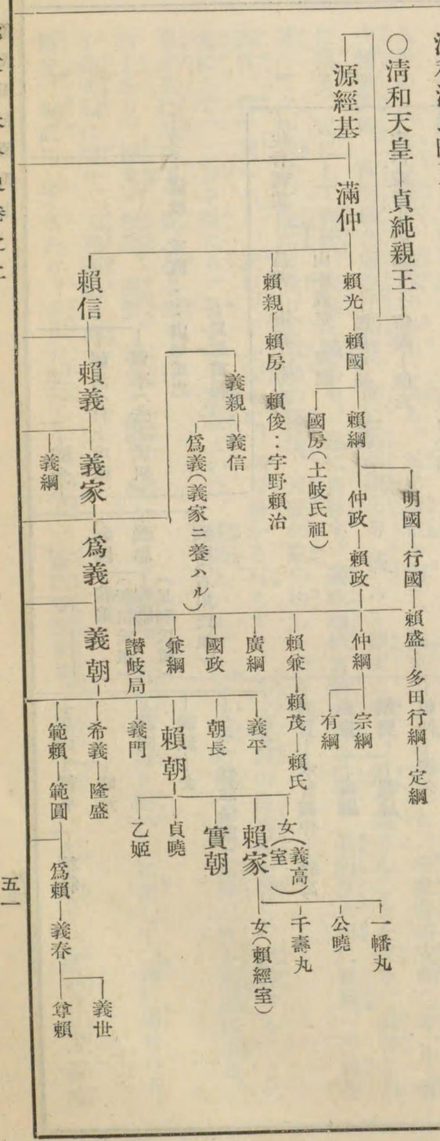
邦文日本外史 卷之二

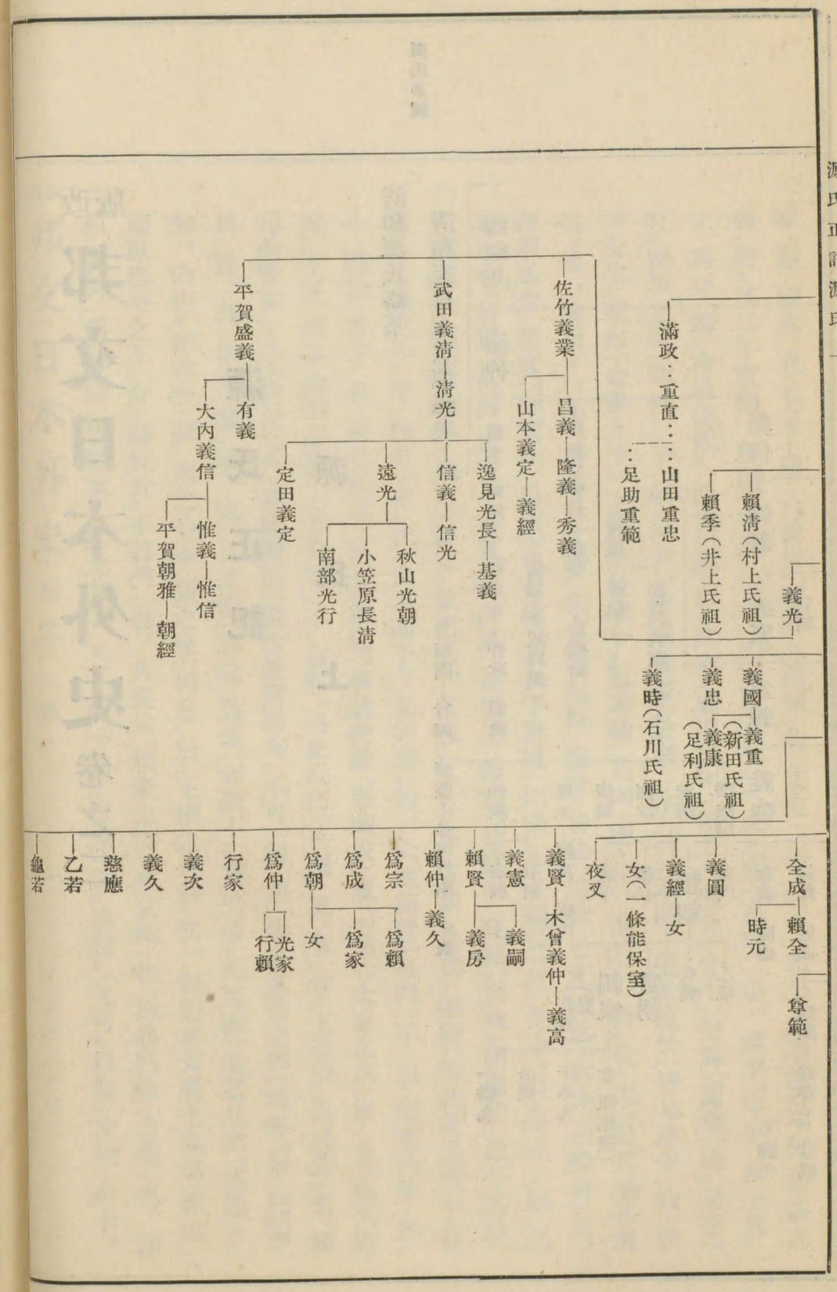
源氏正記

源氏上

源氏系圖

清和源氏略系





源氏系統
貞純親王
六孫王經基

經基の子多田滿仲【父の職位】正四位下、鎭守府將軍
安和二年安和の變

鬚切、膝圓

滿仲の子
大和源氏
賴光

源氏は、清和天皇より出づ。天皇の宮人王氏、貞純親王を生む。四品に叙し、兵部卿に任ぜられ、桃園親王と稱せり。親王二子あり。經基と曰ひ、經生と曰ふ。皆姓を源氏と賜はる。

經基、武幹あり、騎射を善くす。親王は帝の第六子たりしを以て、世、經基を呼びて六孫王と曰ひき。天慶中、武藏介と爲る。平將門の反せし時、間行して、入りて之を奏す。因りて從五位下に拜す。藤原忠文に從ひて、將門を伐ち、又小野好古に從ひて賊黨藤原純友を伐つ。終に正四位下に叙し、鎭守府將軍に任ぜらる。子孫世武臣たり。其旗は白を用ゐる。

八子あり。長は滿仲、攝津の多田に生る。父の職位を襲ぎ、關東の士心を得たり。冷泉帝の安和二年、中務少輔橘繁延、前相模介藤原千晴等、密に爲平親王を挾みて關東に奔り、亂を爲さんことを謀る。滿仲これに與る。已にして滿仲、繁延と隙あり。遂に自首す。攝政藤原實賴の旨を以て、弟滿季と與に繁延、千晴を捕へて之を流す。是時に當りて京師の騷擾、天慶の亂の如しと云ふ。

滿仲、嘗て謂へらく、武臣天子を衞るに、利刀無かる可らずと。乃、筑前の良冶某を召し、鍛錬すること六旬にして、二刀を得たり。名づけて鬚截といひ、膝圓といふ。之を子孫に傳へぬ。滿仲、官左馬頭に至る。卒するに及びて、從三位を贈らる。

四子あり。賴光、賴親、源賢、賴信。源賢、僧となる。賴親、興福寺の僧と鬪ひしに坐して、流に處せらる。子孫大和に居り、大和源氏と稱す。

賴光、材武にして名あり。東宮大進たり。永延中、攝政藤原兼家、新第を造り、之を落す。賴光、馬三十匹

攝津源氏　平忠常の亂

を遣りて、以て賓客に分つ。兼家の子道隆、攝政を襲ぐ。其弟右大將道兼、之と權を爭ふ。賴信、素より道兼に事へたり。賴光に謂て曰く、「吾が力能く道隆を刺し、我が主をして之に代らしめん」と。賴光、其口を掩ひて曰く、「妄言すること毋れ。事敗るれば、肝腦地に塗れん。汝が主も亦豈晏然として止る可けんや」と。賴信、乃止む。賴光、三子あり。長は賴國、子孫世多田に居り攝津源氏と稱す。

賴信、尤勇敢にして、善く兵を用ゐる。長元中、甲斐守と爲る。會上總介平忠常、亂を作す。朝廷、上野介平直方をして東海、東山の兵を將ゐてこれを討たしむ。三歲にして平ぐること能はず。乃、賴信を以て常陸介となし、之に代らしむ。賴信、命を聞きて卽往く。人、其兵の集るを待ちて進まむことを勸むれども聽かず。遂に子の賴義等を率ゐ、進みて鹿島に赴く。忠常、舟を奪ひ、柵を海岸に列ぬ。渡る可からず。賴信、弱を示して之を怠らせんことを計り、使をして和を請はしむ。忠常肯ぜず。是に於て、衆を聚めて戰を議す。衆謂へらく、「其れ舟筏なし。宜しく海を循りて赴き攻むべし」と。賴信曰く、「不可なり。賊險を恃む。吾れ直に渡りて、其備へざるを攻めなば、一戰にして下す可し。聞く、『淺き處ありて騎渡すべし』と。軍中豈之を知る者有らんか」と。高文といふ者あり。自之を知ると稱し、馳せて海り入り、行葦を立てて表と爲す。賴信、軍を麾きて之に從ふ。忠常驚怖し、出でゝ降る。之を斬り、首を京師に效す。功を以て從四位上に敍し、上野、常陸介に任ず。賴信謝して曰く、「臣天威を藉り、刄に血ぬらずして强賊を降すを得たり。何の功か之れ有らん。臣老いたり、遠任に堪へず。願はくは改めて丹波に守たるを得ん。敢て望む所に非るなり」と。許されず。

賴信、忠常を斬る

賴義　八幡太郎

子の賴義、沈斷にして武略あり。小一條院の判官代となる。毎に獵に從ひ、善く弱弓を用ゐて猛獸を殪す。平直方、其材藝を奇とし、女を以て之に妻す。既にして賴義、八幡神より劍を賜ふと夢み、其妻娠むことありて、子を生む。賴義喜びて曰く、「此兒、必我が家を興さん」と。因りて名づけて義家と曰ふ。長ずるに及び、八幡の祠前に冠し、八幡太郎と稱す。人と爲り英果にして射を善くす。征行ある毎に、未だ嘗て從はずんばあらず。賴義、相模守となる。州俗、武を好む。賴義、義家、撫するに恩威を以てす。豪傑爭ひ服し、之が用を爲すを樂しむ。

（安倍氏系圖）

奧州安倍氏略系

- ○忠頼—忠良
  - 爲元
  - 良昭
  - 頼時
    - 貞任—千代
    - 宗任
    - 正任
    - 家任
    - 重任
    - 則任
    - 女（伊具十郎妻）
    - 女（清衡、家衡母）

前九年戰　安倍賴時

是時に當りて陸奧の豪傑安倍賴時、諸部落を併せて、六郡の酋長と爲る。國守、秋田城介と、兵を合せて之を伐つ。賴時、逆へ擊ちて大に之を敗る。白河關以北、海に傅まで、盡く叛き附く。朝議、賴義を以て陸奧守と爲す。義家及び次子の義綱と、兵を率ゐて赴き伐つ。大赦に會ふ。賴時、兵を解きて降り、賴義に臣として事ふ。賴義、遂に鎭守府將軍を兼ぬ。

永承七年

永承七年、任滿ちて、將に還らんとし、府に入りて事を視る。賴時、厚く其軍を犒ふ。既にして罷めて國府に歸り、阿栗川に宿す。人あり、夜、藤原光貞の營を襲ふ。初め賴時の長子貞任、婚を光貞に請へども聽さず。故を以て之に報ぜしなり。

衣川關

是に於て、賴義、貞任を執へんと欲す。賴時、乃兵を舉げて反し、衣川關に據る。賴義、奏して再任を請ひ、兵を發して之を伐つ。賴時の婿藤原經清、平永衡、來りて官軍に屬す。或人、「永衡、虜と私あり」と

賴時誅せらる

天喜五年

鳥海の戰

源兼長【出羽守】兼長【新守】源齊賴、賴義の再從兄弟

康平五年

清原光賴、武則

【營岡萩埒】陸奥【小松柵】出羽小松柵

告ぐ。賴義、永衡を捕へてこれを斬る。經清も亦自ら安んぜず。遁れて賴時に歸す。賴時の族富忠、勇にして衆あり。賴義、勅旨を以て諭して、官軍に應ぜしむ。賴時も亦親往きて之を說く。賴義、富忠をして兵を伏せて要擊せしめ、賴時を獲て、之を誅す。而れども貞任の軍猶張る。貞任魁傑にして、善く兵を用ゐる。官軍數利あらず。歲比に飢に屬し、糧食給らず。天喜五年、賴義、奏して兵食を徵せんことを請ふ。其十一月、自兵千八百を將ゐて、貞任を河崎に伐つ。大風雪に會ひて、人馬凍飢す。貞任、選兵四千を以て、鳥海に戰ひ、左右の翼を縱ち、大に我が軍を敗る。我が軍餘る所僅に六騎なり。虜、急に之れを圍む。矢下ること雨の如し。賴義、義家、みな馬を傷つく。從騎下りて之を授く。義家、藤原範明等と、縱橫に奮擊す。虜兵相警めて曰く、「八幡太郎なり」と。遂に退き去る。賴義、既に免れ、乃ち、奏すらく、「兵食の至らざる、遠近皆然り。且出羽守、臣と力を戮せず」と。更に於て、詔して出羽守を罷む。新守至るも、亦敢て來り援けず。貞任の勢益張る。經清をして私符を以て官物を徵さしむ。令して曰く、「白符を用ゐよ。赤符を用ゐる勿れ」と。赤符は官符なり。賴義、益困しむ。對守せしこと數歲なり。康平五年、任滿ち、高階經重に詔して代り任ぜしむ。國民賴義を慕ひて、經重に服せず。經重已むを得ずして去る。

是に於て、賴義必虜を滅ぼさんことを矢ひ、人をして出羽の酋清原光賴、及び弟武則に說かしめ、諭すに大義を以てせしむ。七月、武則、子弟以下萬餘人を率ゐて至る。賴義、三千人を以て營岡に會議して、七陣と爲し、武則等を以て分ちて之に將たらしめ、而して自第五陣に將たり。進みて萩埒に至る。將に小松の柵を攻めんとし、凶日を以て果さず。清原氏の候騎、誤りて火を民家に失するに會ふ。柵中大に囂し。賴義、武則に謂て曰く、「機失ふ可らず。日に拘りて何をか爲さん」と。對へて曰く、「我が兵、怒りて火の如し。宜しく此時に及びて之を用ゐるべし」と。乃騎兵を遣し、其衝路を絕ち、而して步兵薄りて之を攻む。深江是則

長蛇陣

衣川

【二柵】大麻生野、瀨原鳥海の柵

【三柵】黑澤尻、鶴脛、比與登利、出羽【厨川】出羽厨川柵

貞任捕はれて斬らる

等、死士を以て險を冒し、柵に入る。虜大に援る。貞任、弟の宗任をして、出でて戰はしむ。賴義、麾下を以て橫に擊ちて之を破る。虜の遊軍、又我第七軍を襲ふ。亦擊ちて大に之を破る。虜遂に柵を棄てゝ走る。乃、柵を焚きて退く。霖雨に會ひて留ること旬餘。磐井以南、盡く宗任に應じて、我が糧道を侵奪す。賴義、兵を分ちて赴き拒ぐ。九月、貞任、我が兵の寡きを瞰ひ、精騎八千を以て來り襲ふ。武則、曰く、「我は客兵にして、糧乏し。利は速に戰ふに在り。彼は坐ながらに之を困しめんとせずして來り戰ふは、是れ自、首を授くるなり」と。賴義大に喜び、長蛇陣を爲し、逆へ戰ふこと半日、大に之を破る。走るを追ひて、磐井河に至り、武則に乘じて遂に其巢穴を擣かんと欲す」と。則、武則をして八百騎を以て、夜、之を追はしむ。て曰く、「吾れ機に乘じて柵を攀ぢて河を踰え、火を虜の營に縱たしむ。貞任駭き走る。賴義追擊して、連に二柵を破り、進みて鳥海の柵を拔く。乃、將士を會して飲み、武則に謂て曰く、「吾れ此に至るを得しは、子の力なり。子、吾が面目を視る奚若」と。對へて曰く、「臣、將軍の爲に鞭を執る。何の力か之れ有らん。將軍、忠を天子に盡し、野に暴露すること十餘年、頭髮みな白し。天地爲に動き、將士爲に奮ふ。虜を破ること河を決するが如し。臣、今、將軍を見るに、髮復半黑なり。卽し貞任を獲ば、則、全黑とならん」と。賴義喜び、又進みて三柵を破り、貞任を追ひて、厨川の柵に至る。柵、水澤に據り、壘を高くし、塹を深くし、塹中に刄を植て、死を以て之を守り、我が兵數百人を殺す。賴義、人家を壞ち、塹を堙めしめ、馬を下りて遙に京師を拜し、手に火を取り、號して神火と爲し、之を投ず。風起るに會ひ、壘柵皆火く。我が軍因りて、急に之を圍む。虜、殊死して戰ふ。武則其一角を解く。虜逃れ走る。賴義、擊ちて之を殄きて至る。賴義、之を視る獨身出でて鬪ふ。我が兵之を叢刺す。殊せず。之を巨楯に載せ、六人にて之を舁きて至る。賴義、乃、に、腰圍七尺、長は之に稱ふ。賴義、其罪を數へて之を斬る。其子千代、其弟重任に及び、經清も亦縛せ

宗任降る

六年

られて至る。頼義、命じて鈍刀を用ゐて之を斬る。曰く、「猶よく白符を用ゐるか」と。宗任等皆降る。頼義、柵中に虜の掠むる所の美女數十人あるを見、盡く分ちて將士に賜ふ。六年二月、人をして貞任以下の首を齎して、闕下に献ぜしむ。詔して正四位下に叙し、伊豫守に任ず。義家、從五位下に叙し、出羽守に任ず。義綱を左衛門少尉と爲し、清原武則を鎮守府軍と爲す。八月、頼義、八幡の祠を鎌倉鶴岡に建てゝ戰功を賽す。

七年

頼義上書

七年春、頼義、義家諸の降虜を以て入朝し、奏して有功の將士を賞せんことを請ふ。朝議未だ許さず。故を以て未だ任に赴かず。任國登らず。私資を以て貢賦を濟す。是の如くせしこと二年、上書して重任を請ひて曰く、「臣聞く、人臣、勳功を建てゝ、恩賞を受くることは、和漢古今同じき所なり。是を以て或は徒隷より起りて、金紫を係け、卒伍より出で、將相に至る者あり。頼義、功臣の裔を以て恪勤の節を效すこと舊し。適東夷蜂起し、郡縣を侵盜し、人民を抄略す。六郡の地、皇威に服せざる者數十年なり。近歲に及びて、日に益猖獗なり。頼義、永承六年を以て、任を彼州に受け、天喜中に至りて兼て鎮府に帥たり。臣、鳳凰の詔を啣み、以て虎狼の國に向ひ、堅を被り鋭を執り、身に矢石を受け、千里の外に暴露して、萬死の途に出入す。天子の威と、將卒の力とを藉りて、終に其功を奏するを得たり。其渠帥安倍貞任、藤原經清等、皆誅戮に伏し、首を京師に傳ふ。其餘の醜虜、安倍宗任等手を束ねて歸降す。其巢窟を掃ひ、之を縣官に收む。叛逆の徒、皆王民と爲る。乃、功績を錄することを蒙り、伊豫に守たるを得たり。臣、聖恩を忝くし、欽荷に暇あらず。而して餘燼を鎮服するを以て、猶奥地に留る。且、征戰の際、功勞有る者十餘人、爲に抽賞を請へども、未だ裁許を得ず。況や去歲九月、任符を賜はる。遲引の罪、已むを獲ざるに出づ。四歲の任、空く二稔を過ぎ、官物を徵納する能はず。而るに封家納官、督責雲の如し。仍りて私物を以て、且進濟を償へり。彼州の吏の言を聞くに、頻年旱凶にして、田に秋實なく、民に菜色ありと。臣謹みて傍例を按ずるに、境に蒞むの年限を延べて、以て闔國の凋弊を救ふ者、其人寔に繁し。況や希世の功を致す者、寧ぞ殊常の恩無からんや。昔班超は三十年を以て西域を平げぬ。今頼義は十二歲を以て東夷を誅せり。遲速優劣は、採擇難きに非ず。饒、千戶の封を受くる無きも、曷ぞ重任の典を許されざらんや。天恩を望み請ふらくは、臣が意を哀矜して、忝く允可を賜ひ、臣をして徐に興復の計を處し、以て辨濟の方を致すを得しめられんことを。臣、懇款に任へず」と。

宗任

延久三年

承暦三年

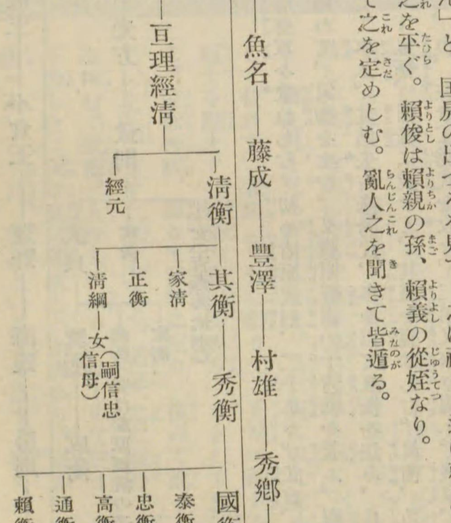
【美濃亂】源重宗、源國房、兵ゐ構ふ

永保二年

是より先、諸の降虜皆流に處せらる。義家、宗任の勇を愛して、特に之を親信す。一夜、私する所の女子を問はんと、車に乘りて往く。獨宗任從ふ。心陰に報復を圖り、刀を拔きて車中、窺へども、其睡るを見て發せず。後遂に心を傾けて之に事へきと云ふ。義家、嘗て藤原頼通が第を過り、陸奥の戰事を談ず。博士大江匡房、別室に在りて、之を聞きて曰く、「好男子、惜むらくは未だ兵法を知らず」と。宗任微に之を聞き、慍りて義家に告ぐ。義家曰く、「其或は然らん」と。匡房の出づるを見て、之に禮し、遂に就きて學ぶ。延久三年、陸奥亂る。守源頼俊討ちて之を平ぐ。頼俊は頼親の孫、頼義の從姪なり。承暦三年、美濃亂る。義家に詔して往きて之を定めしむ。亂人之を聞きて皆遁る。永保二年、頼義卒す。

奥州藤原氏略系

○藤原鎌足―不比等―房前―魚名―藤成―豐澤―村雄―秀郷―千晴―



（藤原氏系圖）

奥州清原氏略系

○天武天皇――舍人親王――御原王――小倉王――夏野――海雄――房則――深養父

- 童父――基貞――基光――光方――武則
  - 武貞――眞衡――成衡
    - 清衡（實は藤原經清の子）
    - 家衡
  - 武衡
    - 家衡
    - 女（吉彦秀武妻）

（清原氏系圖）

後三年の戰

吉彦秀武

金澤柵

寛治元年

權五郎景政

【敵】鳥海彌三郎

三年、義家に詔して陸奥守と爲し、鎭守府將軍を兼ねしむ。初め清原武則、二子あり。武貞、武衡と曰ふ。武貞、眞衡を生む。又藤原經清の寡婦を納れて、家衡を生む。又藤原經清の子清衡を養ふ。而して眞衡を嫡嗣と爲す。家衡、清衡、以下皆之に臣として事ふ。其姑夫吉彦秀武、事を以て眞衡を怨み、兵を擧げて之に背く。眞衡赴きて之を攻む。秀武、人をして家衡、清衡に說きて、其虛を襲はしむ。眞衡、乃、還り救ふ。已にして義家至ると聞き、迎へて之を饗し、復、往きて秀武を攻む。二弟又來り襲ふ。義家、兵を從へて其城に入り、拒ぎて之を卻く。義家、自、出羽に赴きて、家衡を攻む。利あらずして還る。武衡、喜び來りて、家衡に謂て曰く、「子は八幡太郎に克つ。吾曹の榮なり。當に與に力を戮すべし」と。遂に兵を合せ金澤の柵に據る。義家大に怒る。

寛治元年九月、自數萬騎を將ゐて之を攻む。柵を去ること數里にして、雁行の亂るゝを望み見て曰く、「是れ伏有らん」と。兵を縱ちて搜り索む。果して獲て之を鏖にす。衆に謂て曰く、「兵法に言はく、『鳥亂るゝ者は伏なり』と。我れ學ばざらば則殆からん」と。遂に進みて柵を圍む。相模の人鎌倉景政、戰を挑む。敵射て其右目に中つ。景政、箭を拔かずして己を射たる者を索め、終に之を射殺す。武衡、險に據りて死鬪し、多く我兵を傷ふ。又卒千任といふ者をして、義家を詬言せしめて曰く、「汝の父、名簿を我に納れて、以て敵に克つを獲たり。簿、見に我に在り、汝何を以て我に負くか」と。義家怒りて、之を攻めて、未だ下す能はず。

新羅三郎

豐原時秋

（後三年之役の圖）

義家の弟義光、新羅三郎と稱す。亦勇智ありて技能多し。是の時右兵衞尉たり。京師に在りて、兄の軍、利あらざるを聞き、奏して赴き援はんことを請ふ。許されず。遂に官を舍てゝ之に赴く。義光素より音を好む。嘗て笙を豐原時元に學ぶ。是の時、時元已に死せり。其孤子時秋、義光を送りて足柄山に至り、月明なるに會ふ。義光因りて笙を吹き、盡く學びし所を授けて訣別し、遂に陸奥に至る。義家喜び泣きて曰く、「吾れ汝を見ること、猶先君を見るが如し」と。乃、與に俱に進み攻む。柵固くして拔けず。義家、會食に因りて、勇怯の兩列を設けて、以て戰士を勵ます。義光の從臣腰秀方、日として勇列に列らざるなし。吉彦秀武、降りて我軍に在り。進みて說く、「宜しく久を持し、之を困しましむべし」と。義家、之に從ひ、令を下して戰を休む。武衡、人をして來り言はしめて曰く、「我が軍、事無きを苦しむ。我に健兒龜次といふ者あり。請ふ一力人を得て之と角べん」と。乃、鬼武といふ者を遣す。勝ちて之を殺す。虜、愧憤して出でゝ戰ふ。

龜次

鬼武

已にして虜、食盡き、羸兵を出して來り降らしむ。秀武曰く、「是れ糧を紓するなり。宜しく斬るべし」と。義家又之に從ふ。虜益窘しみ、義光に因りて降を乞ふ。聽さず。再、乞ひ、且、義光に、柵中に臨みて、要結を爲すを請ふ。義光往かんと欲す。義家之を止む。乃、秀方をして往かしむ。虜、又を露して之を待つ。秀方夷然たり。武衡、之を賂ふに金を以てす。秀方、之を卻けて曰く、「我が輩、將に旦暮之を分ち取らんとす。汝が賂を煩さゞるなり」と。刀を撫して出づ。時に天漸く寒く、軍士凍を恐る。一夜、義家令を軍中に出して曰く、「我が營を燒きて煖を取れ。今夜、虜の柵陷らん。復、營を用ゐざるなり」と。黎明に柵中火起り、家衡遁れ、武衡池水の中に潛る。義家、之を獲て、誚めて曰く、「爾が父、吾が父に屬して功を樹て、吾が父、請ひて官爵を授けたり。若、怨を以て德に報ずるは何ぞや。名簿果して安に在る」と。因りて千任を執へて其舌を拔き、武衡を斬らしむ。武衡哀を義光に乞ふ。義光請ひて曰く、「降る者は宜しく赦すべし」と。義家、色を作して曰く、「過を悔いて來り歸すること、宗任の如き者、是れ之を降ると謂ふのみ。擒へられて活を求むるは、降るに非ず」と。遂に之を斬る。家衡は其下に殺さる。義家、武衡、家衡以下の首を獻ぜんと欲して、奏して官符を下さんことを請ふ。廷議、其を私鬪なりと謂て許さず。故を以て將士を賞せず。遂に首を途に棄てゝ還る。義家、父祖の業を承ぎ、善く將士を撫す。其陸奥を征するや、前は九年、後は三年。東國の士民、皆其恩信に服し、相與に共に請ひて其子弟を留め、之を擁戴して、自其家人と呼び、義家を稱して八幡公と曰ふ。是時に當りて八幡公の威名、朝野に徧し。白河法皇、嘗て夢魘を患ひ給ふ。義家に詔りして、其兵器を獻ぜしめて、之を鎭む。義家一の

金澤柵陷る

（源義家肖像）

玄弓を獻じて御枕の上に建つ。卽ち患無し。法皇問ひて曰く、「乃、東征に執る所なる毋からんや」と。對へて曰く、「臣、記せざるなり」と。法皇これを嘉賞す。然し、義家の官位甚だ卑し。正四位下右衞門尉を以て

天仁元年義家卒す

天仁元年に卒す。年六十八。

義家の子義忠

六子あり。義宗、義親、義國、義忠、義時、義隆。義忠、最、名あり。官、檢非違使に至る。季父義光之を嫉み、義忠の臣、鹿島某を誘ひて陰に之を殺さしむ。初め義忠の叔父義綱、義家と相惡みて、兵を構ふ。詔して兩家の兵の京師に入るを禁ぜられて、事寢むを得たり。後義綱、陸奥守を以て擊ちて亂人平師妙を出羽に平ぐ。功を以て從四位上に拜す。其黨、頗、廣し。此に至りて、朝議、義忠の死を以て、義綱の子義明に出づとし、兵を遣して之を殺さしむ。義綱、甲賀山に據る。源爲義に詔して、之を討たしむ。義綱、自、髡して降る。佐渡に流す。義光の子孫、世甲斐に居る。因りて甲斐源氏と稱す。

【鹿島某】三郎義連

義綱

甲斐源氏

爲義

爲義は、義親の子なり。義親、對馬守と爲り、罪を以て誅せらる。爲義幼にして孤なり。義家之を奇とし、以て義忠の嗣と爲さんと欲す。甲賀の捷に、左兵衞尉に拜す。時に年十四なり。其明年、義家卒す。爲義、遂に義家の後を承ぐ。居ること五歲、南部の僧兵叡山を攻む。又爲義に命ず。爲義、十七騎と、栗子山に逆へ擊ちて、之を走らす。後十餘歲、累遷して檢非違使左衞門大尉と爲り、從五位に叙せらる。

爲義の子鎭西八郎爲朝

爲義、二十三子あり。長を義朝と曰ふ。尤、善く戰ふ。相模の鎌倉に居る。關東の家人盡く之に附く。下野守と爲る。第八子を爲朝と曰ふ。猿臂にして善く射る。幼にして諸兄を凌犯す。爲義、之を患ひて、之を豐後に逐ふ。鎭西八郎と曰ふ。自、九國總追捕使と稱し、妻の父阿曾忠國を以て鄕導と爲し、數菊池、原田の諸大姓と戰ふ。十五歲に比びて、遂に盡く九國を伏す。九國の守介、交、之を訴ふ。朝廷、太宰府に勅して之を討たしむれども、克つこと能はず。爲義坐して官を免ぜらる。爲朝、聞きて之を病ひ、須藤家季等二十八人と俱に京師に至りて、罪を待つ。是歲、近衞帝崩ず。帝は鳥羽法皇の寵姬得子の生所たり。夙に禪を崇德上皇に受く。帝崩ずるに及びて、

近衞帝崩ず

【帝の兄】雅仁保元元年鳥羽法皇崩

保元の亂上皇兵を募る

【八甲】薄金、藤丸、楯無、慈姑、八龍、日數、日數、源太產衣

【寶劍】鶴丸

爲朝議を上る

賴長爲朝の議を排す

上皇、位に復せんことを願はる。法皇、得子と議して、帝の兄を立て、位に卽かしむ。是を後白河帝とす。帝の保元元年、法皇疾あり。得子を召して之に一筐を授け、戒めて曰く、「緩急あらば之を啓け」と。七月、法皇崩ず。上皇、兵を起して白河殿に據る。左大臣藤原賴長謀主となりて、四に兵を募る。京畿大に擾る。得子、乃筐を啓けば、則、武臣十人の名を書せり、義朝之が首たり。卽、義朝を召す。義朝、乃兵を率ゐて族の賴政等と俱に高松殿を衞る。賴政は賴光五世の孫也。安藝守平淸盛も亦召に應じ入りて衞る。是に於て、上皇使者をして爲義を召さしむ。爲義辭して曰く、「臣老羸、復、平昔に非ず。長子義朝勇にして衆あり。而れども旣に禁內に赴けり。餘子は獨爲朝ゐる可し。君請ふ、之を用ゐ給へ。臣を以て爲す毋れ。且、臣、家に傳へし所の八甲、風の漂はす所となるを夢む。臣、心に之を惡む。往くも必利あらじ」と。使者之を强ふ。爲義已を得ずして、諸子を率ゐて之に赴く、上皇喜び以て判官代と爲し、邑及び寶劍を賜ひ、四子賴賢を以て藏人と爲す。因りて會して戰を議す。

爲朝進みて曰く、「臣、大戰二十たび、小戰二百たび、以て九國を芟鋤せり。少を以て衆を擊つは、每に夜攻に利あり。臣、請ふ、今夜、高松殿を襲ひ、其三方に火して、これを一面に要せん。其善く戰ふ者は獨、臣の兄義朝あり。然れども臣一矢もて之を斃さん。平淸盛の如きに至りては、臣の鎧袖一觸せば、皆、自、倒れんのみ。則、乘輿必出でざるを得ず。臣乃矢を其從兵に加へ、輿を此に徙して、陛下を彼に奉ぜんこと、易きこと掌を反すが如し。則、東方未だ白まざるに、大事集らん」と。賴長曰く、「爲朝、年少くして氣を負ふ。言ふ所は皆鄙人私鬪の事なり。安ぞ之を帝王の戰に施す可けんや。兩帝、國を爭ひたまふ。當に堂々の陣を用ゐるべし。南都の僧兵、召に應じて且に至らんとす。軍を成して以て戰ふも、未だ晩しと爲さざるなり」と。爲朝退き、竊に罵りて曰く、「唉、長袖の者、惡ぞ兵を知らんや。家兄謀あり。將に我が爲さんと欲する所に出でんとす。僧兵寧ぞ須つ可けんや」と。

爲義亦議を上る

義朝

（爲朝肖像）

【曾祖祖父】賴義、義家、

鎭西八郎にて可なり

爲義、又策を進めて曰く、「本宮は垣溝單淺にして、地の據る可きなし。寡兵を以て此を保つは、計に非ざるなり。陛下宜しく南都に幸し、宇治橋を撤して以て守るべし。卽し利あらずば、關東に幸せよ。臣、家人を糾合して、輿を奉じて闕に復せん。臣、之を籌るに難からず」と。賴長聽さず。爲義退きて曰く、「吾れ死所を知ら ず」と。其六子、賴賢、賴仲、爲宗、爲成、爲朝、爲仲と、八甲を分ちて之を擐き、一を義朝に送る。爲朝軀幹大にして、服る可からず。乃、他の甲を服し、獨二十八人を以て西門を守る。餘子、盡く父に從ひ、百騎を以て南西の門を守る。平忠政等の諸將は、兵數百を以て、分れて諸門を守る。義朝、禁內に在り、關白藤原忠通以下、衆議して決せず。義朝數之を趣す。詔あり、義朝を階下に召して、計を問ふ。對へて曰く、「勝を一舉に取るは、夜攻に若くはなし。臣聞く、『南郊の兵千餘、上皇の徵に應じて已に宇治に次す』と。宜しく其未だ至らざるに及びて之を擊つべし」と。詔あり、「戰勝たば昇殿を聽さん」と。義朝對へて曰く、「武臣之に從ふ。戰に赴く、生きて還るを期せず。臣請ふ、賜を拜して死なん」と。衣を攝げて昇る。藤原通憲奏して曰く、「彼の曾祖、祖父嘗て昇殿を聽さる。而れども父は則未だし。子を以て父に先ずるは若何」と。詔して曰く、「問ふ勿れ」と。義朝感喜す。營に還るとき、鞭を車傍に繫げて曰く、「我卽し戰死せば、誰か我が昇殿を得たるを知らん。此れ之を識すなり」と。乃選兵四百を以て、白河殿を襲ふ。平淸盛も亦これに赴く。兵凡數千人なり。

上皇の諜者還り報ず。爲朝哂ひて曰く、「固より當に然るべきのみ」と。賴長、爲朝が用を爲さゞりしを恐れ、遽に拜して藏人と爲す。爲朝曰く、「吾れ何ぞ藏人を用ゐることを爲さん。吾れ鎭西八郎にて可なり」と。辭して拜せず。將に戰はんとす。諸子先を爭ひて決せず。爲朝曰く、「戰に臨みて何ぞ兄弟を論ぜん。然れども吾れ嚮に不遜を以て罪を獲たり。故に先ぜんと欲すれども敢てせず。唯、敵の勁くして當り難き處、

清盛西門に向ふ

輙我に命ぜよ」と。賴賢、賴仲、邀へて義朝を擊ちて、敗れ退く。義朝隨ひて之を攻む。平清盛西門を攻む。其將伊東景綱、二子伊東五、伊東六と先づ進む。爲朝、之を射て、五の胸を洞き、六の袖に著く。清盛慴懼して退く。獨、其騎山田伊行返り戰ふ。爲朝又射て之を斃す。馬逸して義朝の陣に入る。鏃、鞍を穿つ。大さ巨鑿の如し。部將鎌田政家、取りて之を献じて曰く、「八郎君の爲す所なり」と。義朝曰く、「彼れ弱齡、未だ當に此に至るべからず。詐り設けて以て敵を怖すのみ。汝之を嘗試よ」と。政家、自、呼びて進む。爲朝曰く、「爾は吾が家人に非ずや」と。對へて曰く、「昔は主君たり。今日は兇徒たり」と。射て其冑に中つ。爲朝大に怒りて、二十八騎と門を闘きて突出す。政家辟易して退き走る。義朝、二百騎を以て之に馳す。呼びて曰く、「吾れ宣旨を奉じて來る。汝盍ぞ速に降らざる。乃、弓を其兄に彎くや」と。爲朝曰く、「判官公、院宣を受けて、爲朝等をして拒戰せしむ。旦弓を其兄に彎くと、又義朝、馬を莊嚴院の門に立つ。爲朝、之を望見して箭を注く。既にして之を舍てゝ曰く、「父此に在り、兄彼れに在り、焉ぞ其潛約する所ありて、勝敗互に相救護せざるを知らんや」と。乃、嗚鏑を注け、顧て家季に謂て曰く、「吾れ且其魄を褫はん」と。家季曰く、「誤るなきを得んや」と。爲朝曰く、「第、吾が爲す所を觀よ」と。乃、射て冑臍を穿ち

（保元亂圖）

爲朝、義朝と爭ふ

【判官公】爲義

て、門扇を貫く。義朝大に驚き、乃、呼びて曰く、「八郎、射未だ精しと爲さず」と。爲朝曰く、「敢てせざる耳、卽し許さるれば甲の鬲、冑の額、唯阿兄の命ずる所のまゝ」と。乃、大箭を注く。深巢清國、進みて義朝を蔽ふ。弦に應じて倒る。義朝の兵、死傷最衆し。爲朝も亦二十三騎を喪ひ、猶固く守る。爲義、賴賢等また善く拒ぐ。

白河殿陷る

【如意山】京都の東

【蓑浦】近江

天、漸明く。義朝、使を馳せ、奏して火攻を用ゐんと請ふ。之を聽す。乃、火を上風に縱つ。烟焰宮を蔽ふ。宮中大に亂る。義朝等鼓譟して、終に之を陷る。上皇出でゝ奔り、如意山に入る。爲義以下悉く之に從ふ。上皇親諭して之を散遣す。皆泣を揮ひて散ず。爲義、將に東國に遁れんとすれども、病みて行く能はず。蓑浦に抵る。追兵來り薄る。諸子力戰して之を卻く。士卒盡くるに垂とす。乃、髮を削り、義朝に因りて降を請はんと欲す。爲朝、諫めて曰く、「上皇は、帝の同母兄なり。而して左府は關白の親弟たり。聞く、『上皇已に讃岐に遷り、左府も亦死せり』と。骨肉の恃む可からざる此の如し。大人盍ぞ鑑みざる。東國に赴き、其豪族に倚るに若かず。官軍卽し來らば、兒爲に力を竭さん。力盡きて後に死するは、亦可ならずや」と。聽かず。遂に出でゝ降る。初め清盛、敕を奉じて爲義を索むれ共得ず。會平忠政出でて降る。其叔父なり。素より與に隙あり。則、斬りて之を献じて、以て義朝を搖かす。詔あり、義朝をして爲義を斬らしむ。義朝數〻己れが戰功を以て其命を贖はんことを請ふ。帝怒りて曰く、「清盛よく叔父を誅しぬ。義朝獨り父を誅する能はざるか。果して能はずんば、將に清盛に命じて之を斬らしめん」と。義朝憂懼して出づる所を知らず。之を鎌田政家に謀る。政家對へて曰く、「此れ臣が敢て議する所に非ず。然れども既に國讎たり。竟に誅を免れじ。其人に死せんより、寧子に死せん」と。義朝、意決し、政家をして誘ひて之を殺さしめ、自ら其首を奉じて闕に詣る。賴賢以下五人皆誅に伏す。猶四弟あり。乙若、龜若、鶴若、天王と曰ふ。皆幼し。義朝、詔を以て人を遣し之を殺さしむ。鶴若、使者に謂て曰く、「抗闘する者は死に當らん。吾儕、何ぞ科を同くせん。恐らくは、汝謬り聞けるならん」と。

爲義殺きる

爲義の幼子

【下野守】義朝

龜若曰く、「家兄誤れり。吾輩をして存在せしめば、數百の士卒よりも多らん」と。乙若、諸弟を諭して曰く、「汝が輩復言ふ勿れ。下野守既に父に忍ぶ。何ぞ弟に有らんや。是れ他なし。清盛の計中に陷りて、自ら其羽翼を鐵げるのみ。事已に此に至る。生きて猶辱を蒙らんよりは、速に死して、以て父に地下に從ふに若かず」と。首を聯て刄を受く。

爲朝

爲朝、輪田に匿れ、將に鎭西に奔らんとす。平氏の將平家貞、之を要すと聞きて果さず。適疾ありて、民家に浴す。或人其身材魁偉なるを視て、之を官に告ぐ。官、兵を遣して之を圍む。爲朝、裸體にて柱を抉し、數人を擊殺して縛に就き、闕庭に至る。特に死一等を減じ、其臂筋を拔きて大島に流す。爲朝筋力減ずと雖も、箭を用ゐるは長きを加ふ。曰く、「天子我に大島を賜ふ」と。遂に傍の五島を併有す。舊臣稍々來り附く。

大島に流す

後數年、狩野介に敕してこれを攻めしむ。爲朝射て其一艦を沒し、自ら逃れて琉球に入ると云ふ。義朝の捷つや、賞して右馬權頭とす。義朝奏して曰く、「是れ先臣滿仲が拜せし所、然して彼れは左、此れは右、且、權と曰ふ。臣未だ其榮を知らざるなり」と。是に於て、陞せて左馬頭とす。而して資望終に平氏に及ばず。

義朝と藤原通憲と不和

平氏素より少納言藤原通憲と善し。通憲、帝の乳母の子なるを以て、貴幸せられて事を用ゐる。義朝、女を以て其婦と爲さんと欲す。通憲、義朝を鄙み、之を卻けて曰く、「我が子は學生、子の女の偶に非ず」と。乃清盛と婚す。

二條天皇

帝既に位を二條帝に禪り、而して猶政を聽く。嬖人藤原信頼、通憲と惡し。則、寢、義朝を引きて自援け、說くに甘言を以てす。義朝、深く之に結ぶ。

藤原信頼

平治元年

平治の亂

平治元年十二月、清盛熊野に如く。信頼、乃、義朝に謂て曰く、「通憲、寵を恃みて、自專にし、陰に清盛と、子の家を剪除せんと謀る。彼の專横なる、上皇と雖も、亦之を厭ふ。吾れ事を發し、讒人を誅夷せんと欲す。子何ぞ相助けざる」と。義朝曰く、「吾れ殊功を建てゝ、而も父の命を贖ふ能はず。親屬摧頽す。清盛、此時に乘じて以て我を陷擠せんと欲す。我れ之を知らざるに非ず。公、此舉有り。敢て力を效さざらんや」と。信頼大に喜び、贈るに鎧伏名馬を以てす。義朝、又之をして賴政を招かしむ。是に於て、義朝、五百騎を以て、夜、三條殿を圍み、之を焚き、又通憲の第を焚く。通憲遁逃す。追ひ獲て之を斬る。信頼、帝及び上皇を挾み、大內に據る。義朝の第三子を賴朝と曰ひ、鬼武者と稱す。時に年十三、右兵衞佐たり。進みて義朝に謂て曰く、「清盛等、將に還らんとすと聞く。盍ぞ逆へ擊たざる。乃、坐ながら之を待たんや」と。賴朝の長兄義平、鎌倉に在り。嘗て其叔父義賢と隙あり。大藏に戰ひて之を斬る。人呼びて惡源太と曰ふ。是に於て、變を聞き、晨夜馳せ至る。信頼之に授くるに官を以てせんと欲す。義平辭して曰く、「曩に叔父八郎は藏人を辭して拜せず。緩急を知るなり。吾れも亦姑く惡源太の號を用ゐて可なり。平氏將に還らんとするを聞くが如し。願くは吾れに一隊の兵を借せ。吾れ之を阿部野に要し、清盛以下の首を梟して、然る後命を拜せんのみ」と。信頼聽さず。

惡源太義平【大藏】武藏

清盛京に歸る

已にして清盛京師に入る。帝、上皇皆夜に乘じて逃れ出でゝ、平氏の第に入る。殺傷する所甚衆し。通憲覺り、意大に沮喪す。義朝、其兵を檢するに、稍散じ亡せて、餘す所二千騎あり。乃、分ちて諸宮門を守る。賴朝に授くるに傳家の寶刀鬚截を以てし、携へて以て軍に臨ましむ。信頼、騎に習はず。騎して墜つ。左右之を扶けて、待賢門を守る。平重盛來り攻む。信頼、守を捨てゝ走る。重盛、五百騎を以て門を破りて入る。義朝望み見て、咄嗟して曰く、「豎子吾が事を敗れり」と。義平を呼びて拒ぎ鬪はしむ。義平、乃、鎌田政家、三浦義澄、平廣常、平山季重、熊谷直實等十六騎と、馬を躍らせて出づ。其騎に指視して曰く、「赤甲にして黃馬なるは、重盛なり。宜しく之を生擒すべし」と。進みて大庭に戰ふ。騎、皆目を重盛に注ぐ。之を追ひて七匝す。重盛走り出でゝ、生兵を以て入る。義平、復、擊ちて之を走らす。義朝、使を馳せ、義平を讓めて曰く、「若何ぞ善く拒がずして、敵をして數入らしむるや」と。義平乃出でゝ、大宮巷に至り、直に平氏の陣を衝く。陣潰え亂る。重盛兩騎と走る。義平之を追ふ。及ぶに垂として馬跌く。重盛墜を踰ゆ。政家之を射る甲堅くして入らず。義平曰く、「馬を射よ」と。馬を射る。重盛墜つ。追ひて之に及ぶ。

待賢門戰【豎子】信頼を指す

重盛と義平

郁芳門の戰

其兩騎遮り鬪ひて死す。重盛、僅に身を以て免る。義平、義朝を慮り還りて之を援く。則、義朝方に平清盛と、郁芳門に戰ひて大に之を破る。頼朝射て二人を斃し、一人を傷く。義平至り、父に代りて進み戰ふ。平氏の軍悉く敗れ走り、退きて六波羅の第を保つ。我軍北ぐるを追ふ。信頼從ひて出でて、半途にして逃れ走る。平氏の兵、虛に乘じて大内に入る。義朝直に進みて、六波羅を攻む。頼政、獨、六條磧に陣す。義平、其貳心有るを察し、五十騎を以てこれを突く。頼政、走りて清盛に歸す。清盛、我軍の至るを聞き、大に怖れて措く所を失ひ、倒に冑を蒙る。從者これを言ふ。清盛曰く、「帝後に在り。背く可らざるなり」と。乃、門を關して固く守る。義平力戰し、門を排して入る。敵、兵を分ちて更戰ふ。我が兵、旦より晡に至るまで十餘合す。刀折れ、矢盡き、人馬皆傷く。義朝親決戰せんと欲す。政家馬を控へて諫めて曰く、「衆寡勞逸、較せざること明けし。且、東國に走りて、以て後圖を爲せ。身を徒卒に殞して、以て家聲を辱むるに孰與ぞ」と。義朝乃兵を收めて、退きて三條磧に至る。敵兵來り薄る。平賀義信、佐々木秀義、首藤俊通等救ひ戰ふ。俊通之に死す。義信は、義光の孫なり。

政家義朝を諫む

義朝敗走

義朝、間を得て、三十騎と東に走る。山門の僧徒、其敗れたるを聞くや、三百人を以て路に要す。義朝之を患ふ。武藤の人齋藤實盛、冑を免ぎて僧徒に謂て曰く、「左馬既に死せり。我輩は新募の兵にして、將に鄕に歸らんとするのみ。公等我が鎧仗を褫んと欲するならん。敢て愛まざる所なり。顧ふに、子は衆にして、我は寡なり。周く給すること能はず。請ふ、之を抛擲せん。公等自取れ」と。乃、其冑を投ず。僧相蹂踐し、之を奪ひて之を爭ふ。三十騎因りて驅突して過ぐ。八瀨に至り、顧みて信頼の來るを見る。義朝を呼びて曰く、「子何ぞ我を棄つ」と。義朝罵りて曰く、「豎子は首謀にして乃先づ走る。何の面ありて來りて我を見るや」と。鞭を擧げて其面を撲ち、之を棄てゝ去る。龍華に至り、又僧徒の路を要するに遇ふ。皆馬より下り柵を破りて過ぐ。叔祖義隆矢に中りて死す。子の朝長股を射られ、箭を抜きて復戰ふ。義朝怒り、力戰して之を走らす。堅田に至り、義隆の首を見る。泣きて其騎に語りて曰く、「八幡公の遺體は、獨此人に見る。而れども此に至る」と。首を湖水に沈め、將に渡らんとす。風濤の起るに會ひ、路を勢田に取る。乃、實盛等二十餘人を諭して散じ去らしむ。獨義平、朝長、頼朝、義信、政家、及び源重成、豎金王之に從ふ。頼朝騎す。睡りて後れ、夜、森山の驛を過ぐ。土兵聚り、且に之を捕へんとす。頼朝乃覺め、刀を抜きて二人を斬る。義朝、頼朝の在らざるを怪み、政家をして返り索めしむ。之を獲たり。鏡驛に至り、平氏不破關を拒ぐと聞き、乃間道より東に出づ。大雪に會ひ、馬前む能はず。甲を釋きて步行す。復、頼朝と相失ふ。青墓驛に至る。義朝、嘗て驛長の女延壽を嬖し、一女を生めり。是に於て、其家に投ず。乃義平、朝長を分遣し、兵を美濃、飛驒に募る。朝長創劇しくして、途より還る。義朝曰く、「頼朝、幼と雖も、汝の怯なるが如くならず」と。之を留めて去らんと欲す。朝長父に請ひて、己を殺し、追兵に獲はるゝ所と爲る勿らしむ。義朝乃之を刃す。土兵、義朝在るを聞きて、群聚して之を圍む。重成詐りて義朝と稱し、十餘人を射殺して、面を剝ぎて自殺す。義朝乃走る。

又義信を遣して兵を募る。義信曰く、「公安に適かんと欲す」と。忠致曰く、「不可なり。彼の性勢に趨る。恐らくは公に利あらじ」と。忠致は、政家の妻の父なり。義信曰く、「聽かずして訣る。道塞りて達せず。大俠玄光といふ者は、延壽の母の兄なるを聞き、金王を遣し、就きて謀る。玄光乃、義朝、政家を航載し、柴もて之を覆ひ、株瀨河より内海に如く。津吏覺り、呵して之を止む。玄光聞かざる爲して過ぐ。吏追ひて之を射る。玄光、舟を回して岸に至る。吏、船に入り、柴を發きて之を索む。玄光曰く、「義朝敗ると雖、亦二三十騎を從へん。安ぞ吾が儕に依りて活を求めんや。假使在ると も、必自殺せんのみ。安ぞ子等の手に落ちんや」と。義朝、政家に耳語して曰く、「玄光、我れを諷して自殺せしめんとするなり。如何せん」と。政家曰く、「且く之を待て」と。更も亦究めずして去る。明日、内海に達す。忠致厚く之を待つ。義朝亟に東に去らんと欲す。時、除夜に屬す。忠致固く之を止む。止ること三日。

【義隆】義家の第六子
【堅田】近江
【森山】近江
【不破】美濃
【青墓驛】美濃
朝長

義朝鞭を擧げて信頼を撲つ
【龍華】近江
義隆戰死

義朝内海に入る
【内海】尾張

義朝、政家殺さる

忠致の子景致、密に其父に勸めて、義朝を殺さしむ。忠致之に從ふ。乃、力士三人を浴室に伏せて、浴を進む。金王刀を操りて浴に侍す。力士敢て發せず。義朝浴衣を求む。至らず。金王自出でゝ之を取る。力士乃入る。義朝、赤手一人を縛ち仆す。其二人偶刺して之を殺す。金王、浴室譁きを聞きて、則返り、輙三人を斬る。政家方に忠致と飲む。變を聞きて且に起たんとす。酒を行る者刀を拔く。政家其刀を奪ひて之を斬る。景致後より政家を斬る。忠致の女にて、政家に嫁せる者、政家の刀に伏して死す。金王、玄光、忠致父子に報ぜんと欲すれども獲ず。數十人を殺し、馬を取りて逃れ去る。忠致乃義朝及び政家の首を平氏に獻ず。義朝、政家、年並に三十八。信賴以下、皆誅に伏す。義平、飛驒に在り。來り屬する者甚衆し。義朝の死せるを聞きて皆散ず。義平、自盡せんと欲すれども、當に父の仇を報じて死すべきを念ひ、乃變じて京師に入る。適舊臣志内景澄に値ふ。因りて僞りて其僕と爲り、平氏の第に出入し、三條烏丸に舍す。舍の主人、僕の舉止凡に非ざるを視、又主僕每に隱處に食するを怪みて、竊に之を窺へば、則饌を易へて食ふなり。乃走りて平氏に告ぐ。平氏、難波經房をして三百騎を以て之を圍ましむ。義平、刀を拔き出でゝ、數人を斬り、躍りて屋に昇り往く所を知らず。經房、乃景澄を執へて去る。義平、晝伏し、夜行き、以て平氏を伺ふ。東近江の舊人に倚らんと欲し、行きて逢坂に至る。經房、關神の祠に詣で、途に義平の困臥するを見て、五十騎を以てこれを圍む。義平蹶起す。箭其臂に中る。刀を揮ふ可からず。終に縛せられて、六波羅に至る。之を堂の緣に坐せしむ。怒りて曰く、「吾れ何ぞ此に坐せん」と。自ら起ちて堂に入る。清盛出でゝ見る。之に謂て曰く、「三百騎に脫し、五十騎に獲へらる。何ぞ嚮に勇にして怯なる」と。義平笑ひて曰く、「命なるのみ。子の命も窮らば、亦此に至らん。吾れは子の大患たり。宜しく速に殺さるべし」と。乃、六條磧に斬る。義平刑に臨み、首を仰げて平氏の第を睨みて曰く、「保元の亂、斬に處する者は夜を以てせり。今乃白日に我を斬る。平賊何ぞ無狀なるや。嚮に我が言をして行はれしめば、奴輩、遺類無からん」と。遂に斬らる。時に年二十。

義平

義平、平氏を伺ふ【逢坂】近江

義平殺さる

賴朝

賴朝、父兄と相失ふや、夜、迷ひて路を失ひ、小平山に出づ。漁人あり、其常人に非ざるを知りて、之を舍し、裝ひて女子と爲して、薦に其刀を包み、自之を肩にして、送りて靑墓驛の延壽が家に至る。賴朝、鬚截刀を延壽に托して、去りて關東に之く。平氏の將平宗淸に遇ひて虜へられ、還りて延壽の門を過ぐ。義朝生める所の女、年十二なり。之を聞き、泣きて曰く、「我れ他日辱を受けんよりは、寧今阿兄に從ひて死なん」と。將に走り出でんとす。衆これを止む。後、獨、水に赴きて死す。賴朝既に六波羅に至る。斬に就くに日あり。宗淸之に謂て曰く、「活を欲するや」と。曰く、「然り。父兄皆亡ぶ。吾に非ずして誰か其冥福を祈らん」と。宗淸、淸盛の繼母池尼に詣る。尼從容として問ひて曰く、「賴朝如何」と。對へて曰く、「右馬君に肖たり」と。右馬とは蓋し尼の子の蚤死せる者なり。尼之を悲み、爲に淸盛に乞ふこと再三なり。乃、死を宥さるゝを得たり。蛭島に流さる。道傍に觀る者、其威容あるを見て、相語りて曰く、「是れ猶虎を野に放つが如きのみ」と。舊臣皆其髮を削らんことを勸む。獨秩父盛安、其耳に附きて、語りて曰く、「郎君宜しく髮を存して、以て前途を待つべし」と。賴朝首肯して去る。

賴朝、父兄と相失ふ

義朝の女死す

池尼

賴朝を蛭島に流す

【蛭島】伊豆

賴朝六弟あり。義門は蚤く死せり。希義は駿河に居り、虜へられて土佐に流さる。範賴は、藤原範秀に養はれて、蒲冠者と稱せり。平氏問はざるなり。今若、乙若、牛若、三兄皆婢常盤の出なり。並に母に從ひて龍門の里に匿る。平氏之を索むれども獲ず。因りて常盤の母を捕ふ。常盤乃自ら至る。淸盛、其色を悅びて、密に之を挑めども、肯ぜず。其母涕泣して、說くに禍福を以てす。已むを得ずして之に從ふ。淸盛、乃三兄を釋し、盡く僧と爲す。今若、名を全成と改め、醍醐に居る。乙若名を義圓と更め圓慧法親王に事ふ。牛若甫めて二歲、鞍馬山寺に居り、遮那王と稱す。未だ髮を削らざるなり。平氏の勢威、歲に熾に月に盛なり。

常盤

【龍門の里】大和

【醍醐】京都の東

【圓慧法親王】大津圓滿院主

【鞍馬山寺】京都の北

賴朝、配所に在りて、其乳母比企禪尼、常に之に餽遺するを以て、纔に乏しからざるを得たり。伊豆の人伊

東祐親、北條時政、平氏の令を奉じて之を監視す。關東の舊臣齋藤實盛、大庭景親、畠山重能以下、皆叛きて平氏に事ふ。其意を頼朝に屬せし者も、亦敢て來り通ぜず。獨、佐々木秀義、近江より來りて相模に寓し、澁谷重國に倚り、其子定綱等をして、數頼朝を問はしむ。安達盛長、加藤景廉等の數人も、往來して給仕す。頼朝、深沈にして大略あり。性堅忍にして、喜怒色に形れず。衆に畏愛せらる。中宮屬、三善康信は其故人なり。一月に三たび使をして、以て京師の動靜を報ぜしむ。

清盛、累遷して太政大臣に至る。其妻の姉、法皇に幸せられて、皇子を生む。遂に禪を受く。是を高倉帝とす。清總、女を納れて、立て〻中宮と爲す。是より先、常磐寵衰へ、出で〻人に嫁す。牛若年已に十一なり。嘗て諸家の系譜を見て、自其先世を知り、悵恨之を久くす。是に於て、晝は書を讀み、夜は劍搏を學ぶ。人と爲り、短小にして、精悍なり。面白く、齒出づ。甚趫捷なり。衆僧に患苦せらる。師、其髮を削らんことを勸む。對へて曰く、「二兄、僧と爲る、吾れ已に之を恥づ。復倣ふ可けんや」と。之を强ふれども竟に聽かず。」時に藤原清衡の孫秀衡、鎭守府將軍たり。牛若往きて之に倚らんと欲す。適鐵賈吉次といふ者あり、陸奥に往來す。其山に詣るに會ふ。牛若、乃陰に之に語るに情を以てす。吉次曰く、「事甚易し。然れども子を取りて去らば、恐らくは僧徒の怒に遭はん」と。牛若笑ひて曰く、「彼輩我れに苦しめり。我の去るは、其欲する所のみ」と。又下總の人深棲頼重の山に詣るに會ふ。牛若之と狎る。是に於て、三人與に偕に東し、鏡驛に至る。牛若乃自冠を加へ、名づけて義經と曰ひ、九郎と稱す。遂に下總に至り、居ること數月、適一の强盜ありて、馬を盜む。衆之を追ふ。盜樹に負る。衆敢て迫らず。義經、徒手にて之を捕ふ。又盜數十ありて劫を爲す。義經赴き救ひ、立に四人を斬る。頼重其勇に服す。而れども物議を憚て稍之を戒む。義經乃去りて、上野に徑き、伊勢の人義盛といふ者を得て、約して君臣と爲り、陸奥に至り、吉次に因りて、秀衡に通ず。秀衡善く之を遇す。義經之に金を請ひて、以て吉次に報ず。陸奥に在りて、又佐藤嗣信兄弟を得たり。時に承安四年なり。

高倉天皇
【人】大藏卿藤原長成を云ふ
牛若

【山】鞍馬山
牛若鞍馬山を出づ

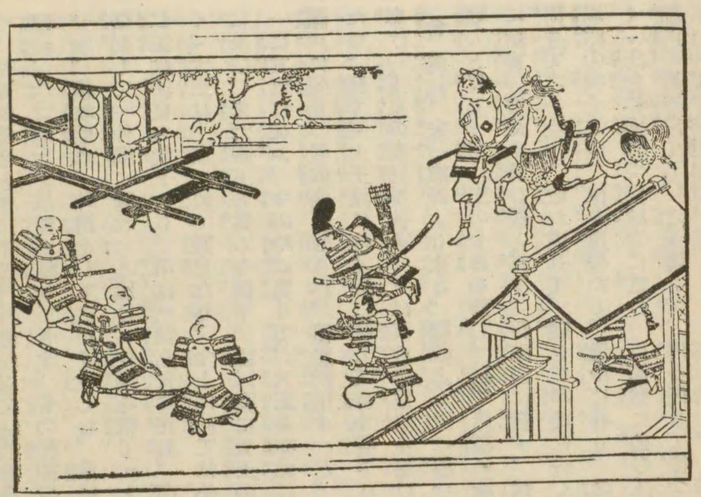
牛若元服

【義盛】伊勢三郎
【兄弟】兄三郎兵衛嗣信
弟四郎兵衛忠信
承安四年

頼政鵺を射る

治承元年

神輿振



（神輿振の圖）

【行綱】多田藏人
治承二年

是時に當りて、陸奥、出羽を除くの外は、盡く平氏の管する所に係り、所在の源氏、皆人に擯斥せらる。獨兵庫頭頼政は平治中、意を決して官軍に屬し、材藝多く、昇殿を聽さる。嘗て勅を奉じて怪禽を寢殿の上に射て之を獲たり。帝之を嘉賞す。後遂に從四位下に叙せらる。治承元年、比叡山の僧徒、神輿を擁して闕を犯す。諸武臣に詔して、之を拒がしむ。頼政、達智門を守る。僧兵來り攻む。頼政、冑を免ぎて下拜し、其裨將を遣し、之に言はしめて曰く、「頼政、山神を崇敬する、年あり。不幸にして勅を奉ず。敢て弓を關き神輿に向はず。昔源平氏並に朝廷を衞る。保元以降、平盛に、源衰ふ。況んや頼政の老憊を以て、寡兵敝甲、以て公等を迎ふるに足らず。左近衞大將平重盛、大兵を以て陽明門を守る。彼を避けて此を攻むるは、勇と謂ふ可からず。公等之を思へ。卽し許されずば、頼政、衆卒と與に、輿前に斃死せんのみ」と。僧兵乃陽明門に向ひて、敗れ還る。世稱す、「頼政、智辯を以て禍を免る」と。是の時、僧兵再舉せんと欲す。大納言藤原成親に勅して之を討たしむ。成親初め法皇の密旨を受けたりと稱し、陰に平氏を圖らんとして、事に託して兵を聚む。攝津源氏に行綱といふ者あり。其謀に與る。已にして衆寡敵せざるを悉く之を殺す。二年、清盛の女、皇子を生む。立て〻太子と爲

四年
安德天皇
【名馬】木下

す。明年、清盛、其次子宗盛をして兵を將ゐて法皇を徙し、之を鳥羽に幽せしむ。四年帝を廢して太子を立つ。是を安德帝とす。平氏、外祖を以て益專横なり。

賴政以仁王に說く

賴政、從三位と爲り、髮を削りて老す。子の仲綱伊豆守たり。名馬あり。宗盛數之を借らんと欲す。仲綱肯ぜず。賴政懼れ、仲綱をして之を許さしむ。宗盛借りて還さず。大に客を會して其馬を出し、仲綱の二字を烙記して「仲綱に騎れ」と曰ひ「仲綱を鞭て」と曰ふ。仲綱、父と言ひて之を憤る。賴政以仁王と善し。以仁王は法皇の次子なり。第は三條高倉に在り。高倉宮と稱す。賴政嘗て夜高倉に詣り、從容として說きて曰く「大王は上皇に於て庶兄たり。今上に於ては伯父たり。才德兼ね備はりて、天人交應す。齡既に壯なるに及び、未だ親王と爲るを得ず。臣、竊に大王の爲に之を羞づ。王も亦淸盛の爲す所を見るか。廢立生殺、一に其私に從ふ。今の時に當りて、大王も亦竟に終を保つ能はじ。平氏の權を專にしてより、諸州の源氏、編戸に列り、皆奴僕使せられ、憤怨欝積す」と。因りて指を屈して之を擧げ、賴朝、義經以下四十餘人を得たり。曰く「大王誠に能く義に仗りて罪を聲さば、此輩、皆檄を傳へて致す可きなり。王何ぞ速に大事を擧げ、上皇の幽厄を拔き、下は萬姓の塗炭を援けざるや」と。王意に悅び、終に之を聽す。

以仁王園城寺に入る

會源行家、熊野より來る。賴政之を王に薦む。行家は、故爲義の第十子なり。是歲五月、行家を拜して藏人と爲し、密に王の令旨を齎し、以て諸源に諭さしむ。賴朝嫡宗たるを以て、特に一通を賜ふ。行家又密に新宮の僧徒を誘ひ援と爲す。行家既に發す。僧徒相告げて語る。謀泄る。熊野の別當は、平氏の黨なり。聞きて之を攻む。敗れ還りて、馳せて平氏に告ぐ。平氏未だ事端を悉さゞるなり。兵を遣し王の宮を圍む。賴政の次子兼綱、檢非違使たり。遣中に在り、急に之を賴政に告ぐ。賴政卽使を王宮に馳せ、告げて曰く「王急に逃れて園城寺に之け。臣等將に追ひて赴かんとす」と。王の隷士長谷部信連、王に被らしむるに婦人の服を以てし、之を遣りて、門を開きて待つ。昧爽に、吏卒、門に入り、呼びて王を索む。信連大に罵り、十餘人を殺傷して執へらる。終に王の在る所を告げず。賴政其第を焚き、仲綱、兼綱等五十餘人を率る

行家

渡邊競
【三位】賴政
【駿馬】南錄

て、追ひて王の所に赴く。其舊臣渡邊競、平氏の第後に居たり。衆之を呼びて輿に偕にせんと欲す。賴政曰く「以て爲す毋れ。彼は呼ばずして來る者なり」と。已にして宗盛、賴政の奔るを聞き、人をして競を闕はしむ。在り。乃召して之を見て、問ひて曰く「三位逝けり。汝何を以て從はざる」と。競、伴り喜びて之に從ふ。因りて言ふ「新に報効を圖れ相聞知せざるなり」と。宗盛誘ふに厚祿を以てす。競、伴り答へて曰く「近頃三位と隙あり。故にども獨馬無きを患ふ」と。宗盛與ふるに愛する所の駿馬を以てす。競乃舍に歸り、結束して其馬に騎り、平氏の門を過ぎ、呼びて曰く「渡邊競は、源家の舊臣なり。何ぞ能く慮りを改めて仇敵に仕へんや。今將に赴きて三位を援けんとす。何ぞ要擊せざる」と。平氏敢て出づる者なし。遂に園城寺に至る。仲綱大に喜び、其馬の鬣尾を截り宗盛の二字を烙記し、夜、人をして驅りて之を平氏の第に入れしむ。馬、厩に入り、他馬と相齕齧す。一第驚騷す。宗盛慙恚恚す。

字治の戰

是に於て賴政、叡山、南都を招く。並に王を援く。因りて策を建てゝ曰く「今夜羸兵千を遣して、火を三條に縱ち、以て平氏の兵を誘ひ、且戰ひ且卻き、而して精騎數百を以て、遶りて六波羅を襲はゞ、必克を得ん」と。僧眞海、陰に平氏に附く。故に異議を發して之を沮む。天遂に明けたり。平氏も亦利を以て山徒に唱はす。山徒叛きて、賴政を攻めんと欲す。

賴政自殺す
以仁王殂す

賴政、宇治橋の板を撤し、之を拒ぐ。會曉霧あり。平氏の兵、橋架に緣りて來り戰ふ。騎を以て追ひ至る。賴政、南都に走る。王、騎を習はず。墜つること六たび。因りて平等院に息ふ。平知盛等二萬渡邊競等善く拒ぐ。殺傷過當なり。已にして敵、流を亂して大に至る。賴政流矢に中りて膝を傷く。兼綱も亦戰死す。賴政、乃王を奉じて、南都に走る。王、騎を習はず。墜つること六たび。因りて平等院に息ふ。平知盛等二萬入り、鎧を釋きて坐し、其騎に謂て曰く「吾れ已に七十七、天下の爲に義を倡ふ。以て死す可きなり」と。仲綱と與に皆自刄す。王、途にして追兵に獲はれて殂す。皆首を京師に傳ふ。

清盛、諸源己を圖ると聞き、法皇を幽すること益〻固し。六月、迫りて都を福原に徙し、帝を己が家に奉じ、三間の板屋を作り、以て法皇を囚す。遂に諸源を誅鋤せんと欲す。三善康信、書を飛して頼朝を戒め、早く備を爲さしむ。頼朝、初め伊藤祐親の家に倚る。事を以て相惡し。遂に頼朝を殺さんと欲す。祐親の子祐請密に之を頼朝に告ぐ。頼朝乃北條時政に倚る。時政、素より之を器とし、妻すに其女政子を以てす。

頼朝兵を擧ぐ

會〻以仁王の令旨至る。頼朝、大に喜び、陰に時政と兵を擧げんことを謀る。平兼隆は、平氏の疏屬なり。伊豆の目代と爲りて、八牧の寨に居る。頼朝、先づ之を擊たんと計り、竊に京人藤原邦通を遣し、兼隆と游び、其地形を圖し還らしむ。會大庭景親、京師より歸り、請盛の旨を以て頼朝を圖り、之を佐々木秀義に語る。秀義密に其子定綱をして、馳せて之を頼朝に告げしむ。頼朝已に康信の書を得、其信に然るを知る。乃先づ發せんと欲す。因りて定綱に語るに、大事を擧げんと爲る所を以てす。曰く、「吾れ首に目代を擊ちて、以て成否を卜せんと欲す。子宜しく此に留りて、諸弟を招致すべし」と。定綱、還りて鎧仗を取り、與に俱に來らんと請ひ、乃去る。之を久しくして至らず。頼朝、其意變ずるかを疑ひ、之を語りたるを悔ゆ。已にして定綱、三弟經高、盛綱、高綱を率ゐて至る。甲冑敝惡にして、羸馬繩轡なり。頼朝之を目て、慘然として泣下る。是に於て、頼朝、時政等八十騎をして八牧を攻めしめ、圖を出して、其嚮ふ所を指授す。盛綱及び加藤景廉を留めて自衛る。時に八月十七日なり。時政、昏を待ちて發す。頼朝、時政を呼び之を還して曰く、「吾れ何を以て勝敗を知らん」と。對へて曰く、「勝たば卽ち火を擧げん。苟も敗るれば使を馳せて之を報ぜん。君自計を爲せ」と。乃、往く。

平兼隆

八牧の戰

加藤景廉

敵の饒將堤信遠、別に寨北に居る。佐々木氏を遣して之を攻めしむ。經高前門より入り、之を射る。信遠寇あるを知りて亦射る。刀を揮ひて出づ。時に月已に出づ。經高之を覩て、弓を舍てゝ刄を交ふ。定綱、高綱、繼ぎて至る。遂に信遠を斬り、亦八牧に赴く。頼朝、人をして樹に升り、火を望ましむ。火擧らず。景廉を顧みて赴き援けしむ。授くるに薙刀を以てす。曰く、「我が爲に兼隆を斬れ」と。景廉、僕の洲崎三郎と俱に八牧に赴けば、則戰方に酣なり。寨堅くして拔けず。景廉進みて塹に迫り、楯數枚を合せ、綴る弓弦を以てし、諸を塹に投じて以て渡り、壘を踰えて入る。敵に善く射る者關屋八郎あり。檜上より呼びて曰く、「吾が箭一のみ。誰か之に當る者ぞと。三郎伴り景廉と稱して進み、箭に當りて死す。景廉進みて八郎を擊殺し、遂に入る。又一人を殺し、寢に及ぶ。寢の戸闢く。戸內に燭あり。乃冑を脫し、薙刀に冒せ、刀を伸べて戸に入れ、人の戸を窺ふ狀の如くす。兼隆戸側に在り。敵人入ると謂ひて、之を擊つ。景廉刀を揮ひて兼隆を斬り、燭火を用ゐて、屛障に傳けて以て出づ。頼朝火の擧るを望みて、則大に喜ぶ。已にして時政等凱旋す。景廉、兼隆の首を提げて、頼朝に視して曰く、「公天下を定むる、此を以て卜す可きなり」と。兼隆の族知親、蒲屋の邑吏たり。民の患ふる所たり。頼朝、自令旨を受け、關東に宰たりと稱して、因りて知親を罷む。民大に悅ぶ。

安達盛長八州を歷說す

伊豆の人、狩野茂光、相模の人土肥實平等、稍來り集る。土肥の里に會して事を計る。是に於て、安達盛長をして令旨を傳へ、八州の豪傑を歷說せしむ。先づ大庭景親に抵る。景親、素より平氏に厚く遇せらるゝが爲に聽かず。兄の景能これに謂て曰く、「汝は恩の爲にす。吾れは義の爲にす」と。乃來り歸す。次に首藤經俊に抵る。經俊之を嘲り笑ひて曰く、「流人を以て平氏を圖る。猶鼠の猫を圖るが如きのみ」と。乃去りて三浦義明に抵る。義明使者の至るを聞き、病を扶けて出で諸兒孫を召して曰く、「吾が家世、源氏に仕ふ。吾れ今餘喘未だ絕えずして、此の擧に遭ふを得たり。汝等之を勉よ。事克たば家を興さん。克たざれば義に死せん」と。盛長を禮して之を遣る。遂に千葉常胤に抵る。常胤遲疑す。其子胤正諫む。常胤乃意を決す。因りて策を進めて曰く、「鎌倉は地形險固にして、源家の故なり。公宜しく先づ之に據るべし。臣も亦將に赴かんとす」と。盛長、終に平廣常に抵る。廣常、心兩端を持し、依違として之に應ふ。盛長乃還る。而して常胤、義明等未だ至らず。二十三日、頼朝三百騎を以て、石橋山に軍す。明日、大庭景親、首藤經俊、三千騎を以て來り攻む。日且に

千葉介頼朝に鎌倉の據るべき地なるを說く

石橋山戰大庭景親

暮れんとするに會ふ。或は明日を待ちて戰はんと議す。景親、三浦の黨の未だ至らざるに及びて戰はんと欲するや、進みて戰を挑み、自ら名のりて曰く、「我は鎌倉景政の裔なり。亂を倡ふる者は何人ぞ」と。頼朝、人をして對へしめて曰く、「我が君は、八幡公四世の孫なり。王命を奉じて無道を誅す。東國の士族、誰か君が家人に非ざる。汝、獨、乃祖の八幡公に陸奥に從ひしを記せざるか。乃、義に背き、利に嚮ひ、以て家聲を蠖すや」と。景親語塞る。乃、弟景尚と先づ進む。頼朝、岡崎義實を召して問ふ、「孰れか彼の兄弟に當る者ぞ」と。義實は、乃三浦義明の弟にして、伊豆に居りし者なり。是に於て、其子義忠を薦む。義忠、命を受けて退き、僕家安を召して曰く、「我れ佐公の爲に死せんと欲す。汝身を全うして歸りて、之を我が妻子に語げよ」と。家安、歸るを肯せず。曰く、「郎君年二十にして、乃能く佐公の爲に死す。臣年六十、焉ぞ郎君の爲に死せざらんや」と。乃從ひて進む。義忠、景尚に遇ひ、搏ちて之を伏せ、從者を呼ぶ。從者未だ屬せず。而して敵人長尾爲宗、來りて景尚を援く。時に夜黑く大に雨ふり、咫尺を辨ぜず。義忠曰く、「上なる者は景尚なり」と。景尚曰く、「上なる者は義忠なり」と。爲宗進みて其鎧を摹す。義忠足を揚げて之を蹴る。急に刀を拔きて景尚を刺さんとす。刀、室を脫せず。爲宗の弟定景も亦來る。義忠終に殺さる。家安も之に死す。明くる比、我が兵遂に大に敗れ、走りて杉山に入る。敵兵群り追ふ。頼朝、殿して親射る。敵弦に應じて倒る。景廉、馬を扣へて諫止し、自、佐々木高綱、天野遠景等と留り戰ふ。高綱の弟義淸は、景親の妹を娶りて、追騎の中に在り。高綱呼びて曰く、「汝一婦人の故を以て、君に背き親に離る。何ぞ恥無きの甚しき」と。因りて奮鬪して、數敵兵を卻く。頼朝、間を得て獨土肥實平と險を冒して逃れ去る。狩野茂光、老いて大にして歩に艱む。子の親光をして己れを舍てゝ頼朝に從はしめ、乃、自殺す。親光、時政、景廉、高綱等の六人と俱に頼朝を踪す。其僵樹の上に立てるを見て、生死之を以にせんと請ふ。實平曰く、「人多ければ則顯はる。宜しく之を散じ去るべし」と。頼朝、乃、時政を遣し甲斐に赴き、其諸源を發せしむ。其餘は皆後會を期し、之を散ぜしむ。景親大に山谷に索む。

【乃祖】景政

景尚

義忠

杉山に匿る

其族梶原景時、頼朝の匿るゝ處を知る。故に之を他に導く。景時も亦頼朝自殺すと聞き、使を馳せて之を京師に告ぐ。頼朝既に免れ、杉山を出でゝ筥根山に匿る。

初め三浦義明、子義澄、義連、庶孫義盛等を遣し、三百騎を以て、頼朝と石橋山に會せり。酒匂に至り、頼朝敗死すと聞きて、乃還る。畠山重忠と小坪に戰ひ、之に克ちて歸りて、衣笠城を守る。重忠、三千騎を以て之を攻む。義明、年八十九、疾を力めて馬に上り、親戰はんと欲す。義澄等之を止め、出でゝ戰へども克たず。城竟に陷る。義明、義澄等に謂て曰く、「佐公、勇略あり。一敗して死するものに非ず。汝が輩宜しく索めて之に從ふべし。吾れ耄いたり。行く能はず。當に止りて此に死すべし。吾れ耄耋、死すとも惜むに足らず。獨り佐公の成業を目せざるを憾むのみ」と。義澄等、固く扶け行かんことを請へども聽さず。逡巡する間、遂に敵兵に獲はれて死す。義澄等、海に航して安房に走り、頼朝を索む。頼朝の筥根山に匿るゝや、僧家に投ず。僧の弟、嘗て平兼隆に善し。爲に仇を復せんと欲す。乃逃れ出でゝ山に循ひて土肥に走り、眞鶴崎より舟に上り、安房に赴く。獨、土肥實平、岡崎義實之に從ふ。是の時に當りて、海陸皆敵なり。二人心を盡して防護す。數日にして一大船の甲士を載するものを望見す。二人急に頼朝を船腹に匿して、大船を待つ。至れば則三浦氏なり。義實を見て、爭ひて、「佐公は何に在るか」と問ふ。義實、輙く對へずして曰く、「吾れも亦公を索むるのみ」と。義澄等泣きて曰く、「吾れ父を棄てゝ去りしは、公を見んと欲するのみ。今此の如し。與に俱に死せざりしを悔ゆ」と。頼朝之を聞きて、匍匐して出づ。義澄驚き喜び、拜して曰く、「君此に在すか。亡父の言、果して驗あり」と。頼朝、義明の死を聞きて、悲慟す。義實も亦石橋の戰に義忠の死せし狀を語りて、相共に泣涕す。義盛進みて曰く「諸君何ぞ徒に泣くことを爲すか。今佐公に遭ふを得たり。盍ぞ大事を議せざる。諺に曰く、『食はんと欲する者は器を先にす』と。嚮に藤原忠淸、相國の命を以て、侍所別當と爲るを得て、八州の士人、其門に群聚す。臣意に之を欽む。君にして志を得ば、願くば臣に授くるに此職を以てせよ」と。頼朝笑ひて之を諾す。

頼朝筥根山に匿る

【酒匂】相模

衣笠城陷る

頼朝海を航し安房に赴く

【眞鶴崎】伊豆

船中主從相會して泣く

平廣常

是に於て、頼朝、乃安房に上り、檄を遠近に移し、來り會せしむ。其敵地に間まるる者は海路より來らしむ。九月、小山朝政、下河邊行平を徴し、三百騎を得て、進みて下總に赴く。千葉常胤、州の目代千田親政を擒にし、兵三百を以て、國府に迎へ謁す。因りて策を建てゝ曰く、「宜しく多く旗幕を張りて、以て觀望の者を誘ふべし」と。頼朝之に從ふ。進みて隅田川に至る。是に於て、平廣常、乃萬騎を以て來り會し、頼朝に見えんと欲す。頼朝輙く見ず。實平をして、言はしめて曰く、「吾れ敕を奉じて義を擧ぐ。汝何ぞ速に來らざる。當に後陣に在りて以て召呼を待つべし」と。廣常悚然たり。退きて人に謂て曰く、「此公必大事を成さん。吾れ、我が衆を以て、其孤弱を援く。其れ此の如くなるを圖らざりき」と。頼朝、既に廣常の兵を併せ、又石橋の散兵の來り歸するに會ふ。軍大に振ふ。

頼朝の軍大に振ふ

是より先、石橋の報、京師に至るや、清盛大に喜ぶ。已にして、「頼朝未だ死せず。勢復振ふ」と聞きて、則恐る。十月、孫維盛、弟忠度をして、五萬騎を以て來り攻めしむ。藤原忠清を以て軍を監せしめ、齋藤實盛を鄕導と爲す。頼朝、諸將を召し、議して曰く、「吾れ上野、下野を徇へ、然る後進まんと欲す。如何」と。廣常曰く、「敵未だ足柄を踰えざるに及びて、武藏、相模を取るに若かず。二州既に獲ば、天下は唯君の爲さんと欲する所のまゝならん」と。頼朝之を然りとし、河を渡りて軍す。畠山重忠、江戸重長等來り降る。頼朝、重忠を詰るに、三浦氏を攻めし由を以てす。對へて曰く、「臣が父重能京師に在り。故を以て口を藉りしのみ。臣の本心に非ず」と。實平、常胤、請ひて之を釋す。乃命じて前軍に在らしめ、功を立てゝ自贖はしむ。是に於て、武藏、相模の豪傑、相告げ來り降る。兵凡十餘萬なり。

【河】隅田川
畠山重忠、江戸重長等來り降る

鎌倉に幕府を建つ

乃鎌倉に入り、立てゝ幕府と爲し、諸將士を部署す。遂に親ら將として、西し、平氏を逆へ擊つ。八州の將士、爭ひ追ひて之に附く。足柄山を踰ゆる比、凡二十餘萬騎なり。

北條時政
武田信義

北條時政、武田信義等の兵を引きて之に會す。信義は、義光の曾孫なり。世甲斐に居る。是に於て子信光、弟安田義定等と、州兵二萬を擧げて、南畿河に入る。是時大庭景親、弟景尙と、兵千餘を以て走り、維盛に歸せんと欲す。甲斐の兵路を塞ぐと聞きて、景親窘蹙し、乃首藤經俊、長尾定景等と俱に來り降る。景尙、義定に波太山に遇ひ、戰敗れて遁走し、維盛に歸す。信光、又擊ちて州の目代を破り、長田入道父子を斬る。平賀義信、其子維義も亦信濃の兵を發し、來りて頼朝に屬す。頼朝、乃諸事を合せ、進みて維盛と富士河を夾みて陣す。

富士河陣

初め維盛、行旅の東より來る者に遇ひて、頼朝の兵數を問ふ。對へて曰く、「八州の草木、風靡せざるは無し。山と無く、河と無く、皆其兵なり」と。已にして頼朝、河東に至る。白旗林の如く立つ。之を望むに際なし。維盛、齋藤實盛を召し問ひて曰く、「汝は東事を知る者、頼朝の兵を度るに、强きを挽くこと汝が如き者幾人ぞ」と。曰く、「弓は五箇力、箭は十五拳、以て甲七札を貫く。是の若き者、一隊に二十人を下らず。人ごとに五六馬を畜ひ、山谷を馳すること平地の如し。戰ひて親を喪ひ、尸を踐みて進む。臣の如き者は、斗量帚掃すべく、數ふるに足らざるのみ。我が畿内、西國の兵の如きは、幺麼廷弱なり。喪に託し創を稱し、動もすれば輙退かんと欲す。而して乘る所は皆駑なり。豈彼輩と較ぶ可けんや」と。蓋し實盛、藤原忠清と事を議して合はず。既に維盛に對へ、遂に辭して西す。一陣恐怖す。

富士河陣

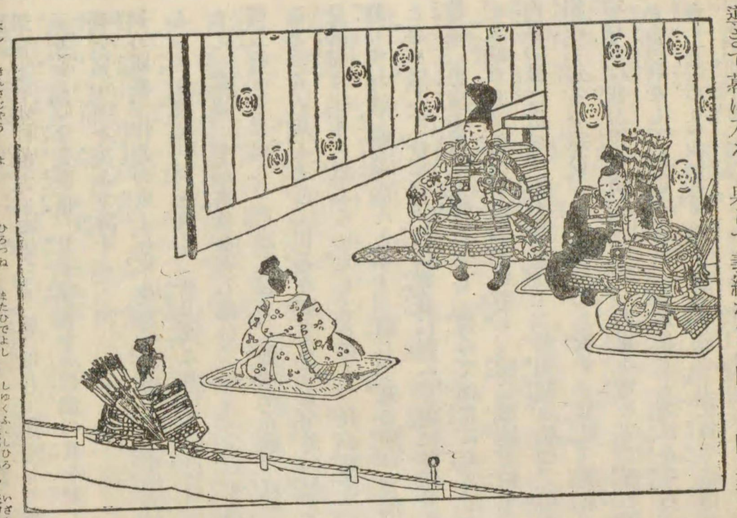
實盛關東の武を說く

維盛、忠清を以て先鋒となし、進みて河岸に至る。河水方に漲る。兩軍相持して未だ戰はず。武田信光、我が先鋒たり。使を平氏の營に遣し、與に戰期を約す。平氏答へず。信光、乃兵を潛めて、間道より、夜、西軍の後に出づ。道大澤を經す。鷺鴨驚き起つ。西軍大に駭き潰走す。

平軍潰走

頼朝、走るを追ひ、遂に西せんと欲す。常胤、廣常、義澄、皆說きて曰く、「常陸、陸奥の諸州未だ服せず。恐らくは我が後を窺はん。先づ關東を定めて、然る後西伐するも、未だ晚しと爲ず」と。頼朝これに從ふ。乃信義をして駿河を守り、義定をして遠江を守らしめ、而して兵を引きて還り、黃瀨川に次す。會一將あり。二十騎を率ゐて來り、土肥實平に因りて、頼朝に見えんことを求む。頼朝、狀を問ふ。對へて曰く、「其年齒二十左右にして、面目俊邁なり」と。曰く、「是れ陸奥の九郎なり」と。亟に呼び入る。實平

【黃瀨川】駿河



頼朝、義經兄弟相會ふ

【故將軍】頼義

【頭公】義朝

大に刑賞を行ふ

（頼朝、義經對面の圖）

【金砂城】常陸

導きて幕に入る。果して義經なり。曰く、「阿兄義を起すと聞き、喜び自禁ぜず。秀衡に固辭して來れるなり」と。頼朝大に喜びて曰く、「八幡公の東征するや、新羅公の來り援くるに遇ふ。曰く、『猶故將軍を見るが如し』と。今吾れ汝に遇ふは、猶頭公を見るが如し」と。兄弟相對して泣く。是の時、頼朝の諸弟、希義、土佐に在りて、平氏に殺さる。範頼、全成、義圓皆來り歸す。頼朝鎌倉に還りて、大に刑賞を行ふ。長田入道父子の首を梟し、大庭景親を斬る。乃首藤經俊を召し、言て曰く、「鼠の猫を圖るとは如何」と。將に之を斬らんとす。其母嘗て頼朝を乳養す。因りて爲に哀を請ふ。之を宥す。長尾定景を、岡崎義實に賜ひて曰く、「乃の子の仇なり」と。義實、又請ひて死を宥す。伊藤祐親、海に航して西に奔らんと欲し、天野遠景に捕へらる。三浦氏に囚す。祐清、固く辭し、嘗て平氏の厚恩を受けしを以て、去りて之に從はんと請ふ。頼朝、義として之を許す。佐々木義清降る。亦父兄の故を以て之を宥す。

十一月、頼朝兵を將ゐて、佐竹義政を常陸に攻む。廣常、其姻戚たるを以て、說きて降さしめ、之を誘殺す。其妹秀義、金砂城に據る。廣常、又秀義の叔父義弘を誘ふに利を以てし、内應を爲さしめ、兵を潛めて城に入り、

鎌倉新邸成る侍所を置く

木曾義仲

木曾城

養和元年

墨股河

【矢矧川】三河

【菊河】遠江

擊ちて秀義を走らしむ。其邑を分ちて將士に賜ふ。十二月、新館成り、徙りて居る。將士三百餘人をして各邸第を占めしむ。別に侍所を置き、和田義盛を以て別當に充つ。其前諾を踐むなり。壯士十一人を選みて、毎夜寢室に直せしめ、以て自衛る。是時に當りて、諸道の豪傑、兵を起して、以て頼朝に應ずるもの甚多し。河野氏は南海に起り、菊池氏、緒方氏は鎭西に起り、山木氏、柏木氏は近江に起る。而して木曾義仲は信濃に起る。義仲は頼朝の從弟たり。其父の義賢は義平に殺されし者なり。義仲、幼孤の時、畠山重能、義平の命を受け、之を殺さんと欲して、忍びず。之を齋藤實盛に託す。實盛、更に之を中原兼遠に木曾に託す。木曾氏と稱す。義仲、常に宗族の殘滅を憤り、陰に仇を報ぜんことを圖る。群兒と嬉戯するに、毎に騎射の狀を爲す。稍長じて壯偉多力にして善く射る。潛に京師に入り、平氏を覘ふこと數なり。以仁王の令旨至るに及び、喜びて兵を集め、立どころに千餘人を得たり。平氏之を聞き、召して兼遠を詰る。兼遠、義仲をして出でゝ根井行親に依らしむ。甲斐、下野の諸源を招く。石橋の事起るを聞きて、赴き援けんと欲す。會州人笠原頼直、平氏の爲に來り攻む。義仲擊ちて之を走らしむ。因りて木曾峽に據る。養和元年春、淸盛薨じ、宗盛嗣ぐ。遺命を以て諸弟を遣し、兵を將ゐて赴き援けしむ。三月、行家、を遣し、安田義定を援け、遠江を守らしむ。頼義の叔父義廣、常陸に在り、襲ひて鎌倉を取らんと欲し、兵三萬を聚めて下野に入り、足利忠綱、小山朝政を誘ふ。忠綱之に應ず。朝政詐り應じ、伏を設け、擊ちて之を破る、義廣奔りて義仲に歸す。頼朝の季父行家、美濃に在り。平氏と戰ひて敗れ退く。頼朝、弟義圓を遣し、兵を將ゐて赴き援けしむ。義圓、兵二千を以て、平重衡の七十騎と墨股河を夾みて軍す。義圓、夜、身を挺んでゝ河を渡り、平氏の邏騎に獲はれ、戰ひて死す。行家、繼ぎて進めども利あらず。戰ひ且走りて、矢矧川を保ち、人をして役夫の狀を爲して、西行せしむ。西兵に遇ふ。鎌倉の援兵來るや否やを問ふ。對へて曰く、「前軍菊河に及び、後軍

行家京師に入る

見附に及ぶ」と。重衡大に恐れて退く。行家、人をして馳せて、美濃、尾張を徇へしめて曰く、「平氏走れり。之を射ざる者は我が敵なり」と。二國の人、爭ひ起ちて要擊す。西軍狼狽して去る。行家、遂に京師に入り、援を山徒に請はんと欲す。山徒應ぜず。奔りて賴朝に歸す。

壽永元年

是より先、平宗盛、陸奥の藤原氏をして賴朝を攻めしむ。藤原氏聽かず。又越後の城氏をして、義仲を攻めしむ。城氏之を聽く。六月、城資永、兵萬餘を發して信濃に入る。義仲三伏を設け、擊ちて其九千人を殺す。九月、通盛等亦來り攻む。義仲見兵三千あり。源光基の策を以て、分ちて七隊と爲し、赤旗を張りて之を迎ふ。敵以て來り攻む。義仲見兵三千あり。源光基の策を以て、分ちて七隊と爲し、赤旗を張りて之を迎ふ。敵以て平氏の黨と爲す。漸く近づくに及びて、赤旗を仆し、白旗を樹てゝ、急に之に迫る。敵軍驚き潰ゆ。長茂創つけられて走る。北陸の豪傑悉く義仲に附く。

北陸の豪傑悉く義仲に附く

武田信光、其女を以て義仲の子義高に妻せんと欲す。義仲曰く、「娶りて妾と爲さんのみ」と。信光怒りて、義仲を賴朝に構へて曰く、「義仲數捷ちて、北國に張る。平宗盛、嘗て其兄の女を養ひ、以て義仲に妻し、與に連和して共に東せんと欲す」と。賴朝大に怒る。會行家、鎌倉に來り、邑を請ひて自給せんとす。賴朝曰く、「吾れ十州を取る。義仲五州を取る。公も亦盍ぞ自取らざる」と。行家慍りて、千餘騎を以て去り、義仲に歸す。賴朝益怒る。二年三月、親ら十萬騎に將として信濃に入る。義仲、將士を集めて議す。樋口兼光、今井兼平、富部に壁して、之を拒がんと欲す。義仲曰く、「世皆言ふ、『源氏は相肉す』と。今又深仇の平氏を捨てゝ同宗と兵を交ふ。人の笑を如何せん」と。乃兵を引きて之を越後に避く。賴朝も亦兵を引きて還る。使をして、義仲に言はしめて曰く、「平氏の罪惡貫盈せり。朝廷、我が宗に命じて之を討たしむ。當に日夜命に赴くべし。而して十郎、私に兵を構へて我を圖る。子乃之を庇ひ、西を舍てゝ東に向ふは何ぞや。子苟も他心無ければ、則請ふ、速に十郎、を逐へ。否らざれば、則貴息を養ひて子と爲すを得ん。二の者聽さゞれば、則將に八州の卒を以て子と相見えんとす」と。義仲の將小室忠兼、其請を聽さんことを勸む。兼平

賴朝使者を義仲に送る

【十郎】行家

【大藏の事】義平、義仲の父義賢を武藏の大藏に斬る。義仲、義高を質となす

四月、義仲平氏と戰ふ

栗殼壑

曰く、「君、大藏の事を聞けりや。佐公豈終に君に釋然たらんや。蚤く之を絕つに若かず」と。義仲、忠兼の言に從ひ、義高を遣して質と爲す。

四月、平氏十餘萬騎を以て東伐し、先づ義仲を擊つ。義仲、乃其將仁科幸弘等を遣し、之を燧城に拒ぐ。日野河を引きて壕と爲す。西兵進む能はず。我新附の將齋明と云ふ者、款を平氏に通じ、水を決して兵を導く。城輒陷る。西兵勝に乘じ、連に諸城を陷る。

五月、西將平盛俊、進みて般若野に至る。義仲、越後の國府に在りて、今井兼平を遣し、馳せて先づ寒原の險を奪はしめ、擊ちて盛俊を破る。西軍退きて志雄、礪並の二山に陣す。礪並山の南に栗殼壑あり。深さ數千仞。義仲、國府を發し、行兵を收めて、五萬騎を得たり。兵を六動寺に閱し、自礪並山に向ふ。樋口兼光等に謂て曰く、「彼は衆、我は寡。彼れ山を舍てゝ東に下り、平地に就きて戰はんこと我が利に非るなり。我れ先づ山の東麓に陣せば、敵必奮を下りて陣せん。我が一軍則遠りて山西に出で、敵を南壑の中に驅らば、一擧にして麈にす可し」と。諸將皆曰く、「善し」と。乃萬人を分ちて、兼光等に屬し、自ら三萬人に將として、進みて東麓に至り、旗幟を益し、林を蔽ひて軍す。平氏之を望見し、果して奮を下りて山腹に陣す。兩軍射戰すること終日。而して兼光等已に敵の背に在り。日暮れて、萬人鼓譟して突出す。義仲、兵を麾きて上り、夾みて西軍を擊つ。西軍大に駭き潰走し、南壑に陷りて死する者、幾ど二萬人。壑爲に塡塞す。平氏の將帥、僅に身を以て免れ、散兵を收めて、佐良嶽を保つ。初め義仲、行家をして、別に兵を將るて、志雄山に向はしむ。戰利あらず。義仲赴き援く。西軍戰はずして走る。

西軍潰走して壑に陷る

六月、走るを追ひ小楯林に陣す。相持して未だ戰はず。西兵我が芻者を獲て、問ひて曰く、「北軍何を謀るか」と。曰く、「夜襲を謀る」と。西兵怖れ走り、爭ひて安宅の渡を渡り、溺るゝ者千餘。既に渡りて橋を截ちて陣す。義仲渡頭に至る。濁流方に漲る。試に馬十匹を放つ。水、馬腹に及ぶ。全軍之に從ひ、終に大に之を破る。勝に乘じて走るを追ひ、進みて越前に至る。齋明及び齋藤實盛等を獲たり。平氏既に連に義仲に破ら

安宅渡に溺死者千餘

【史】書記役義仲叡山に軍す
平氏西奔
【二皇】後白河法皇

れ、走りて京師に歸る。義仲進みて近江に至る。其史覺明をして、牒して山徒を誘はしむ。七月、湖を濟りて叡山に軍す。平宗盛大に恐れ、旗を擧げ、乘輿を挾みて、西奔す。獨賴盛、其母嘗て賴朝に德あり。賴朝、間に書を通じて之を招く。且、其臣宗清にも報ぜんと欲す。故に從ひ奔らず。法皇、平氏を避けて叡山に之く。義仲、行家と北兵六萬を帥ゐ、路を分ちて京師に入る。京師の人相告げて曰く、「圖らざりき、今日復白旗を見んとは」と。

改版 邦文日本外史 卷之二 終

法皇平氏討伐の功を論ず
北陸宮
【故三條宮】以仁王
【寵姫】丹後
後鳥羽帝卽位

改版

邦文日本外史 卷之三

源氏正記

源氏 下

是の月、法皇、諸公卿を會して、平氏を討ちし功を論ず。賴朝第一、義仲第二、義仲を從五位下に叙し、左馬頭に任じ、越後守に除し、行家を備後守に除す。二人悅ばず。更に義仲を伊豫守に、行家を備前守に除し、並に院の昇殿を聽す。平氏の五百餘邑を收め、其百四十を義仲に賜ひ、留りて京師を衞らしむ。世呼びて旭日將軍と曰ふ。義仲、山野に生長し、擧止粗鄙にして、衣冠に任へず。京人に嗤笑せらる。

初め以仁王の子、僧と爲りて越後に奔り、北陸宮と稱す。年十七。義仲奉じて以て京師に入る。八月、法皇の乘輿西奔し、京師主なきを以て、天子を立てんと議す。時に高倉帝の皇子二人あり。叔五歲、季四歲。法皇擇みて之を立てんと欲す。因りて宣して之を義仲に問ふ。義仲、意を北陸宮に屬す。奏して曰く、「君を立つるは重事なり。鄙人の敢て問する所に非ず。然れども辱く諮問を受く。敢て情を竭さゞらんや。故三條宮、平氏の專橫を憤り、陛下を幽厄より拔かんと欲す。時命未だ會せず。身を鋒鏑に隕さる。天下之を悲む。臣の功を今日に樹つるも、亦遺令を奉ずるなり。今建立を議して、其亂に及ばざれば、人心何とか云はん」と。法皇、其嘗て僧たりしを以て聽さず。二皇子を卜す。叔、吉なり。法皇、寵姫の言を納れ、季を立てんと欲し、再卜して之を立つ。是を後鳥羽帝と爲す。

北兵鹵掠す

法皇使者を鎌倉に遣す

公卿頼朝の風采を想ふ

頼朝奏言

法皇、頗る義仲を厭ひ、頼朝を召し、京師に來らしめんと欲す。義仲、爭ひて不可と爲せども聽されず。義仲憤懣す。而して北兵糧乏し。四に出でて鹵掠す。法皇之を患ふ。時に平氏南海にあり。屢山陽を侵す。行家、赴き討たんと請ふ。詔して之を許す。義仲曰く、「行家、勇と雖も數奇なり。將たらしむ可らず」と。乃、更に義仲に命ず。義仲、京師を發す。足利義清等を以て先鋒と爲す。閏月、義清、平氏と水島に戰ひて敗死す。義仲、進みて南海を攻めんと欲す。途に、頼朝、兵を遣し且に京師に入らんとすと聞きて、則引きて還る。詔ありて之を止むれども、肯ぜず。是より先、法皇の使者鎌倉に至る。頼朝延きて見る。言て曰く、「平氏、京師を棄て、自逃る。而して義仲、行家、虛を擣きて之に入り、乃功に矜り、賞を要し、敢て任國を擇む。胡爲る者ぞ。臣當に疾く往きて之を伐つべし。而れども藤原秀衡等、日夜臣が背を窺ふ。臣、未だ以て詔を奉ず可からず。且大兵を帥ゐて輦下に入らば、徒に騷擾を爲さん」と。使者歸り報ず。公卿、皆頼朝の風采を想望し、爭ひて狀を問ふ。使者言く、「頼朝、軀矮にして、面大に、然して擧止詳雅にして、言語明晰なり。義仲の比に非ず」と。頼朝、又使をして奏せしめて曰く、「平氏の侵せる所の諸邑は、宜しく盡く其故主に復すべし。臣等宜しく之を利す可からず。平氏の降る者は、宜しく赦宥に從ふべし。臣嚮に宥さる。故に今日あり。源平並び立ちて、同く王家を衛るは。古制然りと爲す。朝廷よりこれを視れば、何ぞ彼此あらんや」と。法皇、益意を頼朝に屬し、屢使をして之を召さしむ。是に於て、頼朝、弟範頼、義經をして、關東の貢賦を監して西上せしめ、以て義仲を誡しむ。義仲、之れを拒がんと欲し、行家と法皇を軍に奉ぜんことを謀る。行家素より法皇に寵あり。密に之を奏す。法皇、乃僧靜憲をして義仲を詰らしむ。義仲對へて曰く、「孰が此言を造す者ぞ。臣、徒官家の頼朝に貳あるを慨くなり。故に與に雌雄を決せんとするのみ。願くは頼朝を討つ宣を賜はるを得ん」と。遂に法皇の宮に詣りて誓書を獻じ、且讒人を間執せんと請ふ。詔して之を慰解す。十一月、屢詔して、義仲に西征を趣す。曰く、「或人謂ふ、汝の西せざるは不良を謀らんと欲するなり」と。義仲對へ、ふるに東兵に備ふるを以てす。而して鹵掠益甚し。法皇、其幸臣平知康を遣して

鼓判官

義仲怒る

【鼓】知康

義仲法住寺殿を圍む

【摂政の第】基通五條の第

院廐別當

元暦元年征夷大將軍

行家義仲に畔く

池月磨墨

之を詰る。知康、善く鼓を擊つ。鼓判官と稱す。義仲曰く、「鼓判官、反りて人に擊れんとするか」と。知康怒り、還り報じて曰く、「義仲反形已に成る。請ふ、之を討たん」と。法皇之を聽す。遽に、叡山・園城寺の僧兵を徵し、知康を以て、之に將とす。義仲將士を會し、言て曰く、「我れ功ありて罪なし。何ぞ遽に此に至るや。我れ五萬の士馬を以て、留りて京師を衛る。而れども官、給する所なし。豪戸を剝がすば、何を以て生存せんや。然れども未だ嘗て敢て皇人を抄掠せず。彼の鼓、乃、我を讒して以て此に至る。我將に擊ちて之を破らんとす」と。樋口兼光、今井兼平、切に之を諫め、其闕に詣りて降らんことを勸む。義仲怒りて曰く、「吾れ兵を起してより數十戰、未だ嘗て謂ゆる降ることあるを知らず。卽し降らば吾れ反りて鼓に擊殺せられんのみ」と。遂に將士に令して曰く、「吾れ今日死を決す。汝が輩之を勉めよ。頼朝に笑はるゝ勿れ」と。乃、軍を分ちて七隊と爲し、法住寺を圍む。知康、墻に上り、踴躍して義仲を罵る。義仲、咄嗟して之に赴く。知康走り匿る。北兵火を縱ちて、之を索むれども獲ず。遂に法皇を攝政の第に、帝を閑院に奉じ、公卿以下知康に至るまでの官爵を停め、自院廐別當と爲る。是より先、義仲、藤原基房の女を娶りぬ。是に於て、基房徐に之を開諭す。乃、法皇を西洞院に徙し、自其官爵を辭す。元暦元年正月、義仲を從四位下に叙し、征夷大將軍に任ず。是より先、行家、平氏と室山に戰ひて敗れ、遂に河内に據りて、義仲に畔く。義仲、樋口兼光を遣し、兵を將ゐて之を擊つ。而して範頼、義經已に伊勢に至る。樋公友といふ者、往きて變を告げ、遂に鎌倉に赴く。頼朝、公友を見て曰く、「義仲罪あらば、宜しく臣に詔して之を誅せしむべし。知康は何人ぞ。焉ぞ義仲と敵するを得んや」と。乃、八州の將士に檄して、西、義仲を討つ。而して知康鎌倉に來り、自ら解說せんと欲す。頼朝內外を戒め、爲に通ずる勿らしむ。知康至れども肯て顧る者なし。幾何もなくして、徵兵聚る者六萬、乃盡く之を範頼、義經に委ぬ。因りて令して曰く、「木曾、我が兵を阻むは、必ず宇治河に於てせん。皆善馬を具へて、以て騎渡すべし」と。頼朝、駿馬二あり。池月と曰ひ、磨墨と

曰ふ。梶原景時寵あり。其子景季、年少くして鋭勇なり。是に於て池月を得て、以て先登せんと請ふ。賴朝曰く、「乞ふ者多けれども、吾れ與へざるなり。顧ふに範賴等、戰ひて克つ能はずんば、吾れ且に親ら往かん。此れ吾が乘なり」と。乃、靡墨を賜ふ。諸將士皆發す。明日、佐々木高綱、近江より來り謁す。賴朝、問ひて曰く、「汝近江にありと聞く。盍ぞ直に軍に從ひて、京に入らざるか」と。高綱對へて曰く、「臣、如し軍に從はば、敢て生を期せず。一たび君に見えて訣別し、且、指揮を奉ぜんと欲し、馳することと三日にして、乃達す。臣、唯一馬、罷れて用ゐるべからず。故に期に後れて此に在り」と。賴朝喜ぶ。因りて之に謂て曰く、「汝能く我が爲に宇治に先登せんか」と。曰く、「能くせん。臣、河上に居て其淺深を識るなり」と。是に於て、遂に池月を出して之を賜ふ。高綱感喜し、謝して曰く、「君、高綱未だ戰はずして死すと聞かば、則、先登する能はざるなり。未だ死せずして戰ふと聞かば、則、先登する者は高綱なり」と。拜舞して出づ。賴朝呼び返し、之を戒めて曰く、「景季等乞へり。而れども與へざりき。汝之を記せよ」と。對へて曰く、「諾」と。時に大軍、浮島原に陣す。景季群馬を視るに、靡墨に過ぎたる者なし。牽きて高丘に上り、衆に誇り示す。已にして大に嘶聲あり。畠山重忠曰く、「池月の聲なり。何を以て此に至る」と。已にして高綱の僕、池月を牽きて至り、丘下を過ぐ。景季問ひて曰く、「誰が乘ぞ」と。僕對へて曰く、「佐々木氏の乘なり」と。景季大に慍りて曰く、「圖らざりき、公の彼れを視る、我に踰えんとは。我れ寧彼と與に死し、公をして二良を喪はしめん」と。即刀を扣へ、路に要して待つ。高綱之を望み見て、其騎に謂て曰く、「彼は梶原に非ずや。公の我に囑せしは殆ど是が爲ならん」と。漸く近く。景季呼びて曰く、「四郎、久濶なり。彼の乘は公の賜ふ所か」と。高綱哂ひて曰く、「否、吾れ善馬なきを患へ、公の厩に就きて之を借らんと欲す。聞く靡墨は已に子に賜ひ、池月は命を得ずと。子すら且然り。況や高綱に於てをや。然れども君事方に急なり。顧慮するに遑あらず。遂に厩人を誘ひ、之を竊めり。後、責問あらば、子幸に之を救解せよ」と。乃與に俱に西す。

賴朝池月を高綱に賜ふ

浮島原

【二良】高綱と景季

高綱景季相見る

宇治勢多

平等院の鼓を撾つ

（宇治川先陣の圖）

佐々木、梶原川を騎渡す

先登第一

範賴は勢多に向ひ、義經は宇治に向ふ。義仲之を聞き、戰守を議す。見兵千騎、乃、今井兼平、山木義弘を遣し、勢多を拒がしめ、根井行親、楯親忠をして、宇治を拒がしむ。橋板を撤して柵を樹て、繩を水中に張り、これを守る。二十日、義經、騎二萬五千を以て東岸に至り、居民を戒めて、軍を避けしめ、而して其廬舍に火して以て陣を布き、櫓を起して自ら登り、筆硯を具へて、將士の功最を書し、「將に以て鎌倉に報ぜんとす」と曰ふ。將士皆奮ひて戰はんと欲す。義經又令を發す。而れども軍囂然として令を聞かず。乃平等院の鼓を取りて、櫓下に撾つ。一軍、耳を屬す。義經乃令す、「二萬人の中、必善く泅ぐ者あらん。直に前みて之を嘗よ。我が勇士、橋架に緣りて敵を防ぎ、敵をして我が泅ぐ者を射しむる勿れ」と。泅ぐ者爭ひて甲を釋きて沒し、刀を以て其繩を截る。平山季重、澁谷重助、熊谷直實等架に上りて射る。射戰すること良久し。二騎あり、馬に鞭うち、流れを亂りて進む。先なる者は景季、後なる者は高綱なり。高綱、後より景季を紿きて曰く、「子の馬倏慢めり」と。景季、馬を駐めて條を約す。高綱則超乘して過ぎ、岸に上りて自名のる。景季踵いで上る。義經、功簿を上るに、高綱を先登の第一とし、景季を第二とす。畠山重忠、手兵を以て繼ぎて渡る。行親之を射て、其馬に中つ。重忠、泅ぎて岸に達し、刀を揮ひて進む。北兵辟易す。

義仲法皇に御幸を請ふ

【木幡】山城

【妻の藤原氏】前關白基房の女

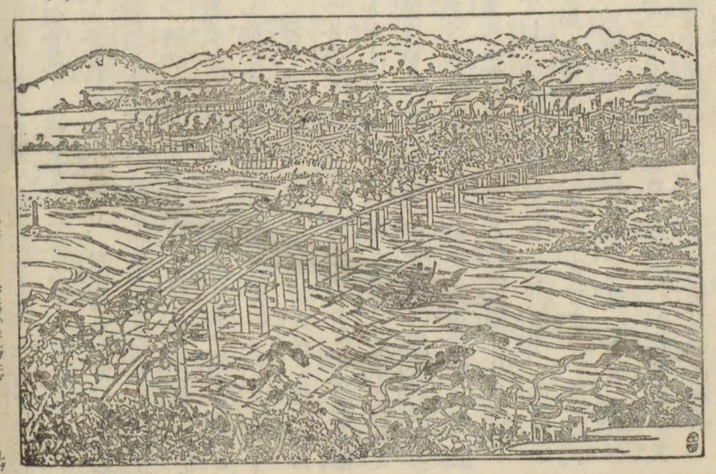
（宇治川戰之圖）

義仲西走

義經法皇の宮に詣る

法皇大に喜びて義經等を迎へらる

義仲使を馳せ、法皇に醍醐寺に幸せられんことを請ふ。聽さず。則兵を率ゐ馳せて其宮に赴き、刀を抜き目を瞋らして、階下に立ち、輿を具へて幸を趣す。宮中股栗す、會「東軍已に木幡に至る」と來り告ぐるあり。義仲馳せ出でて、五條の第を過り、妻の藤原氏に訣る。久しく出でず。二士あり、之を諫めて帳前に自殺す。義仲乃出づ。行親、親忠に遇ひて、其兵を合す。兵僅に三百騎なり。東軍を望み見るに、旗幟、天に彌る。曰く、「吾れ死せん」と。將士を諭して散じ去らしむ。衆、生死ともに相從はんと請ふ。義仲、乃進みて東軍を冒す。重忠、景時等、累に進めども皆潰ゆ。義仲、驅りて進み、義經と遇ふ。義經、數百騎を以て、蹄を攢め衝擊し、因りて之を亂射す。義仲大に敗れて、創を被り、殘兵を以て西に走る。義經、其兵をして之を追はしめ、而して重忠等と與に法皇の宮に詣る。大江業忠、宮垣に上り、之を望み見て曰く、「義仲復至る」と。一宮驚怖す。業忠、又報じて曰く、「旗號自別なり。蓋し東兵ならん」と。義經、門に踵りて馬を下り、颺言して曰く、「臣は源頼朝の使者義經なり。賊を破りて至れり。願くば爲に之を奏せよ」と。業忠、驚喜して跳下し、匍匐して入りて之を奏す。法皇、大に喜び、六人を延きて、中門外に列立せしめて之を見る。人をして其名を指問せしむ。「赤錦の袍を穿てる者は、」曰く、「源義經なり」。「緋甲を被り、大刀を帶べる者は、」曰く、「畠山重忠なり」。「重忠に亞ぐ者二人は、」曰く、「澁谷重助、河越重頼なり」。「玄甲なる者は、」「梶原景季」。「黄甲なる者は、」「佐々木高綱なり」と。法皇曰く、「皆壯士なり」と。因りて勅して宮を護らしむ。



巴

巴家吉の首を斬る

義仲粟津に至る

義仲戰死

義仲奔て巴共に死せんと請ふ。義仲之を强ふ。巴、泣涕して辭し去る。義仲、走りて粟津に至り、兼平に遇ふ。兼平曰く、「義弘戰死せり。臣、未だ主公の何の狀たるかを審にせず。これを以て脫れ歸るのみ」と。義仲曰く、「吾れ宜しく京中に死すべかりしに、一たび汝を見んと欲し、故に忍びて此に至る。身創つき力竭く。以て自殺すべし」と。兼平曰く、「主公努力せよ。方今平氏西にあり、佐公東にあり。主公盍ぞ走りて北國を保ち、以て三分を圖らざる。臣請ふ、留りて敵を防がん。主公以て逃るべし」と。乃旗を樹てゝ潰兵を集む。潰兵稍聚る。數百騎を得て、進みて敵陣を衝く。貫きて過ぐること三たび。乃二十餘騎あり。範頼、數千騎を以て之を圍む。義仲、奮戰して盡く其騎を亡ふ。獨り兼平あり。兼平乃一邱樹を指さし、義仲に謂て曰く、「君彼に赴きて、徐に計を爲せ。臣請ふ、此に担がん」と。義仲、田を徑りて邱に赴く。馬淖に陷る。顧て兼平を視る。箭、額に中りて死す。年三十一。兼平、方に奮鬪し、箙に八矢を餘す。射て八騎を斃す。敵中に「木曾公死せり」と傳へ呼ぶを聞く。曰く、「吾が事終れり」と。刀を咥みて馬より墜ち、自ら貫きて死す。東軍振旅す。而して兼光方に行家を破りて、これを紀伊に追ふ。難を聞きて京師に還る。其兵道より亡ぐ。鳥羽に及ぶ比、

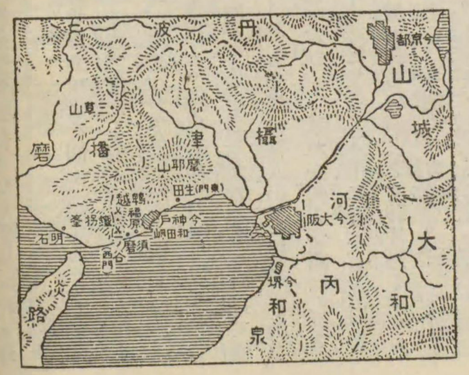
義仲以下の首を京師に傳ふ

【一日】山城義高殺され妻亦死す

三十騎あり。東兵赴き擊つ。兒玉の黨、之と姻あり。諭し降して以て歸し、死を宥さんことを請ふ。朝議聽さず。義經、義仲以下の首を京師に傳ふ。其髻に帛書して「賊義仲」と曰ふ。兼光を縛し、其後に從はしめ、終に之を斬る。義仲の叔父義廣、初め一口を防ぐ。兵敗れて伊勢に逃る。後、賴朝に攻殺せらる。義仲の子義高、鞠に鎌倉に質となる。賴朝、罪を追ふ者に歸して之を斬り、女を藤原高保に改め嫁せんと欲す。肯せずして死す。義仲の妾巴、既に義仲に別れ、甲を釋きて間行し、信濃に歸る。義仲の親故に遇ひ、具に語るに故を以て相ひ泣く。時に年二十八。髮を削りて尼となり、越後の友松に居り、義仲の冥福を祈り、以て身を終へたりと云ふ。

平氏福原を復す

義仲既に死せり。平宗盛、南海より山陽に徙る。山陽の將士、室山、水島の二役より、平氏に服從す。平氏、終に福原を復し、城を築きて據り、山を負ひ海に臨む。生田を東門とし、一谷を西門とす。勝兵十萬餘、大艦數千を繫ぐ。平教經、備前、安藝、淡路、和泉に轉戰して、皆捷つ。源賴賢の子義嗣、賴仲の子義久、淡路に居る。皆爲に殺さる。平氏の威、關西に振ふ。京師を犯さんことを期す。賴朝、之を聞きて、二弟を趣して赴き伐たしむ。二月三日を以て一谷を攻む。範賴、五萬騎を以て西門に向ひ、梶原景時、軍を監す。義經、萬騎を以て西門に向ふ。土肥實平、軍を監す。明日、清盛の忌辰たるを以て、延べて七日に至る。期に先つ三日、早く發す。義經、丹波路を取り兼行して、暮に比びて、三草山に至る。平資盛等七千騎、山西に陣すと聞きて、實平を召し、議して曰く、「夜之を襲はんか。抑且



辨慶

鵯越

熊谷、平山

（鵯越の圖）

を待たんか」と。實平未だ對へず。田代信綱進みて曰く、「敵、我れ衆を恃みて稽留すと謂はん。則急に之を襲はゞ必ず勝たん」と。義經曰く、「是れ我が心を得たり」と。卽、發す。僕辨慶に命じ、沿道の民家に火し、明を取りて過ぐ。夜半、山西に至り、急に資盛を襲ふ。資盛果して備へず。大に敗走す。天明に信綱、實平をして七千騎を以て西門を赴かしめ、自ら精騎三千を將ゐて鵯越に向ふ。鵯越は、城後の間道なり。日暮れて軍を駐む。熊谷直實、平山季重、麾下にあり。直實其子の直家に謂て曰く、「險を冒して混進す。孰れが後、孰れが先ぞ。功を立てんと欲する者は、西門に向ふに若かず」と。直家曰く、「然り。比の公常に士卒に先つ。隨ふ可らず。未だ平山子の如何を知らず」と。僕をして之れを闚はしむ季重甲冑して、刀を按じ、獨語して曰く、「誰か能く先たん」と。僕歸り報ず。直實曰く、「彼が見る所も我に同きなり」と。乃馳せて一谷に至る。天未だ曙けず。門に薄りて自名のる。季重も踵ぎて至る。敵、門を闢く。二人突き入りて奮鬪す。城兵辟易す。季重出づ。其旗卒を亡ふ。乃、復入り、其敵を斬りて出づ。實平、信綱、皆至る。士卒をして繼ぎて攻めしむ。門堅くして破れず。範賴も亦諸軍をして東門に薄らしむ。武藏の人河原高直、其弟と柵を踰えて先登し、箭に中りて死す。梶原景時、輕卒をして柵を拔かしめ、五百騎を以て入りて鬪ふ。すでに退き顧て景季の所在を失ひ、復入りて之を索む。景季、敵中に在りて被髮して鬪ふ。箙に梅花を挿み、以て目標とす。景時識見して、之を挈げて出づ。是の時に當りて、平氏專東西二門を防ぎて、義經を圖らず。義經の鵯越に向ふや、路險しく、夜黑し。辨慶をして鄉導を索めしむ。辨慶火光を認め、一の人家を得たり。翁嫗對座するを見る。告ぐるに故を以てす。

【東西二門】一谷と生田

鷲尾經春

翁曰く、「小人獵を以て業と爲し、山路を諳知す。而れども今老いたり。一兒あり。膽氣用ゐるべし」と。呼び起し辨慶に從ひて、義經に謁せしむ。義經、火を執りてこれを視るに、長身高觀にして、獵の弓矢を持てり。其齒を問へば、十七と曰ふ。義經爲に之に冠せしめ、姓名を命じて鷲尾經春と曰ふ。鎧仗を給ひて以て鄉導と爲す。「鵯越は如何」と問ふ。經春曰く、「太險なり。人馬行く可らず。唯鹿能く之を躐ゆ」と。義經曰く、「鹿も四足、馬も四足。等しきのみ」と。衆に先ちて之れに馳す。鵯越に至れば、則天明く。城中を瞰し視るに、一門、戰方に酣なり。義經急に之に應ぜんと欲す。而れども懸崖數百仞、經春の言ふ所の如し。衆相目して、敢て進む者なし。乃試に鞍馬二を驅りて之を下す。一は傷き、一は達す。義經曰く、「下る可し」と。乃其騎る所の馬の後足を屈し、一鞭して下る。三千騎皆之に倣ふ。曾鞍相觸れ、直に城後に達し、大に呼びて入る。平氏の軍駭擾して、自相擊刺す。教經等敗走す。義經火を縱ちて之に乘ず。煙焰城に漲る。範頼、實平、東西の門を破りて入り、三面より合せ擊つ。平通盛等十人を斬り、平重衡を擒にす。宗盛乘輿を奉じ、海に航して逃る。衆、舟に攀ぢ乘らんことを爭ふ。斷臂舟に滿つ。遂に讃岐に奔り、田口成能の衆に倚り屋島を保つ。

義經鵯越を踰えて至る

重衡檻致せらる

九日、範頼、義經、首虜を以て京師に還る。徇へて之を梟せんことを請ふ。許さず。義經抗疏して曰く、「臣の父義朝、忠を保先に盡して、人に註誤せられ、卒に詬を獄門に宣ぶ。平氏、昨は戚勳たり。今は國賊たり。臣等力を竭して攻討し、進みて死を顧みざる者は、獨王命を重ずるのみならず。乃父の恥を雪がんと欲するなり。臣の兄頼朝に深く是の志を存す。今にして許されずば、臣等復何の望む所かあらん」と。朝議終にこれを許す。

三月、頼朝、義仲を平げし功を以て、正四位下に叙す。梶原景時を遣し、重衡を鎌倉に檻致せしむ。面見し、景時をして命を將なはしめて曰く、「吾れ相國の德を忘るゝに非ず。王命を如何せん。然れども公の卒に此に臨むを圖らざるなり。則內大臣氏の若きに至りても、亦當に不日相見るべし」と。重衡速に死せんこと

平信兼の亂

【伊賀の人】平信兼

佐々木盛綱藤戸を渡る

鎌倉に公文所を置く

問注所を置く

を請ふ。頼朝、之を狩野氏に屬し、侍せしむるに二姫を以てし、酒食を餽る。平族の未だ夷がざるを以て、輒く殺さゞるなり。

是月、土肥實平をして、山陽道を鎭撫せしむ。六月、奏し請ひて、範頼を參河守に任じ、從五位下に叙す。範頼來りて鎌倉に謝す。置酒して之を勞す。八月、復遣して西征せしむ。是月、法皇、義經を以て左衞門尉に任じ、檢非違使に補す。時に伊賀の人亂を作し、平氏に應ず。州の守護平賀維義、討ちて之を平ぐ。餘黨京師に竄匿す。義經捕へて之を斬る。九月、頼朝、範頼を以て西海の軍事を統べしめ、義經に南海の軍事を統べしむ。範頼をして先づ發せしむ。三萬騎を以て、山陽道を下る。平行盛の兒島に軍するを聞きて、赴き攻む。藤戸に陣し、海水を阻て、敵を望む。敵之を招きて戰を挑む。我が兵渡る能はず。佐々木盛綱、潛に土人に問ふに津を以てし、夜與に俱に濟り、竹條を植て、標として還る。旦日、敵復戰を挑む。盛綱馬を躍らし、濤を破りて進む。衆之に從ふ。擊ちて行盛を走らしむ。進みて周防に入る。是月、義經を從五位下に叙し、院の昇殿を聽さる。十月、頼朝公文所を置き、大江廣元を別當と爲し、以て政令を出す。問注所を置き、三善康信を執事と爲し、以て訟獄を決せしむ。將士に令じて曰く、「凡そ武門の事は、悉く法皇の旨を奉ず。不便なる者ならば、徐に之を分疏せよ」と。遂に奏して曰く、「方今、天下半定り、貢賦闕乏す。請ふ、國守を簡擇し、流民を撫輯せしめ、京畿の控弦の士は、悉く義經に從ひて、西して平氏を討たしめ、其功ある者は、宜しく臣に附し論じて賞せしむべし。僧徒の兵を帶ぶる者は、宜しく臣に附し禁止して收取せしむべし。又關西の諸族に檄し、平氏を攻むるを、援けしむべし」と。

文治元年正月、範頼、赤間關に至る。舟の濟るべき無し。軍疲れ、糧乏し。將士皆東に歸らんことを思ふ。範頼書を以て軍食を濟さんことを請ふ。頼朝答書し、因りて範頼を戒めて曰く、「軍に在りては務めて衆心を綏撫し、愼みて左右に耳語し、其危疑を致す勿れ。乃進み戰ふに至り、愼みて先帝、太后を犯す勿れ。願くば二位尼をして帝を奉じて至らしめんことを。宗盛は恇怯なり。必ず之を生得せよ」と。範頼、臼杵氏に諭し、

文治元年頼朝命を範頼に傳ふ

【臼杵氏】帳隆豐後の人

【木上氏】遠隆周防の人

三浦義澄

戰艦を給し、木上氏に糧食を餽らしむ。遂に進みて海を濟り、千葉常胤に諮りて曰く、「吾れ之を家兄に聞く、周防は京畿に通じ、宰府を控へ、西國の咽吭なりと。吾れ今智勇にして衆ある者をして、居守せしめんと欲す。誰か可なる者ぞ」と。對へて曰く、「三浦義澄、其人なり」と。乃義澄に命ず。固く辭すれども許さず。範頼諸車を以て海を濟る。二月、頼朝給する所の糧船至る。軍益振ふ。原田種直と葦屋浦に戰ひて大に之を破り、其子賀摩を得る。

義經京師を發し西向す

【渡部】攝津逆櫓

是より先、義經數南海を征せんと請ふ。法皇、京師に賊黨多きを以て許さず。先づ其將校を遣すことを許す。義經奏す、「日を曠くし久きに彌り、範頼糧盡き東に歸りて、鎭西の兵士寖く平氏に屬かば、則勢拔き難からん」と。乃之を許す。義經乃戎服して法皇の宮に抵り、白して曰く、「平氏關西に奔竄せしより、官税を奪ひ官民を亂すこと、麌にして、後已まん。否らざれば、後王城に入らじ」と。二月、京師を發し、渡部に艤す。東兵水戰を習はず。人々自危む。梶原景時曰く、「請ふ、逆櫓を爲さん」と。義經曰く、「何を逆櫓と謂ふ」と。曰く、「舳艫、皆櫓を設けて、進むに舳を以てし、退くに艫を以てす」と。義經曰く、「進むを求めて退くは、兵の通患なり。乃退くを求めんと欲するか」と。曰く、「宜しく進むべくして進み、宜く退くべくして退くは良將なり。進む有りて退く無きは、野猪にして介する者のみ」と。義經色を變じて曰く、「猪か、鹿か、吾れ自知らず。吾れ唯進みて敵を勦して快と爲するを知るのみ。公若し大將と爲らば、逆櫓千百も公の爲す所を聽かん。義經の若きは、則欲せざるなり」と。衆景時を目笑す。景時慙恚す。義經遂に將士に命じて曰く、「進みて死せんとするは我に從へ。退きて生きんとする者は此より去れ」と。畠山重忠、熊谷直實、金子家忠、佐々木高綱等、從はんと願ふ者數百人。將に發せんとするに逆風俄に起りて、舟艦壞破せり。乃留りて艦を修む。艦成る。義經落宴に託言して以て糧食を具へ、即夜纜を解かしむ。時に風反つて益暴し、舟人肯せず。義經曰く、「風順なり。盍ぞ發せざる」と。伊勢義盛、弓を張り矢を注して曰く、「命を用ゐざる者は射殺さん」と。舟人相謂て曰く、「行くも死せん。止るも死せん。死は一のみ」と。乃發す。從ふ者五艦、百五十騎。獨り、炬を義經の舟に置き、暗に乘じて南す。舟駛きこと射るが如し。黎明に尼子浦に達す。岸上を望めば、赤幟あり、三百騎許り。義經令して曰く、「我が馬足瑟縮せり。直に用ゐる可らず。驅りて之を游がし、結束して騎れ。虚發して以て箭を費す勿れ」と。衆之に從ふ。岸に上りて大に戰ひ、敵將田口良連を擒にす。其捕虜言ふ、「櫻間良遠、兵五十を以て、勝浦城を守る」と。義經馳せて城に抵り疾く攻めて之を拔き、進みて中山に至る。一卒の書を齎すを見る。京人なり。義經問ひて曰く、「子は何に之く」と。曰く、「屋島に之く」と。義經曰く、「吾れは阿波の人、内府の徵に應ずる者なり。源氏淀河に艤すと聞くが如し。子必途に之を觀ん。其兵幾何ぞ」と。卒曰く、「六萬可り」と。曰く、「子の齎す所は誰の書ぞ」と。曰く、「吾れ焉ぞ之を知ることを得の書なり。夫人は内府の妹なり」と。曰く、「書中何をか言ふぞ」と。曰く、「吾れ焉ぞ之を知ることを得ん。獨り我に口授して曰く、『九郎既に京を發せり。彼は眞に畏るべき者、木曾の鬼神の如きを以てすら、彼れ一舉にして之を取る。君急に城を修め、兵を集めて、以て之が備へを爲せよ』と。書辭も亦是の如きみ。公等の若きも、亦宜しく亟に之に赴むくべし」と。曰く、「諾、且子屢屋島に赴くか」と。曰く、「然り」と。曰く、「其城甚固しと聞く。然るや否や」と。曰く、「否、潮來れば則舟を須る、潮去れば騎渡すべし」と。義經乃叱して曰く、「吾は九郎なり」と。其書を奪ひて、卒を樹に縛り、五十騎を以て疾く馳す。明日、屋島に至り、火を高松里に縱つ。平氏大に驚き、以て大兵至ると爲し、族を擧げて舟に乘る。而して義經已に城下に至る。騎の能く屬せし者七人のみ。城兵平有國と云ふものあり。呼びて曰く、「大將は誰ぞ」と。伊勢義盛對へて曰く、「九郎判官なり」と。曰く、「是れ義朝の婢子、鐵賈に從ひて、陸奥に如く者か」と。義盛怒る。城兵嘲罵して已まず。金子家忠、弟の近範をして箭を注ぎ、罵る者を射殺さしむ。義經、敵が其寡單なるを知るを恐るゝや、乃火を縱ちて城を燒く。平氏の兵皆航し、更來りて岸に迫る。七騎担ぎ射る。我が兵後る者稍來り屬す。又州人藤原範忠といふ者あり。生兵數騎を以て來りて曰く、「臣の曾祖範明、

逆風に船を行る

尼子浦

【中山】阿波讃岐の國界

【六條夫人】攝政基實の妻

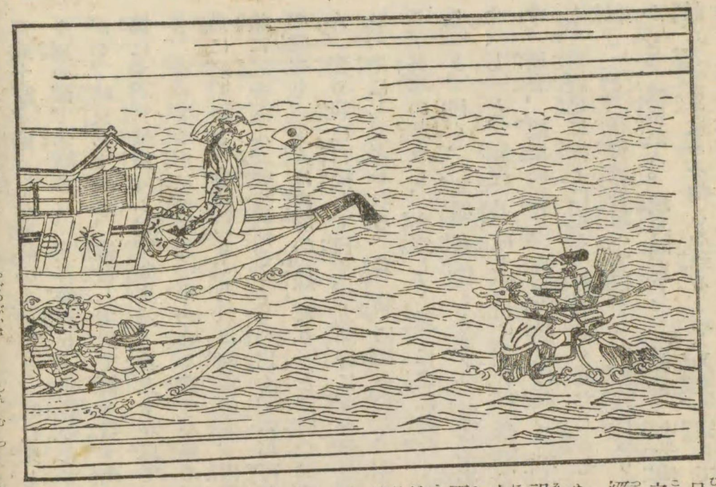
吾者九郎也

屋島を攻む

金子家忠

藤原範忠

嘗て八幡公に從ひて陸奥に戰ふ者」と。義經喜びて以て先鋒と爲す。戰ひて交退く。日既に晡なり。敵、一舟を以て美姫を載せ、扇を竿に挿みて、之を舳に植つ。陸を去る五十歩、麾きて射んことを請ふ。義經曰く、「誰か之に命中する者ぞ」と。衆、下野の人那須宗高を薦む。義經召して之に命ず。宗高騎して獨出づ。兩軍注ぎ視る。宗高一發して、扇轂を斷つ。扇翻りて墮つ。兩軍大に呼ぶ。



那須宗高

（那須宗高の的を射る圖）

義經弓を拾ふ

平氏の兵怒りて來り戰ふ。義經親ら擊ちて之を卻け、追ひて海に入る。其執る所の弓を波上に遺す。俯して之を取らんと欲す。敵兵爭ひて鐵搭を以て其胄に鈎す。義經刀を以て之を扞ぎ、鞭をもつて其弓を扱る。從兵呼びて曰く、「之を捨てよ」と。義經聽かずして、終に之を取りて還る。從兵曰く、「君何ぞ身を輕んじて弓を重ずるか」と。曰く、「不らず。吾が弓をして叔父鎭西八郎の弓の如くならしめば則可なり。否ざれば是れ敵に笑を貽すなり」と。宗盛、義經を失ふを憾み、教經をして精兵を率ゐ、岸に迫りて義經を射さしむ。佐藤嗣信身を以て義經を蔽ひ、輙仆る。教經の竪、菊王、舟を下りて、其首を斬らんと欲す。嗣信の弟忠信、射て菊王を殺し、兄を扶けて營に還る。義經親ら嗣信を視て、之を膝に枕せしめ、言はんと欲する所を問ふ。嗣信曰く、「臣、陸奥を出でゝより、已に身を君に委ぬ。君に代りて死す。死すとも且

佐藤嗣信、義經に代りて死す

不朽なり。獨君が敵を鏖にするを覩ざるを憾と爲すのみ」と。義經泣きて曰く、「我れ敵を鏖せんこと旬日に在り。而るに汝の勞に醻るに及ばず」と。嗣信、肯謝して絕ゆ。是日、鎌田光政も亦箭を被りて死す。義經僧を請ひて、光政、嗣信を高松に葬る。贈るに名馬を以てす。蓋し藤原秀衡の贐りし所にして、宇治、一谷の二役に騎りし所なり。一軍感泣して、皆義經の爲に死せんと思ふ。

西軍

東軍

是夜、西軍屋島の故趾に陣す。東軍高松に陣す。東軍皆倦臥す。獨、伊勢義盛、敵の來り襲はんことを慮り、徇警して明に徹ぶ。明日、義經晨を侵して、復屋島に赴く。西兵善く戰ふ。擊ちて之を破る。平氏走りて志度浦を保つ。義經追擊して、復之を破る。降將の言に因り、平氏の將田口成能が其子成直を遣し、兵三千を以て伊豫を徇ふと聞き、伊勢義盛に命じて、往きて說きて之を降さしむ。義經其兵を併せ、成直をして書を作り、成能を招かしむ。成能終に款を送る。

志度浦

【降將】田口良連

平氏の船、志度を逃れて西す。義經、陸に循ひて之を追ふ。東軍の風に阻てられ、後れて發する者、悉く來り屬す。軍益振ふ。時に三月二十三日なり。

壇浦

宗盛、鎭西に赴かんと欲す。範賴三萬騎を以て豐後に軍す。平氏入る能はず。還りて壇浦に泊す。兵艦凡五百艘、熊野湛增、河野通信、皆來りて義經に附く。明日、義經兵艦七百艘を以て、大に海上に戰ふ。西兵殊に死して戰ふ。我が兵少しく卻く。義經衆を勵して進む。和田義盛挺んで、進み射る。箭二百歩を軼ぎて、平知盛の船に及ぶ。知盛、新井親淸をして答射せしむ。箭義盛の冑を汰し、其後騎を傷つく。我が軍之を羞づ。義經、安田義遠に命じて還射せしむ。義遠其箭を採りて曰く、「幹短く且弱し、請ふ我が箭を以てせん」と。乃十四拳の箭を注ぎ、親淸の胸を洞きて、海を過ぐる三十歩。義遠は義定の弟なり。義盛慙憤して、敵に迫りて亂射す。殺傷甚多し。義經、成能の言を以て、宗盛等の所在を知り、軍を麾きて之に萃り、成能をして內應を爲さしむ。西軍大に敗る。教經怒りて、我が船に入り、義經に薄る。義經躍りて別船に入る。教經及ぶ能はず。乃海に赴きて死す。知盛以下六人、前後皆死す。二位の尼、養和帝を懷きて海に投ず。平

安田義遠

教經、知盛以下死す

太后繼ぎて投ず。我が兵、搭して之を得たり。義經徇しめて曰く、「海に赴く者は貴人なり。我が兵、辱むるを得る勿れ」と。

宗盛を擒にす

是に於て、太后以下を其船に奉ず。遂に宗盛を生擒し、平氏の軍を鏖にす。海水之が爲に赤し。四月、東軍振旅す。俘獲を以て旋り、之を京師に徇へ、鏡璽を還し納る。範頼留りて西海を鎭す。六たび月を閱して乃還る。

頼朝の使者實平景時

宗盛

頼朝、使一名を遣して西せしめ、兵士の侵掠を禁じ、事大小と無く、一に朝旨を奉じて行はしむ。將士其奏に因らずして、衞府官を拜せしものは、東歸を許さず。詔して頼朝を從二位に叙せらる。

五月、宗盛父子を鎌倉に檻致す。義經護送し、行きて内海に至り、父子をして徒行し、義朝の墳を七匝せしむ。六月鎌倉に至る。是に於て、頼朝大に諸將士を會し、自ら簾内に座して、宗盛を前舍に延き、比企能員をして之に言はしめて曰く、「頼朝、敢て私仇を復するに非ず。乃王命を成すのみ。今日の臨、何ぞ幸甚なる」と。宗盛慴伏して、死を宥されんことを請ふ。許さず。諷して自殺せしめんとすれども解せず。乃復護送して西に還らしむ。宗盛を更めて、末國と名づけ、貶して讃岐權守と爲し、之を篠原に斬り、首を京師に傳へて、右獄に梟す。平重衡を南都に斬る。大納言平時忠を流に處す。

【篠原】近江宗盛の首を梟す

義朝贈官

八月、詔して、使をして義朝の墓に就きて、内大臣正二位を贈らしむ。是月、頼朝奏し請ひて、同姓五人を以て東國の諸守に補す。特に詔して義經を伊豫守に任じ、院廐別當を兼ね、京師に宿衞せしむ。

【諸守】山名義範を伊豆守に大内惟義を相模守に足利義兼を上總介に遠元信濃守に安田義資を越後守に梶原景時

初め頼朝、西征の大將を撰み、諸弟の材を試んと欲し、陰に火を以て盥器を烙り、而して諸弟をして更に侍して執らしむ。執れば輙驚き釋つ。獨義經盥を終るまで釋てず。神色自若たり。頼朝是を以て、其事に堪ふるを知りて、心陰に之を畏る。梶原景時、寵あり。義經の軍を監するや、義經與に事を諮らず。景時怒りて範頼に屬す。畠山重忠、初め範頼に隷す。景時の寵を負みて人を凌ぐを憎み、去りて義經に屬す。景時益怒り、寖之を頼朝に讒す。頼朝、性忌克なり。平廣常、源忠頼、皆驕傲を以て誅殺せらる。義經も亦功を負み、自ら專にするを聞くや、稍之を惡む。景時又逆櫓の議を爭ひ、相啣むこと益甚し。壇浦の役に先鋒爲らんと請ふ。義經聽さずして自、先んず。景時諮罵すること已まず。義經怒りて之を誅殺せんと欲す。景時刀を撫して曰く、「我れ鎌倉公あるを知るのみ」と。諸將間に居り、事乃解く。景時、鎌倉に歸りて百方之を讒す。

景時義經を頼朝に讒す

平時忠、平氏の疎屬たり。其西奔に從ひて、竊に謀畫を贊く。其擒に就くに及びて、簿書一篋あり。義經に收めらる。時忠、其子と之を奪還して、以て禍本を除かんことを謀り、乃女を以て義經に妻す。義經、乃其篋を還す。頼朝、聞きて之を惡む。頼朝方に一男を舉く。而して其外舅北條時政を親信す。諸の骨肉皆猜防せらる。義經東し、俘を鎌倉に獻ぜんとし、腰越の驛に至る。頼朝入るを許さず。時政をして出でて俘を受けしむ。義經、乃書を大江廣元に寄せ、自訴して曰く、「義經征討の勞に代り、上は國賊を夷げ、下は家恥を雪ぎ、心竊に褒賞を期したり。圖ざりき、忽讒言を蒙り、日を此に曠せんとは、以て自ら明にする莫し。徒涕泣するのみ。將に永く恩顔に違ひ、骨肉誼絶せんとす。先人の再生に非ざるよりは、誰か爲に分疎せん。義經幼孤のとき、母に從ひて逃匿し、諸國に流寓して、氓隷の爲に役せられ、未だ嘗て一日も安居せず。然して幸慶忽會ひて、重任を忝くするに至る。或は馬を峻阪に策ち、或は風を大海に凌ぎ、敢て軀命を顧ず。以て冤魂を慰し、宿憤を伸べんと欲す。豈他あらんや。既に五位尉を辱くす。榮顯何ぞ加へん。而るに忽ち此厄に遭ふ。憂深く、悲切なり。敢て誓書を上り、之を百神に要す。而れども威猶霽れず。公の救護を仰がざるを得ず。伏して願くは間に乘じて進み說んことを。庶幾くは其他なきを亮し、卒に恩宥を蒙り、終身の安きを享るを得ん」と。廣元報ぜず。義經怏々として西す。頼朝其怨望を聞くや、怒りて其邑を奪ふ。

義經腰越より書を廣元に寄す

腰越狀

時に行家京師に匿る。義經潛に相往來す。頼朝、梶原景季を遣し、義經に命じ、行家を討たしめ、且之を伺はしむ。義經病と稱して、間日乃景季を見る。景季反りて其病羸の狀を言ふ。景時曰く、「兩日間、寢食を

頼朝怒りて義經を擊たんとす

【平虜女】平時忠の女

南部僧昌俊

【七大寺】東大、興福、西大、元興、大安、藥師法隆

義經、昌俊を詰る靜

昌俊敗走す

廢して、以て病を裝ふのみ」と。頼朝、乃諸將を召し、言て曰く、「誰か我が爲に九郎を擊つ者ぞ。九郎も亦我が知に負かざるのみ。而れども我に先ちて昇殿し、我に告げずして五位尉と爲る。車服華侈にして、院中に翺翔す。儀君寵ありとも、何ぞ自ら遜せざる。壇浦の役に太后と舟を同くし、又平虜の女を娶る。横恣此の如し。誅鋤せざるを得ず。誰か我が爲に九郎を擊つ者ぞ」と。衆敢て答ふる莫し。頼朝憚ばず。乃景時に命ず。景時辭して曰く、「判官素より臣に惡し。臣往かば判官必之を備へん。其意外の者を遣し、之を襲ふに若かず」と。乃昌俊に命ず。

昌俊といふ者は南都の僧なり。事に因りて鎌倉にあり。勇傑を以て親近せらる。是に於て、計を授けて西せしむ。京師に至り、義經の堀川の第を去ること四町にして舍す。義經、其亟に來り謁せざるを尤め、召して之を詰る。對へて曰く、「臣が此行七大寺に詣す。事を畢へて然る後謁せんと欲するのみ」と。義經笑ひて曰く、「否、二位の旨を以て我を圖るに非ざるを得んや。吾れ先づ發す可らず」と。昌俊誓書を献じて、舍に歸る。怯と爲さんことを恐る。且汝は兄氏の使者なり。吾れ今汝を囚へんと欲すれども、顧ふに人の我を謂て義經、幸する所の舞姫を靜と曰ふ。昌俊を窺ひて、義經に言て曰く、「彼れ將に去らんとするとき、第中を四顧して目を厩に注ぐ。恐らくは異志あらん」と。義經意と爲さず。昏に及ぶ。又告げて曰く、「大遠塵起り、人行くこと距躍たり。虞らざるべからず」と。二童をして往きて昌俊の舍を詗はしむ。久しくして還らず。又婢を使せしむ。婢走り還りて曰く、「童、門に駢死す。門内に鞍馬五十匹可り、士、甲を擐ぬき將に騎らんとす」と。

夜、既に三鼓、第外大に譟し。第に直する者僅に七人なり。靜急に鎧を取りて義經に被らしむ。義經門を開かしめ、騎して突出す。呼びて曰く、「今日に在りて誰か敢て義經を圖る者ぞ」と。昌俊、兒玉の黨六十餘騎と散じて亂れ射る。義經の從士變を聞き四より至る。行家も亦來り救ふ。昌俊終に敗走す。義經徑に法皇の宮に詣る。箭冑に蝟集す。而して籠に在る者三つ。變を奏して還る。昌俊鞍馬山に逃る。山僧義經と故あり。索獲して之を獻ず。義經其誓に背くを誚む。對へて曰く、「誓ふ者は昌俊、襲ふ者は二位」と。義經怒りて其面を毆つ。曰く、「我が面は卽ち二位の面なり。我面を毆つは、是れ二位の面を毆つなり」と。義經之を壯とし、活して還らしめんと欲す。昌俊、速に死せんことを請ふ。乃之を斬る。義經、行家、遂に迫りて、頼朝を討つの宣旨を請ふ。

頼朝征討の院宣を下す

公卿皆義經を憚れ、權に之を許らんと欲す。獨藤原兼實肯せずして曰く、「頼朝の罪未だ討つに當るに至らず。且弟に命じて兄を討たしむ。之を如何と」。法皇遂に之を許す。義經の僕安達清經、常に頼朝の爲に義經を討つ。且日、將に長勝壽院を落す。報を聞きて曰く、「可なり」と。

【二兇】義經行家

義經を九國地頭に行家を四國地頭に補す

義經を搜索す

廣元策を建て守護地頭を置く

昌俊を捕へて斬る

禮を畢へて歸る。曰く、「彼れ吾が使を殺す。以て伐つべきなり」と。乃諸將を戒め、束裝せしめて曰く、「旦日、將に發せんとす」と。小山朝政以下五十餘人、卽夜に發せんと請ふ。乃以て先鋒と爲す。之に命じて曰く、「我未だ至らざるに及びて、彼の二兇を誅せよ」と。後五日、自鎌倉を發し、諸道に檄し、軍に途に會せしむ。義經之を聞き、法皇に詣りて、關西の兵を勅して己を援はんことを請ふ。法皇之を許し、義經を九國の地頭に、行家も四國の地頭に補す。十一月六日、義經、行家及び女婿源有綱等と、俱に西海に奔竄し、往く所を知らず。伊勢義盛、義經と訣れ、伊勢に歸りて、守護須藤經俊を襲ひ、敗れて鈴鹿山に匿る。

義經攻めて之を殺す。

頼朝、黄瀨川に至り、義經既に奔ると聞きて乃鎌倉に還る。朝廷宣して己を討たしむるを以て、寃を訴へて已まず。法皇、乃急に諸州に宣して、義經を索むれども、未だ獲ず。平氏の餘黨、又所在に竄匿す。天下騷然たり。頼朝之を患ふ。大江廣元策を建て、曰く、「方今大亂初めて平ぐ。關東は帥府に倚安すれども、姦豪諸道に伏匿し、隨ひて起り、隨ひて討つ。輒東兵を發すれば、則勞費量られず。民、誅求に苦しむ。今の計としては、國司に守護を置き、莊園に地頭を置きて、所在追捕せしむるに若くは莫し。則坐して定むべし」と。頼朝大に悅び、北條時政を遣し、京師を護衛せし

【四道】山陰山陽、南海、西海。
毎段五升を兵糧米とす
總追捕使

議奏十人

二年賴朝書を議奏官に送る

【九國】相模伊豆、駿河、上總、下總信濃、豐後
【逋租】未納の租稅
三年閑院殿を修む
四年六條殿を作る
五年大内を修す
【鎌ヵ除鎌ヵ創】名

め、因りて之を奏請し、且畿内及び西南の四道に課し、段毎に五升、以て兵食に充てんと請ふ。朝議之に從ふ。賴朝、家人の功勞ある者を薦め、分ちて守護、地頭と爲し、而して身之を統ぶ。世因りて賴朝を稱して、八十六國總追捕使と曰ふ。

賴朝、素より兼實の賢を聞き、且、院宣を爭ひしを德とするや、之に書を貽りて曰く、「賴朝、平賊の熾んなるに當りて、孤身義を擧げ、功を奏するに至るを得て、敢て自專にせず。今亂人乃命を挾み柄を恃みて、敢て非分を規る。賴朝特に禍亂の端、復此より起るを恐る。近日、奏し請ふ所は、以て私を營むに非ず。乃の下の爲に亂を定むるのみ」と。因りて奏し請ひて、議奏官十人を置き、公卿を撰みて充つ。公卿以下東討天宣に預る者を按治す。

二年春、兼實遂に攝政と爲る。四月、賴朝、又書を議奏官に貽りて曰く、「僕武門に生れ、鄙野に長じ、朝章を諳知せず。偶奏する所あらば、願くば諸公之を簡び、專公兵を執りて、以て天下を安ぜよ。宣旨の如きに至りても、或は民の便ならざる有れば、亦當に言を盡すべし。面從するは忠に非ざるなり」と。時に北條時定、時政に代りて京師を護る。行家を和泉に、有綱を大和に獲て、之を斬る。

十二月、天野遠景を以て、筑紫の奉行となす。行家、義經の黨與、鬼界島に竄すと聞き、擊ちて之を平ぐ。是より先、賴朝奏して、比年、軍興り、民、農に任へざるを以て、其管内九國の逋租を蠲き、遂に其正稅を薄くす。而して諸國之に準ず。是歲、又倉を發して相模の窮民を賑はす。三年春、中原親能、大江廣元等を遣し、閑院殿を修む。時に輦下强盜多し。千葉常胤、下河邊行平を遣し、之を按ず。書を藤原經房に寓せて、亂賊を鎭壓するは二人に若くは莫しと稱す。二人京師に至りて、盜賊悉く平ぐ。

四年六月、六條殿を造る。

五年正月、正二位に叙す。三月、大内を修す。

七月、奏して陸奥の藤原氏を討たんことを請ふ。其義顯を舍するを以てなり。義顯は卽義經。綺を削り名を改めしなり。義經の京師を出づるや、舟に大物浦に上る。飈に遇ひて、行家と相失ひ、吉野に匿る。五日、山僧群聚して之を捕へんとす。佐藤忠信曰く、「臣の兄、既に命を屋島に授く。臣今亦、將に君に代りて死せんとす」と。乃伴り義經と稱して亂射す。義經、間を得て逃れ、多武峰に至り、又十津川に徙り、復還りて京師に匿る。忠信亦來り匿る。而して發覺し、吏卒と戰ひて終に自殺す。義經、乃妻の河越氏、及び辨慶等と道士の裝を爲し、北陸道に由りて陸奥に奔る。初め義經の妾靜、從ひて吉野に匿る。義經之を諭して訣別し、僕をして資を齎らし、送りて京師に歸らしむ。僕其資を奪ひて靜を棄つ。靜獨風雪の中を行き、山僧に獲へらる。北條時政に致し、これを鎌倉に送る。義經の所在を詰る。靜固く知らずと陳ず。其姙あるを以て之を留む。夫人政子、其歌舞を善くするを聞き、一見せんと欲す。靜病を引きて往かず。賴朝夫妻鶴岡の祠に詣で、靜を召し舞を命じ、簾を垂れて觀むと欲す。靜固く辭す。之を强ふること再三、乃起ちて場に上る。工藤祐經、皷を鼓ち、畠山重忠、銅拍子を擊つ。靜、衣を整へて進み、離別の曲を唱ふ。又歌を作りて義經を慕ふ意を言ふ。衆皆泣を垂る。賴朝色變じて曰く、「賤婢、我を頌するを肯ぜずして、敢へて亂人を慕ふ」と。之を誅せんと欲す。政子諫め止めて、纏頭を賜ひて之を罷む。祐經、梶原景茂等と俱に、靜の舍に就きて飲む。景茂は景時の季子なり。醉ひて靜に挑む。靜怒り泣きて曰く、「吾れ曾て豫州に侍しぬ。豫州は鎌倉公の親弟に非ずや。汝は乃公の家人なり。何ぞ吾れを遇する亡狀なる。公をして友道を全くせしめば、汝我が面を識らんと欲するを得んや」と。景茂大に慚づ。已にして分身し、男を生む。安達清經、命を受け、奪ひて之を戕す。靜放ち還さる。政子厚く賜ひて之を遣る。

初め賴朝、藤原秀衡が義經を舍するを聞き、其亂人を納るゝことを奏劾す。院宣もて秀衡を讓む。秀衡陳謝

【大物浦】攝津佐藤忠信

（源義經肖像）

義經陸奥に奔る

靜舞曲を爲す

秀衡死す

す。尋いで病みて卒す。子の泰衡等に遺言す、「二國を擧げて義經に聽き、以て頼朝に抗せよ」と。院宣ありて、泰衡をして義經を圖らしむ。泰衡疑惑す。是歳一月、頼朝奏して曰く「泰衡反者を庇ふ、罪、反と同じ。臣請ふ、王命を奉じて之を伐たん」と。因りて大に兵を徵す。四月晦、泰衡兵を遣し、衣川を襲ふ。辨慶、經春等奮戰して死す。義經手づから妻子を刄して自殺す。五月、泰衡乃使をして、義經の首の齎し、來りて鎌倉に獻ぜしむ。頼朝方に鶴岡の浮屠を落す。使をして之を途に止めしむ。六月、首至る。盛るに漆函を以てし、醇酒に之を浸す。和田義盛、梶原景時をして之を檢せしむ。或曰く、「義經死せず。匿れて蝦夷に在り」と。頼朝復推究せず。遂に奏す、「泰衡、險を負み、化を阻み、速に勅を奉ぜず。伐たざる可からず」と。朝議未だ許さず。而れども徵兵稍く衆る。頼朝之を大庭景能に諮る。景能曰く、「大將事に臨むときは、君命を顧ず。且泰衡の先世は、君の家人たり。君其罪を討つ、何づ勅允は須たん。兵を聚めて徒費を爲す、毋れ」と。頼朝之に從ふ。景能及び三善康信等をして、鎌倉を留守せしめ、分ちて三軍と爲し、常陸、下總の兵は東海道より進む。千葉常胤、八田知家、之に將たり。武藏、上野の兵は北陸道より進む。比企能員、宇佐見實政、之に將たり。畠山重忠を以て先鋒と爲す。東山道より直に陸奥に入り、多古に次す。小山政光迎へて之を犒ひ、入りて謁す。一甲士の侍するを見て、其名を問ふ。頼朝曰く、「此れ本朝無雙の勇士熊谷直家と云ふ者なり」と。政光曰く、「此輩の單進するは、臣等と異なる。故に名を成し易きのみ。士の君の難に赴く、何ぞ彼此あらんや」と。其子朝政、朝光を顧て曰く、「汝等も亦單進せよ」と。八月、頼朝進みて白河關に至る。泰衡、鞭楯に軍して、厚樫山の北に城き、庶兄國衡をして、精兵二萬に將として之を守らしむ。國衡の將金剛秀綱、數千人を以て先鋒を爲す。山下に大濠を穿ち、過隈河を引きて之に瀦す。頼朝、重忠をして赴き攻めしめ、卒を發し濠を塡む。朝光、軍を挺でて、加藤景廉等と進み擊つ。重忠繼ぎて進み、大に之を破る。秀綱退きて國衡に合す。日既に暮る。頼朝軍中に令す、「明日、城を攻めん」と。三浦義村、葛西清重、先登して數千人を斃す。三日に頼朝、自、進みて攻む。城、甚固し。國衡善く拒ぐ。

辨慶等死す
義經自刄す

頼朝陸奥を征せんとす

頼朝中軍に將たり

熊谷直家

【厚樫山】陸奥

朝光、景廉進擊す

死士七人險を冒して入る

朝政、朝光以下、皆殊死して戰ふ。呼聲地を動し、積鎌堆を成す。朝光、族の朝綱と、豫、死士七人を遣し、城後より險を冒して入り、大に呼びて射しむ。城兵、大兵夾み擊つと謂ひ、則大に亂る。國衡圍を潰して北に走る。和田義盛、弓を張りて之を追ふ。國衡も亦馬を回して射る。義盛、先づ發して其左膊に中つ。國衡傷き走る。重忠の部將大串某、追ひて之を斬る。朝光も亦追ひて秀綱を獲たり。泰衡敗を聞きて遁る。頼朝進みて國府に至る。東海道の軍は、敵將佐藤元治以下十八輩を斬りて、來り會す。頼朝、未だ泰衡の在る所を詳にせず。朝政等をして物見岡を攻めしめて、自誰母城を圍む。城兵皆降る。乃令を出して曰く、「我軍津雲橋に至らば、則敵之を平泉に避け、死を以て之を守らん。先鋒の諸將功を貪り、輕しく進み、吾が一士を傷くる勿れ」と。遂に諸軍を以て進み、連に栗原、三迫の諸寨を破り、遂に平泉に至る。泰衡、已に城に火して遁れ、使をして降を乞はしむれども許さず。九月、進みて陣岡に軍す。北陸の軍は念珠關を渡り、敵將の田河行文等を斬りて來り會す。兵總て三十萬騎、白旗空を蔽ふ。泰衡蝦夷に奔り、贄柵に至る。其將の河田二郎、泰衡を襲殺し、其首を持ちて來り降る。頼朝之を誚讓して曰く、「泰衡は吾が掌中に在り。何ぞ、若が力を須ゐんや。若、恩を忘れ、利を規る。大逆無道なり」と。乃之を斬る。命じて泰衡の首を梟す。而して宣旨適至る。乃進みて厨川に至る。泰衡の族、俊衡以下悉く出でゝ降る。頼朝、鎌倉を出でゝ四十餘日にして陸奥、出羽を平ぐ。乃其版籍を索む。皆兵燹に罹る。既にして實俊、實昌、州事を諳ずるを聞き、召して之を見る。其記せる所を圖せしめて、以て其戶口と阨塞とを知り、流民を復し、老人に賚ひ、浮囚を放ち、鹵掠を禁じ、糧を上野、下野より取り、毫も土人を累さず。乃國府に至り、其廳に大書して曰く、「國法は、一切に秀衡の舊に仍り、更革を得る勿れ」と。葛西清重をして、留りて州事を釐めしむ。使をして捷を奏せしめ、其擅伐を謝し、簿して將士の功を上り、請ひて二州の地を分予し、十月、鎌倉に還る。十一月、法皇其戰功を賞せんと欲す。大江廣元を遣して之を辭せしめ、請ひて陸奥の窮民に賑貸す。十二月、法皇頼朝を封ずるに、伊豆、相模を以てし、促して京師に朝せしむ。

誰母城

河田二郎泰衡を襲殺す

陸奥出羽を平ぐ

鎌倉に還る

建久元年

義兼、兼任と戰ふ

【兜眛山】陸奥

兼任殺さる

頼朝入朝

法皇に謁し帝に朝す

鎌倉に歸る

二年政所

三年法皇崩す

征夷大將軍

是より先、出羽の留守、邑を檢し、將に間田を廢せんとす。頼朝、之を禁止し、以て人心を安ず。已にして泰衡の舊臣大河兼任、出羽に在りて、數千人を聚め、詐りて源義經、木曾義高と稱し。建久元年正月、轉じて陸奥に入る。由利維平逆へ戰ひて之に死す。清重變を上る。使者謬り報じて曰く、「由利維平奔り、橘公成死す」と。頼朝曰く、「維平は奔る者に非ず。公成は死する者に非ず」と。之を驗するに果して然り。乃、上總介足利義兼をして、千葉常胤、比企能員と、兵を將ゐて之を伐たしむ。小山朝光以下陸奥に邑する者、道に之に會す。相模以西、兵を具へて命を待つ。脅從して降る者は斬る勿らしむ。二月、義兼等、兼任と栗原に戰ひて、大に之を敗る。兼任卻き、衣川を隔てゝ陣す。義兼等、流を亂りて又大に之を敗る。清重、州兵を率ゐて來り會す。兼任逃れて外濱に之き、兜眛山に壘す。義兼等圍みて之を鏖にす。兼任脫走して龜山を踰え、樵夫に斧殺せらる。頼朝、出羽の留守の政を失ふを責めて、甲二百を罰す。頼朝、天下全く定るを以て、乃、入朝を議す。重忠を前隊と爲し、常胤之に殿たり。十月、鎌倉を發し、海道より入朝す。途内海を過ぎ、義朝の冢に謁す。青墓に至り、女延壽を召す。是より先、延壽、頼朝の起るを聞き、其託せる所の刀、鬚截を返致す。是に於て相見て舊故を道ふ。十一月、京師に入り、六波羅に居る。先づ法皇に謁し、卽日、帝に朝す。帝、直に權大納言を授け、尋いで右近衛大將を兼ねしむ。法皇、之を待する甚厚し。入見する每に、漏數刻にして出づるを許さず。十二月、兩職を辭す。大功田百町を賜ふ。功臣十人を薦め、衛府官に拜す。藤原高能をして六波羅を留守せしめて、辭して鎌倉に歸る。凡往還需むる所、百姓を累さず。遠近悅服す。

二年正月、公文所を改め、政所と稱す。凡事、政所の下文を以て行ふ。二月、法住寺殿を修す。冬、法皇、弗豫。頼朝、齋戒して祈禱す。三年三月、遂に崩ず。頼朝因りて大に法會を張り、浴を民に施すこと一百日。七月、天皇詔して、頼朝を以て征夷大將軍とす。中原景能をして、就きて之を拜せしむ、頼朝曰く、「吾れ武臣爲り。敢て坐して王命を受けんや」と。三浦義澄をして天使を鶴岡の祠に迎へ、詔書を受けしむ。

四年

富士野獵

曾我復仇

【幕】將軍の座所

（頼朝の筆蹟）

【二孤】祐成時致

範頼、頼朝に忌まる

【參州】三河守範頼

範頼自殺す

其父、義に死せしを思ひて、以て之を榮するなり。四年正月、將士の坐次を定む。四月、那須野に獵す。五月、大に富士野に獵す。長子頼家從ふ。獵罷みて將に還らんとするに、伊藤祐成と云ふ者、弟時致と、夜、工藤祐經の舍に入りて、之を斫り殺す。雷雨に會ふ。士卒出でゝ鬪ふ。死せし者多し。遂に祐成を斬る。時致、幕を犯して捕へらる。旦日、頼朝親之を詰る。蓋し、祐成の父祐泰、嘗て祐經に殺され、其曾我の莊を奪はる。故に仇を復せしなり。頼朝問ふ、「何ぞ吾が幕を犯す」と。曰く、「吾が祖祐親、將軍之を仇とす。吾れ祐經を仇とす。將軍之を籠す。吾是を以て怨む」と。頼朝、之を壯なりとし、其死を宥さんと思ふ。祐經の子哀訴す。乃斬に處す。曾我の莊の租を復して、以て二孤の變、鎌倉訛傳す、「頼朝害に遭ふ」と。夫人駭き悲む。範頼曰く、「之を安ぜよ。範頼在り」と。頼朝聞きて之を惡む。初め義經、功を負み專恣なり。而して範頼、事辱に頼朝に稟る。義經反するに及び、範頼をして之を討たしむ。固く辭すれども許さず。將に發せんとして、入りて見ゆ。頼朝曰く、「汝も亦九郎の貳舞をなすもの」と。範頼大に懼れ、敢て發せず。誓書千通を獻ず。是に至りて又獻じ、大江廣元に就きて失言を謝す。頼朝、其誓書に、源範頼と署するを見る。曰く、「姓を稱する濫なり」と。使者之を辨ずれども釋さず。頼朝、夜、床下に人の氣息あるを聞きて、急に衛士を呼ぶ。結城朝光、床を發きて一人を獲たり。乃範頼の力臣當麻なり。曰く、「臣、參洲の憂迫するを視て、幕中の議を聞かんと欲せしのみ」と。之を掠治するに異辭なし。八月、遂に狩野氏に命じて、範頼を伊豆の修禪寺に拘す。其群臣相聚りて濱館に據る。兵を遣して之を夷ぐ。梶原景時、範頼を殺さんことを勸め、其手兵五百を以て之を襲ふ。範頼射て十餘人を殪し、火を縱ちて自殺す。

五年 安田義定

六年 東大寺

七年

八年 九年 頼朝薨す

正治元年

頼家 【狎臣五人】 小笠原長經、和田朝盛、比企三郎、中野能成、細野四郎、千幡

義盛以下景時を罪狀して之を討たんとす

五年八月、安田義定も亦殺さる。義定の子義資、嘗て頼朝の侍女を挑み、景時に發かれて、斬に處す。義定、座して免ぜられて、憤怨す。其反を告ぐる者あり。是に於て之を殺す。

六年三月、頼朝、政子、頼家と、南都に赴き、東大寺を落す。寺、嘗て平氏に燒夷せらる。法皇之を修む。

頼朝、爲に其資を給し。僧文覺をして役を司らしむ。慶するに馬千匹を以てす。遂に京師に朝し、月を踰えて歸る。

時に平賀義信、武藏の地頭たり。百姓之を便とす。頼朝、其廳に揭げて曰く、「凡國を守る者、當に義信に則るべし」と。八月、東國の地頭に令して、「姦盜を匿す者あらば、皆其職を奪ひて、以て捕獲する者に予へむ」と。七年六月、平知忠といふ者、兵を京師に聚め、頼朝の妹夫藤原能保を襲はんと謀る。能保、初め頼朝に請ひて、後藤基清を延きて自ら衛る。是に於て、基清、知忠を攻殺す。平氏の餘黨、是に於て、悉く平ぐ。

八年十二月、頼家、從五位上に叙せられ、右近衛權少將と爲る。九年十二月、稻毛重成、相模川の橋を修む。

頼朝、親臨みて、之を落す。歸るとき、馬より墜ちて疾作る。明年正月、遂に薨ず。年五十三。

頼朝、年三十三のとき兵を起し、六歲にして平氏を夷げ、天下の兵馬を握ること十五年。乃沒す。詔して頼家を以て右近衛權中將と爲し、天下の守護地頭を總べしむ。是歲、正治元年なり。頼家年十八。北條時政、外祖を以て政を執る。頼家をして、親訟を聽かしめず。獨、其狎臣五人と游處し、寢、淫縱なり。母の政子驟之を戒むれども悛めず。時政、聞知せざるが如し。

頼家、弟あり。千幡と曰ふ。頼朝に愛せらる。嘗て之を懷中に置き、宗族の諸將を召して、これを囑す。小山朝光與る。頼朝薨ずるに及びて、朝光爲に髮を削らんと欲す。遺託あるを以て、未だ果さず。一日、衆に其意を言ふ。梶原景時、之を頼家に讒して曰く、「朝光『忠臣二君に事へず』の語あり。恐くは異志あらん」と。朝光聞きて自ら危み、計を三浦義村に問ふ。義村は義澄の子なり。固より朝光に善し。乃和田義盛、安達盛長以下六十六人と、俱に景時を罪狀して、大江廣元に因りて上る。廣元其和解を欲して、敢て上らず。義盛

二年 景時擧族西奔して殺さる

直實京師に入る

建仁元年

板額

頼家征夷大將軍となる

（源頼朝肖像）

廣元を促がす。廣元、實を以て對ふ。義盛之を責む。乃上る。頼家、其疏を以て景時に示す。景時、其邑、一宮に奔る。何も無くして、潛に鎌倉に返る。頼家、義盛等に命じて之を逐ひ、其弟を毀たしむ。景時邑に據りて兵を聚め、武田有義を擁して、將軍と爲さんと欲し、京師に至り、關西の兵を擧げんと約す。有義といふ者は信義の子なり。二年正月、景時、族を擧げて西奔す。頼家、兵を遣して之を追ふ。景時狐崎に至る。土豪吉香某に鑿殺せらる。衆之を快とす。景時、頼朝の世を終るまで、信寵衰へず。建久中、熊谷直實、久下直光と、疆を爭ひて訟ふ。直實、口訥にして辨ずる能はず。怒りて曰く、「景時、直光に黨す。臣望む所なし」と。走り出でゝ刀を拔き、髮を斷ちて、西し、京師に奔る。頼朝、人をして之を遮り止めしめ、而して景時を問はず。義盛、疾あり。

其兵拒ぎて之を卻く。賊、上皇の宮を圍みて、頼家を討つ。宣を請へども許さず。奔りて吉野に匿る。頼家令を下して急に索む。二月、獲て之を誅す。長茂の姪資盛、鳥阪に據りて反す。頼家、佐々木盛綱に命じて之を伐たしむ。盛綱、適出でゝ、其門外にあり。命至る。家に入らずして發し、三日にして鳥阪に至る。其子盛季、先登す。資盛逃れ亡ぐ。其姑を板額と曰ふ。醜にして力多く、善く射る。遂に虜へられ、送られて鎌倉に到る。安田義遠、之を娶らんと請ふ。頼家、其意を問ふ。對へて曰く、「勇士を生ましめ、以て君に益せんと欲するのみ」と。頼家笑ひて之を聽す。

頼家、累遷して是歲七月、終に征夷大將軍を襲ひ、從二位に叙す。

五月、「叔父の全城、阿野に在りて謀反す」と告ぐる者あり。武田信光をして捕へしめ、之を常陸に放ち、尋い

一幡
千幡【其女】若狭局一幡の母能員政子
仁田忠常
頼家修禪寺に幽せらる
実朝將軍となる
頼家殺さる

で八田知家に命じて、之を殺さしむ。
是時に當りて幕政大小となく、皆時政に決す。其族黨、一府に半なり。頼家、制を受け、心平なる能はず。
八月、頼家疾あり。政子、時政と議し、總守護を其長子一幡に傳へしめ、而して關西三十八州の地頭を割き
て、以て千幡に予へんとす。一幡の外祖比企能員、其女に因り、頼家に謂て曰く、「近日の議、權を分ち、爭
を起す。不便これより大なるはなし」と。頼家も亦北條氏の爲す所を憤り、密に能員を臥内に召して、與
に事を議す。政子、耳を障外に側てゝ之を聞き、人をして馳せて、時政に告げしむ。時政、其黨と之を謀り
甲を伏せて、事に託して能員を召す。能員の子弟皆曰く、「往く毋れ。卽し往かば、兵を以て自ら備へよ」と。
能員曰く、「是釁を啓くなり。彼れ何ぞ他意あらん」と。遂に往く。甲起ちて之を殺す。從者走り歸りて、之
を其子宗員に告ぐ。宗員、族を擧げて一幡を奉じ、小御所に據る。時政、長子義時を遣し、諸將を率ゐて之
を攻めしむ。宗員等、奮擊して之を卻く。畠山重忠、兵を選みて疾く攻む。宗員、力盡き、弟を焚きて自殺
す。遂に悉く其族を夷げ、幷せて一幡を殺す。諸の能員と親善なる者は、皆誅竄せらる。頼家、病間に變
を聞きて、大に恨怒す。時政、罪を仁田忠常に歸して之を殺す。忠常は能員を刄せし者なり。既にして「頼
家、忠常と己を圖る」と宣言し、遂に頼家に迫りて髮を削らしめ、之を修禪寺に幽し、千幡を以て之に代ら
しむ。頼家、幽囚せられて無憀なり。書を母と弟とに寄せ、故の近臣數人を得て、己に侍せしめんと請ふ。
答へずして、三浦義村を遣し、之を視察せしめ、其書を通ずるを禁ず。
明年七月、時政、人を遣し之を圖る。頼家の矯捷なるを憚れ、其浴を候ひて之を圍み。絙を飛し、首を約し
て、以て之を殺す。年二十三なり、子の一幡、先だちて卒す。
猶二子あり。長は四歳なり。政子、千幡をしてこれを養はしめ、遂に僧と爲す。公曉と曰ふ。次は千壽丸と
曰ふ。中務丞に養はる。
千幡、十二歳にして立つ。詔して從五位下に叙し、征夷大將軍を襲ひ、名を實朝と賜ふ。北條氏の第に居る。

元久元年
平賀朝雅
畠山重忠
重忠戰死す
閏七月
北條氏專ら幕府を掌る
頼家、實朝

令を下し、諸將を按撫し、誓を京畿、西國の將士に徵す。武藏守平賀朝雅を遣し、關西の地頭を率ゐて、京
師を監護せしむ。
元久元年三月、伊賀、伊勢、盜起る。伊賀の守護須藤經俊逃れ走る。實朝、朝雅をして之を討たしむ。盜魁
平基度と平盛時とを獲たり。乃、經俊の職を奪ひて、朝雅に授く。朝雅は、義信の子なり。畠山重忠と、
皆時政の女を娶る。而して朝雅の娶る所は、其後妻牧氏の出なり。故を以て、時政偏して朝雅を愛し、寢
重忠を惡み、終に之を殺さんと欲し、誣ふるに謀反を以てす。二子義時、時房をして、重忠の子重保を其
弟に攻め殺さしむ。時に重忠、其邑にあり。時政、人を遣し紿き告ぐ、「鎌倉難あり。宜しく赴き援くべし」
と。重忠、卽、百餘騎を從へて發す。中途にして、大兵、野を蔽ひて來るを望見して、始めて其實を知る。
部下、交、其邑に據りて兵を聚めんことを勸む。重忠、肯ぜずして曰く、「吾れ梶原景時のごとく、苟しくも免れ
て譏を貽すに倣はず」と。奮戰し、箭に中りて死す。重忠の族、稻毛重成、榛谷重朝等、同日に皆斬らる。
重成、初時政に媚びて、重忠を構陷し、而して終に時政に殺さる。北條氏、重忠を忌むこと日久し。重忠、
勇にして衆あり。頼朝に從ひて、常に軍鋒たり。而して性忠厚にして人と功を爭はず。頼朝、深く其長者な
るを知り、後事を委託す。而して、北條氏に陷れらる。天下之を寃とす。七月、畠山氏の邑を分ちて、以
て將士を賞す。
實朝、時政の第に在り。時政、終に實朝を弑して朝雅を立てんことを謀る。因りて兵を聚む。事覺る。閏月、
政子、諸將を遣し、實朝を義時の宅に遷す。兵皆從ひ歸す。義時、終に時政夫妻を北條里に徙し、京師の將士
をして朝雅を誅殺せしむ。是時に當りて、諸豪傑千葉常胤、土肥實平等、皆老死し、佐々木高綱、熊谷直實、
前後して逃れ隱る。獨、北條氏、專ら幕府の事を掌る。而して實朝、其成を仰ぐ。實朝、性文事を喜び、
文章博士源仲章を師とし、和歌を中納言藤原定家に學ぶ。而して武技は頼家に及ばず。然れども頼家は荒
淫にして、安達景盛の妾を奪ひ、景盛を殺さんと欲するに至る。頼朝、諸將を召呼するに、敢て之を名いは

ず。賴家、輙、之を名いふ。平知康等技藝を以て進み、寵を負み、人を凌ぐ。將士憤怨す。實朝、人と爲り優柔にして、將士に愛せらる。

義時の專政

初年、將士に令して、各賴朝の下したる文書を獻ぜしむ。爾時、授けし所の地頭は、職を褫はず。賴朝、賴家の世より、數守護、地頭の吏務に干與し、分外を侵し取るを禁ず。是に至りて、又其下文を徵し、恩勳の殊なるを辨じ、結番して追拂せしめ、使者を遣し管內を行りて、吏民の寃枉を問はしむ。然れども政權は義時に在り。實朝、日夜、文士と飲宴して、歌詠に耽溺し、外事を問はず。義時、益專なり。

建保元年

建保元年、信濃の人泉親衡、故の賴家の子千壽丸を奉じ、兵を起して義時を討たんとす。僧の安念をして諸將に說かしむ。諸將應ずる者多し。義盛の二子義直、義重、姪の胤長等與かる。次に千葉成胤に至る。成胤肯ぜず。安念を執へて之を義時に送る。義時、家臣金窪行親、安藤忠家をして、之を鞫せしめて、狀を得たり。兵を遣して親衡を執ふ。親衡、姓は源、經基の子滿快の遠孫なり。勇力あり、吏卒數十人を殺して逃る千壽、髮を削り京師に匿る。義直等、虜に就く。是の時義盛、上總にあり。馳せ歸りて謁し、二子を贖はんと請ふ。義盛、實朝に親信せられ、特に命を受け、結城朝光と並びに衞兵を統ぶ。是に於て其請を聽す。義盛大に喜びて出づ。旦日、其族九十八人を以て幕府の南庭に列し、大江廣元に因りて、胤長を赦さんと乞ふ。義時、素より其强宗を忌み、激して之を除かんと欲し、行親、忠家に命じて胤長を縛し、義盛の前を過りて之を吏に屬し、陸奥に放つ。義盛、慙忿し門を塞ぎて出でず。胤長の第、便地にあり。之を得んと欲する者多し。義盛、實朝に請ひて、人を遣しこれを守らしむ。義時、請ひて之を奪ひ、守者を逐ひ、割きて行親、忠家に與ふ。義盛、大に怒り、遂に北條氏を滅さんと欲し、日夜宗黨を會して之を謀る。謀泄る。幕府の使者來りて之を問ふ。義盛、他なきを陳謝す。使者、微に其子弟の兵を閱する狀を見て、還り報ず。令あり、兵を徵し、更に使者を遣して義盛を誚む。義盛、乃、對へて曰く、「老夫、故將軍の殊恩を受く。豈敢て反を謀らんや。獨、兒輩、義時の專恣を憤り、往きて狀を問はんと欲す。老夫、之を諭す。而れども聽かざる

義盛怒りて北條氏を滅さんことを圖る

義盛、義時、廣元の第を攻む

義秀

義盛死す

建保二年

なり」と。遂に百五十騎を以て、分ちて三隊となし、分れて義時、廣元の第を攻め、而して急に幕府に赴き、實朝を取らんと欲す。其族三浦義村、弟胤義と、北門を守るを約して、意中より變じ、走りて義時に告ぐ。義時、廣元と北門より入る。義盛、隨ひて之を圍む。三子義秀、門を排して入る。向ふ所、皆破る。足利義氏と遇ひ、其甲袖を擢む。義氏、馬に鞭して濠を躐ゆ。袖斷つ。義秀、土屋義淸、古郡保忠と俱に奮擊す。一府中皆辟易す。火を縱つ者あり。煙焰天に滿つ。義時、廣元、實朝を挾みて、之を法華堂に避く。接戰すること一晝夜。黎明、義盛の兵疲れ、退きて前濱に軍す。橫山時兼、族を擧げて來り援ふに會ひ、三千騎を得て、軍復振ふ。近國の兵、變を聞きて來り聚る。義時之を召す。疑ひて至らず。實朝の敎書を請ひて之を示す。乃、至る。既にして義直戰死す。義盛泣きて氣沮す。終に江戶能範に射殺され、七子皆死す。義秀、五百人を以て、海に航して逃る。義時、和田氏の邑を分ちて、以て將士を賞す。二年六月、旱す。實朝、齋戒して經を誦す。既にして雨ふる。東國の租稅を減ず。

六年

十一月、義盛の遺臣、千壽を奉じて、兵を京師に聚め、事覺る。大江氏の卒、之を攻殺す。十二月、實朝、僧に命じて法會を修む。曰く、「疇昔、義盛、族を率ゐ、我が前に群至せしを夢む。吾れ爲に其冥福を修むるなり」と。

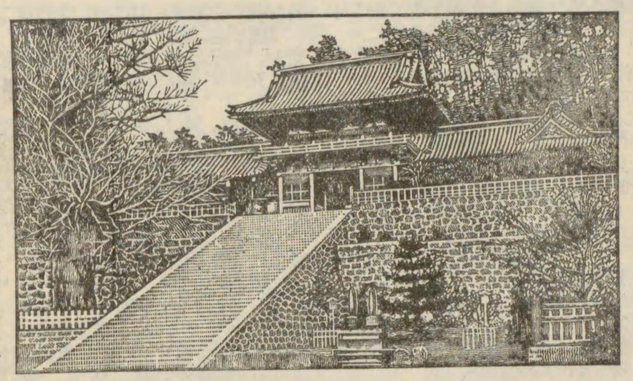
廣元、實朝の昇位を諫む

是より先、實朝已に正二位に累叙し、權中納言に任ぜらる。六年、累遷して權大納言に至る。三月、右近衞大將を兼ぬ。大江廣元、從容として言て曰く、「將軍、慶を來裔に貽さんと欲せば、宜しく滿盈を戒むべし。盍ぞ諸官を辭し、獨、征夷將軍を帶び、高年に及びて、然る後、大將を求めざる」と。實朝曰く、「吾れ卿の言ふ所を悅ばざるに非ず。然れども吾れ念へらく、源氏の正統、今日に縮る。子孫を慮る可からず。吾れ飽くまで官職を取りて、以て家聲を擧げんと欲す。子孫を慮るに暇あらざるなり」と。廣元、言なくして退く。

是より先、宋の佛工陳和卿、來りて大和に在り。實朝、召して之を見る。和卿自ら實朝の前生を知ると稱

實朝宋に行かんとす
鶴岡別當公曉

す。實朝、遂に宋に如かんと欲し、命じて巨船を作らしむ。既に成りたれども、用ゐる可からず。是歳、北條氏、故頼家の子公曉を召す。京師より至る。用ゐて鶴岡の別當に補す。公曉、常に父の幽死を憤り。實朝を父の仇なりと謂ひ、竊に報復を謀る。祈る所ありと稱し、鶴岡の祠に祈ること千日。時に鎌倉傳へ言ふ、「幕府に怪物あり、婦人の衣を被り、行歩すること飛ぶが如し」と。十月、實朝内大臣に任じ、十二月、右大臣に進む。承久元年正月、鶴岡祠に拜賀す。二十七日、戌時を卜して、將に出でんとす。廣元進み諫して曰く、「臣、平生未だ嘗て涙を出さず。今故無くして泣然たり。臣、危疑す。先大將、東大寺を落せしとき、甲を衷して自備ふ。君宜しく倣ふ可し。輕舉する勿れ」と。源仲章曰く、「大臣、大將は甲を衷す可らず」と。廣元、又晝日禮を行はんと請ふ。仲章曰く、「燭を乘る。故事なり」と。實朝、出づるに臨み、秦公氏をして髪を梳らしむ。髪一縷を拔きて之を與へ、哂ひて曰く、「吾が遺物なり」と。公卿以下、悉く從ふ。隨兵千騎、義時、侍して劍を持つ。祠門に入る比、病作ると稱し、劍を仲章に授けて歸る。實朝、乃、悉く隨兵を屏け、獨、仲章を從ふ。儀畢り、公卿に揖して階を降る。一人あり、階側より跳り出でて、刀を揮ひて、實朝及び仲章を斬り、其首を持ちて逃れ去る。時、方に闇黑にして、内外騷擾す。何人の爲す所なるを知らず。已にして大に呼ぶ者あり。曰く、「吾は公曉なり。父の仇を報ず」と。衆、始めて公曉の爲す所なるを知り、其居る所を圍む。公曉、實朝の首を提げて、直に備中某の宅に赴きて、以て食す。手に首を釋さず。三浦義村の少子、公曉の



承久元年

實朝鶴岡拜賀の禮を行んとす（鶴岡八幡宮の圖）

公曉實朝を斬る

弟子爲り。公曉、因りて使をして、計を義村に問はしむ。義村紿きて曰く「將に兵を以て迎へんとす」と。而して義時に告ぐ。義時、命じて速に之を殺さしむ。幕府、乃、長尾定景を遣し、力士五人を率ゐて之に赴かしむ。公曉、迎兵を望む。久くして至らず。乃、自祠後の高阜を躐え、義村の家に如く。途に五人に遇ひて奮ひ戰ふ。定景、傍より其首を斬りて、之を義時に送る。公曉年十九。實朝年二十八。明日、實朝を葬らむとするに首を得ず。遺す所の一髪を以て之に代へぬ。源氏の正統、此に於て絶えたり。

（源實朝肖像）

東方人强悍全國に敵するに足る

外史氏曰く。余嘗て函嶺を踰え、八州の野、北に陸奥を控ふるを望み、源氏の基業、深く、且遠きことを知れり。世に傳ふ、八幡公終に臨み、書を其家に遺して曰く、「吾が後世、必天下の權を操る者あらん」と。信否未だ知る可らずと雖ども、其謂無きに非ず。蓋し、我が王化、西より東に漸す。東の强悍にして服し難き、以て全國に敵するに足れり。中古鋤治して、纔に條緒に就くと雖も、叛服常ならず。毎に國患を爲す。而るに廟堂以て憂とせざりき。蓋し、綱紀の弛みしこと、一日に非るなり。相門寵を爭ひ、骨肉相軋れども、制すること能はず。盜賊公行して、公卿を劫し、宮闕を焚けども禁ずること能はず。則ち、何ぞ邊疆を恤ふるに暇あらんや。而して夫の貞任、家衡等、皆傑黠の才、以て乘じて逞くするに足る。源氏の父子微りせば、封豕長蛇、荐に上國を食むも、誰か能く之を拒がんや。其の天下に大功德あること此の如し。而して朝廷の功に酬ゆる。其什一を塞がず。頼義、任を遷されて、適困敝を致す。義家、官四位衞尉に過ぎず。子孫或は罪を以て誅せられ、或は謫を以て逐はる。保平の亂、又其骨肉を鬪はしめ、殘亡して盡くるに垂くとす。何ぞ報施の倒なるや。天の人に福する、父祖に縮れば、則子孫に贏る。固より其所なり。故に源氏の福は、大に頼朝に發して、遂に天下の權を司るを得たり。義家、儻預之を睹るか。然れども、余嘗て謂へらく、天下の權、源氏に歸せしこと久し。而して源氏自知らざるなり。頼義、義家、

源氏の功德

源氏の福頼朝に發す

寧ろ天子に背くも源氏に負く勿れ

東北を經略し、其民を捍護すること前後十有五年。而して朝廷闕り知らざるが如し。其功を奏して、將士の爲に賞格を請ふに及べば、遷延して決せず。甚しきは目するに私鬪を以てし、之が官符を停め、其私恩を以て之を噢咻せしむ。則、是れ朝廷、自、其征伐刑賞の柄を捨てゝ、之を源氏に付し、遂に東北の豪傑をして、「寧ろ天子に背くとも、源氏に背く勿れ」と曰はしむ。是の時に當りて、義家をして、一たび手に唾して起らしめば、則函嶺以東の朝廷の有に非ざること、必ずしも賴朝を待ざるなり。而れども敢て臣の節を失はずして、以て其身を終る。乃、慶を子孫に貽す所以なり。舊志に稱す、「賴朝の伊東に逃るゝや、心私に祝して曰く、『額くは關東八國に主たるを得ん。否らざれば、則、猶、伊豆を領して、以て伊東氏に報ずるを得ん』と。」此に由りて之を觀れば、其初念は一隅に割據するに過ぎざりしなり。而して豪傑の素より附ける者、爭ひて之が用を爲し、兵鋒の嚮ふ所、克捷せざる莫し。又廷臣の才を抱きて而も逞からざる者を得て、以て其及ばざる所を輔け、而して國家の綱紀極隳の時に會ふ。謂ゆる素より附ける者を七道に蓍布して、座ながら其命を制す。是れ其智術、以て上下を刼持し一世を籠絡する有りと雖ども、則、亦時勢の、自、至れるなり。而して其源は、實に父祖の餘慶に出でしのみ。吾れ嘗て之を搢紳の家に聞く、「鎌倉の興るや大江、三善の徒、竊に民部省の簿記を抱きて往く者あり」と。亦以て人心の向ふ所を見るべし。夫れ王家、自其權を放失して、これを或は收むるなし。民、安ぞ倚る所あらんや。是に於て王族其器に任ふる者、代りて之を操り、以て天下を宰す。亦已むを得ざるの勢なり。源氏は清和の冑を以て、世王事に勤勞し、以て賴朝に至りて、經營艱苦して、大業を刱建し、以て天下の小康を致す。而して敢て僭踰せず。其跡を恭順にし、又再傳して乃亡びぬ。天未だ源氏の福を艾さゞるなり。是を以て、足利氏、新田氏、皆清和の源を以て、更起ちて天下を宰す。而れども皆上將を以て、代りて國權を操り、以て天子に服事す。賴朝の故を襲ふに非ざる者なし。則是れ、賴朝、天下萬世の爲に、已むを得ざるの事を創めて、以て踰ゆ可からざるの限を立つ。而して君臣の際、兩つながら其宜しきを得たるなり。然らざれば、焉ぞ、莽、操、鐘、卓、我が國に接踵せざるを知らんや。

時勢の至り父祖の餘慶

賴朝心願

清和源氏

【莽操鐘卓】前漢の王莽後漢の曹操魏の司馬鐘

「賴朝の天下に功德ある、其父祖に勝る」と曰ふと雖ども可なり。

外氏氏曰。余嘗踰二函嶺一。望三八州之野。北控二奥羽一。知二源氏基業深且遠一矣。世傳。八幡公臨レ終遺二書其家一曰。吾後世必有下操二天下之權一者上。雖二信否未一レ可レ知。非レ無二其謂一也。蓋我王化自レ西漸レ東。東之强悍難レ服。足三以敵二全國一。雖三中古鋤治。纔就二條緒一。叛服不レ常。每爲二國患一。而廟堂不二以爲レ憂。蓋綱紀之弛非二一日一也。相門爭レ寵。骨肉相軋。而不レ能レ制也。盜賊公行。刼二公卿一。焚二宮闕一。而不レ能レ禁也。則何暇レ恤二邊疆一哉。而夫貞任家衡等。皆桀黠之才。足二以乘而逞一焉。微二源氏父子一。封豕長蛇。荐食二上國一。誰能拒レ之。其有レ大三功德於二天下一如レ此。而朝廷酬レ功。不レ塞二其什一。賴義遷レ任。適致二困敝一。義家官不レ過二四位衞尉一。子孫或以レ罪誅。或以レ謫逐。保平之亂。又闘二其骨肉一。殘亡垂レ盡。何報施之倒也。天之福レ人。縮於二父祖一。則贏於二子孫一。固其所也。故源氏之福。大發レ於二賴朝一。遂得レ司二天下之權一。義家儻預睹レ之邪。然余嘗謂。天下之權歸二源氏一。久矣而源氏不二自知一也。賴義義家經二略東北一。捍二護其民一。前後十有五年。而朝廷如レ不二關知一焉。及下其奏レ功爲二將士一請中賞格上。遷延不レ決。甚而目以二私鬪一。停二之官符一。使下其以二私恩一噢中咻之上。則是朝廷自舍二其征伐刑賞之柄一。而付二之源氏一。遂令下東北豪傑。曰中寧背二天子一。勿中負二源氏一。當二是之時一。使二義家一唾レ手起一。則函嶺以東。非二朝廷之有一。不三必待二賴朝一也。而不三敢失二臣節一。以終二其身一。乃所三以貽二慶子孫一也。舊志稱。賴朝之逃二伊東一也。心私祝曰。願得レ主二關東八國一。否則猶領二伊豆一。得三以報二伊東氏一。由レ是觀レ之。其初念不レ過レ割二據一隅一。而豪傑之素附焉者。爭爲二之用一。兵鋒所レ嚮。莫レ不二克捷一。又得二廷臣抱レ才而不レ逞者一。以輔二其所一。不レ及。而會レ於二國家綱紀極隳之時一。碁三布所レ謂素附者於二七道一。而坐制二其命一。是雖下其

後漢の董卓なり皆僭踰反亂の臣

智術有丙以劫二持上下一籠乙絡一世甲則亦時勢之自至焉。而其源實出レ於二父祖之餘慶一焉爾。吾嘗聞二之縉紳之家一鎌倉之興。大江三善之徒。有下竊抱二民部省簿記一而往者上。亦可三以見二人心所レ向矣。夫王家自放二失其權一而莫二之或收一民安所レ倚哉。於レ是王族之任二其器一者。代而操レ之。以宰二天下一。亦不レ得レ已之勢也。源氏以二清和之胄一世勤二勞王事一以至レ於二賴朝一經營艱苦。剏二建大業一以致二天下小康一而不二敢僭踰一恭二順其跡一又再傳乃亡。天未レ艾二源氏之福一也。是以足利氏新田氏。皆以二清和之源一更起宰二天下一而皆以二上將一代操二國權一以服二事天子一莫下非レ襲二賴朝之故一者上。則是賴朝爲二天下萬世一創二不レ得レ已之事一以立二不レ可レ踰之限一而君臣之際。兩得二其宜一也。不レ然焉知二莽操懿卓不レ接二踵我國一哉。雖レ曰下賴朝有レ功三德於二天下一勝中其父祖上可也。

改版 邦文日本外史 卷之三終

逆櫓　　賴山陽

海風打レ船船腹穿。
東兒慣レ馬不レ慣レ船。
前設二順櫓一却逆櫓。
公唯直前是豬武。
猪邪鹿邪君奚疑。
爲レ鬼爲レ蜮君未レ知。

北條氏陪臣を以て國命を執る豈偶然ならんや

改版

邦文日本外史 卷之四

源氏後記

北條氏

外史氏曰く。北條氏の事、吾れ之を言ふに忍びざるなり。しかも、諸の其事を叙するや、晦澁にして曖ならず。亦文飾に疑はしきものあり。獨、源親房の論、頗、信を取るべしと云ふ。其論に曰く、「源氏、武臣を以て天下を掌握す。朝廷、蓋し平なる能はず。況や其後嗣、既に絶えて、寡妻、陪隷、繼ぎて其家に當るをや。此時に乘じて、之を斃して、以て、舊權に復せんと欲す。似たるなり。然りと雖も、王綱の衰へたること久しく、賴朝、一臂を奮ひて、以て其亂を平ぐ。朝廷、其舊に復せずと雖も、而れども民庶肩を息へり。德政の以て之に勝るに足る有るに非ずば、則安ぞ克く之を斃すことを得ん。縱使克く之を斃すとも、民の安からざる、天豈之に與せんや。王者の師、必ず有罪に罰を加ふ。賴朝、高官に陞り、重職を管するは、皆法皇の允裁に出づ。私に之を竊みしに非ざるなり。北條氏、其外家を以て、久しく其權を司る。未だ嘗て人望を失はず。顯然たる罪ありしに非ざるなり。而るに遽に之に誅を加へんと欲す。是れ朝廷未だ過無しと爲さず。而して北條氏、又之を反賊の利を獲る者に比すべからざるなり。夫れ、賴朝の業を以てして、猶二世を過ぐること能はず。北條氏、乃、陪臣を以て國命を執ること、奕世累葉なり。是れ豈偶然ならんや。蓋し、義

【七世】時政義民、泰時、時氏、經時、時頼、時宗、貞時、高時、之を北條九代七世と云ふ

時の才德、人に過ぎしことあるに非ず。泰時、之を繼ぎて、政を修め、法を立て、專正直を操る。獨、己の分を踰えざるのみならず、親族及び諸將士を戒飭し、敢て高爵を規望すること莫からしむ。其子孫に至るまで、能く其法を守りて、敢て失墜せず。其政、漸く衰へ、卒に亡ぶるに至ると雖も、而れども之を七世の久きに傳ふることを得たり。亦憾無しと謂ふべし。大凡保平以來の亂を以てして、頼朝の若き有りて、泰時の如き有らずば、則、六十州の民、何ぞ、底止する所あらん。此を詳にせずして、特皇威の衰、武臣の專を稱するは謬れり。」と

源親房の論

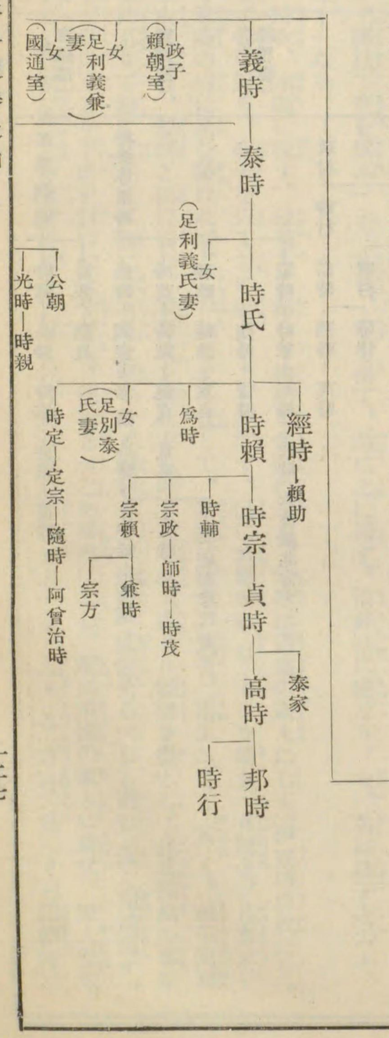
外史氏曰く。吾れ親房の論を讀みて、其意を悲む。其れ亦已むを得ざるに出でゝ、君に告すの體、宜しく此くの如くなるべきのみ。後の君子、其言に因りて其事を詳にせば可なり。

蓋し、源氏の嗣既に絶えて、藤原頼經五征夷大將軍となり、其子頼嗣職を襲ふ。既にして宗尊親王、往きて之に代り、之を其子惟康に傳ふ。久明親王、往きて之に代り、之を其子守邦に傳ふ。而して兵馬の政は、每に北條氏に在り。故に凡、事みな之を北條氏に係けざるを得ず。

外史氏曰。北條氏之事。吾不レ忍レ言レ之也。而諸叙二其事一。晦澁不レ鬯。亦有下疑レ於二文飾一者上。獨源親房之論。頗可レ取レ信云。其論曰。源氏以二武臣一掌二握天下一。朝廷蓋不レ能レ平。況其後嗣既絶。寡妻陪隷。繼當二其家一。欲下乘二此時一而斃上之以復舊權。似也。雖レ然。王綱之衰久矣。頼朝奮二一臂一。以平二其亂一。雖二朝廷未レ復二其舊一。而民庶息レ肩。非レ有二德政足一以勝レ之。則安克斃レ之。縱使二克斃一之。民之不レ安。天豈與レ之。王者之師。必加レ罰二有罪一。頼朝陞二高官一。管二重職一。皆出二法皇之允裁一。非二私竊一之也。北條氏以二其外家一。久司二其權一。未二嘗失一人望一。非レ有二顯然之罪一也。而欲二遽加一之誅一。是朝廷未レ爲レ無レ過。而北條氏又不レ可レ比二之反賊獲レ利者一也。夫以二頼朝之業一。而猶不レ能レ過二二世一。北條氏乃以二陪臣一執二國命一。奕世累葉。是豈偶然哉。蓋義時非レ有二才德過一人也。泰時繼レ之。修レ政立レ法。專操二正直一。不二獨不下踰二己之分一。戒二飭親族及諸將士一。莫二敢規望高爵一。至二其子孫一。能守二其法一。不二敢失墜一。雖二其政漸衰。卒至レ於レ亡。而得レ傳二之七世之久一。亦可レ謂レ無レ憾矣。大凡以二保平以來之亂一。而不下有レ若二頼朝一。有上若二泰時一。則六十州之民。何所二底止一。不レ詳レ於レ此。而特稱二皇威之衰武臣之專一者。謬矣。外史氏曰。吾讀二親房之論一。而悲二其意一焉。其亦出レ於レ不レ得レ已。而告レ君之體。宜レ如レ此爾。後之君子。因二其言一。而詳二其事一。可也。蓋源氏之嗣既絶。藤原頼經爲二征夷大將軍一。其子頼嗣襲レ職。既而宗尊親王往代レ之。傳二之其子惟康一。久明親王又往代レ之。傳二之其子守邦一。而兵馬之政。每在レ於二北條氏一。故凡事皆不レ得レ不レ係二之北條氏一。

北條氏略系

○平貞盛―維將―北條維時―直方―聖範―時方―時家―時政―



（北條氏系圖）

北條氏系統

- 名越朝時
  - 時章
    - 公時
      - 時家
        - 高家
        - 高邦
  - 時基
    - 朝貞
- 女（泰綱母）
- 極樂寺重時
  - 長時
    - 義宗
      - 赤橋久時
        - 守時
        - 益時
  - 時茂
    - 時範
      - 範貞
        - 重高
          - 英時
          - 女（足利尊氏妻）
- 女（寶宣室）
- 義政
  - 時治
    - 重貞
  - 國時
    - 俊時
- 女（朝雅妻）
- 業時
  - 時兼
    - 基時
      - 仲時（六波羅北方）
- 政村
  - 時村
    - 爲時
      - 凞時
        - 茂時
- 有時
  - 政長
    - 時敦
      - 時益（六波羅南方）
    - 重村
      - 時仲
- 實泰
  - 金澤實時
    - 實村
      - 顯時
        - 貞顯
          - 貞將
            - 忠時
- 時尙
- 佐竹時房
  - 時盛
    - 政氏
      - 盛房
        - 宣房
          - 時繼
    - 朝盛
      - 信時
    - 時直
    - 時員
      - 時國
        - 時元
  - 大佛朝直
    - 朝房
      - 貞房
        - 宗泰
          - 貞直
            - 貞朝
    - 宣時
      - 宗宣
        - 惟貞
          - 高直
          - 家時
    - 時貞
      - 時親

北條氏は、平貞盛に出づ。貞盛七世の裔時政、其父を時家と曰ふ。時家の父時方は祖父の直方に養はる。直方の父は維時、維時の父は、卽ち貞盛の次子常陸介維將なり。維將の後三世、始めて源氏と婚す。子孫、世伊豆の北條に居る。因りて氏とす。

北條氏、豪族を以て世々源氏に屬せり。源義朝、平清盛と京師に戰ひて敗績す。宗黨死亡し、略盡く。義朝の子頼朝執へらる。死を宥して、伊豆に流さる。時政、清盛の命を以て、州人伊東祐親と竝に之を監護す。頼朝四世の祖義家、恩威を東國に樹つ。卽、直方の女の生みし所なり。故を以て時政頗る意を頼朝に屬す。頼朝、初め伊東氏に寄り、其女に通じて男を生めり。女の繼母之を祐親に告ぐ。祐親、平氏の己を疑はんことを惧れて、其男を水に投じ、女を江間某に嫁し、遂に密に頼朝を圖る。頼朝逃れて北條氏に依る。之を久しくして、人に問ひて曰く、「聞く、時政女多しと。孰か尤も美なる」と。曰く、「長は美なり。次は否なり。否は後妻の出なり」と。頼朝、伊東氏に懲りて、次女に通ぜんと欲す。書を作りて、僕の安達盛長に託して、これを致さしむ。盛長、次女は貌無し。頼朝、情好終らずして、徒に禍を階くに足ると慮りて、更に書を作り、長女に致す。前一夕に次女、鳩の金函を銜み至るを夢む。覺めて之を其姉に語る。姉心動く。曰く、「吾れ當に妹の夢を買ふべし」と。乃、妹に與ふるに、其粧鏡を以てす。曰く、「薄以て直を償ふ」と。旦日、書を得て、遂に之に通ず。情好日に密なり。女、名は政子と云ふ。

時政の二女夢を易ふ

政子

時に年二十一なり。

是の時、時政、京師に役す。役滿ちて歸る。路に平兼隆に遇ふ。兼隆は清盛の族人にして、伊豆の目代たり、時政と與に偕に歸る。政子を以て之に妻さんことを許す。已に其頼朝に私するを聞き、且驚き、且喜ぶ。而れども兼隆の約に違ひ難ければ、則知らざる爲して、兼隆に嫁す。其夜、雨ふること甚し。政子出奔して伊豆山に匿れ、頼朝と俱に居る。兼隆之を索れども得ず。時政、素より頼朝を器とし、且其高祖の事を思ふ。是に至りて陽に怒りて、陰に益々之を厚くす。頼朝も亦、時政の謀慮倚るべしと謂ひ、深く相結託す。治承四年、以仁王より平氏を討つべき令至る。頼朝先づ之を時政に示し、遂に東國の家人に發す。家人至る者頗多し。頼朝、輙之を別室に延きて曰く、「我がために努力せよ」と。人々各自以爲らく、「頼朝は、

平兼隆政子を索む

治承四年

兼隆を擊殺す

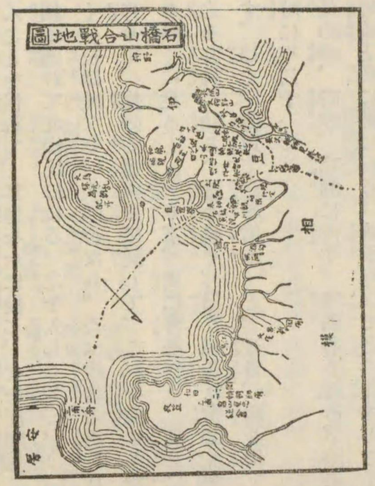
特に己に厚くす」と。而して其陰謀に至りては、獨時政之を知るを得るのみ。八月、時政、佐々木定綱等と八十五騎を率ゐて、夜、平兼隆を襲ひて之を斬る。遂に伊豆、相模の豪傑を糾して、以て頼朝を擁し、石橋山に據り、政子をして居守せしむ。頼朝、大庭景親と戰ひて敗走す。時政、疲れて後れたり。加藤景廉、狩野祐茂、堀親家、小山賀政等、從はんと請ふ。時政、之を揮して頼朝に從はしむ。而して自甲斐に之きて、其諸源を發せんと欲す。長子宗時、平井郷に至りて、伊東氏の兵に圍れ、箭に中りて死す。夜に逮びて、時政頼朝に杉山に遇ふ。箱根別當行實、素、頼朝と善し。其敗れしを聞き、弟の永實をして來りて餉を餽らしむ。先づ時政に見ゆ。時政紿きて曰く、「大將既に死せり」と。永實曰く、「子、吾れを疑ふか。大將死して、子豈生存する者ならんや」と。時政、哂ひて頼朝に見えしむ。頼朝、乃、箱根に匿る。時政及び、其次子義時をして甲斐に如かしめて、自土肥に走り、土肥遠平をして政子を存問せしめ、航して獵島に抵る。時政、三浦義澄等と出でゝ頼朝を迎ふ。頼朝曰く、「咿、何を以て此に在るや」と。時政曰く、「吾れ命を蜘みて北行すれども、中道にして自度るに、君の底る所を

箱根

杉山

（石橋山合戰地圖）

【獵島】安房



鎌倉府

北條公

觀ずば、安ぞ信を取る所あらん。故に君を踪して此に至る。請ふ、此れより行かん」と。是において、武田、一條の諸族に抵る。二萬人を得て頼朝を助く。平氏を駿河に擊ちて之を走らす。頼朝、還りて相模の國府に至り、功を論じ、賞を行ふ。時政を以て首と爲し、武田信義以下之に次ぐ。頼朝、鎌倉府を剏む。政子、之を内に助け、而して時政、義時、之を外に輔く。諸將士目するに北條公を以てす。敢て抗禮する者なし。明年七月、政子男を生む。是れを頼家と爲す。立てゝ世子と爲す。北條氏、外祖を以て益貴重せらる。陰

政子性妬悍

文治元年

守護地頭

頼家十二、鹿を射る

正治元年

頼家狎臣五人

【盜】室平重廣

に人心を收めて、以て自固くす。頼朝嬖姫あり。之を伏見廣綱の家に託す。時政の妻、牧氏之を知りて政子に告ぐ。政子、性妬悍なり。即、牧宗親をして廣綱の宅を毀たしめて、其姫を驅逐す。姫走りて大多和義久に依る。頼朝之を聞き、事に託して義久の宅に往き、宗親を召して之を罵り、親其髻を截らしむ。時政聞きて之を恥づ。告げずして其邑に歸る。頼朝、梶原景季に謂て曰く、「江馬、必從はざらん。汝、往きて之を視よ」と。江馬とは、義時なり。還り報じて曰く、「在り」と。頼朝、義時を召して曰く、「汝、吾が子孫を託すべき者」と。已にして事釋け、時政、鎌倉に還る。親信せらるゝこと初の如し。頼朝、弟義經の勇智を忌みて、之を除かんことを謀る。文治元年冬、親將として之を京師に擊つ。義經奔竄す。頼朝途にして還る。時政を遣し、千餘騎を以て京師を護り、四に索むれども獲ず。是に於て、頼朝の意を以て、奏して諸國司に守護を置き、莊園に地頭を置き、所在追捕することを請へども允されず。時政、抗辯すること再三、終に允さる。自、七國の地頭と爲る。已にして之を辭す。是の時に當りて、大亂初めて平ぎて、京畿多事なり。時政、身、其衝に當る。事立どころに辨ぜざる無し。歳餘にして東に歸る。詔を以て從弟の時定を舉げて、自、代らしむ。亦頼朝の意なり。

頼朝、嘗て富士野に獵す。頼家、甫めて十二、射て走鹿に中つ。頼朝大に喜び、人をして之を政子に報ぜしむ。政子曰く、「彼れは將家の冑子なり。一禽を獲たるに、何ぞ專擅を煩さん」と。頼朝之を愧づ。正治元年正月、頼朝薨ず。頼家立つ。政子髮を削り、尼と爲りて、政事を與り聞く。時政、從五位下に叙し、遠江守に任じ、政所別當と爲る。大江廣元、三善康信、中原親能、三浦義澄、八田知家、和田義盛、比企能員、安達盛長、足立遠光、梶原景時、藤原行政と諸政を參決す。餘は傳宣を得る毎らしむ。頼家、狎臣五人あり。敎を下して曰く、「五人の親黨は罪ありども論ずる勿れ」と。七月、三河に盜起る。安達景盛を遣し、之を討たしむ。景盛新に妾を京師に買ふ。殊に行くを欲せず。已むを得ずして行く。歸れば則ち、頼家已に其妾を奪ひ、絶之を愛幸す。「景盛怨望す」と告ぐる者あり。頼家、五人をして之を討たしむ。府下大に擾

政子、頼家を戒む

る。時に頼朝薨じて、纔に六閲月なり。政子急に安達氏に如き、使をして頼家を誚讓せしめて、且曰く、「汝我が言を聽かずば、吾れ身を以て汝が箭に當らん」と。頼家、乃、止む。政子、景盛に誓書を徵す。佐々木盛綱をして齎して、頼家に送らしめ、以て之を和解せしむ。因りて頼家を諭して曰く、「汝が近狀を視るに、政に倦み、民を忘れ、賢を遠ざけ、佞を近づく。只聲色にのみ溺れ、親戚に禮なし。願くば少しく意を留めて、悔に及ぶ勿れ」と。頼家、般樂故の如し。已にして、梶原景時の讒を聽き、結城頼光を誅せんと欲す。頼光、諸將と連署して控訴す。景時出奔す。旋鎌倉に還る。時政、之を逐ふ。景時終に京師に奔る。人をして追ひて、之を誅せしむ。二年五月、疆を爭ひて訟ふる者あり。頼家、其地圖を見て筆を採りて、圖の中央に抹して曰く、「廣きと狹きは命なり。」と按檢を費す能はず。凡、疆場の訟はこれを以て準と爲せ。卽、心に厭かざれば爭ふことなきに如かず」と。建仁元年秋、大風雨あり。關東禾稼登らず。下總の海溢れて、民死する者千人と云ふ。九月、蹴鞠工紀行景といふ者、京師より至る。大江廣元、携へて頼家に謁せしむ。頼家、素、蹴鞠を好む。上皇に請ひて行景を得たるなり。是より日に其技を學びて、復、朝を視ず。義時、子あり、泰時と曰ふ。少にして器局あり。密に頼家の狎臣、中野能成を召し、謂ひて曰く、「蹴鞠は事に害なし。獨

景時を誅す

二年頼家訴を正す

建仁元年蹴鞠

義時北時に至る

災異を畏れざらんや。故將軍天變に逢ふ毎に、輙出遊を止む。是れ後世當に法とすべき所のみ。子は親臣なり。盍ぞ嘗て試に之を諷せざる」と。時に北條、儀を告ぐ。義時、且に往きて之を視んとす。僧の觀清至りて曰く、「將軍、能成の語を聞きて、怒りて曰く、『言、理なきに非ざれども、父祖を踰えて言ふは何ぞや』と。公、且病と稱して邑に歸りて、其怒の衰ふるを竢つべし」と。義時曰く、「吾れ聊鄙意を侍臣に語りしのみ。豈敢て諫めんや。卽、譴怒を被るとも、避くるに所非ざるなり。吾れ事ありて邑に如く。旦日將に發せんとす。子以て避くと爲す勿れ」と。乃、簑笠を出して之を視す。遂に邑に至る。邑人、去歳、籽種を貸り、明稔之を償はんと約す。而れども、稔ずず。相與に逃亡せんと謀る。是に於て、義時、諸の負債者を召し、悉其券を燒きて曰く、「父老、乞を安ぜよ。儲使、糧豆なりとも吾れ復責めず」と。皆泣きて拜祝して曰く、「願くば君をして子孫多からしめん」と。二年七月、義時、三浦義村の女を娶る。義村は義澄の子なり。

二年

三年

三年七月、頼家、疾あり。政子議して其職を遜れ、其管する所を分ちて、之を同母弟の千幡と、子の一幡とに傳へしむ。一幡の母は、比企能員の女なり。能員、陰に異議を懷き、其女をして頼家に說かしむ。頼家、遽に能員を召し、北條氏を圖らんと欲す。政子、微に之を聞き、急に書を作り、侍女をして齎して時政に致さしむ。時政、將に名越の第に赴かんとす。途に其書を得、轡を按じて思念し、直に大江廣元に詣りて曰く、「能員、外戚の親を憑恃し、衆士を凌蔑す。今又將軍の事を省みざるに乘じて、命を矯め逆を圖る。宜しく先づ發して之を誅すべきや、否や」と。廣元曰く、「僕、前將軍の在日より、獨、文墨を執りて議論す。兵事に至りては敢て與り知らず。今日の事は公の心に在るのみ」と。時政、卽、起つ。天野遠景、仁田忠常、從騎中に在り。荏柄祠前に至る。時政、顧て二人に謂て曰く、「能員反せり。子等、兵を將ゐて之を伐て」と。遠景曰く、「一老翁を殺すに、何ぞ必しも兵を發せんや。宜しく召して之を誅すべきのみ」と。時政、第に至り又廣元を召す。廣元戒心あり。而して從士を屏け、獨一人を從へて曰く、「急あらば我を刺せ」と。遂に往く。時政、之に坐を與ふ。良久くして、乃、罷む。是に於て、時政、甲を衷し、遠景、忠常をして中門に伏せしめ、人を遣し能員に謂はしめて曰く、「吾れ佛事を修む、公盍ぞ一たび臨まざる。因りて與に事を計らん」と。能員、輙往きて門に入る。二人突き出でて、其左右の手を捉り、伏せて之を斬る。其僕走り歸る。比企氏の族一幡を擁し、其第に據る。義時、泰時を遣し兵を將ゐて之を攻めしむ。比企氏、火を縱ちて自殺す。一幡、燒死す。頼家、病間に之を聞き、大に怒る。堀親家をして、密に和田義盛、仁田忠常に命じ、時政を誅せしめんとす。義盛之を時政に告ぐ。時政、忠常を召す。之を久くして出でず。其馬卒、怪みて歸り告ぐ。忠常の二弟危疑す。遂に義時の第を攻む。義時不在なり。其家人防戰して之を斬る。忠常、歸途に之を聞き、遂に幕府に赴く。加藤景廉に殺されたり。政子、終に、頼家をして髮を削らしめ、伊豆に徙す。幾何も無くして

天野遠景
仁田忠常

頼家北條氏を圖らんとす

能員を殺す

一幡死す

實朝
時房
元久元年
二年

鶴峰の戰
時政死す
時房武藏守
建保元年

【千姪】義直、義重姪は胤長【頼家の子】千壽丸
義盛反す

薨ず。是に於て、千幡を以て嗣となし、之を時政の第に奉ず。更めて實朝と名づく。時政、妻の牧氏と之を保護す。侍姫阿波局、密に政子に語りて曰く、「牧氏笑謔中に忮心を挾め。保姆の任を託すべからず」と。政子、以て然りと爲す。實朝を迎へ、府中に置き、義時の弟時房を以て營中の事を掌らしむ。是歲時政、女婿源朝雅をして、關西の守護を率ゐ、往きて京師を鎭せしむ。元久元年、義時、相模守と爲る。二年「畠山重忠反す」と告ぐる者あり。義時、時房、兵を將ゐて之を擊つ。初め重忠、朝雅と、皆時政の婿なり。而して朝雅娶る所は牧氏の出なり。故を以て最親愛せらる。是歲、實朝京師より娶る。重忠の子重保等に命じて之を迎へしむ。朝雅、六波羅に候す。與に飲み禮を爭ひて、相鬪ぐ。朝雅、終に之を牧氏に惡す。牧氏、終に時政と、重忠の父子とを殺さんと謀る。誣ふるに謀反を以てす。義時、時房を召し、之を擊たんと議す。二子諫め止む。時政怒りて入る。牧氏、人をして、義時に謂はしめて曰く、「繼母の故を以て、吾を目して讒と爲すか」と。義時、已むを得ずして之に從ふ。重保を擊殺し、遂に重忠と鶴峰に戰ひて之を斬る。七月、時政、遂に朝雅を立てゝ實朝に代らしめんと欲す。實朝、時に時政の第に在り。政子、諸將を遣し之を義時の第に徙す。時政の兵、牽義時に歸す。時政、遽にして髮を削り、北條に老す。年六十八。後十一年にして卒す。是月、義時、兵を遣し朝雅を誅し、時房を以て代へて武藏守と爲す。

是より先、和田義盛、上總の國司と爲らんことを求む。賴朝の制に、「諸士は國司と爲るを得ず」と。故を以て許さず。義盛、書を獻じ大江廣元に因りて苦に請ふ。三歲まで命を獲ず。乃、前書を還されんことを請へども亦省ず。建保元年、義盛の子姪、泉親衡といふ者に黨し、故賴家の子を擁し亂を作さんと謀る。事覺はる。義盛其子を宥されんことを請ふ。乃、釋さるゝを得たり。遂に族を舉げて幕府に抵り、又其姪を宥されんことを請ふ。「姪首謀爲り。釋す可らず」とて、義時之を縛し、吏に屬す。五月二日、義盛、輒兵を舉げて反す。三浦義村、族人の故を以て之に黨す。既にして其弟胤義と議して、自北條氏に白す。北條氏宴あり。義時、方に客と棋す。報至る。局を終へて起つ。更に烏帽子を被り、水干衣を穿ち、以て幕府に赴き、大江廣元と與に、

賴朝影堂
義盛以下敗死す
泰時贊を辭する言
重忠の子重慶日光山に反す
小山宗政
【故將軍】賴朝
軍國の事、義時に決す
二年
後鳥羽上皇

實朝を奉じて賴朝の影堂に徙し、長子泰時をして兵を將ゐて之を防がしむ。次子賴時、義盛の子義秀と鬪ひて創を被る。義盛の兵、勝に乘じて進む。呼聲天に震ふ。申にして戰ひ、星を見れども未だ已まず。義時、戰を督すれども、身、士卒に先だち、黎明に擊ちて義盛の兵を卻く。自、衞路を扼し、足利義氏を遣し、追ひて之を擊つ。敵兵復振ふ。義時、廣元と連署して、武藏、相模及び諸國をして來り援けしむ。敵の驍將、土屋義清、流矢に中りて死す。義盛以下敗れ死す。義時、首虜を獻じ酒を置き、諸將士を勞す。

之に謂て曰く、「吾れ復酒を飲まじ。疇昔、宴を與にし、其明亂作る。甲を擐き馬に上りて宿醉未だ醒めず。吾れ意ふ、今より飲を禁ぜんと。已にして戰ふこと數十合渴して水を索む。葛西六郎榼を執りて酒を進む。我れ輒之を飲むこと甚し。吾れ常操なし。探なし。吾れ復飲まじ」と。已にして功を論じ、賞を行ふ。泰時、賞を辭して曰く、「義盛、反心なし。獨臣が父を恨むるのみ。而して諸將士多く之が爲に死を致す。臣、父の爲に、仇を擊つ。焉ぞ賞を受く可けんや。宜しく臣を賞するを以て、事に死するの家を恤むべし」と。聽さず。

義時、義盛に代りて侍所別當と爲る。卽日書を京師に移して、將士を鎭安す。

九月、故畠山重忠の季子僧重慶といふ者あり。日光山に在りて謀反す。小山宗政を遣し、之を捕へしむ。宗政、之を斬りて還り報ず。實朝人をして言はしめて曰く、「重忠寃死し、其胤、變を爲す。虛實未だ必す可からず。汝輒く之を斬るは何ぞや」と。宗政、目を瞋らして曰く、「彼の髡、反跡已に明なり。臣、生致せざる所以は、將軍內謁を聽し、之を宥さんことを恐るればなり。將軍、詠歌蹴鞠して、武備を廢棄し、婦女を重じて、戰士を輕じ、諸の沒官の邑は、舉げて嬖妾に與ふ。故將軍の業墜つ」と。實朝、怒りて其朝從を禁ず。幾何もなくして解くるを得たり。實朝、人と爲り優柔にして、歌詠に耽溺し、罪ある者と雖も、歌を獻ずれば卽ち免し、而して軍國の事は、一に義時に決す。

二年冬、和田氏の餘黨亂を京師に作す。戍卒擊ちて之を夷ぐ。七月、鎌倉の賈人の員を定む。是時に當りて、鎌倉の權勢日に盛なり。後鳥羽上皇、居常憤々として源氏を滅さんことを謀る。初め位を太

【今將軍】實朝

（實朝公曉に斬らるゝ圖）

六年
承久元年
實朝薨す

子に讓る。是を土御門帝と爲す。尋いで又之を少子に禪らしむ。是を順德帝と爲す。而して政、常に上皇にあり。後白河の時より北面の武士を置く。上皇、益して西面を開く。廣く材勇ある者を徵し、親刀劍を鑄る。實朝を驕せて以て之を斃さんと欲し、連に其官爵を進む。實朝覺らず。遂に左近衞大將を求む。義時、廣元に謂て曰く、「故將軍、宣下ある毎に輒之を辭して、以て後亂の地を爲す。而るに今將軍年、未だ壯ならずして、昇進太速なり。又家臣をして、朝せずして官爵を取らしむ。僕、愚昧ながら竊に之を危む。爲に入りて言はんと欲すれども、譴怒に遭ふことを恐る。公盍ぞこれを言はざる」と。廣元曰く、「僕も亦之を思ふ。故將軍事毎に下問す。今は則否らず。故に默して以て今に至るのみ。將軍坐ながら成業を享け、不次に榮進す。殃を積み、害に嬰ること其れ能く免れんや。公、言有りたれば、僕敢て言はざらんや」と。義時、遂に入りて言ふ。實朝聽かず。六年遂に大將となり、右大臣に累進す。承久元年正月鶴岡祠に拜賀す。卒に故朝家の子公曉の爲に狙擊せられて薨ず。公曉因りて自立して將軍と爲らんと欲す。義時、政子の命を以て之を誅す。初め政子、義時と朝に熊野に詣で、京師を過ぐ。上皇召して政子を見んとす。辭して曰く、「東鄙の老尼、禮節に閑はず」と。則、前相國頼實の妻をして之を勞はしむ。政子、與に語りて曰く、「實朝、卽、子なし。敢て請ふ、一皇子を得て鎌倉の主と爲さん」と。是に至りて、諸將をして連署し、奏し請はしめて曰く、「願くば上皇の二皇子より擇み、一人を戴くを得ん」と。上皇許さずして曰く、「是れ二王を樹つるなり」と。實朝薨ずるに及びて、藤原頼經を請ふ。初め頼朝の妹婿藤原能保、女を以て、攝政良經に妻す。良經は關白兼實の子なり。良經、道家を生む。道家、頼經を生む。故を以て、義時議を定め、時房を遣して之を請はしむ。七月、鎌倉に至る。甫めて二歲なり。政子、政を簾內に聽く。政子、人と爲り明決、頼朝を佐けて天下の幸を定む。諸將士の爲に畏服せらる。目けて尼將軍と曰ふ。其從二位を拜するを以て、又二位尼とも曰ふ。義時、右京權大夫と爲り。陸奥守を兼ね、廣元等と諸將をして頼朝の舊規を修めしむ。義時の妻の弟伊賀光季、廣元の子親廣と、並に京師を護衞す。實朝、害に遭ひし翌月、故阿野全城の子時元、兵を駿河に起し、自立して將軍と爲らんと謀る。義時、兵を遣し擊ちて之を殺す。蓋し頼茂は源頼經、鎌倉に至るの月、大內の守護源頼茂、子頼氏と仁壽殿に入り、火を縱ちて自殺す。頼政の孫にして、自ら以て源氏の嫡宗と爲す。因りて自立を圖り、事覺れて誅せらる。上皇謂へらく、「源氏衰滅して、王政復すべし」と。而れども關東の權勢自如たり。會關東の家人仁科盛遠といふ者、二子を挈げて熊野に詣で、上皇の幸に遇ふ。其子を錄して西面と爲さる。盛遠大に喜び、留りて東歸せず。義時、怒りて其邑を收む。上皇之を復さしむれども、詔を奉ぜず。上皇の嬖妓を龜菊と曰ふ。長江、倉橋の二莊を食む。其地頭之を侮慢す。上皇怒りて其職を褫はしむ。義時、對へて曰く、「先右大將、王命を以て平氏を誅す。乃、請ひて地頭を置きて、以て有功の者を賞す。義時、敢て故なくして之を褫はず」と。上皇積怒す。遂に意を決し義時を討たんとす。義時、素より右大將藤原公經に善し。上皇、公經を殺さんと欲す。右大臣藤原公繼之を止む。且諫めて曰く、「臣聞く、本邦を稱して葦原と曰ふ。原の大なる處是を關東となす。漸く西して漸く小し。小を以て大に敵し、弱を以て强に抗し、時を待たずして行ひ、行ふに無謀を以てす。臣未だ

上皇の二皇子を請ふ

【二皇子】雅成、頼仁

頼經

尼將軍

阿野時元

【上皇】後鳥羽

上皇嬖妓龜菊

義時を伐つ

藤原公繼

五月
【九條廢帝】仲恭天皇
【流鏑馬】射儀の名

莊家定

押松

【諸豪】武田小笠原、千葉、宇都宮、三浦、葛西等の諸族

政子命を下す

關東軍議

其可なるを知らざるなり。義仲の難、以て鑒むべし」と。權中納言藤原光親も亦切に諫む。上皇皆聽かず。西面秀康をして、三浦胤義を誘はしむ。胤義の妻、初め賴家の婢たり。一男を生む。義時之を殺す。妻悲痛せり。胤義、京師を戍りて、復東するを欲せず。秀康、酒間に於て微に之を說く。胤義、奮躍して、命に應じて曰く、「臣の兄義村、力能く義時を擒にせん」と。上皇大に悅ぶ。五月、順德帝をして位を太子に讓らしめて、以て計議に便にす。太子立つ。是を九條廢帝と爲す。上皇、卽、城南寺の流鏑馬に託し、畿兵千七百人を徵して、公經を囚へ、親廣、光季を召す。親廣脅從す。光季至らず。胤義、秀康をして之を討たしむ。光季及び子光綱、奮鬪して死す。

卽日、上皇、五畿、七道に詔して義時を討たしむ。將士を召し、問ひて曰く、「東人の義時に黨する者、幾ばく有りや」と。胤義、對へて曰く、「千許の人に過ぎず」と。莊家定進みて曰く、「然らず。彼れ人心を收むる事此に年あり。之が爲に死せんことを願ふ者計ふるに勝ふ可からず。臣等をして東國に在らしめば、亦籠牢せられんのみ」と。上皇悅ばず。彌益兵を集む。善く走る者、押松を遣し、誥を齎して、東國の諸豪を歷說す。特に胤義をして、書を作らしめ、重賞を以て義村に昭はしむ。義村、以て義時に示す。義時曰く、「唯子の意の鄕ふ所のまゝ」と。義村、二心なきを誓ふ。義時嗤ひて曰く、「吾れ豫此事あるを知るや久し」と。因りて大に鎌倉に索めて、押松を獲たり。誥を奪ひて之を燒く。狀を政子に啓す。政子、乃大に諸將を簾下に會す。安達景盛をして命を傳へしめて曰く、「吾れ、今日將に諸君に訣れんとす。先將軍、堅を被り銳を執り、草萊を闢き、以て大業を創めしは、諸君の知る所なり。今讒謗の徒、人主を註誤し、關東の業を傾厄せんと欲す。諸君、苟も先將軍の恩を忘れざらば、則、心を協へ、力を戮せ、讒人を誅除し、以て舊圖を全くせよ。卽、詔に應じ、西上せんと欲する者は、今之を決せよ」と。諸將皆感激し、力を効さんことを願ふ。敢て異辭なし。

是に於て、義時の宅に會して事を議す。義村、景盛等皆曰く、「宜しく足柄、箱根を扼し、以て官軍を待つべし」と。廣元曰く、「不可なり。險を守りて日を曠くせば、恐らくは人心內變あらん。是れ自、敗るゝの道なり。宜しく直に兵を進め、京師を攻め、成敗を天に聽くべきのみ」と。政子之に從ひ、泰時を以て將と爲す。泰時、時に武藏守たり。武藏の兵至るを待ちて發せんとして、居ること五日。或は議す、「其れ懸軍遠く進むは、是れ危道なり」と。廣元曰く、「武藏の兵を待つは計に非ず。此異論を生ずる所以なり。遷延する此の如くなれば、武藏の兵と雖も、其變なきを保せず。今夜、武州宜しく單身鞭を揚ぐべし。東兵、猶雲の龍に從ふが如けん耳」と。三善康信方に病に臥す。政子、召して之を諮る。康信の對も、廣元の議の如し。是に於て、泰時をして、卽夜、程を發せしむ。黎明に、泰時、十八騎を帥ゐて西す。相模守時房、前武藏守足利義氏、駿河守三浦義村等之に從ふ。行くこと三日にして十萬騎を得たり。東海道より進む。式部丞朝時は北陸道より進む。武田信光、小笠原長淸等は東山道より進む。凡役に從ふ者、父行けば子を留め、子行けば父を留む。行く者凡十九萬なり。義時、乃、押松を放ち還し、歸りて上言せしめて曰く、「臣、罪なくして討たる。敢て逃れ避けず。聞く、陛下戰を喜ぶと。謹みて臣の長男泰時、次男朝時以下十萬人を獻じ、之をして戰を爲さしむ。陛下これを觀せ。猶心に厭き給はずば、則猶二十萬人在るあり。臣將に自將として、以て之を繼がんとす」と。押松、走り歸りてこれを白す。內外色を失ふ。上皇曰く、「可なり。東人、必ず虛に乘じ、義時を誅する者あらん」と。

【武州】泰時

三善康信

泰時發程

【時房】泰時の弟

泰時、重忠大に戰ふ

鏡久綱

六月朔、諸の官軍を部署す。宮崎定範、仁科盛遠等、越中を拒く。藤原秀康、三善胤義等、諸將を部して九隊となし、尾張、美濃を距ぐ。兵、凡、一萬七千餘人なり。信光、長淸、四萬騎を以て、大井の渡を亂る。官軍の將大內惟信を擊ちて之を走らす。胤義、赴き援はんと欲す。秀康曰く、「吾れ腹背に敵を受く。退きて宇治、勢多を守るに若かず。勅旨此の如し」と。乃ち馬に鞭ちて先づ走る。胤義以下、みな之に從ふ。官軍の將山田重忠は、源滿政の苗裔なり。奮ひて、留り戰ふ。泰時、流を亂りて進む。重忠連に射て東兵を斃す。泰時、軍を麾きて之に萃らしむ。重忠、敗れ走る。官軍の將久綱、自、名を旗に書し、毛利季

【懦夫】秀康
【右京君】義康
乘輿叡山に幸す
宇治勢多淀泰村
佐々木父子
貞幸泰時を諫む
重忠自殺す
院宣使

光と戰ひて敗る。曰く、「懦夫と事を共にせしを恨む」と。乃、自殺す。泰時、進みて信光と合ふ。義村、策を建てゝ分ちて五隊と爲す。其子泰村請ひて曰く、「願に右京君と、武州に從ひて生死せんと約す」と。因りて義村を辭して、泰時に從ふ。泰時皷行して西す。

京師震駭す。乘輿、叡山に幸す。山徒、「力、以て東軍を扞ぐに足らず」と遜辭す。乃、還り、見兵二萬五千を分ちて、宇治、勢多及び淀を守らしむ。時房、勢多を攻む。山田重忠、山徒二千を帥ゐ、橋を截ちて力戰す。時房、利あらずして卻く。泰時、宇治を攻む。前中納言源有雅、參議藤原範茂等、南都の僧萬人を率る、河を壓して軍す。時に霖雨にして水漲る。泰時、旦を待ちて進まんと欲す。泰村、夜、挺でて進み、水を夾みて射戰す。義氏赴き援ふ。泰時、遂に全軍を以て之に從ふ。橋板已に撤す。兵、架に緣りて進む。官軍の矢石雨下し、東兵多く死す。泰時、芝田兼義をして水を試しむ。春日貞幸、佐々木信綱等、之に繼ぐ。貞幸の馬傷きて溺る。從者援けて還る。泰時、親爲に之を炙る。乃、蘇る。將士爭ひて渡る。溺るゝ者八百。信綱先づ中島に達す。其子重綱、年十五にして父の馬尾に攀ぢ泅ぎて渡る。信綱、之をして還りて兵を請はしむ。泰時、諾して之を遣る。其子時氏を召して曰く、「我が衆將に敗れんとす。汝進みて之に死せよ」と。時氏、六騎を以て渡る。泰村之に繼ぐ。泰時、乃、親、渡る。貞幸、馬を扣きて諫むれども聽かず。貞幸、之を結きて曰く、「甲を釋きて渡れ。不せざれば則沈溺せん」と。泰時、馬より下り、甲を釋く。貞幸乃、馬を奪ひて去る。渡るを得ず。其兵、渡る者五百騎、兼義、信綱、皆達す。進みて官軍を冒す。殺傷相當る。義氏、民屋を撤し筏を縛して、以て軍を濟す。泰時に遂、前岸に至る。武藏、相模の將士奮ひ進みて大に戰ふ。有雅以下、潰走す。右衞門佐藤原朝俊は八田知尙、佐々木氏綱等を帥ゐ、留り戰ひて之に死す。時氏、火を縱ちて進む。義村、季光、大納言藤原忠信を淀に攻めて之を破る。重忠、胤義、走り歸りて事を奏す。上皇、門を閉ぢて納れず。重忠、門を擊ちて罵りて曰く、「懦主我を誤まらしむ」と。遂に嵯峨に走りて自殺す。胤義、遁れ走る。時泰、進みて樋口河原に至り、院宣使の至るに遇ふ。馬を下りて人をして之を

泰時、時房六波羅に館す
【木島】京城の西
【駿州】義村
佐々木經高
雷、義時の廚に震ふ
廣元
【文治の故事】文治元年、平氏の黨與を罪せし例に準す

を讀ましむ。宣に曰く、「近日の事、朕が意に出でたるに非ず。皆臣僚の爲す所なり。唯、汝其罪を論じ、兵士をして輦下を擾さしむる莫れ」と。泰時、乃、時房と六波羅に館す。朝時の北陸道を出づるや、從軍四萬なり。官軍弩を張り、寒原の塞を扼す。朝時、夜、數十牛を收め、薪を其角に束ね、之に火し驅りて官軍に赴かしむ。官軍の弩發す。東兵、乃、塞を踰え。市振に至る。官軍險に據りて柵を設く。東軍の騎兵海を渡る。而して步兵柵を破り、礪並山に戰ふ。盛遠を殺し、定範を走らせ、進みて泰時に京師に會ふ。是に於て、東軍街衢に塡塞し、四出して捕斬す。胤義、部下を以て、東寺に據る。佐原景吉を遣し之を攻めしむ。胤義、叱して曰く、「汝吾が族人に非ずや」と。與に戰ひて之を走らす。盡く其騎を亡ひ、獨、其長子と逃げ去り、其妻の家に投ぜんと欲し、木島の叢祠中に匿る。識る所の僧に遇ふ。其自裁を勸む。長子先づ死す。胤義、僧に謂て曰く、「我が父子の首を以て我が妻に視し、然る後之を駿州に致せ。我が爲に駿州に告げて曰へ。『阿兄、自、手足を剪りて當に意を逞くすべし』と。」僧、其言の如くす。義村、之を泰時に送る。泰時、佐々木經高、上皇の謀を賞けて、亡げて鷲尾に匿るゝを聞き、之を宥さんと欲す。經高自殺す。其子高重、兄の子廣綱等、皆死す。廣綱の稚子宥に當る。叔父の信綱、請ひて之を斬る。泰時、時房に議す、「凡そ罪を論ずる輕きに從ふ」と。復究捕せず。遂に奏して首謀者を求む。上皇、忠信、有雅、光親、及び中納言藤原宗行、參議藤原信能を以て答ふ。乃分ちて之を諸將に屬す。時氏、同く渡りし所の六騎を召し、酒を置きて之を勞ひ、捷を鎌倉に報ず。上下相慶ぶ。初め義時、既に軍を遣し、日夜疑懼す。雷、其廐に震するに會ふ。義時、大に怖れ、廣元に告げて曰く、「吾が命窮るか」と。廣元曰く、「君臣の命は、皆天の司る所なり。今事の曲直を斷つこと、天の心にあり。公何ぞ必しも怖れんや。故將軍の陸奥に捷つや、雷其の陣に震ふ。此れ安ぞ吉兆に非ざるを知んや」と。是に於て、捷聞果して至る。廣元、文治の故事を引きて、公卿の斬を論ず。泰時、之を京師に於て、戮するを難る。七月、諸將をして、これを東國に押送せしむ。皆途に斬る。獨、忠信は、其妹、嘗て、實朝に適きしを以て、死を宥して、越後に流す。後、泰時、光親

義時帝を廢す
後堀河天皇
【兩親王】雅成、頼仁
三上皇を遠國に徙す

の諫疏を得て、大に之を殺せしを悔いきと云ふ。是に於て、義時帝を廢して、高倉帝の孫守貞親王の子を立つ。是を後堀河帝と爲す。遂に上皇に逼りて髪を削らしめて、之を隱岐に徙す。順德上皇を佐渡に兩親王を但馬、備前に徙す。土御門上皇、謀に與からず。且之を諫む。故を以て問はず。乃、義時に勅して曰く、「朕安ぞ獨、留まるに忍びんや」と。十月、之を土佐に徙し、後、阿波に徙す。是月、秀康父子を南都に獲たり。諸の籍沒する所の、三千餘邑、義時、悉く分ちて戰功の將士に與へ、一も取る所なし。而して北條氏の勢威、滋熾なり。

兩六波羅
栂尾僧高辨

泰時、既に官軍を破り。時房と留り、京畿を鎭むること四年、分れて六波羅の南北に居る。兩六波羅と號す。泰時、京師に在りて、栂尾の僧高辨の名を聞く。往きて之を訪ふ。高辨、泰時に語りて曰く、「國を治むるは、猶病を治むるが如し。其因を究めずして藥すれば、徒に病を益すのみ。治亂の因は、人の欲に在り。公、苟も欲を絶ちて以て之を率ゐなば、治すること幾かる可し」と。泰時大に悅ぶ。元仁元年、大に旱す。世、以て亂逆の致す所と爲す。北條氏、祈禳、甚努む。六月、義時、病みて卒す。泰時、時房、皆東に歸る。政子、泰時を以て執權を襲ひ、以て賴經に傳たらしめんと欲すれども、其服に在るを以て、之を疑ひ、廣元に諮る。廣元對へて曰く、「宜しく速に議を定め、以て人心を鎭むべし」と。泰時、八弟あり。後母藤原氏の出多し。泰時之に父の邑を割き與へ、自、取るは甚少し。曰く、「吾れ執權爲り。復何をか求めん」と。而して藤原氏、其弟光宗と謀りて、其生む所の子四郎政村を以て、執權と爲し、其女婿參議藤原實雅を以て、將軍と爲さんとす。政村の冠せしとき、三浦義村を賓となし、約して父子と爲りき。是に於て、光宗、弟の光重と驟、三浦氏に適く。府下洶々として口耳相屬す。人或は泰時を警めて、其兵備を勸む。泰時曰く、「之を置け」と。獨、數人の給仕を許すのみ。時氏、及び從弟時盛を六波羅に遣はす。二人曰く、「鎌倉虞るべし」と。泰時曰く、「京師の虞るべきに如かず」と。遂に之を遣す。婢あり、密に泰時に告げて曰く、「光宗兄弟、大夫人の前に矢ひて曰く、『之に濫るあること莫らん』と。是れ必ず異圖あらん」と。泰時曰く、「兄弟濫る莫きは、嘉すべ

三浦義村
泰時の大量

政子義村を詰る
【四郎】義村
【故大夫】義時

しと爲すのみ」と。已にして騷擾已まず。政子、一侍女を從へ、夜、義村に造る。義村、惶恐して出で迎ふ。政子曰く、「近日物議騷然たり。聞く政村、光宗、日に首を子が家に聚むと。謀る所は何事ぞ。武州を圖るに非ざるを得んや」と。義村曰く、「知らざるなり」と。政子色を作して曰く、「何ぞ知らずと曰ふを得んや。且、子、政村を挾み、以て反を圖るか。抑和平を計るか」と。義村、乃、誓ひて曰く、「四郎は他無し。獨、光宗微しく異圖あり。臣當に之を禁止すべし」と。明日、義村往きて、泰時に謁して曰く、「僕、故太夫の公と四郎とを眷遇せらるゝを記す。僕に於て何ぞ擇ばん。願ふ所は安平是のみ。日者、光宗云々せんと欲す。僕心を盡し諷導し、終に服從せしむるを得たり」と。泰時、顏色自若として曰く、「僕、政村に於ける、固より釁隙なし。安ぞ偏私する所有らんや」と。居ること十餘日、府下、又大に擾る。政子、終に賴經を抱きて泰時の第に入り、義村及び諸宿將を召し、廣元をして論決せしむ。實雅を送りて京師に歸し、光宗を信濃に流し、藤原氏を北條に還す。廷議して實雅を越前に流す。事、即定る。黨與を問はず。

嘉祿元年
廣元卒す
政子薨す

嘉祿元年、六月廣元卒す。七月、政子薨ず。泰時、評定、引付の兩職を置きて、政事を諮詢す。又家令を置き、平盛綱、尾藤景綱を以て之を爲さしむ。地頭の侵攘を申禁し、京官と抗するを得ざらしむ。京師に篝卒を置く。鎌倉の將士、衞府官を帶びて、而して衞らざる者、衞りて期に後るゝ者、皆直を縣官に納れむし。貞永元年、泰時、三善康連と議し、式目五十條を立てゝ以て、聽斷を資く。評定衆十二人に誓ひて曰く、「吾が曹、天下の司直たり。偏私を挾む所の者は、國神之を殛す」と。又諸吏をして獄を斷ぜしむるに、輕罪は其身に止まり、羅織すること勿らしむ。盜竊する者は、倍して之を贖はしむ。武田信光、海野幸氏と界を爭ふ。幸氏直なり。泰時、之に予ふ。或人曰く、「信光、公を啣む」と、泰時曰く、嚮に和田氏、胤長を宥さんことを請ふ。而るを先人之を流す。和田氏爭ふ能はず。公私如何を顧みるのみ。怨を畏れて決せずんば、何ぞ執權に取らんや」と。信光、之を聞きて自、惧れ、書を効して他なきを誓ふ。泰時以て諸將に示して、終に恒例と爲す。

信光、幸氏の訴訟
【胤長】建保元年三浦胤長故賴家の子を擁して亂を作さんと謀る
貞永元年式目を定む
【和田氏】義盛

嘉禎二年
仁治三年
泰時卒す

泰時の性行逸事

【朝時書して上文泰時の辭を書するなり、權勢を以て自らに異なりとせず】

（北條泰時筆蹟）

勤儉以て士を率ゐる

儒人を愛す

寛元二年
頼嗣

嘉禎二年、泰時從四位下に進む。仁治三年六月、卒す。年六十なり。泰時の人と爲り、親族に敦く、常に叔父時房を推して之に下る。嘗て評定所に在りて、弟朝時の第に寇ありと聞き、輙、起ちて赴き援ふ。平盛綱曰く、「是小事のみ。公、重職に任じ、何ぞ自輕しくするや」と。泰時曰く、「兄弟難あり。何ぞ小事と曰はん。吾を以て之を視れば、建保、承久の二役と奚ぞ擇ばん。苟も吾が親を喪ふときは、重職何にか爲ん」と。朝時、書して家に藏めて曰く、「世々子孫、武州の裔に背く毋れ」と。泰時、權勢を以て、自異なりとせず。常に諸將と、更幕府に直す。老に逮びて懈らず。當直の夕、敢て辱せず。頼朝の墓に詣づる毎に、堂下に拜す。或曰く、「盍ぞ上らざる」と。曰く、「將軍在しゝ時、吾れ未だ登るを得ず。豈、將軍を死せりとせんや」と。其四位に進みしとき、人に謂て曰く、「功なくして爵に進む。終を保たざるを恐る。吾れ將に之を神に祈らんとす」と。僧あり、これに說きて曰く、「一佛寺を建て、以て、治安す可し」と。曰く、「財を靡し、民を蠹ふ。何の治安かこれ有らん」と、遂に其僧を逐ひき。泰時、鋭意、治を求む。其政府に參するとき、衆に先だちて入る。躬、勤儉を執りて、以て將士を率ゐ、將士の富家に貸る者は自、爲に息を償せ償ふ。饑歲あるに遇へば、倉を發きて之を賑す。或は場を設けて、流民を救濟す。其卒するに及びて、天下之を惜む。子時氏、先だちて卒す。時氏の子經時、嗣ぎて執權と爲る。泰時、常に儒人を愛す。經時に謂て曰く、「政を爲すこと文に在り。專、武斷を用ゐる可からず」と。經時吏事に長ず。世「祖父の風あり」と稱す。遂に其官を襲ふ。寛元二年、將軍頼經、職を其子頼嗣に讓る。甫めて六歲なり。四年、經時疾あり。亦執權を弟時頼に傳へて卒す。故朝時の子光時、頼經に寵あり。因りて時頼を圖るを勸め、自之を代らんと欲し、兵士を府下に集む。時頼、吏卒を遣して衢路を扼し、而して兵を以て自禦る。頼經の使者來れども、見ゆるを許さず。光時、髮を削り、罪を謝す。之を伊豆に流し頼

三浦光村
泰村

寶治元年

匿名書

經を送りて京師に還す。其近士三浦光村、與に護兵と爲り、京師に至る。辭して還るや、嗚咽して曰く、「臣、必ず以て君に報ずる有らん」と。既に鎌倉に歸り、潛に兵を其邑に徵す。其兄前若狹守泰村に反を勸む。泰村果さず。泰村は義村の子なり。時に義村已に卒す。泰村、威權仍盛なり。族黨最廣し。時頼の外祖安達景盛、髮を削りて高野に在り。寶治元年四月、景盛、府下に來り、數〻時頼の家に往く。已にして其子の義景、孫の泰盛に謂て曰く、「汝が輩、三浦氏の近狀を目せざるか。而して之に頰首するや」と。五月、鶴岡祠前に榜あり。曰く、「泰村、將に誅せられんとす」と。時頼、事に因りて三浦氏に寄宿す。氏族悉く集りて、酒を獻ず。迭出で、更入る。時頼頗る之を怪しむ。其夜、障内に鎧冑の聲あるを聞く。決起して曰く、「果して然らん」と。一從者を麾きて、徒歩して歸る。泰村、驚惋して措かず。翌夜、時頼、人をして三浦の諸第を訷はしむ。皆兵仗を蓄ふ。時頼、益〻戒心あり。將士、之を聞きて爭ひ至る。明日、泰村の第に匿名の書あり、曰く、「子、將に誅せられんとす。盍ぞ戒めざる」と。泰村曰く、「是れ我に毒する者」と。取りて之を毀り、人をして時頼に謝せしめて曰く、「道路の言を聞くに、泰村に關する者の如し。家僕傳へ聞きて、爭ひ來りて相衝る。卽し尤怪せられば、當に速にこれを散去すべし。如し事他人に關し、衆力を須ゐること有らば、當にこれを率ゐて、以て奉援すべし」と。時頼、慰諭して遣歸す。大江季光の妻は、泰村の妹なり。來りて其兄に意を決して反を勸むれども、亦果さず。會〻時頼の誓書至る。速に兵を罷めしむ。泰村、大に喜びて之に從ふ。使者出づ。其妻賀して食を進む。泰村、一噀して未だ下す能はざるに、門外大に囂しきを聞く。安達氏の兵來り攻むるなり。泰村瞙眈して、急に之を防ぐ。時頼、是に於て、弟時定を遣し、兵を將ゐ、援けて三浦氏を攻む。金澤實時をして幕府を守らしむ。實時は泰時の弟、實泰の子なり。大江季光、將に往きて時頼に屬せんとす。其妻慍りて曰く、「良人は士に非ざるなり」と。季光、乃、泰村に屬す。時頼、人をして三浦氏の北隣を火かしむ。泰村大に敗れ、走りて頼朝の影堂に入る。光村、八十騎を以て、永福寺に據りて、以て泰村を呼ぶ。泰村敢て往かず。光村、乃、堂中に至る。諸軍之を圍む

【若州】泰村光村自殺す

泰村其族二百七十人と皆死す

【重時】祖父泰時の弟赤橋相摸守建長元年四年

（北條時頼肖像）

宗尊親王

時頼の儉薄

青砥藤綱【束載の牛】束牲に誓書を載せて神に供するなり

是に於て、三浦氏の宗族、影前に列坐す。光村慷慨して曰く、「前に殿下の密旨に從はゞ、則我が族、將に軍政を專にせんを、若州、猶豫して、以て此の辱めを取る」と。刀を引きて、自、其面を撫ぎ、問ひて曰く、「猶識る可きか」と。遂に自殺す。殿下とは、道家を謂ふなり。泰村、泣きて曰く、「我が四世、功を幕府に積む。又北條氏の外戚を以て、内外を輔佐す。乃、禍を免るゝ能はざるか。然りと雖、焉ぞ先君の多殺の報に非ざるを知らんや。何ぞ遽に北條氏のみを之懟みんや」と。其族二百七十餘人と皆死す。諸の三浦氏の妻孥は、皆之を釋す。後、泰村の女野本尼といふ者、亂を作さんと謀りて、殺さる。

是より先、時頼の從祖父重時六波羅の北方に鎭す。時頼之を召さんと欲す。泰村之を止む。建長元年、召し至る。並に執權たり。時頼、相模守と爲る。四年、道家暴に卒す。賴嗣、又時頼を圖る。長久連等を遣して諸將士を誘ふ。佐々木氏信、縛して之を時頼に送る。時頼、乃賴嗣を廢し、京師に送り還す。後嵯峨帝の皇子宗尊親王を迎へて鎌倉の主と爲す。政子の志を成すなり。

時頼、泰時の式目を循守す。内外、治を稱す。而して其自奉ずる、人の堪へざる所多し。大佛宣時は、時房の孫なり。嘗て時頼に詣る。時、已に深夜なり。時頼、一壺の酒を手にして曰く、「子と之を共にせんと欲す。顧ふに安ぞ肴を得る所あらん」と、紙燭を照し、庋に索む。碟に殘醬あるを覩る。取りて酒を佐く。其儉薄なること此の如し。

其人を用ゐる、門地に拘らず。嘗て青砥藤綱を擢づ。藤綱は微者なり。少くして學を好み、僧の行印を師となす。年旱に遭ふ。時頼、僧を聚めて之に施す。又親三島祠に祈る。其束載の牛、水に溲す。藤綱、傍に在りて叱して曰く、「汝も亦北條公の臣事に倣ふか」と。衆、其說を問ふ。曰く、「方に旱す。牛にして知るあらば盍ぞ田に溲せざる。今僧に施すに、其貪廉を甄たず。廉者は寧餓うとも來らず。徒に貪者を飽かしむるのみ。是れ何ぞ牛の水に溲するに異ならんや」と。時頼、之を聞きて、召し見て與に語りて、大に之を說ぶ。竟に擢でゝ引付衆と爲す。公文といふ者あり。北條氏の封人と、畔を爭ひて訟ふ。衆、皆、時頼を畏れて公文を曲とす。獨、藤綱、之を直とす。公文、之を德として、報ずる所あらんと欲し、夜、錢を苞にして、其後圃に投じて去る。藤綱、大に怒りて曰く、「相模公は天下の直を司る。公文を直とするは、乃、相模公を直とするなり。公こそ宜しく報ぜらるべけれ。是れ何ぞ舛れるか」と。郵りて其錢を還す。

引付衆

藤綱自ら儉して人に施すを喜ぶ（藤綱買炬撈錢の圖）

嘗て夜行して、十錢を水中に遺す。乃、炬を買ひ、水を照して之を撈ふ。炬の直五十錢なり。或人曰く、「得るもの失ふを償はず」と。藤綱曰く、「五十錢は吾れ失ひ、人得。十錢は誰か之を得る者ぞ。我れ六十錢を取りて、以て世に益す。大に得ざらんや」と。藤綱、自、儉して施すことを喜ぶ。日に一晡を食ひ、布衣袴褶し、刀室漆せず。時頼、之に祿を加へんと欲して曰く、「神、夢を我に見す。曰く、『汝、治を願はゞ藤綱の祿を增せ』と。」藤綱固く辭す。時頼曰く、「何ぞ辭するか」と。曰く、「神、『藤綱の祿を增せ』と曰ひて、之を增さば、則神『藤綱の首を斬れ』と曰はゞ、之を斬らんか」と。時頼、又從容して其欲する所を問ふ。藤綱、乃、鎌倉及び諸州吏の姦狀を陳べて曰く、「管子に稱す、『階前千里、門外萬里』と。是れなり」と。乃、其最姦なる者を罰す。世是を以て、時頼、人を得たりと稱すと云ふ。康元元年、時頼疾ありて髮を削る。是より先、時頼、禪を宋の僧道隆に學ぶ。爲に建長寺を造り、又最明寺を造る。是に於て、最明寺に老す。長子時宗、猶幼なり。重時の子

時頼人を得たり康元元年時頼禪を學ぶ長時

弘長三年時頼卒す

文永三年

長時を以て執權と爲す。

弘長三年、時頼卒す。卒するに臨みて、偈を作りて曰く、「業鏡高く懸る、三十七年。一槌破碎し、大道坦然たり」と。蓋し享年三十七なり。

時宗、十三にして從五位下に叙し、左馬權頭に任ぜらる。外舅安達康盛、軍政に參與す。文永三年、將軍宗尊、病と稱して出でず。僧良基入りて之を禱る。而して藥を徵さず。府下、頗る、物議あり。兵士四より至る。良基出でゝ奔る。幕府の近臣、稍出でゝ留侍する者五人のみ。宗尊、竟に京師に還り、其子惟康を立てゝ之に代らしむ。

七年

時宗九年

小笠懸

七年、長時卒す。時宗、執權たり。時宗の庶兄時輔、長時の弟義宗と、倶に六波羅を鎭す。時輔、居常怏々として、弟に降るを愧づ。九年二月、時宗、義宗をして、時輔を擊ちて、之を殺さしむ。其異志有るを聞けばなり。

時宗、人と爲り强毅にして撓まず。幼にして射を善くす。弘長中、大に極樂寺の第に射る。將軍、小笠懸を觀んと欲し、顧て諸士に命ず。敢て應ずる者なし。時頼曰く、「太郎、之を能くす」と。太郎は、時宗の幼字なり。召して場に上らしむ。時に年十一なり。馬に跨りて出で、一發にして中つ。萬衆齊く呼ぶ。時頼曰く、「此兒、必ず負荷に任へん」と。

是時に當りて、宋氏、胡元の爲に滅され、諸隣國、みな元に服す。獨、我が邦、使聘を通ぜず。元主忽必烈、韓人をして、書を我に致さしめて曰く、「服せずば則兵を尋ゐん」と。朝廷、之に答へんと欲して、鎌倉に下して議せしむ。時宗、其書辭の無禮なるを以て、執りて不可と爲す。元主、復、使者趙良弼を遣し來らしむ。時宗、太宰府をして之を逐はしむ。凡そ、元使の至ること、前後六反なり。みな拒みて納れず。十一年十月、元の兵一萬可り、來りて對馬を攻む。地頭宗助國に

建治元年

鎭西探題

弘安二年

（蒙古襲來賊船覆沒の圖）

元主忽必烈使者を送る（北條時宗肖像）

十一年元兵來寇

元兵大擧して來る

【漢、胡、韓】支那蒙古三韓

四年【志賀島】筑前

【鷹島】筑前

七年時宗卒す

貞時

之に死す。轉じて壹岐に至る。守護代平景隆之に死す。事、六波羅に報ず。鎭西の諸將をして、赴き拒がしむ。少貳景資、力戰して、射て虜將劉復亨を殪す。虜兵亂れ奔る。而れども元主、必ず初志を遂げんと欲す。後宇多天皇の建治元年、元の使者杜世忠、何文著等の九輩、長門に至り、留りて去らず。必、我報を得んと欲す。時宗、之を鎌倉に致し、龍口に斬る。上總介北條實政を以て、鎭西探題と爲す。東兵を遣し、京師を衞らしめ、西兵の衞る者は、悉く實政に從はしむ。益、太宰府の水城を築き、冗費を省きて兵備に充つ。弘安二年、元使周福等、復宰府に至る。復之を斬る。元主、我が再び使者を誅せしを聞きて、則、憤恚して、大に舟師を發す。漢、胡、韓の兵を合し、凡十餘萬人と云ふ。范文虎を以て之に將とし、入寇せしむ。四年七月、水城に抵る。舳艫相銜む。實政の將草野七郎、潛に兵艦二艘を以て、志賀島に邀へ擊つ。首虜二十餘級を斬る。虜、大艦を列ね、鐵鎖を以て之を聯ねて、弩を其上に彀る。我兵、近づくを得ず。河野通有、奮ひ前む。矢、其左の肘に中る。通有、益前みて、檣を仆し、虜艦に架し、之に登りて、虜將王冠を擒にす。安達次郎、大友藏人、踵いで進む。虜、終に岸に上る能はず。收めて鷹島に據る。時宗、宇都宮貞綱を遣し、兵を將ゐて實政を援けしむ。未だ到らず。閏月大風雷あり、虜艦敗壞す。少貳景資等、因りて奮擊して海、歩みて行くべし。虜兵十萬、脫れ歸る者、纔に三人と云ふ。元、復、我七年時宗卒す。子貞時、甫めて十四なり。繼ぎて執權となり、父の官爵

【官位】從五位下左馬權頭

を襲ふ。安達泰盛、外祖を以て益專なり。太宰府の捷、其子弟與りて力あり。威望日に盛なり。內管領平賴綱と權を爭ふ。內管領は、卽家令なり。泰盛の子宗景、性狂易にして、其曾祖は實に賴朝の子なり と謂ふ。遂に姓を源氏と改む。賴綱、因りて之を譖して曰く、「彼れ姓を更めしは、將軍爲らんことを冀ふなり」と。十一月、貞時、兵を發して安達氏を滅す。人以て三浦氏の報と爲す。賴綱、獨政を執る。後賴綱も亦反を圖る。其子宗綱、之を貞時に告ぐ。賴綱を誅し、宗綱を流す。正應二年九月、府下騷擾す。貞時、惟康を廢して、之を輿に倒載し、京師に送還す。東人曰く、「將軍京師に流さる」と。乃後深草帝の三子久明を請ひて將軍と爲す。永仁元年、長門探題を置く。

正應二年惟康を廢す

【倒載】罪人を遣り放つの處置を示すなり

永仁元年久明將軍と爲る長門探題

四年、僧良基、故源範賴の裔吉見義世を誅して亂を謀る。捕へて之を誅す。

正安三年師時時村

正安三年、貞時髮を削りて老す。時賴の孫師時、政村の子時村をして、並に代りて執權たらしむ。師時の從弟宗方、權を爭ひ、命を矯めて、先づ時村を殺し、遂に師時を殺さんと欲す。貞時怒りて、宣時の子宗宣に命じて、之を誅せしむ。

延慶元年久明を廢し守邦を立つ應長元年

延慶元年、久明を廢し、其長子守邦を立てゝ、之に代らしむ。應長元年、貞時、師時、相繼ぎて卒す。貞時、意を政治に留め、時賴の風を慕ふ。初め時政、義時以來、數使を遣し、曹を分ち郡國を行り、吏民の寃枉を問はしむ。時賴、貞時に至りて間使を發し、緇衣を被て四出し、摘發する所多し。吏欺くを得ず。而して間使又稍奸を成す。時賴、貞時、終に親出でゝ之を按ずと云ふ。

高時

文保元年

貞時既に卒す。長子高時甫めて九歲なり。宗宣、及び時村の孫熙時、並に執權たり。幾も無くして皆卒す。長時の姪基時、及び實時の孫金澤貞顯、之れに代る。高時の舅安達時顯は泰盛の弟なり。內管領長崎圓喜は賴綱の甥なり。貞時の遺命を以て、共に高時を輔く。五年、遂に高時を立てゝ執權となす。文保元年、高時相模守と爲る。高時、性頑率にして政を時顯、圓喜に委ぬ。二人、心を協せて、賴時の舊規を修む。既にして圓喜老す。子の高資、之に代る。高資、性多欲にして黜陟予奪、一に賄を以て成る。

元亨二年

元亨二年、陸奥の人安藤堯勢、族の季長と、邑を爭ひて訟ふ。皆、高資に賂ひす。高資兩ながら之を納れて決せず。一人怒りて、邑に據りて反す。承久以來、士の北條氏に叛く者、此に始る。北條氏、人を遣して之を討てども克たず。高時、以て意と爲さずして、日夕飲宴す。一日、狗の庭に鬪ふを見て、之を喜ぶ。遂に吏民をして獎を貢せしむ。獎數千集る。分ちて諸將に附して養視せしむ。輿載して往來す。獎に遇ひて下らざる者には誅あり。獎の群鬪哮噉するや、尸を爭ふ者の狀の如し。高時、又田樂を喜む。樂師も亦數千あり。纏頭の費毎に萬を以て數ふ。一夕、高時獨醉舞するに、十餘倡あり。來り歌ひ、以て之を助く。姬人、之を訶ふに倡みな天狗なり。歌ひて曰く、「天王寺の妖靈星を見ずや」と。歌ひ終りて去る。獸跡、座に滿つ。高時醒めて、見る所なし。已にして疾あり。高資、其髮を削り職を貞顯に讓らんことを勸む。高時の弟康家、其己に讓らざるを惱りて、亦髮を削る。高時、病より起ちて、貞顯を誅せんと欲す。貞顯、自、斃して之を謝す。諸將爭ひて之に傚ひ、圓顱、朝に滿つ。高時、頗る高資に不平なり。密に長崎高賴をして之を誅せしむ。高資、覺りて高賴を捕へ、之を流す。內外憤怨す。擺津の渡邊氏、大和の越智氏、皆、兵を起す。高時、吏に命じて之を擊たしむ。又克たず。

士の北條氏に叛く者此に始まる

高時犬鬪を好む

正中二年

正中二年、高時、中納言藤原資朝を佐渡に流す。其北條氏を圖るを以てなり。

南北朝分立の原因

初め、北條氏、承久の亂を定めて、後堀河帝を立つ。帝、位を太子に傳ふ。是を四條帝と爲す。帝崩ず。朝議、順德の皇子を立てんと欲す。賴時、土御門帝の亂謀に與からざるを思ひて、安達義景を遣し、其皇子を立てしむ。義景、途より還りて曰く、「もし、順德の皇子立つが如きこと有らば、則ち、奚爲せん」と。曰く、「之を廢せよ」と。遂に京師に入りて、後嵯峨帝を立つ。帝の二子後深草、龜山、相繼ぎて位に昇る。後嵯峨帝、特に龜山を愛す。時賴に遺詔して曰く、「龜山の後、永く皇統を承がしめん」と。乃、長講堂の領を以て、後深草の湯沐の邑と爲す。後深草、上皇、時宗の力に倚りて、以て政柄を得んと欲す。時宗、敢て從はず。已にして龜山、位を太子に傳ふ。これを後宇多帝と爲す。上皇、憤恨して、髮を削らんと欲す。時宗、

淺原爲頼の亂

後深草龜山の二統十年毎に更立の議成る

後醍醐天皇

天皇北條氏を討んとす

元弘元年

乃、上皇の皇子を以て、後宇多の儲貳と爲す。是を伏見帝と爲す。伏見帝立ちて三年、賊淺原爲頼と云ふ者あり。夜、宮中に入りて逆を謀り、成らずして自殺す。六波羅、之を檢するに、事、龜山上皇に連る。上皇、書を貞時に賜ひて他なきを誓ふ。帝、密に貞時に勅して曰く、「龜山の位に在るや、承久の事を慣りて、陰に圖る所あれども、敢て發せず。其後を立つるは、卿が利に非ざるなり」と。貞時、乃、帝の皇子を立つ。是を後伏見帝と爲す。後宇多上皇、使を遣し貞時を責む。貞時、乃、帝を廢し、後宇多の皇子を立つ。是れを後二條帝と爲す。因りて議を定め、後深草、龜山の二統、十年毎に更立つ。是より先、時頼、藤原氏を分ちて五派と爲し、更攝錄に任ず。貞時の天位を議するは、蓋し之に傚へるなり。帝崩ずるに及びて、後伏見の弟を立つ。是を花園帝と爲す。朝議は、後二條の皇子邦良を立てゝ其後を承けしめんと欲す。龜山上皇、特に意を後宇多の次子に屬す。使を遣して、貞時に諭して之を立つ。是を後醍醐帝と爲す。邦良を其太子と爲す。

帝、北條氏の、陪臣を以て、世廢立を主るを憤り、陰に之を滅さんことを謀る。高時の政を失ふを視て、竊に之を喜ぶ。資朝及び右少辨俊基等をして、美濃の源氏土岐頼兼、多治見國長等を誘致せしむ。事覺る。或人、之れを六波羅の北方北條範貞に告ぐ。會攝津の民、亂を作す。範貞、因りて四十八所の篝卒を召し、三千人を得て、以て頼兼、國長を襲ひて、之を殺す。是の時、正中元年九月なり。明年五月、高時兵を遣し、資朝、俊基を收致せしむ。之を按問すれども服せず。遂に廢立を謀る。帝、因りて誓書を賜ふ、高時、其書を奉還し、俊基を釋し、遂に資朝を流す。

嘉暦元年

護良親王を山門座主とす

元弘元年

嘉暦元年、邦良薨ず。帝、初め邦良を廢し、皇長子尊良を立てんと欲す。高時可かず。是に至りて又三子護良を立てんと欲し、使を遣して後嵯峨の遺命を申ぶ。高時、貞時の議を執りて、後伏見帝の子量仁を立てて東宮と爲す。帝怒る。護良と謀りて、諸寺の僧徒を誘ふ。因りて護良を以て山門の座主と爲す。僧圓觀等を召し、北條氏を呪詛せしむ。元弘元年、事覺る。圓觀等を捕へ、鞫して實を得たり。再、俊基を執ふ。後伏見法皇も、亦人をして來りて具に帝の陰謀を告げしむ。高時、乃、大に諸將吏を聚め、計を問ふ。衆、敢て言ふこと莫し。高資曰く、「主上、親王は之を流し、公卿の黨する者は、之を斬り、此の如くして已まん。再、悔を貽す勿れ」と。一階堂貞藤諫めて曰く、「北條氏、世王室を尊び、下民を惠む。國命を執ること、百六十年に幾き所以なり。今已に公卿を執へ、又帝王を遷さんと欲せば天道を如何せん。苟も我れにして釁無からしめば、朝廷何ぞ能く爲さん」と。高時之に從ふ。

高資及貞藤の議

兵を京師に入る

【南北】六波羅の南北

天皇叡山に幸す

【兩上皇】後伏見帝花園帝

天皇笠置山に幸す

【笠置山】山城

【一師】仲時

時益

光嚴天皇

二年後醍醐天皇を隱岐に流す

【千窟赤坂】河内

【吉野】大和

【白旗】播磨

三年

八月、貞藤等を遣し、三千騎を以て京師に入らしむ。基時の子仲時、政村の曾孫時益、方に南北を鎭す。貞藤を得て與に事を計る。事泄る。帝、逃れて南都に之く。仲時、益兵を遣し、宮中に索むれども、帝を獲ず。則、兩上皇、太子を六波羅の北方に奉ず。僧豪譽、來りて帝の叡山に在るを告ぐ。則、近江の守護を遣し、兵を將ゐて之を攻むれども利あらず。已にして南都の僧、來りて帝の笠置山に在すを告ぐ。二師、乃、近江の兵をして叡山に備へしめて、檢斷糟谷宗秋、隅田通倫等を遣し、笠置を圍ましむ。城固くして拔けず。高時、大佛貞直、金澤貞冬を遣し、數萬騎を將ゐ、助け攻めしむ。未だ至らざるに、陶山義高、小見山氏眞、五十餘人を將ゐ、夜、風雨に乘じて、城に絶して入り、火を縱ちて呼譟す。外兵之に應ず。城卽陷る。帝、逃れ走る。追ひ獲て、之を六波羅の南方に拘す。高時、貞藤及び安達高景を遣し、量仁を立てゝ位に卽かしむ。是を光嚴帝と爲す。貞直をして兵を引きて官軍の將楠正成を攻めて、之を走らしむ。二年光嚴帝の詔を請ひて、帝を隱岐に徙す。千葉貞胤、小山秀朝、佐々木高氏、兵を將ゐて護送す。已にして楠正成、復兵を起す。皇子護良、赤松則村、繼ぎて起り、千窟、赤坂、吉野、白旗の諸城に據る。高時、義子阿曾時治を遣し、貞藤、高直、高資と、五萬騎を以て赴き攻めしむ。三年二月、時治、赤坂を攻む。人見恩阿、本間資貞、先登す。資貞の子甫めて十八。父に隨ひて死す。城終に陷る。閏月、貞藤もまた吉野を陷る。時治と俱に高直を援けて、千窟を圍めども、下す能はず。三月、六波羅の二師、山陽の兵を徵す。

三月
【三石】備前
【摩耶山】攝津
天皇隱岐を遁れて伯耆に歸る
【桂川】山城
新帝、兩上皇六波羅に入る
【八幡】山城
【山崎】山城
名越足利高氏
【狐川】山城
高氏官軍に降る
時益死す
【番馬驛】近江
仲時自殺す
宗秋以下四百餘人死す

兵、則村に降り、ために三石を守る。則村進みて摩耶山に據る。二師、又四國の兵を徵す。伊豫の豪族も亦官軍に應ず。二師、近江の兵を遣し、則村を攻めて、大に敗る。是に於て、數隱岐の守護を警め、帝の逃逸に備ふ。而して帝果して逃れ、伯耆に歸る。二師、再萬人を遣し、則村を攻む。又敗る。則村、藤原宗鎭と火を縱ちて來り攻む。宗秋、通倫を遣し、兵二萬を以て之を桂川に拒ぐ。則村の子則祐、流を亂りて、來り擊つ。我が兵、又大に敗る。時已に夜なり。新帝、兩上皇、六波羅に入る。二師、大に兵を七條磧に出す。陶山高通、河野通盛、巷戰して則村を走らす。則村、退き走りて八幡、山崎を扼す。運路梗塞す。二師、兵を遣して、之を擊つ。伏に陷りて敗れ還る。而して山徒も亦護良の令を以て來り攻む。二師、彊騎を遣し、擊ちて僧兵を走らす。因りて昭りに利を以てす。又近江の守護佐々木時信をして之に備へしむ。高通、通盛、又則村を京南に敗る。而して官軍の將源忠顯の大兵來り攻む。二師、甲を悉して陣に乘る。時信、五千人を以て忠顯を擊ちて走らす。而して結城親光、遽に官軍に降る。士卒多く逃る。二師、急を鎌倉に告ぐ。使者相踵ぐ。四月、高時、名越高家、足利高氏等を遣して西上せしむ。半は行在を攻む。高家は、朝時五世の孫なり。則村と狐川に戰ふ。鮮甲を被り、挺で、前み、箭に中りて死す。高氏、傍觀して戰はず。馬より下りて飲を張る。遂に官軍に降り、兵を合して京師を攻む。京師の兵三萬、大半は吏胥にして、戰に習はず。二師、乃、溝を深くし、壘を固めて之を守る。擊ちて忠顯を卻く。已にして城兵大に潰えて、千餘人を餘す。二師、宗秋の議を聽き、夜、兩上皇、新帝、太子を奉じて、城を空くして東に走る。土兵、環起して射る。太子以下四走す。矢、新主の肘に中る。時益之に死す。天明、又敵數百に遇ふ。擊ち破りて過ぐ。明日、番馬驛に至る。土兵數千人、龜山の皇子守良を奉じ、路を夾みて陣するに遇ふ。宗秋、擊ちて其先鋒を破る。而れども兵疲れ矢盡く。走りて佛寺に入る。仲時と謀り、近江の一城に據らんと欲す。時に近江の守護、殿して後れたり。之を待つに至らず。仲時曰く、「是も亦叛けり」と。乃、其兵に謂て曰く、「吾が首を官軍に獻ぜよ。是れ我が諸君の勞に報ゆる所以なり」と。乃、自殺す。

新田義貞
入間河合戰
【入間河、久米河、分陪】武藏
三浦義勝
【三道】子囊
坂極樂寺坂
假粧坂
義貞鎌倉を攻む
義貞の軍府中に入る

新主、兩上皇、收はれて京師に入る。高時、未だ之を知らざるなり。獨、尊氏叛くと聞きて則恐る。上野、下野等、六國の兵を發し、弟泰家に附して西上せしむ。因りて糧を諸邑に徵し、次ぎて新田義貞の邑に至る。義貞、其吏を斬る。高時大に怒りて、乃、專其鋒を北に向く。金澤貞將、櫻田貞國を遣し、道を分ちて義貞を攻めしむ。貞國、義貞と入間河に戰ふ。殺傷相當る。退きて久米川に次す。明日、又戰ふ。利あらず。退きて、分陪に次す。高時、泰家を遣し、之を援けしむ。黎明、兵三千人をして齊しく射しむ。全軍之に從ふ。大に義貞の軍を破る。既に勝ち、驕りて備を設けず。會、三浦義勝叛きて義貞に屬し、兵を合せて來り襲ふ。泰家駭き走る。橫溝某、安保某、還り鬪ひて之に死す。而して小山、千葉の二族、皆叛く。貞將、與に戰ひて、敗走す。諸軍敗れて、鎌倉に歸れば、則六波羅の敗聞至れり。內外色を失ふ。一日を間て、義貞、三道より來り攻む。高時乃基時、貞直、守時を遣す。守時は、長時の孫にして、足利尊氏の妻の兄なり。子囊坂に拒ぎて大に敗る。曰く、「吾れ猜疑を被るより、速に死するに若かず」と。乃、自殺す。貞直、極樂寺坂に拒ぎて敗れ退く。家臣本間某、罪を獲て家居す。是の日出でゝ戰ふ。敵將大館宗氏を斬りて、首を貞直に獻じて自殺す。貞直、感激して敵陣を冒して死す。基時、義貞と假粧坂に相持す。而して義貞の選兵、稻村崎より入り、火を府中に縱つ。基時、千餘人を以て東勝寺の先塋に逃る。貞將、戰死す。基時、國時、鹽飽聖達父子、自殺す。三道の軍皆潰ゆ。安東聖秀、極樂寺の軍より還れば、則、府第已に灰となる。憤激して曰く、「百年の跡、何ぞ一の節に死する屍無らんや」と。馬より下りて將に死せんとす。其從女、義貞の妻爲り。書を贈りて之を招き降す。聖秀、色を作し、使者に謂て曰く、「吾が姪は士家の女にして、何ぞ此恥なき言を爲す。而して義貞も亦之を諫止せざるか」と。書を以て刀を握り、腹を割きて死す。義貞の軍、進みて府中に入る。復た抗する者なし。獨、長崎高資の子高重力戰す。敵、四面より之に萃る。高重、左右に衝突す。向ふ所皆披く。還りて高時を見て曰く、「事已に此に至る。公、自圖を爲せ。然りと雖、臣、猶一快戰せんと欲す。公、且

長崎高重力戰す

高重自殺す

高時自殺す

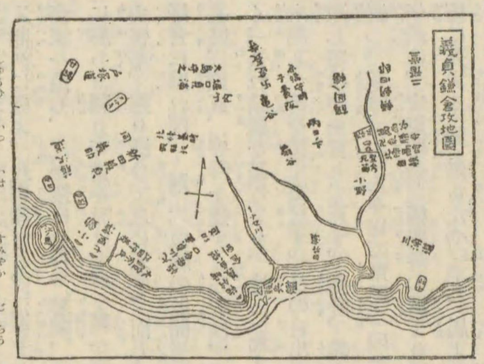
從死者凡六千八百人

（鎌倉攻地圖）

泰家

盛高

之を待て」と。乃、その愛馬に乘りて、百餘騎と與に幟を撤し、刄を裹みて、新田氏の軍に雜り入りて、義貞を狙擊す。及ぶに垂、として覺はる。敵兵、之を圍む。高重乃、大に呼びて奮呼す。馬上に敵の一將を掀げて、數歩の外に投ず。敵軍、辟易す。高重、走りて東勝寺に至れば、則高時以下方に訣飲す。觴を高重に屬す。高重三たび醋けて之を掘津道準に傳へ、而して自屠して腸を抉りて之を出す。道準笑ひて曰く、「好下物なり」と。因りて滿酌し、半を盡して以て諏訪直性に傳へて死す。直性、長崎圓喜と、皆死す。高時乃、自殺す。從ひ死する者、凡六千八百餘人。高時二子あり。萬壽、龜壽と曰ふ。萬壽の母の兄五大院宗繁、高時の遺託を受け、爲に萬壽を匿す。義貞、高時の遺胤を購ひ求む。宗繁、萬壽を斬送せんと欲す。而れども物議を憚る。乃、萬壽を紿きて曰く、「敵且來り捕ふ。宜しく伊豆に逃るべし」と。萬壽之に從ふ。宗繁走りて義貞に告げ、追ひ獲て之を斬る。義貞、宗繁の爲す所を疾みて、將に之を誅せんとす。宗繁亡げ匿れんとす。舍する者なくして、道に餓死す。初め泰家、密に諏訪盛高に諭して曰く、「萬壽は既に宗繁に託す。汝、龜壽を奉じて後圖を爲せ。家兄、自ら禍を招くと雖、而も天豈遽に我が祖宗の德を忘れんや」と。時に高時、葛西谷に逃る。而して龜壽猶孩し。從ひて母の所に在り。盛高往き



て、衆婢に言て曰く、「速に次郎を我に付せよ。公、之に訣れんと欲す。太郎已に死すと聞く。次郎も亦終に免れ難きのみ」と。衆婢皆泣く。盛高佯り怒りて、之を取り去る。信濃に走りて、諏訪の祠宮賴重の家に匿る。泰家、既に盛高を遣し、自脫走せんと欲す。重傷して鄕に歸る者の狀を爲して、眷中に臥し、衾衣を以て、自覆ひ、南部景家、伊達匡衡、之を舁き、二卒をして新田氏の號を繫け、騎して先導せしめて、陸

六波羅鎌倉共に滅ぶ

時治

大佛高直等貞藤

公宗

時興

時行

奥に走る。餘兵三百餘人、其行くこと遠きを度り、第に火して自殺す。新田氏至りて、以爲らく、康家已に死せりと。鎌倉と六波羅と十五日を間てて、皆夷滅す。長門の探題時直は、時房の第五子なり。土居氏、得能氏の爲に攻められて、航して東に走り、高時の死を聞きて、筑紫に還らんと欲す。筑紫の探題北條英時も、亦少貳貞經に攻殺せられたり。時直、貞經に因りて降る。死を宥して邑に歸らしむ。尋いで病死す。淡河時治は時房の孫なり。初め越前に屯して、北陸道を阨す。已にして越中の守護名越有時戰死す。平泉の僧兵來りて時治を攻む。時治、妻子と皆自殺す。時直、時治の亡ぶる、鎌倉、六波羅と皆月を同くす。是月、大佛高直、二階堂貞藤、長崎高資等、千窟の圍を解き、退きて南都を保つ。七月、京師を犯さんことを謀る。官軍來り攻む。高直等髮を削りて降る。阿彌陀峰に斬る。貞藤、嘗て高時を諫めしを以て、特に死を宥して邑に歸す。尋いで反を謀りて誅せらる。明年、赤橋茂時、僧慈法、及び本間、澁谷、規矩、絲田氏等、並に起り、皆敗死す。而して泰家、陸奥より潛に京師に來りて、藤原公宗に依る。公宗は公經の裔にして、北條氏と舊あり。相俱に朝廷を窺伺す。時に朝廷、政を失ふ。天下の士民、皆北條氏を思ふ。泰家、是に於て、髮を蓄へ名を時興と更む。時に龜壽、信濃に在りて、亦名を時行と更む。期を約して京師を攻めんとす。事覺れて、公宗誅せらる。時興、逃れ亡げて、終る所を知らず。

【橋本】相模賴重等死す

而して時行、諏訪賴重と、黨故を招聚す。旬日にして五萬人を得たり。東、足利直義を鎌倉に攻めて、之を走らす。尊氏、京師より來り討つ。時行、名越時基を遣し、三萬人に將として逆へ擊たしむ。發するに臨みて、大風、屋を破る。時基、更に日を卜し、兼行して橋本に戰ふ。後軍亡ぐる者多し。且戰ひ、且退き、相模河を阻て、陣す。水方に漲る。時基備へず。足利氏、夜、濟る。時基、大に敗れて三百人と走り歸る。賴重、時行をして脫走せしめて、四十餘人と與に面を剝ぎて自殺す。足利氏至りて、時行既に死せりと謂へり。時行、兵を起し、二旬にして敗る。世、之を目けて「廿日前代」と曰ふ。

廿日前代

延元二年

時行の起るや、名越時兼も亦北國に起る。時行敗るゝに及びて、加賀の將士の爲に攻め滅ぼさる。延元二年、時行使を遣はして、吉野の行在に詣り、上言せしめて曰く、「臣が父、天誅に伏す。臣、敢て怨みず。怨むる所は足利尊氏なり。世恩を臣が家に受けて、卒に之に背く。今又天子を困しむ。臣、願くば、尊氏を討ちて以て、父の罪を贖はん」と。詔して之を許す。尋いで五千人を以て伊豆を發し、官軍の將源顯家に從ひて、足利義詮を鎌倉に擊走す。退きて美濃に至り、上杉憲顯等と青野原に戰ふ。轉戰して和泉に至る。顯家敗るゝに及びて、終に行宮に赴きて、左馬權頭に任ぜらる。三年、宗良親王に從ひて、遠江に至り、今川範氏の兵を匹馬驛に擊ち破り、親王に從ひて井伊高顯に投ず。亦終る所を知らずと云ふ。

青野原

時行末路

外史氏曰く。北條氏の源氏に於けるは、藤原氏の王家に於けるなり。皆寸兵尺鐵を用ゐずして、其國を衽席の上に纂へり。何ぞ其れ易きや。

蓋し人情、其宗に親むを知らざるは莫し。而も顧て妻黨の倚る可きに如かずと謂ふなり。是に於てか、兄弟を削弱し、親族を疎斥し、以て子孫の爲に患害を除かんと爲す。其、自剪伐して、以て異姓を資くるを悟らず。哀まざる可けんや。

北條氏
藤原氏

源氏の國を成すや、固より王家に懸殊す。而して其謬計は、王家の未だ爲さゞりし所に出づ。故に其禍を受くる、更に烈しき者ありき。而して北條氏の陰謀狡智は、乃藤原氏の及ぶ所に非ざるなり。其骨肉を鬪はし、其手足を剪り、其權を潛收默竊して、己未だ嘗て手を措かざるが如くす。其權を得るに及びて、亦翼戴する所ありて、敢て自居らず。其名を辭して、其實を取り、其利を舍てゝ、其柄を操る。天下をして己を議する能はざらしむ。子孫、其遺謀を守りて、加ふるに周密を以てす。終に帝王の廢立、攝籙の進退、盡く決を己に取りて、而して、己關する所なく、已むを得ずして之が措置を爲すが如くす。是れ北條氏の家法にして、能く長く天下の權衡を持せし所以なり。而して心を民事に盡すに至りては、前後の武族に罕に覩る所なり。

其名を辭して其實を取る北條氏の家法

泰時を論ず

蓋し、自其悖逆なる、人神の容れざる所なるを知りて、惴々焉として、此を以て之を贖はんことを計る。而して泰時、其最たる者なり。世の論者、泰時に於ては、間然する所無きのみとす。余謂へらく、承久の事は、泰時其罪の魁なりと。何ぞや。泰時の賢なる事、果して傳ふる所の如くならしめんか、則既に禍難を定め、大兵を輦下に擁して、諸の大處分、己に由らざるは莫し。其朝廷と幕府とに於ける、往復の際、豈以て之を善く處する所無らんや。已に理を以て導く可く、又勢を以て禁ず可し。是れ之を思はずして、其父を大惡に陷る。善政有りと雖、寧ぞ其罪を贖はんや。是に知る、舊史に稱する所、泰時、其父を勸めて、闕に詣りて降を納れしめんとすれども、義時聽さず。發するに臨みて、「親征に遇はゞ、則何をか爲さん」と問ふ。曰く、「之に降れ。否らずば則、決して前め」と。皆史氏、之が爲に過を文るのみ。信ずるに足らざることを。其後嵯峨を立つるに至るも、亦恩仇の私より出づ。論者、之を天命の正理と謂ふも亦過褒なり。然れども北條氏七世、其人理を以て論ずべき者は、獨り、泰時あるのみ。其他、義時輩の如きは、皆蛇虺、鬼蜮、又曷ぞ責むるに足らんや。或は傳ふ、「義時、深見某といふ者を誅して、其子を近づけ、卒に殺されたり」と。噫、是れ其れ或は然らん。昔、平清盛、源義朝、並に兵を稱げて上皇に抗せしも、皆讒人を除くにあるのみ。敢て其幽囚の計を遂げざるなり。然れども猶誅滅を免れざりき。義時の如きは、眞に無前の逆賊なり。而して叛名を世に脫るゝを得たり。天、其れ手を臣僕に假りて之を斃すか。其子孫に及びて、新田氏の斧鉞に遇ふ。其巢穴を抉り、其醜類を殲す。「天網恢々、疎にして漏さず」とは、豈信ならずや。外史氏曰く。時宗の元虜を禦ぎて、我が天子の國を保ちしは、以て父祖の罪を償ふに足れり。虜、蓋し其趙宋を恫喝せし所以の者を以て、來りて我れに擬す。我れ其使を卻けて納れず。未だ直曲あらざるなり。彼れ兵を以て來り脅かし、我が邊疆を剪屠するに及びては、則、曲彼れに在り。彼が使再び來る。執へて之を戮せざる可からず。彼が凶威を折き、我が民志を定め、其挾む所を奪ひて、死を決して之を待つ。深く機宜に中ると謂ふ可し。否せざれば則、我れ幾何にして趙宋たらざらんや。其後、唯、菊池氏の明を待する、

義時を論ず

時宗を論ず

菊池氏

【武を接ぐ】時宗の踵を接ぐを謂ふ　足利氏豐臣氏

【攻守】豐臣氏は之を攻む北條氏は之を守る

武を接ぐに庶幾し。足利氏の膝を屈にして外嬲せしは、言ふに足らざるのみ。豐臣氏の能く國體を辱めざる、足利氏に勝ること萬々なり。然れども明と戰ふに至りては、張皇太甚しく、内、自困敝せり。攻守、勢を異にすと雖、北條氏に及ばざる遠し。北條氏の策は、守は則土着して、徵發を煩さず。軍須は經費を擾さず。將帥に委任して中より之を掣せず。其戰は、則陸に憑りて寇を誘ひ、舸を走らせて逆へ戰ひ、短兵、急に接す。皆以て後世の法と爲す可きなり。吾れ嘗て鎭西の士人が傳ふる所の元寇の圖卷を觀しに、虜盛に砲礮を以て我に臨む。而るに我が兵、刀を揮ひて奮ひ前む。虜、發するに暇あらず。蓋し是の時、我れ未だ火器の相敵する者有ざりしなり。吾れ是を以て、兵の勝敗は、人に在りて器に在らず。我が長技自在るあり。恃む可きなりと知れり。

外史曰。北條氏之於二源氏一則藤氏之於二王家一也。皆不レ用二寸兵尺鐵一而簒二其國於二衽席之上一。何其易也。蓋人情莫レ不レ知レ親二其宗一而顧謂レ不レ如二妻黨之可レ倚也。於レ是削二弱兄弟一疏二斥親族一以爲下爲二子孫一除中患害上而不レ悟二其自剪伐以資二異姓一可レ不レ哀哉。源氏之成レ國也。固懸二殊王家一而其謬計出二王家所レ未レ爲。故其取レ禍有二更烈者一而北條氏之陰謀狡智。乃非二藤原氏所一及也。鬪二其骨肉一剪二其手足一。潛二收默一竊二其權一而如二己未一嘗措レ手。及二其得レ權。亦有レ所二翼戴一而不二敢自居一。辭二其名一而取二其實一。舍二其利一而操二其柄一。使二天下不一能レ議レ己。子孫守二其遺謀一而加以二周密一。終使二帝王之廢立。攝籙進退盡取二決於己一。而如二己無一所レ關。不レ得レ已爲二之措置一。是北條氏家法。所三以能長持二天下權衡一焉。而至レ於盡二心民事一。前後武族所罕覩一也。蓋自知二其悖逆人神所一不レ容惴惴焉計二以此贖一之。而泰時其最者矣。世之論者。於二泰時一無レ所二間然一已。余謂。承久之事。泰時其罪之魁也。何哉。使二泰時之賢果如一所レ傳乎。則概定二禍難一。擁二大兵於二輦下一。諸大處分。莫レ不レ由レ己。其於三朝廷與二幕府一。往復之際。豈無レ所二以善處一之。已可二以レ理導一。又可二以レ勢禁一。是之不レ思。而陷二其父於二大惡一。雖レ有二善政一。寧贖二其罪一邪。是知。舊史所レ稱。泰時勸二其父一。詣レ闕納レ降。不レ聽。臨レ發。問下遇二親征一則何爲上曰。降レ之。否則決前。皆史氏爲レ之文レ過耳。不レ足レ信也。至三其立二後嵯峨一。亦出二恩仇之私一。論者謂二之天命正理一。亦過褒矣。然北條氏七世。其可下以二人理一論上者。獨有二泰時一。其他如二義時輩一。皆蛇虺鬼蜮。又曷足レ責歟。或傳。義時誅二深見某者一而近二其子一。卒爲レ所レ殺。噫是其或然也。昔平淸盛源義朝。並稱レ兵抗二上皇一。皆除二讒人一而已。不三敢遂二其幽囚之計一也。然猶不レ免二誅滅一。如二義時一者。眞無前逆賊。而得レ脫二叛名於一世。天其假二手其臣僕一斃レ之也。及二其子孫一。遇二新田氏之斧鉞一。抉二其巢穴一。殲二其醜類一。天網恢恢。疎而不レ漏。豈不レ信哉。外史氏曰。時宗之禦二元虜一。保二我天子之國一。足三以償二父祖之罪一矣。虜蓋以下其所三以恫二喝趙宋一者上來擬レ於レ我。我卻二其使一不レ納。未レ有二曲直一也。及三彼以レ兵來脅。剪二屠我邊疆一。則曲在レ彼。彼使再來。不レ可レ不二執而戮一之。折二彼凶威一。定二我民志一。奪二其所一挾。而決レ死待レ之。可レ謂三深中二機宜一矣。否則我幾何而不レ爲二趙宋一也。其後唯菊池氏之待レ明。庶二幾接一武。足利氏屈レ膝外嬲。不レ足レ言已。豐臣氏能不レ辱二國體一。勝二足利氏一。萬萬。然至二與レ明戰一。張皇太甚。內自困敝。雖二攻守勢異一。不レ及二北條氏一遠矣。北條氏之策。守則土著不レ煩二徵發一。軍須不レ擾二經費一。委二任將帥一。不二自レ中掣一之。其戰。則憑レ陸誘レ寇。走レ舸逆戰。短兵急接。皆可三以爲二後世之法一也。吾嘗觀二鎭西士人所レ傳元寇圖卷一。虜盛以二砲礮一臨レ我。而我兵揮レ刀奮前。虜不レ暇レ發焉。蓋是時。我未レ有二火器相敵一。吾是以知二兵之勝敗。在レ人不レ在レ器。我長技自有レ在焉。可レ恃也。

蒙古來

筑海颶氣連レ天黑。
蒙古來。來レ自レ北。
嚇ニ得趙家老寡婦一。
相模太郎膽如レ甕。
蒙古來。吾不レ怖。
直前斫レ賊不レ許レ顧。
擒ニ虜將一。吾軍喊。
不レ使ニ羶血盡膏一ニ日本刀一。

賴山陽

蔽レ海而來者何賊。
東西次第ニ呑食一。
持レ此來擬男兒國。
防海將士人各レ力。
吾怖關東令如レ山。
倒ニ吾檣一。登ニ虜艦一。
可レ恨東風一驅附ニ大濤一。

改版 邦文日本外史 卷之五

新田氏前記

楠氏

北畠氏、菊池氏、名和氏、
兒島氏、土居氏、得能氏、

外史氏曰く。予、將門の史を修むるに、平治、承久の際に至りて、未だ嘗て筆を捨てゝ歎ぜずばあらざるなり。嗚呼、世道の變、名實の相離らざること、一に此に至るか。

古の所謂武臣と云ふは、王に勤むと云ふのみ。源氏、平氏の如き、皆然らざるは莫し。平治の後に至りて綱維の弛めるに乘じて、以て鴟梟の欲を逞くす。暴悍にして忌む無き者あり。雄猜にして測られざる者あり。爲す所同じからずと雖、而も其王憲を蔑にし、私利を營めることは一のみ。然れども猶言ふ可きことあり。曰く、王族なり。將家なり。北條氏に至りては、將門の屬隷を以て、坐して朝廷を制す。天下の事、復言ふに忍びざるなり。且夫れ承久の事、孰か曲、孰か直。筆して之を傳へし者は、皆北條氏の盛なる時に出づ。今、安ぞこれを考へ信ぜんや。況や君臣の際、寧ぞ曲直を較ぶべけんや。乃指斥、憑怒、其凌辱を極む。萬乘の尊を視る、啻に狐豚の如きのみならず。嗚呼、八州の生民、誰か先王の遺澤を被らざる。當時謂ゆる武士と云ふは、其豢養に忸れ、其使嗾に供す。名位、族望、遠く其右に出づる者と雖、奔走驅馳、甘

北條氏將門の屬隷を以て天下を制す

公卿傍觀

【三帝】後鳥羽帝は隱岐順德帝は佐渡土御門帝は土佐

勤王の功は楠氏を第一とす

楠氏出でゝ世道を匡濟す

【張巡許遠】共に睢陽城にたてこもり安祿山の兵と戰ひし人

【顏眞卿】顏眞卿果卿

じて之が役を爲して暇あらず。氣類の召く所、習ひて以て常と爲す。豈言ふに勝ふべけんや。卽、稱して、公卿と爲す者、平時は朝廷の上に趨蹌して、天子の爵秩を取りて、以て天下に驕れり。而して此際に及びて、未だ嘗て一策を畫して、以て危難を救はず。手を袖にし傍觀して、以て其爲す所に聽す。是れ曷ぞ武人のみを尤めんや。時勢未だ可ならざる所あり。君德未だ洽からざる所ありて、以て此禍を致すと雖、亦臣子の罪なり。

是より以來、百餘年の間、廢立黜陟、一に其處分を仰ぎ、朝廷は蹙々として束縛せらるゝが如し。其顏色を窺ひて、以て憂喜を爲すに至れり。何ぞ其れ甚しきや。余聞く、後鳥羽上皇の隱岐に徙るや、石窟に因りて星を縛し、纔に風雨を庇ひしのみ。十有九年にして乃崩ずと。蓋し父子三帝、千里を隔絶し、各窮海に居り、終天相見るを得ず。其心何ぞ嘗て一日も北條氏を忘れんや。則元弘の事、萬、已む可からざりしなり。而して勤王の功は、余、楠氏を以て第一と爲す。楠氏微りせば、則西狩の駕も、吾れ、其承久と一轍に歸して止みしを見んのみ。何ぞや。彼の北條氏、政を失ふと雖、其權力更に甚しきものあり。累世の威を藉りて、積弱の餘に加へ、百萬の虎狼、其指呼に隨ひ、中國に怎咻すれども、之に攖る或るなし。天下方に承久を以て、戒と爲し、踵を重ね息を屏めて、敢て勤王の事を言ふ者なし。而るに楠公、獨り、眇々の軀を以て、義を其間に唱へ、其衝路に當り、其爪牙を挫きて、以て四方の義士の氣を皷舞し、之をして一時に踵起せしむ。元惡を斧鉞の下に殄戮し、列聖の深仇を報じ、累世の大恥を雪ぎ、天下の萬姓、再び日月の光を仰ぐを得たり。皇運の泰に屬すと曰ふと雖、而も公之が唱を爲すに非ずば、焉ぞ能く此に至らんや。是れ焉ぞ、天斯人を生じ、以て世道を匡濟せるに非ざるを知らんや。後の論者、或は之を唐の張巡に比ぶる者あり。巡は全盛の唐室を戴きて、狃胡の偏師を拒ぐ。二顏之が先を爲すあり。許遠、之が助を爲すあり。而して江淮を遮蔽し、城を守りて死を致すに過ぎず。公を以て之に覩ぶるに、勢の難易、功の大小、豈日を同くして語るべけんや。之を要するに、位、其器に滿たず、能く其才を展る莫し。而れども、終に能く躬を以て國に殉じ、

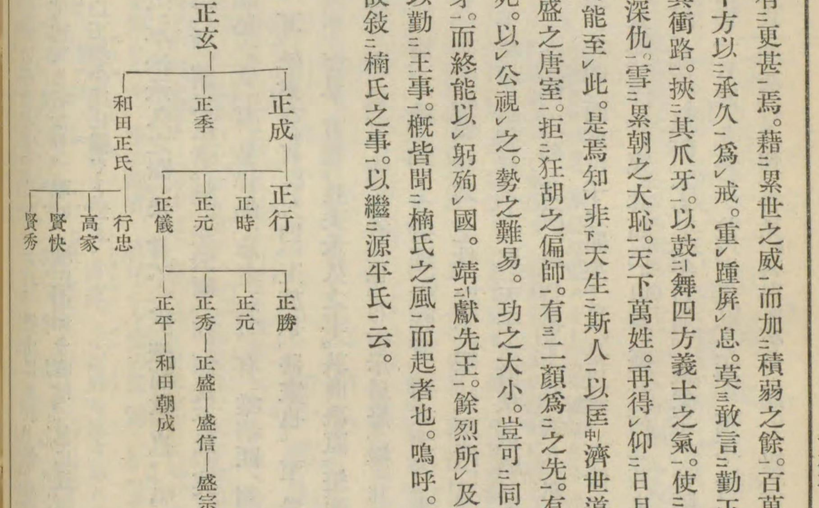
楠氏は眞の武臣たり

先王に靖獻す。餘烈の及ぶ所、獨、其子孫のみならず。公卿にまれ、將士にまれ、各弓箭を執りて、以て王事に勤むるは、概、皆楠氏の風を聞きて起てる者なり。嗚呼、楠氏の如き者は、眞に武臣の名に愧ぢずと謂ふべし。余、故に楠氏の事を叙して、以て源平氏に繼ぐと云ふ。

外史氏曰。予修二將門之史一。至レ於二平治承久之際一。未二嘗不一二舍一筆而歎一也。嗚呼。世道之變。名實之不二相讐一。一至レ於レ此歟。古之所レ謂武臣者。勤レ王云爾。如二源氏平氏一。莫レ不二皆然一。至レ於二平治之後一。乘二綱維之弛一。以逞二鴟梟之欲一。有二暴悍無レ忌者一焉。有二雄猜匪レ測者一焉。雖二所レ爲不レ同。而其蔑二王憲一。營二私利一一耳。然猶有レ可レ言。曰。王族也。將家也。至レ於二北條氏一。以二將門屬隷一。而坐制二朝廷一。天下之事。不二復忍レ言也。且夫承久之事。孰曲孰直。筆而傳レ之者。皆出二北條氏盛時一。今安考二信焉一。況君臣之際。寧可レ較二曲直一也。乃指斥憑怒。極二其凌辱一。視二萬乘之尊一。不二啻如二孤豚一。嗚呼。八州生民。誰不レ被二先王之遺澤一。當時所レ謂武士者。狃二其豢養一。供二其使嗾。雖下名位族望遠出二其右一者上。奔走驅馳。甘爲二之役一。之不レ暇。氣類所レ召。習以爲レ常。豈可レ勝レ言哉。卽稱爲二公卿一者。平時趨二蹌朝廷之上一。取二天子之爵秩一。以驕二天下一。而及レ於二此際一。未下嘗畫二一策一。以救中危難上。袖レ手傍觀。以聽二其所レ爲。是曷尤レ於二武人一邪。雖二時勢有レ所レ未レ可。君德有レ所レ未レ洽。以致レ乎二此禍一。而亦臣子之罪矣。自レ是以來。百餘年間。廢立黜陟。一仰二其處分一。而朝廷蹙蹙如レ被二束縛一。至レ於下窺二其顏色一。以爲中憂喜上。何其甚也。余聞。後鳥羽上皇之徙二隱岐一也。因二石窟一縛レ屋。纔庇二風雨一。十有九年乃崩。蓋父子三帝隔二絶千里一。各居二窮海一。終天下レ得二相見一。是其心何嘗一日忘二北條氏一哉。則元弘之事。萬不レ可レ已也。而其勤王之功。余以二楠氏一爲二第一一。微二楠氏一。則西狩之駕。吾見中其與二承久一歸二一轍一。而止上而已。何哉。

彼北條氏雖レ失レ於レ政。其權力有二更甚一焉。藉二累世之威一而加二積弱之餘一。百萬虎狼。隨二其指呼一。怨二咻中國一。莫二之或攖一。天下方以二承久一爲レ戒。重レ踵屏レ息。莫二敢言一勤王之事一。而楠公獨以二眇眇之軀一。唱二義其間一。當二其衝路一。挾二其爪牙一。以鼓二舞四方義士之氣一。使二之一時踵起一。珍二戮元惡於二斧鉞之下一。報二列聖之深仇一。雪二累朝之大恥一。天下萬姓。再得レ仰二日月之光一。雖レ曰レ屬二皇運之泰一。而非二公爲二之唱一。焉能至レ此。是焉知レ非下天生二斯人一以匡中濟世道上哉。後之論者。或有下比二之唐張巡一者上。巡戴二全盛之唐室一。拒二狂胡之偏師一。有三二顏爲二之先一。有三許遠爲二之助一。而不レ過下遮二蔽江淮一。守レ城致レ死。以レ公視レ之。勢之難易。功之大小。豈可二同レ日而語一也。要レ之。位不レ滿二其器一。莫二能展二其才一。而終能以レ躬殉レ國。靖二獻先王一。餘烈所レ及。不二獨其子孫一。自二公卿一。自二將士一。各執二弓箭一。以勤二王事一。概皆聞二楠氏之風一。而起者也。嗚呼。如二楠氏一者。眞可レ謂レ不レ愧二武臣之名一矣。余故敍二楠氏之事一。以繼二源平氏一云。

楠氏系圖



楠氏系統

後醍醐天皇系統

北條氏を討滅せんとす

無禮講

帝誓書を賜ひ事治まる

兩統更立

楠氏、本姓は、橘氏。敏達天皇より出づ。天皇の曾孫を諸兄と曰ふ。左大臣たり。姓橘を賜ひふ。橘氏の後裔、或は降りて民間に在り。其河內に居る者、楠を以て氏と爲せり。楠氏始めて後醍醐天皇の時に著ると云ふ。天皇は、後鳥羽の玄孫たり。後鳥羽の二子、順德、土御門の二帝、竝に北條氏の爲に徙されて以て崩ず。後嵯峨帝は、土御門の皇子たるを以て、北條氏の爲に立てらる。而して常に先帝の蒙塵を痛み、時を竢ちて之を報ぜんと欲す。而して後深草、龜山相繼ぎて位に卽く。皆帝の子なり。帝後深草の優柔にして、與に爲すことあるに足らずと謂ひ、而して龜山の英氣ありて、以て其志を繼ぐ可きを愛す。故に遺詔すらく「龜山の後、永く皇統を承けしめよ」と。故に後宇多、龜山の太子たるを以て、立ちて位に卽く。而るに北條氏、後深草の皇子を立て、又其皇孫を立てゝ、其後を承けしむ。後宇多上皇、大納言藤原定房を遣し、其再遺詔に違ふことを責む。乃、上皇の皇子を立つ。實に後二條帝なり。遂に兩統更立の議を建つ。帝崩ずるに及びて、又後伏見の弟を立つ。時に後宇多の次子尊治、幼にして英質あり。龜山上皇、之を奇とし、定房を遣し、北條氏を諭して之を立つ。是を後醍醐天皇と爲す。

天皇の時に當りて北條高時、政を失ふ。其家宰長崎高資等權を恣にす。將士心を離し、背叛する者多し。天皇、陰に是時に乘じて、之を討滅せんことを謀る。乃、精を勵まし、治を求む。記錄所を置き、親訴訟を聽く。大納言藤原資朝、右少辨藤原俊基等と謀り、稍豪傑を延攬し、酒を置きて款語し、禮節を破り、歡心を結ぶ。目けて無禮講と曰ふ。美濃の人土岐賴兼、多治見國長これに與る。賴兼の族賴春、齋藤利行の女を娶る。利行は六波羅の府吏なり。一夕、賴春、偶妻と語りて泣下る。妻問ふ、「何を泣く」と。賴春、實を告ぐ。妻走りて其父に告ぐ。父之を六波羅に告ぐ。府、兵を發し賴兼、國長を襲ふ。二人力鬪すれども克たずして自殺す。高時、之を聞き、兵を遣し、來りて資朝、俊基を執ふ。帝、因りて誓書を賜ひ、事寢むを得たり。乃俊基を釋し、資朝を流す。而れども帝の志、益銳なり。皇子護良と謀り、南都、叡山の僧徒を收結す。高時又之を覺り、僧圓觀等

藤原師賢

（楠正成肖像）

笠置山行幸

楠木の夢

（楠正成旗之圖）

志貴山毘沙門天祠

正成詔を奉ず

を捕へ、再俊基を執ふ。遂に宰高資と議を定めて帝を廢し、承久の故事の如くせんと欲す。二階堂貞藤を遣し、兵を潛めて西上し、夜、六波羅に至る。府將北條仲時、北條時益、高時の書を得て、未だ封を發かざるに帝、謀して之を知る。乃、護良の計を用ゐ、籃輿に御し、逃れて南都に之く。大納言藤原師賢をして、袞衣を服し、詐りて帝と稱し、叡山に赴かしむ。僧徒大に喜び、來り聚り、一夕にして萬人を得たり。而るに仲時、時益、帝猶宮中に在りと謂ひ、兵を遣して之を索むれども獲ず。則、大納言藤原宣房等四人を收へて去る。萬人を以て叡山を攻む。護良等擊ちて之を卻く。而して僧徒、帝の眞に非ざるを知りて、悉く散じ去る。是時に當りて、帝、笠置に在り。仲時、時益、之を聞きて、兵を遣し來り攻めしむ。未だ至らざるに、帝、詔を四方に下し、難に赴かしむ。復、命に應ずる者莫し。紫宸殿の南に大樹あり。樹下に虛位を設け二童子來り泣を垂れて白して曰く、「天下帝、憂迫す。適夢みる。の地、陛下を容るゝ所なし。獨此座あるのみ」と。既に覺めて自、念へらく、文に、木の南に從ふは楠なり。當に姓楠なる人ありて、出でゝ朕を扶けて、以て禍難を定むべしと。因りて山僧を召し、之に訪ひて曰く、「地方の豪傑に、豈、姓楠るか」と。對へて曰く、「金剛山の

と云ふ者あ

西に、楠正成と云ふ者あり。正成の父、嘗て子無きを憂へ、其妻と志貴山に禱りて之を生む。少字は多聞と云ふ。長じて材武を以て名あり。嘗て土寇を平げし功を以て兵衞尉と爲る」と。帝曰く、「是なり」と。中納言藤原藤房をして、往きて正成を召さしむ。正成、朗、意を決して之に起き、藤房に從ひて行在に詣る。帝、藤房をして言はしめて曰く、「賊を討つ事、

非理法權天

元弘元年

赤坂城

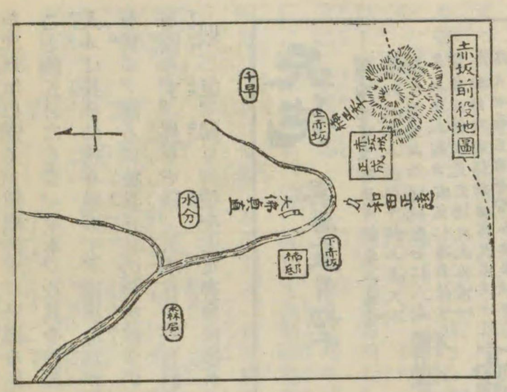
笠置落城

（赤阪城前合戰地圖）

赤坂籠城

朕、一に以て汝に託す」と。因りて座を命じて、計を問ふ。正成、感激し、對へて曰く、「天誅、時に乘ずれば、何の賊か斃れざらん。東夷、勇あれど智なし。如し勇を較ぶれば、六十州の兵を擧ぐるも、以て武藏、相模に當るに足らず。智を較べんか、則、臣、こゝに策あり。然りと雖、勝敗は常なり。少の挫折を以て、其志を變ずべからず。陛下、苟も正成の未だ死せざるを聞かば、則、復、宸慮を勞する毋れ」と。拜辭して還る。實に元弘元年八月なり。

正成、是に於て、赤坂に城き、將に乘輿を奉ぜんとす。而れども賊兵已に行在を圍む。三河の人足助重範、善く拒ぐ。備後の人櫻山玆俊、兵を起して之に應ず。高時、乃北條貞直、足利高氏等、六十三將を遣し、武藏、相模等五州の兵、十餘萬騎を以て西上せしむ。未だ至らずして、笠置陷る。重範擒にせられ、錦織俊政、石川義純、之に死す。帝、藤房と神器を奉じて逃る。



是に於て、貞直等の諸軍、徑に赤坂の城に赴く。城纔に成り、農粟を取りて糧に充つ。兵僅に五百人。正成其三百を分ち、弟正季、族和田正遠を以て之に將たらしめ、城を出でゝ、山に草れ、東軍を竢たしむ。東軍至りて其城を望見す。方、百餘步可りなり。乃憫笑して曰く、「此れ隻手もて掀ぐべきのみ」と。爭ひて馬より下り、肉薄して之を攻む。正成、士卒をして齊しく射しめ、立どころに千餘人を斃す。東兵沮み卻き、甲を卸して、且に息はんとす。而して伏兵左右より起る。正成二百騎を以て、門を闢きて突き出で、三面より合擊す。東軍大に驚きて擾亂し、器械を棄てゝ走る。旦日、東軍分れて二と爲り、一は伏に備へ、一は城を圍む。正成、豫め復垣を築き、繩

赤阪落城

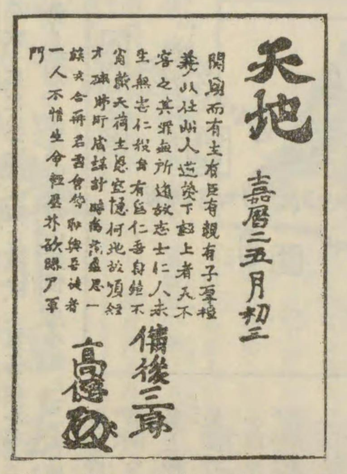
（兒島高德旗之圖）

光嚴天皇

元弘二年隱岐に還幸

兒島氏系統高德

を其外垣に懸く。敵蟻附す。乃縄を斷つ。敵、垣と俱に墜つ。乃、大石巨材を投じ、七百餘人を殺す。居ること四五日にして、東軍、攻具を修め、楯を蒙りて進み、鐵鉤を垣に鉤す。垣殆ど崩る。正成、城兵をして人々に長柄の杓を執りて、沸湯を沃がしむ。敵焦爛して退く。東兵、是に於て營を築き城を環し、持久の計を爲す。而るに城兵五日の食を餘すのみ。正成、衆に謂て曰く、「吾れ天下に先だちて大事を舉ぐ。固より生を圖らず。然りと雖、天子在す。吾れ未だ以て死す可からず。吾れ今佯りて死せば、敵則去らん。去らば則、復、起り、彼をして奔命に疲れしめん。是れ軀を全くして以て敵を亡ぼすの術なり」と。衆曰く、「善し」と。乃、坑を鑿ち、尸を塡め、薪を以て之を蔽ひ、風雨に乘じて、夜、稍逃れ出でゝ、金剛山に入る。一人を留め、誡めて曰く、「我が遠ざかるを度りて火を擧げよ」と。火起る。敵爭ひて城に上り坑中の積尸を見て、正成既に死せりと謂ひ、兵を引きて東に去る。湯淺定佛をして、代りて其城を守らしむ。櫻山氏の兵、之を聞きて潰え散ず。玆俊、自殺す。賊、帝を宇治に執へ、平等院に奉じ、遂に之を六波羅に徙さんと欲す。帝、行幸の儀を備へしめて、乃往く。賊、乃、後伏見帝の子量仁を立てゝ位に卽かしむ。實に光嚴帝なり。帝に神器を傳へんことを請へども聽さず。帝に髮を削らんことを請ふ。又聽さず。每日沐浴して、皇祖を拜し給ふに、帝を奪はんことを謀れども成らず。二年二月、高時、帝を隱岐に徙す。其禮、承久に比すれば頗る厚し。參議源忠顯、嬪藤原氏從ふ。而して賊將佐々木高氏等、兵三千を以て護送して、山陽道に由る。兒島高德、又之を奪はんことを謀れども復成らず。



兒島氏は、本三宅氏なり。世備前の兒島に居る。兒島範長、備後守爲り。子の高德を備後三郎と稱す。帝の

高德櫻樹を削り詩を題して志を表す

【范蠡】越の謀臣なり、勾踐を助け吳を滅し、以て會稽山の恥を雪ぐ。卽高德自らの范蠡に比すなり

笠置に在しゝとき、範長、高德、赴き援はんと欲す。「笠置陷り、楠氏敗る」と聞きて、乃、止む。已にして帝の西遷するを聞き、高德、其衆に謂て曰く、「吾れ聞く、『志士仁人は身を殺して、以て仁を成す有り。義を見て爲さゞるは勇なきなり』と。盍ぞ要して駕を奪ひ、以て義を擧げざらんや」と。衆、奮ひて之に從ふ。船阪山に伏して待つ。之を久しくすれども駕至らず。人を遣し之を候はしむ。曰く、「駕は山陰道に向へり」と。乃、間道より杉坂に至れば、則已に過ぎたり。衆乃散じ去る。

高德、恨恨して去る能はず。乃、服を變へて、駕に尾して行くこと數日、一たび帝に見えて言ふ所あらんと欲す。而れども間を得ず。是に於て、夜、帝の館に入り、櫻樹を白して之に書して曰く、「天、勾踐を空しくする莫れ、時に范蠡無きにしも非ず」と。旦日、護兵聚り視るに、讀む能はざるなり。乃、之を奏す。帝之を熟視して欣然たり。心に王に勤むる者あるを知れり。

帝、隱岐に至り、國府島に居る。高時、遙に隱岐の守護佐々木淸高をして、兵を將ゐて監護せしむ。又藤房以下公卿六人を流し、藤原俊基等四人を殺す。藤原資朝、佐渡にあり。其子國光、京師より赴き父を省る。父已に本間三郎といふ者に殺されたり。國光、夜、三郎を斬りて去る。高時遂に皇子尊良、宗良、恒長を流し、恒性を殺す。獨、第三子兵部卿護良、逃れて吉野に奔る。是に於て四方、復王に勤むるの師なし。

四月、正成、金剛山を出でゝ、五百騎を以て赤阪の城を攻む。城將湯淺定佛、糧を紀伊に徵す。正成、遮りて之を奪ひ、苞に充つるに甲を以てし、三百人をして荷ひて城下に至らしめ、別に兵を分ちて之を追ふ。城兵望み見て謂へらく、敵且に我が糧を奪ふと。門を開きて之を納る。三百人甲を苞より取り出して甲し、吶喊して起り鬪ふ。正成、門を奪ひて入る。定佛、爲す所を知らず。乃降る。正成、其兵を幷せ、七百騎を將ゐて河內、和泉を徇へて、悉く之を下す。渡部に及ぶ比、二千人を得たり。進みて天王寺に陣す。北條氏、天子を徙してより、天下復虞るゝに足るなしと謂へり。正成、起るに及びて則大に驚く。六波羅の二帥、隅田通倫、高橋宗康を遣し、五千騎を將ゐて之を擊たしむ。正成、兵を分ちて四隊と爲し、其三隊

元弘三年湯淺定佛

天王寺陣